

女性向け教養番組の研究

——「花」を主題とする講座の系譜と数量分析——

筑波大学

図書館情報メディア研究科

2017年9月

辻 泰明



女性向け教養番組の研究  
——「花」を主題とする講座の系譜と数量分析——

Abstract

本研究は、女性向け教養番組の編成を通観し、「花」を主題とする講座に関する一次資料の調査と分析をおこなうことによって、女性視聴者層への文化伝播の様相を、具体的事例に基づいて考察した。

日本における放送メディアは、1925年のラジオ放送によって始まり、1953年にはテレビ放送が開始されて、今日に至るまで90年以上の時を刻んでいる。しかし、その歴史を通観しつつ一次資料に基づいて事例を検証する研究はまだ多くおこなわれていない。放送の遺産を歴史上のものとし、その事蹟を実証的にとらえて特性を明確にすべき時が来ているといえる。

1925年3月22日、東京放送局仮放送開始時の挨拶で、総裁後藤新平は、放送事業の職能は、第一に「文化の機会均等」であり、対象者はとりわけ家庭にいる女性であるとした。その目的を果たすためのコンテンツとして設けられたのが、女性向け教養番組である。

女性向け教養番組のうち、放送開始当初から編成されたのは、「生活に役立つ実用的な内容」を旨とする番組群であり、その主たる放送枠（定曜定時に編成され、定められた形式と分野の中でさまざまな主題が採り上げられる「枠」としての番組）は、『家庭講座』、『女性教室』、『婦人百科』と移り変わった。それらの放送枠において採り上げられた主題には、大きく分けて、裁縫（洋裁・和裁）や料理などの実用技術と「花」（花を活ける文化）や「茶」（茶を喫する文化）などの生活に根ざした日本文化があった。

そのうち、「花」は、放送開始時から女性向け教養番組における中核的な主題であり、放送と「花」との関連が幾つかの文献に記載されていることから、ラジオとテレビ双方において、文化を伝播する役割を果たしたと想定される。しかし、その実態についてはこれまで詳しく研究されることはなかった。また、女性向け教養番組についても、貴重な研究や調査は散見されるものの、いずれもある特定の時期や利用動向を対象とした限定的なものであり、放送史を通観した詳細な分析と考察はおこなわれてこなかった。

そこで、本研究は、女性向け教養番組における「花」を主題とする講座に関する一次資料を調査し、分析をおこなうことによって、女性視聴者層への文化伝播の様相を、具体的事例に基づいて実証的に解明することを目的とした。

調査の主たる対象は、「番組の公式記録」であり、「放送を記録の上からたどることができる唯一の第一次資料」と評価されている『番組確定表』とした。そこに記録された放送実績を調査し、放送本数の年度ごと推移、各回の副題における関連語の出現率、出演者の属性についての構成比率などを分析することにより、考察をおこなった。

日本における放送にはいくつかの節目がある。本研究では、1925年3月の放送開始から1937年7月の盧溝橋事件勃発までをラジオ草創期、1937年7月以降、1945年8月15日の玉音放送によって戦争の終結が告げられるまでをラジオ戦時期、1945年8月15日以降、1952年4月28日に「日本国との平和条約（サンフランシスコ平和条約）」が発効するまでをラジオ占領期、1952年4月28日以降、「人びとのテレビ視聴がすでにラジオ聴取にとってかわり、かつてのラジオ全盛時代に比肩するほどのテレビ接触が行なわれていることは明らか」になった1964年度末までをラジオからテレビへの転換期、前の期と一部重複するが、1953年2月1日のテレビ放送開始以降、テレビ普及が頂点に達した後、安定した状態を保った1981年度末までをテレビ発展期、1982年度以降、視聴意向や視聴時間量の減少と新機軸番組の台頭などの変化を経て、視聴意向が回復する1992年度末までをテレビ変化期とし、これらの時期ごとに女性向け教養番組における「花」を主題とする講座についての調査と考察をおこなった。

ラジオ草創期については、文化の伝播に関してラジオという新しいメディアが有した特徴を明らかにすることを課題として、調査、分析し、考察をおこなった。そして、ラジオ草創期の女性向け教養番組および「花」を主題とする講座の特徴について、次の諸点を明らかにした。すなわち、(1) 草創期の女性向け教養番組は、三つの放送枠を設置して、「教養」の多義性および女性聴取者の知識の程度にきめ細かく対応しようとしていたこと、(2) 「花」を主題とする講座には、季節性と入門性それぞれを主旨とする二つの類型があり、そのうち、入門性を主旨とする講座は、テキストを発行することによって、映像が無いというラジオの欠点を補い、異なるメディアの連携による相乗効果を発揮していたこと、(3) 「花」を主題とする講座の放送が新興流派の発展に寄与したことが、放送というメディアが有する広範な伝達能力を事例として示していることである。これらのことにより、本研究は、文化の伝播に関してラジオという新しいメディアが有した特徴の一端を明らかにしたといえる。

ラジオ戦時期および占領期については、両時期の放送実績と編成の特徴を対照することで、両時期における女性向け教養番組と「花」を主題とする講座の相違点あるいは共通点を明らかにすることを課題として、調査、分析し、考察をおこなった。そして、戦時期および占領期での女性向け教養番組および「花」を主題とする講座の特徴について、次の諸点を明らかにした。すなわち、(1)

戦時期には女性向け教養番組は1放送枠のみに削減され、占領期には逆に数多くの放送枠が新設されるという相違点があるにも関わらず、いずれの時期においても「花」を主題とする講座の編成は低調であるという共通点があること、(2) 戦時期および占領期の女性向け教養番組は、共に「教化」としての教養を主眼としており、「花」のような生活文化の伝播がおこなわれる余地は小さかったこと、(3) 戦時期の例外的な連続型講座の編成や、占領期の後における大規模連続型講座の復活が、多くの反響と支持を集めたことは、放送メディアが創設時にめざした「文化の機会均等」の重要性を改めて示していることである。これらの結果は、両時期の相違点と共通点を明らかにしたものと見える。

ラジオからテレビへの転換期については、この時期にラジオとテレビ双方で講座が放送されていた場合、それぞれのメディアにおける特徴、特にテレビという新しいメディアにおける特徴を明らかにすることを課題として、調査、分析し、考察した。そして、この時期におけるラジオとテレビの「花」を主題とする講座は、同時期に対象を同じくして放送され、放送時間帯はラジオとテレビとで棲み分けが図られていたことを明らかにし、その上で、次の諸点を考察した。すなわち、(1) 女性向け教養番組における「花」を主題とする講座の二つのタイプのうち、入門性を主旨とする連続型講座は、テキストと連携していたラジオに、季節性を主旨とする単発型講座は、映像を有するため四季折々の花を視覚的に伝えることができるテレビにと、大まかに分化したこと、(2) その後、ラジオは「ながら聴取」が主流となり、講座は放送されにくくなる一方、テレビにも入門性を主旨とする連続型講座が編成されるようになって、映像を有するテレビでもテキストの随時参照性が求められ、出版という異なるメディアとの連携が有効であることが明らかになったこと、(3) テレビでは、女性出演者（講師）が登用され、講座の内容だけでなく講師の映像も重要な要素となったことである。これらの結果から、本研究は、ラジオからテレビへの転換期における、ラジオとテレビそれぞれの特徴を明らかにしたと見える。

テレビ発展期については、この時期には「花」と同時に「茶」も女性向け教養番組の主題となったことから、「花」と「茶」それぞれを主題とする講座の放送を比較することによって、調査、分析し、考察をおこなった。そして、次の諸点を明らかにした。すなわち、(1) 女性向け教養番組の系譜は「実用」を旨とするものに収斂し、この期の半ばに、「花」も「茶」も講座の放送本数が最多となって、講座形式による伝統的な生活文化伝播の最盛期を形成したこと、(2) 「花」では、四季折々の花々による作例を紹介する「季節」の内容が主であった一方、「茶」では、所作や点前を教授する「技法」の内容が主であったという点で、テレビにおける両者の伝達のされ方には差異があったこと、(3) 特に「花」は、いけばなブームによる女性視聴者層への訴求やレジャーの多様化による新

たな趣味講座番組の開発が放送本数の増減に影響していると考えられる点で、社会情勢とテレビメディアとの連関をより鮮明に反映したといえることである。これらの結果によって、本研究は、テレビによる日本文化伝播について、その様相の一端を明らかにしたといえる。

テレビ変化期については、この期の女性向け教養番組と「花」を主題とする講座について、変化の有無を明らかにし、この期の「花」を主題とする講座が有する特徴をテレビの「変化」と照応することを課題として、調査、分析し、考察をおこなった。調査と分析にあたっては、副題の記述に対して形態素解析をおこない、当該期の副題における品詞分布の変遷と番組概要に記された編成方針との関連を分析した。特に「花」を主題とする講座については、形態素解析の結果を踏まえて、副題の記述における名詞と動詞の出現率の推移と時代背景との関連を分析した。そして、次の諸点を明らかにした。すなわち、テレビ変化期では、番組の形式には表立った変化がなかった女性向け教養番組における「花」を主題とする講座についても、(1) 1980年代半ばの「模索の時期」と同期して、副題における品詞分布の遷移が生じており、社会情勢の変化に対応した、なんらかの模索がおこなわれていたことを示唆していること、(2) 品詞分布の遷移は、『年鑑』における番組ジャンルごと記載の消滅や対象視聴者層の記述の変化とも同期しており、「家庭にいる女性」という創設以来の対象が消失しつつあったことに連関していると考えられること、(3) テレビ変化期の末に『婦人百科』が終了し、「個性の創造」を目的とする新たな放送枠の設置へと向かったことは、文化の機会均等を果たすという使命が終結したことを意味しており、テレビにおける変化のみならず、放送開始以来の日本文化伝播の歩みの上でも、ひとつの終結点を示していることである。これらの結果、本研究は、この期の女性向け教養番組と「花」を主題とする講座が有する特徴を、テレビの「変化」と照応して、明らかにしたといえる。

本研究の成果は、女性向け教養番組における「花」を主題とする講座が、開始時の放送が目的とした「文化の機会均等」に貢献したこと、および、近代流派普及への貢献、「季節性」の一貫した存在、ラジオとテレビ双方におけるテキストの必要性と出版との連携、映像を有するテレビにおける出演者の重要性、社会情勢と放送本数増減の連関などによって、放送というメディアの特性を際立たせていることを明らかにした点にある。

A Study of Cultural Broadcast Programs for Women:  
Genealogy and Quantitative Analysis of Flower Arrangement Courses

Abstract

The purpose of this study is to examine cultural broadcast programs for women in Japan by investigating and analyzing primary materials on courses with “flower (*hana*)” as the theme.

On March 22, 1925, the first day of broadcasting in Japan, the Governor of the Tokyo Broadcasting Station stated that the primary function of broadcasting was to equalize cultural opportunities, primarily for women in individual households. Accordingly, cultural programs for women were created.

Among them, programs that presented practical information regarding the culture were organized, and the main broadcast slots featured *Katei Kouza (Household Courses)*, *Josei Kyoshitsu (Ladies' Class)*, and *Fujin Hyakka (Encyclopedia for Women)*. Themes for available broadcast slots can be largely classified into two categories: practical skills, such as dressmaking and cooking, and the Japanese culture of everyday life, including arranging flowers and serving tea.

Arranging flowers especially has been a core theme in programs for women. Nevertheless, its achievement has not been studied comprehensively. Although some valuable studies regarding cultural programs for women have appeared occasionally, none have fully analyzed them based on the history of broadcasting.

Confirmed Broadcast Record Sheets were used in this study; these sheets are regarded as the official record of programs and the only primary source for broadcasting in Japan. Data were investigated and changes in the yearly number of broadcast programs, the appearance ratio of related terms in titles, and the distribution ratio of performers' characteristics were analyzed.

As Japanese broadcast history has several turning points, this study divides it into six periods, as follows: “Radio early period”: March 1925 (the opening of the first radio station) to July 1937 (outbreak of the Second Sino-Japanese War), “Radio under the war regime period”: July 1937 to August 1945 (end of World War II was declared by the Emperor's broadcast), “Radio under occupation period”: August 1945 to April 1952 (effectivation of the Treaty of Peace with Japan), “Radio to Television transition period”: April 1952 to the end of the 1964 fiscal year (at that time, it was obvious that people had already changed from radio listening to television viewing), “Television development period”: February 1953 (the beginning of television broadcasting), to the end of the 1981 fiscal year (until then, television viewing time

remained stable); and “Television change period”: the 1982 fiscal year to the end of the 1992 fiscal year (the end of *Fujin Hyakka*, a cultural program for women). Flower arrangement courses as cultural programs for women were investigated in each period.

Regarding the “Radio early period,” characteristics of the new medium called radio were analyzed in terms of culture propagation. Findings revealed that: (1) cultural programs for women in the early years filled three broadcast slots and dealt with the diversity of culture and the degree of knowledge of female listeners; (2) flower arrangement courses were of two types—seasonal and introductory—, with the introductory type compensating for the shortcomings of radio as an auditory channel with the issuance of textbooks, demonstrating the synergistic effect of cooperation among different media; and (3) the broadcast of flower arrangement courses contributed to the development of emerging schools as an example of the far-reaching transmission capability possessed by broadcast media, clearly showing some of the characteristics of radio as the new medium for culture propagation.

As for the periods of “Radio under the war regime” and “Radio under occupation” periods, this study included an analysis of the differences and similarities between flower arrangement courses in both periods. Considerations were as follows: (1) although cultural programs for women were reduced to only one broadcast slot under the war regime, many new slots emerged under the occupation, the organization of flower arrangement courses was sluggish during both periods; (2) cultural programs for women in both periods focused on culture as “edification,” and there was little room for the propagation of flower arrangements; and (3) the formation of exceptional courses under the war regime and the revival of continuous courses after the occupation reiterate the importance of reinforcing equal cultural opportunities as the mission of broadcast media.

Regarding the “Radio to Television transition period,” the characteristics of each medium were investigated. This study clarified that flower arrangement courses in this period were broadcast simultaneously by radio and television, with considerations for the following: (1) in the beginning, the classes of courses were roughly differentiated, with continuous courses classified as introductory confined to the radio and textbooks, and one-time seasonal courses limited to television to convey flowers of the seasons visually; (2) subsequently, lectures became difficult to broadcast via radio as “listening while doing something else” became mainstream, as the continuous introductory type began on television and it became clear that the use of publications was effective even on television because of occasional references to textbooks; and (3) in television, female lecturers were appointed because images of the performers were becoming important

broadcast elements.

As for the “Television development period,” broadcasts of tea ceremony courses were organized in the same way as flower arrangement courses. Thus, the two were compared to clarify the aspect of Japanese cultural propagation by television. Considerations in this investigation included the following: (1) the genealogy of cultural programs for women converged toward those focused on culture and practicality and in the middle of this period, the number of broadcasts regarding flowers and tea reached its peak; (2) the proportion of seasonal subjects was relatively large for “flower,” whereas for “tea,” techniques were largely discussed; and (3) “flower,” in particular, more clearly reflected the link with the social aspect of television in terms of its appeal to the female audience based on the Ikebana boom and the development of new hobby lecture programs reflecting the diversification of leisure.

Regarding the “Television change period,” changes in cultural programming for women and flower arrangement courses were investigated, and characteristics of the courses during this period were analyzed. Furthermore, a morphological analysis was performed regarding the descriptions of titles, and the relationship between the transition in the distribution of parts of speech in titles and organizational policy was analyzed. In terms of flower arrangement courses, the relationship between the transition in the appearance rate of nouns and verbs and the background for descriptions of titles based on the result of the morphological analysis were examined.

Accordingly, the following were considered: (1) in sync with the “time of seeking” in the mid-1980s, there was a transition in the distribution of parts of speech in titles, suggesting that some sort of search was underway in response to changes in the social situation; (2) the transition of the distribution of parts of speech synchronized with the annihilation of the program genre described in the “yearbook,” indicating that there might be some link between the change in the description of the target audience and the fact that women in individual households as the target audience were disappearing; and (3) the fact that the end of *Fujin Hyakka* corresponded to the end of this period and the rise of new broadcast slot aiming at the “creation of individuality” implies that the mission for ensuring equal cultural opportunities was completed.

The results of this study empirically clarify that flower arrangement courses in cultural programs for women accentuated the character of broadcast media and their contribution to equal opportunity in terms of culture, the consistency of seasonality, the necessity of textbooks for both radio and television broadcasting, the importance of performers on television because of its visual nature, and the relationship between social situations and increases and decreases in the number of broadcasts.

## 目次

<b>第1章 序論</b> .....	1
1.1 研究背景.....	2
1.2 先行研究.....	6
1.3 研究目的.....	8
1.4 研究方法.....	9
1.4.1 対象領域と用語定義 .....	9
1.4.2 時期区分と課題設定 .....	11
1.4.3 調査資料と分析項目 .....	15
<b>第2章 ラジオ草創期</b> .....	18
2.1 ラジオ草創期の女性向け教養番組.....	19
2.2 ラジオ草創期の「花」を主題とする講座.....	24
2.2.1 放送本数の推移.....	25
2.2.2 講座の種類と内容 .....	26
2.2.3 テキストの機能.....	28
2.2.4 出演者の構成 .....	31
2.3 まとめ .....	38
<b>第3章 ラジオ戦時期および占領期</b> .....	40
3.1 ラジオ戦時期および占領期の女性向け教養番組 .....	41
3.2 ラジオ戦時期および占領期の「花」を主題とする講座 .....	46
3.2.1 放送本数の推移.....	46
3.2.2 ラジオ戦時期における類型と出演者および編成の特徴.....	49
3.2.3 ラジオ占領期における類型と出演者および編成の特徴.....	53
3.3 まとめ .....	63
<b>第4章 ラジオからテレビへの転換期</b> .....	65
4.1 ラジオからテレビへの転換期の女性向け教養番組.....	66
4.2 ラジオからテレビへの転換期の「花」を主題とする講座.....	70
4.2.1 放送本数の推移.....	74
4.2.2 講座の種類と内容 .....	74
4.2.3 テキストの機能.....	83
4.2.4 出演者の構成 .....	85
4.3 まとめ .....	92

第5章 テレビ発展期 .....	94
5.1 テレビ発展期の女性向け教養番組.....	95
5.2 テレビ発展期の「花」を主題とする講座.....	104
5.2.1 放送本数の推移.....	104
5.3 「花」を主題とする講座と「茶」を主題とする講座の比較 .....	107
5.3.1 「花」を主題とする講座と「茶」を主題とする講座の放送本数推移 と凸型形状の照応 .....	107
5.3.2 本数比「花」優勢期（凸型左端部）の編成.....	109
5.3.3 本数比「花」・「茶」拮抗期（凸型中央部）の編成.....	113
5.3.4 本数比「茶」優勢期（凸型右端部）の編成.....	116
5.4 まとめ .....	121
 第6章 テレビ変化期 .....	 123
6.1 テレビ変化期の女性向け教養番組.....	124
6.2 テレビ変化期の「花」を主題とする講座.....	127
6.2.1 放送本数の推移.....	127
6.2.2 講座の種類と内容 .....	130
6.2.3 出演者の構成 .....	131
6.3 副題の形態素解析による内容分析の細分化 .....	131
6.4 品詞分布の遷移および番組概要の変遷と社会情勢.....	138
6.5 女性向け教養番組における「花」を主題とする講座の終結 .....	142
6.6 まとめ .....	146
 第7章 結論 .....	 148
 謝辞 .....	 159
 文献リスト .....	 161
 全研究業績のリスト .....	 170

付録.....	174
付表 1 年度別『年鑑』掲載女性向け教養番組放送枠一覧 .....	175
付表 2 ラジオ草創期の女性向け教養番組における「花」を主題とする講座の 放送 .....	183
付表 3 ラジオ戦時期および占領期の女性向け教養番組における「花」を主題 とする講座の放送 .....	188
付表 4 ラジオからテレビへの転換期のラジオ女性向け教養番組における「花」 を主題とする講座の放送 .....	190
付表 5 ラジオからテレビへの転換期のテレビ女性向け教養番組における「花」 を主題とする講座の放送 .....	192
付表 6 テレビ発展期の女性向け教養番組における「花」を主題とする講座の 放送 .....	197
付表 7 テレビ発展期の女性向け教養番組における「茶」を主題とする講座の 放送 .....	206
付表 8 テレビ変化期の女性向け教養番組における「花」を主題とする講座の 放送 .....	212

## 第 1 章 序論

## 1.1 研究背景

日本における放送メディアは、1925年のラジオ放送によって始まり、1953年にはテレビ放送が開始されて、今日に至るまで90年以上の時を刻んでいる。しかし、放送史を通観しつつ一次資料に基づいて事例を検証する研究はまだ多くおこなわれていない。放送の遺産を歴史上のものとして、その事蹟を実証的にとらえ、メディアとしての放送の特性を明確にすべき時が来ているといえる。

日本でラジオ放送が始まったのは、1925年3月22日のことである。当初は東京、大阪、名古屋に放送局が鼎立していたが、やがて、3局が合同して日本放送協会が設立された。以後、ラジオは、ベルリンオリンピック（第11回夏季オリンピック）の中継、玉音放送、街頭録音などの実績を残しながら普及を続け、1958年度末には普及率81.3%に達する<sup>1</sup>。

1953年2月1日には、テレビの放送が開始された。テレビは、皇太子ご成婚の報道、東京オリンピック（第18回夏季オリンピック）の中継などの実績を残しながら普及を続け、カラーテレビの普及率は、1975年に90%を突破、1984年に99.2%に達し、その後99%前後で推移して現在に至っている<sup>2</sup>。

この間、「放送は電波の持つ特性を生かし、大量の受信者層を対象に、情報の提供、知識・経験の伝達、視野の拡大、意見や態度の形成などに大きな役割を果たし」<sup>3</sup>た。

放送が果たした役割の一つに、「文化の機会均等」がある。1925年3月、東京放送局仮放送開始の日、総裁後藤新平は、その挨拶で「放送事業の職能は少くも之を四つの方面から考察することが出来」<sup>4</sup>ると述べ、その「第一は文化の機会均等」<sup>5</sup>であるとした。「御主人は外に於て諸種の文化的利益を享けつゝある間に、家にある者は文明の落伍者たる場合があります。(中略)我がラジオは、都鄙と老幼男女と各階級相互との障壁區別を撤して、恰も空気と光線との如く、あらゆる物に向つて其の電波の恩を均等に且つ普遍的に提供する」<sup>6</sup>というのである。

後藤がいう「家にある者」とは、「家庭にいる女性」を指していた。翌日の『東京朝日新聞』は、後藤の演説を伝える記事を掲載し、次のように記述している。

---

<sup>1</sup> 日本放送協会放送史編修室編『日本放送史 下』日本放送出版協会、1965、p.753

<sup>2</sup> 内閣府「統計表一覧：消費動向調査」サイト掲載の統計表に拠る。URLは、<http://www.esri.cao.go.jp/ip/stat/shouhi/shouhi.html#taikyuu> (2017年5月1日閲覧)。

<sup>3</sup> 日本放送協会放送史編修室編『日本放送史 下』日本放送出版協会、1965、p.226

<sup>4</sup> 越野宗太郎編『東京放送局沿革史』東京放送局沿革史編纂委員、1928、p.123

<sup>5</sup> 残りの三つは、「家庭生活の革新」「教育の社会化」「経済機能の敏活」である。

<sup>6</sup> 越野宗太郎編『東京放送局沿革史』東京放送局沿革史編纂委員、1928、pp.123-124

後藤総裁はきん然として放送器の前にグツと反身<sup>そりみ</sup>で聲さわやかに「従来男子は外に出て活動してゐる爲に多くの機会に凡ての文化を受けて来たが、家庭にとり残された女性はいつも文化に遅れなければならなかった。然るに之<sup>これ</sup>からはラヂオの力に依つて皆<sup>み</sup>んなが共通に文化の恩澤に浴する事が出来る様になつたのである」と云つた意味の祝辞をのべ<sup>7</sup>（後略）

後藤が掲げた「文化の機会均等」という職能を発揮させるために、ラジオ放送の開始直後から講座や講演などと呼ばれた番組群が編成された。『日本放送史』は、「『講座』という名称は、放送開始以前から、すでに出版物や集会などで盛んに使われて」<sup>8</sup>いと記した上で、講座番組を教養番組として類別<sup>9</sup>している。

草創期の放送番組は、教養に報道と慰安（後年の呼称では娯楽）を加えた三種目に分別されていた。その比率は、初年度の1925年度には、教養34%、慰安39%、報道27%と慰安が最も大きな割合を占めていたものの、次年度以降、1926年度は、教養41%、慰安31%、報道28%、1927年度は、教養37%、慰安32%、報道31%、1928年度は、教養37%、慰安33%、報道30%、1929年度は、教養37%、慰安33%、報道30%と、教養が最も大きな割合を占め続けて遷移した<sup>10</sup>。1931年に発行された『ラヂオ年鑑』は、このことについて「放送開始当時絶対多量を占めたところの慰安が今日では教養とその處を異にするに至つたのは、寧ろラヂオ本来の使命からいつて當然の現象と見なさなければならぬ。ラヂオが教育上大に利用されるであらうとは創業当初に何人も豫想したところであつて、ラヂオを單なる娯楽媒介機関として使用するといふ時代は既に過ぎ去り、社會生活上最も必要な教育の媒介として使用する時代が我國に於ても近々五ヶ年の間に實限の傾向を示してきたのである。」<sup>11</sup>と記している。

「教養」という語が放送で用いられるようになったのは1926年11月19日放送の『婦人講座』から<sup>12</sup>である。このことから、草創期の放送における教養番組は、女性を主要な対象としていたことが窺える。

女性を対象とした教養番組は、しばしば教養番組群の中核となった。たとえば、ラジオの全盛期においては、一時期、「9番組1週間17時間余の婦人番組」<sup>13</sup>が編成され、放送時間量における部門別比率では、教養番組部門のほとんどを占めるに至った。また、たとえば、テレビの草創期には、「最大の“おとくいさ

7 1925年3月23日付『東京朝日新聞』7面

8 日本放送協会放送史編修室編『日本放送史 上』日本放送出版協会、1965, p.88

9 日本放送協会放送史編修室編『日本放送史 上』日本放送出版協会、1965, pp.87-88

10 社団法人日本放送協会編『昭和六年ラヂオ年鑑』誠文堂、1961, pp.308-309

11 社団法人日本放送協会編『昭和六年ラヂオ年鑑』誠文堂、1961, p.308

12 日本放送協会放送史編修室編『日本放送史 上』日本放送出版協会、1965, p.86

13 日本放送協会編『NHK年鑑1955』ラジオサービスセンター、1954, p.87

ま”<sup>14</sup>として想定された家庭にいる女性に向けて、次々に新たな放送枠（定曜定時に編成され、定められた形式と分野の中でさまざまな主題が採り上げられる「枠」としての番組）が編成され、テレビ放送時間の伸張を支える役割を果たした。そして、高度成長期においてもなお、女性向け教養番組（当時の用語では「婦人番組」）は、「典型的に教養番組と考えられているもの」<sup>15</sup>であり続けたのである。

これら女性向け教養番組には、実用情報の提供や文化の伝播を旨とした『家庭講座』、『女性教室』、『婦人百科』などの他に、社会や政治に関する問題の啓蒙を旨とした戦前の『婦人講座』や戦後の『婦人の時間』、高度な専門知識の講義を旨とした『家庭大学講座』など、さまざまな放送枠が編成された。

そのうち、実用情報の提供や文化の伝播を旨とする放送枠は、戦前には主に『家庭講座』、戦後のラジオ時代には主に『女性教室』、そしてテレビ時代には主に『婦人百科』と移り変わった。

これらの放送枠において採り上げられた主題には、大きく分けて、裁縫（洋裁・和裁）や料理などの実用技術と「花」<sup>16</sup>や「茶」などの日本文化があった。

「日本では生活と芸術が一体であり、また一体になろうとするところに日本の生活文化が成立する」<sup>17</sup>といわれる。そうした「生活文化」としての「花」や「茶」が、これらの放送枠で伝播された文化だった。特に「花」は「生活の様式でありながら芸術の様式でもあるような両棲類的な」<sup>18</sup>性格を有し、実践の中にその真価が発揮されるものであることから、放送の開始当初から実用情報の提供と文化の伝播を旨とする放送枠の主題として採り上げられた。

この「花」と放送の関わりについては、「花」の歴史に関する複数の文献に記述がある。

たとえば、『いけばな辞典』には、「草月流」の項に、「昭和三年第一回花展を

---

<sup>14</sup> 藤原功達「家庭婦人はテレビ・ラジオをどのようにみききしているか」『文研月報』1965年12月号, 1965, p.14

<sup>15</sup> 生田正輝「第九章 放送内容」日本放送協会放送文化研究所放送学研究室編『放送研究入門』日本放送出版協会, 1964, p.187

<sup>16</sup> 女性向け教養番組においては、日本文化としての「花」に対して、「花」の他、「いけばな」、「いけ花」、「活花」、「生花」、「お花」など、さまざまな呼称が用いられて一定しない。そこで、本研究では、これらをその内に含んで総称する名辞として、「花」を用いる。また、日本文化としての「茶」についても、同様に、「お茶」、「茶道」、「茶の湯」、「煎茶」など、場合によっては「紅茶」までもその内に含んで総称する名辞として、「茶」を用いる。なお、総称として「花」および「茶」を用いた研究には、村井康彦『花と茶の世界—伝統文化史論』三一書房, 1990 や小林善帆『「花」の成立と展開』和泉書院, 2007 がある。

<sup>17</sup> 熊倉功夫『茶の湯といけばなの歴史 日本の生活文化』左右社, 2009, p.5

<sup>18</sup> 重森弘淹「現代いけばなの諸問題」河北倫明編『図説 いけばな体系 第4巻 現代のいけばな』角川書店, 1971, p.132。原文は鶴見俊輔『限界芸術論』勁草書房, 1967, p.8からの引用に基づく。

東京銀座千疋屋で開催。それがきっかけとなってNHKラジオの家庭講座で、『誰にでも出来る投入と盛花』と題して一回にわたって放送<sup>19</sup>し、草月流の名を全国的に広めた。<sup>20</sup>とあり、『日本花道史』には、「昭和四年 一九二九 蒼風、NHKラジオ講座開く。」<sup>21</sup>とある。

また、『日本いけばな文化史』では、「大正十四年には、ラジオ放送でいけばなが取り上げられるようになる。JOAK（東京放送局。大正十五年より日本放送協会）が本放送を開始したのはこの年であるから、放送開始当初からいけばな講座が組み込まれていたということになる。」と、その端緒が記され、続いて、「ラジオ放送の最大の欠点は、テレビのように映像が対象に伝わらないことであるが、講義録を普及させ、教授者が指定した花材をもとにした講習で、良家の子女たちのみならず、一般の家庭婦人にもコミュニケーションができる新しいメディアとして大変有用なもの」だったと、その効果を記している。さらに、「公的機関である日本放送協会が、日常の生活における一つの技芸としていけばなの存在を認めたということの意義は大きい。ことに放送に出演した花道家たちにとっては、流派のいけばなと家元の存在を大衆にアピールする機会となったと評している。そして、「放送によるいけばなの講座を担当したのは、(中略) いずれも自由花、盛花などの近代流派を代表する花道家たちで、ことに蒼風は、昭和四年に『誰れにも出来る投入花と盛花』と題して七回連続で講座を担当し、創流間もない草月流はその名を全国に知られるようになった。」<sup>22</sup>として、「近代流派」とラジオの関係を強調している。

また、『いけばな 花の伝統と文化』には、「昭和3年、NHKでは勅使河原蒼風を講師に招き、ラジオを通してのいけばな教室を開いて大いに人気を博した。この成功は、その後もラジオからテレビへと引きつがれ、電波によるいけばなの大衆化に果たした役割は大きい。」<sup>23</sup>と記されている。

このように、特に草創期のラジオ放送と「花」の関係は、数々の文献に記されており、放送の第一の「職能」である「文化の機会均等」を実現した事績として注目されるべきである。にも関わらず、テレビまでをも含む放送と「花」の関係についてはこれまで詳しく研究されることはなく、その実態と意義は明らかにされていない。また、「花」が講義される場となった、女性向け教養番組については、断片的な調査や論考がおこなわれたのみで、放送史を通観して論じる研究は見当たらず、その実態と意義は詳しく明らかにされていない。

<sup>19</sup> 題名は「誰にでも出来る投入花と盛花」が正しい。放送は昭和4（1929）年。回数は他の文献では7回とされている。本研究の調査でも7回であることを確認した。

<sup>20</sup> 大井ミノブ編『新装普及版 いけばな辞典』東京堂出版、1990、p.201

<sup>21</sup> 久保田滋・瀬川健一郎『日本花道史』光風社書店、1971、p.179

<sup>22</sup> 工藤昌伸『日本いけばな文化史 三 近代いけばなの確立』同朋舎出版、1993、p.105

<sup>23</sup> 水尾比呂志『いけばな 花の伝統と文化』美術出版社、1966、p.139

## 1.2 先行研究

放送史を通観して女性向け教養番組を論じた研究は見当たらないとはいえ、放送史の各時期に即した研究は散見される。

まず、ラジオの草創期については、「昭和初期のラジオが提供した『婦人』向け学習プログラム ——1925-33年の番組分析から——」<sup>24</sup>および「昭和初期におけるラジオ放送による大学開放講座」<sup>25</sup>がある。前者は、草創期の女性向け教養番組における三つの放送枠、すなわち、『家庭講座』、『婦人講座』、『家庭大学講座』について考察したものであり、後者は、そのうちの特に『家庭大学講座』についてのものである。それぞれ放送内容の題目を一覧化して分析し、草創期における女性向け教養番組の功績を明らかにした点で大きな意義を有する。

また、女性向け教養番組に特化した研究ではないが、草創期の教養番組については「戦前におけるラジオ講演番組の系譜」<sup>26</sup>があり、メディアを介した教育という観点から、草創期における主な講演番組についてその概略を紹介し、後藤新平が「当時のニュー・メディア放送の機能を『文化の機会均等と生活の近代化』においた」とした上で、それが「大正末期から高まってきた中産階級の出現による教養主義的な風潮の先どり」でもあったとしている。

戦時期については、女性向け教養番組に特化した研究ではないが、「太平洋戦争下の放送 ——国民はどう受け止めたか——」<sup>27</sup>が同時期の講演放送に対する国民の反応を投書の内容から分析し、考察している。『戦争と放送 史料が語る戦時下情報操作とプロパガンダ』<sup>28</sup>も、同じく放送への投書の内容分析を中核として、戦時体制下でのラジオ放送について論じている。また、『太平洋戦争下 その時ラジオは』<sup>29</sup>は、戦時下に出版された放送関係の雑誌などの史料を分析して、制作者の観点から戦時期のラジオ放送について考察している。

占領期については、「占領下における女性対象番組の系譜・1 『婦人の時間』

---

<sup>24</sup> 野村和「昭和初期のラジオが提供した『婦人』向け学習プログラム ——1925-1933年の番組分析から」『日本社会教育学会紀要』第40号, 2004, pp.51-59

<sup>25</sup> 野村和「昭和初期におけるラジオ放送による大学開放講座」『UEJ ジャーナル』第3号, 2011, pp.11-16

<sup>26</sup> 市川昌「メディアと教育(その1) ——戦前におけるラジオ講演番組の系譜——」『月刊社会教育』第28巻第6号, 1984, pp.56-64

<sup>27</sup> 竹山昭子「太平洋戦争下の放送 ——国民はどう受け止めたか——」『学苑』第629号, 1992, pp.72-82

<sup>28</sup> 竹山昭子『戦争と放送 史料が語る戦時下情報操作とプロパガンダ』社会思想社, 1994, 248p.

<sup>29</sup> 竹山昭子『太平洋戦争下 その時ラジオは』朝日新聞出版, 2013, 273p.

の復活」<sup>30</sup>、「占領下における女性対象番組の系譜・2 『婦人課』の誕生」<sup>31</sup>が、占領期の女性向け教養番組に対する統制について制作側の視点から問題点を明らかにしており、この時期の女性向け教養番組研究の基準となるものである。また、『アメリカ占領期の民主化政策——ラジオ放送による日本女性再教育プログラム』<sup>32</sup>は、占領軍による放送への検閲の実態などの分析と共に、当時の女性向け教養番組『婦人の時間』について、番組の副題や台本に基づく分析とインタビュー調査にをおこない、占領期におけるラジオによる思想教育について考察している。『戦後日本のメディアと社会教育——「婦人の時間」の放送から「NHK 婦人学級」の集団学習まで——』<sup>33</sup>は、占領期における『婦人の時間』の制作方針および『テレビ婦人学級』とその視聴グループによる集団視聴活動の実態について詳しく記し、放送内容と女性への民主主義教育との関連について考察している。

なお、女性向け教養番組に特化した研究ではないが、占領期の放送については、「占領初期における CIE の『番組指導』 思想の自由キャンペーンを中心に」<sup>34</sup>、「GHQ の放送番組政策——CI&E の『情報番組』と番組指導」<sup>35</sup>、「許可された自立 ～占領期インフォメーション番組におけるメッセージの変容～」<sup>36</sup>がある。いずれも、占領期の放送番組に対する GHQ（連合軍最高司令官総司令部）による統制の様相を実証的に論じる研究であり、その意義は大きい。

テレビ放送が開始された後における女性向け教養番組については、「テレビ放送における婦人番組の変遷」<sup>37</sup>が、1950年代から1960年代にかけての女性向け番組群の編成について分析している。民間放送まで含めたテレビ草創期の女性向け番組の編成を記録した貴重な研究である。

また、この時期において、特に家庭にいる女性に対する調査結果に基づく分

---

<sup>30</sup> 飯森彬彦「占領下における女性対象番組の系譜・1 『婦人の時間』の復活」『放送研究と調査』1990年11月号, pp.2-19

<sup>31</sup> 飯森彬彦「占領下における女性対象番組の系譜・2 『婦人課』の誕生」『放送研究と調査』1990年12月号, pp.2-19

<sup>32</sup> 岡原都『アメリカ占領期の民主化政策——ラジオ放送による日本女性再教育プログラム』明石書店, 2007, 294p.

<sup>33</sup> 岡原都『戦後日本のメディアと社会教育——「婦人の時間」の放送から「NHK 婦人学級」の集団学習まで——』福村出版, 2009, 317p

<sup>34</sup> 塙融「占領初期における CIE の『番組指導』 思想の自由キャンペーンを中心に」『放送研究と調査』1991年2月号, pp.26-35

<sup>35</sup> 向後英紀「GHQ の放送番組政策——CI&E の『情報番組』と番組指導」『マス・コミュニケーション研究』第66号, 2005, pp.20-36

<sup>36</sup> 宮田章「許可された自立 ～占領期インフォメーション番組におけるメッセージの変容～」『放送研究と調査』2015年4月号, pp.80-101

<sup>37</sup> 荒牧富美江「テレビ放送における婦人番組の変遷」『立正女子大学短期大学部研究紀要』第12号, 1968, pp.22-43

析をおこなった研究については、「家庭婦人のテレビ教育教養番組視聴」<sup>38</sup>や「教育・教養番組の視聴実態」<sup>39</sup>がある。

同時期における教養番組全般については、「教養番組の構造 視聴にみられる理念と行動のずれ」<sup>40</sup>が、各種調査結果の精緻な分析を元にして、教養番組の特質とその将来的な変化を予見した研究である。

1980年代以降、テレビ視聴時間が一時的に減少した時期については、女性向け教養番組に特化した研究ではないが、「データにみる80年代のテレビ視聴動向」<sup>41</sup>が、「視聴率調査」や「生活時間調査」などの調査データを元に、1980年代におけるテレビの変化を実証的に考察し、女性視聴者層の動向についても触れている。

一方、教養番組だけでなく教育番組を含む講座番組一般に関しては、1970年代以降になってから、ほぼ10年おきに利用調査が実施され<sup>42</sup>、調査結果に基づく分析がおこなわれてきた。これらの研究は、基礎となる調査の範囲および方法が同一ではないものもあるが、時系列で調査結果を分析する試みもなされており、その資料的価値は高いものである。

このように、女性向け教養番組については、貴重な研究や調査は散見されるものの、いずれもある特定の時期や利用動向を対象とした限定的なものであり、「花」を主題とする講座などの具体的な事例に即して放送史を通観した、詳細な分析と考察はおこなわれていないのが現状である。

### 1.3 研究目的

先行研究の節で示したとおり、女性向け教養番組に関する論考は、いずれも特定の時期における研究にとどまっており、具体的事例に基づいて、その歴史を通観した詳しい研究は、これまでなされてこなかった。特にそのうちの「花」を主題とする講座については、草創期の事績が文献に記述されているにも関わ

<sup>38</sup> 鈴木泰「家庭婦人のテレビ教育教養番組視聴」『文研月報』1971年10月号, pp.1-19

<sup>39</sup> 加藤春恵子「教育・教養番組の視聴実態」『東京大学新聞研究所紀要』第22号, 1974, pp.133-186

<sup>40</sup> 見田宗介、吉田潤「教養番組の構造 視聴にみられる理念と行動のずれ」『放送文化』1967年4月号, pp.6-11

<sup>41</sup> 戸村栄子「データにみる80年代のテレビ視聴動向 その1 テレビ視聴の変化」『放送研究と調査』1991年6月号, pp.58-67

<sup>42</sup> 1974年には、神山順一、藤岡英雄、岩崎三郎「講座番組の研究1 <講座番組はどれだけ利用されているか>——横浜調査の結果から——」『文研月報』1974年1月号, pp.1-24、1984年には、大串兎紀夫「講座番組はどのように利用されているか 横浜調査の結果から」『放送研究と調査』1984年8月号, pp.40-53、1991年には、大串兎紀夫、原由美子「講座番組はどのように利用されているか その1 利用の状況 ～『教育・教養番組利用状況調査』から～」『放送研究と調査』1991年10月号, pp.38-47がある。

らず、ほとんど研究の対象となっていない。女性向け教養番組における「花」を主題とする講座は、水尾（1966）が「成功は、その後もラジオからテレビへと引きつがれ」と記していることから、ラジオとテレビ双方において、文化を伝播する役割を果たしたと想定されるにも関わらず、その研究には大きな空白が生じているのが現状である。

そこで、本研究では、女性向け教養番組における「花」を主題とする講座に関する一次資料を調査し、分析をおこなうことによって、女性視聴者層への文化伝播の様相を、具体的事例に基づいて実証的に解明することを目的とする。

放送による文化伝播の様相を一次資料によって解明し、考察することは、放送というメディアの特性を実態に即して明らかにし、放送を知的資源として研究しようとする際の基盤を構築する意義がある。

## 1.4 研究方法

### 1.4.1 対象領域と用語定義

進藤（1973）が指摘するように「教養」とは「とらえることが容易にできないことば」<sup>43</sup>であり、岩永（1999）も「今日わが国で日常的に用いられる『教養』という概念は、きわめて曖昧」<sup>44</sup>であるとしている。教養という語を冠した「教養番組」についても、その語義は曖昧であるといえる。

放送法での定義は、まず教育番組を「学校教育又は社会教育のための放送の放送番組をいう」<sup>45</sup>とし、次に教養番組を「教育番組以外の放送番組であつて、国民の一般的教養の向上を直接の目的とするものをいう」<sup>46</sup>としている。放送法において「教養、教育、報道、娯楽」という4種別が示されたのは、1959年の改正（放送法は1950年6月1日施行）にともなつたのことという<sup>47</sup>が、教養番組の定義にある「一般的教養」が具体的に何を指すのかは示されていない。

1964年発行の『放送研究入門』では、放送法の定義よりも詳しく、教育番組を「正規の学校教育の延長ないしはその補足としての意味をもち、意識的な学習を目的とするような番組」<sup>48</sup>とし、教養番組を「それ以外の広く一般的な教養の涵養あるいは修養に資するための番組、いわばむしろ無意識的な学習に役立

---

<sup>43</sup> 進藤咲子「『教養』の語史」『言語生活』1973年10月号、p.66

<sup>44</sup> 岩永雅也「多様化するメディアと教養」『教育学研究』第66巻第3号、1999、p.295

<sup>45</sup> 放送法第二条二十九

<sup>46</sup> 放送法第二条三十

<sup>47</sup> 村上聖一「番組調和原則 法改正で問い直される機能 ～制度化の理念と運用の実態～」『放送研究と調査』2011年2月号、p.4

<sup>48</sup> 生田正輝「第九章 放送内容」日本放送協会放送文化研究所放送学研究室編『放送研究入門』日本放送出版協会、1964、p.188

つような番組」<sup>49</sup>としている。しかし、同書は、「教養番組の内容は極めて多様であると同時に、著るしく曖昧な存在である」<sup>50</sup>ともしている。そして、「一般に教養番組と目されている典型的な番組を指摘することは可能であり、NHKの分類に従えば、婦人番組、農業番組、宗教番組、社会教養番組などをこれに含めることができる」<sup>51</sup>としながらも「しかしながら、極端ないい方をするならば、娯楽番組を含めてあらゆる番組が、人々がなんらかの形で自分の教養に資するものを読み取る限りにおいて、すべて教養番組といい得ないことはないかも知れない」<sup>52</sup>と、その定義の曖昧さを繰り返し指摘している。

筒井（1995）は、「教養」という語について、明治末には『教化育成』というような意味で使われていた」<sup>53</sup>とし、「この傾向は大正・昭和期にも残っており、辞書にも『おしえそだつること』を意味としてあげているものが多い」<sup>54</sup>とした上で、「当時『教養』とはたんに『教化』『教育』『育成』を指していた」<sup>55</sup>としている。そして、「教養」という語のもう一つの意味として、大正期のいわゆる教養主義の潮流から「修養」という語から自立して『数千年来人類が築いて来た多くの精神的な宝—芸術、哲学、宗教、歴史—によって』『人間としての素質を鞏固ならしめる』こと、としての『教養』の観念」<sup>56</sup>が用いられるようになったと考察している。進藤（1973）も「和英辞典で『教養』の項を見れば **culture, education** と二つ並記される事実を見落とすわけにはいかない」<sup>57</sup>として、「教養」という語に二つの意味があることを指摘している。

教養番組が放送番組の分類として示されるようになったのは、1927年12月から<sup>58</sup>のことという。『日本放送史』は、この時点での教養番組を「情報の伝達、娯楽の提供のそれぞれを目的とする報道・慰安に対し、いわゆる教育的なもの、知識の啓発に資するもの、実用・実利を主体とするものなど」<sup>59</sup>と定義している。ここでは、教養番組は、「教育的な」、「知識の啓発」、「実用・実利」という3種

---

49 生田正輝「第九章 放送内容」日本放送協会放送文化研究所放送学研究室編『放送研究入門』日本放送出版協会、1964、p.188

50 生田正輝「第九章 放送内容」日本放送協会放送文化研究所放送学研究室編『放送研究入門』日本放送出版協会、1964、p.190

51 生田正輝「第九章 放送内容」日本放送協会放送文化研究所放送学研究室編『放送研究入門』日本放送出版協会、1964、p.190

52 生田正輝「第九章 放送内容」日本放送協会放送文化研究所放送学研究室編『放送研究入門』日本放送出版協会、1964、p.190

53 筒井清忠『日本型「教養」の運命 歴史社会学的考察』岩波書店、1995、p.30

54 筒井清忠『日本型「教養」の運命 歴史社会学的考察』岩波書店、1995、p.30

55 筒井清忠『日本型「教養」の運命 歴史社会学的考察』岩波書店、1995、p.30

56 筒井清忠『日本型「教養」の運命 歴史社会学的考察』岩波書店、1995、p.90

57 進藤咲子「『教養』の語史」『言語生活』1973年10月号、p.68

58 日本放送協会放送史編修室編『日本放送史 上』日本放送出版協会、1965、p.86

59 日本放送協会放送史編修室編『日本放送史 上』日本放送出版協会、1965、p.86

の類別から成り立っていることになる。

ここでは、「教育的な」と「知識の啓発」という **education** と **culture** に相当するとみなしうる類別に加えて「実用・実利」という類別も示されている。進藤（1973）が指摘する<sup>60</sup>ように、「実用」は「教養」と対比して用いられることも多い語であり、草創期の放送における教養番組は、教育、知識に加え実用も含む、幅広い概念だったことになる。

そこで、本研究は、対象領域を明確にするために、各年度の『年鑑』<sup>61</sup>において、教養番組<sup>62</sup>のうち「婦人家庭向け」や「婦人向け」の項に記載された番組（放送枠）群を「女性向け教養番組」として扱う。放送の用語としては、女性を対象聴取者ないし視聴者とした番組に対しては、「婦人家庭向け放送」、「家庭婦人への放送」、「婦人向け放送」、「婦人放送」などの語が用いられ、その番組内容を説明する際には、「女性」という語も用いられた。本研究では、これらの語を包括するものとして「女性向け教養番組」という語を用いる。そして、これら「女性向け教養番組」で採り上げられた題材の中核であった「花」を主題とする講座を事例として、調査と分析をおこなう。なお、必要に応じ、「茶」など他の主題にも言及する。

#### 1.4.2 時期区分と課題設定

日本における放送は、90年以上の歴史を有するが、その歩みにはいくつかの節目がある。大きくはラジオ放送のみだった時代とテレビ放送が加わった後の時代に二分されるが、ラジオ時代には、戦争という大きな出来事があり、1937年の盧溝橋事件勃発後の戦時体制によって、放送内容は変化を余儀なくされた。また、戦後のラジオ放送もアメリカを中心とする連合軍の占領下にあって、放送内容は変化を余儀なくされた。占領が終わり、日本経済が復興に向かった時期には、テレビが出現し、普及の頂点に達していたラジオと併存するという状況が訪れた後、テレビはラジオに取って代わる存在となった。テレビは急速に発展した後、日本経済が高度成長から低成長へと転換した頃に、マンネリズム化やレジャーの多様化の影響で一時的に視聴時間が減少し、新機軸番組が

---

<sup>60</sup> 進藤咲子『『教養』の語史』『言語生活』1973年10月号, p.66

<sup>61</sup> 1931年（発行年・以下同）から1940年までは『ラジオ年鑑』、1941年から1948年までは『ラジオ年鑑』、1949年から1952年までは『NHKラジオ年鑑』、1952年以降は『NHK年鑑』に拠る。1930年以前は『年鑑』が発行されていないため、通史である『東京放送局沿革史』（1928）、『最近の放送事情』（1932）、『日本放送協會史』（1939）、『日本放送史』（1965）における該当時期の記述に拠る。

<sup>62</sup> 放送法の定義では「教養番組」は「教育番組以外の番組」とされていること、および後藤の演説でも「教育の社会化」は「文化の機会均等」とは別の「職能」とされていることから、本研究では、学校教育番組などのいわゆる「教育番組」は対象とはしない。

台頭するという変化期を有する。女性向け教養番組における「花」を主題とする講座は、こうした放送史上の各時期に即した、特性と意義を有していたと想定される。

そこで、本研究では、放送史上の各時期を画し、それぞれの時期ごとに章を立てて調査および分析と考察をおこない、最後に結論の章において各時期を通観して考察をおこなう。

時期区分は以下のとおりである。

まず、1925年3月22日の放送開始から1937年7月7日の盧溝橋事件勃発より前までをラジオ草創期とする。ラジオ草創期の始まりを1925年3月22日とするのは、この日に東京放送局による仮放送が始められ、日本における放送メディア誕生の時とされている<sup>63</sup>からである。

次に、1937年7月7日以降、玉音放送によって戦争の終結が告げられる1945年8月15日までをラジオ戦時期とする。ラジオ戦時期の始まりを1937年7月7日とするのは、この日に勃発した盧溝橋事件以降、「事変下における戦時体制確立の国策に協力すべく」<sup>64</sup>番組編成が変更され、報道部門が増大して番組の構成割合が変化し、日本の放送史上、画期となった<sup>65</sup>からである。

次に、1945年8月15日以降、「日本国との平和条約（サンフランシスコ平和条約）」が発効する1952年4月28日までをラジオ占領期とする。ラジオ占領期の始まりを1945年8月15日とするのは、この日の玉音放送によって戦争の終結が告げられた後、月内に連合軍の進駐が開始されて占領が始まり、まもなく日本の放送は連合軍の統制下に置かれることになったからである。

次に、1952年4月28日以降、1964年度末までをラジオからテレビへの転換期とする。ラジオからテレビへの転換期の始まりを1952年4月28日とするのは、この日に「日本国との平和条約」が発効して日本が主権を回復したことに拠る。この頃、ラジオは全盛期を迎えていた一方、1952年度（1953年2月1日）に日本でのテレビ放送が開始されて、ラジオとテレビの並立が始まった。ラジオからテレビへの転換期の終わりを1964年度末とするのは、この年度に「人びとのテレビ視聴がすでにラジオ聴取にとってかわり、かつてのラジオ全

<sup>63</sup> 仮放送開始の3月22日が放送記念日として制定されている。

<sup>64</sup> 社団法人日本放送協会『業務統計要覧 昭和12年度』1938, p.4

<sup>65</sup> 『放送五十年史』(1977)は、「戦時体制の始まりを満州事変以後ではなく日中戦争から」とし、「国民生活への影響、放送番組編成上の変化という点を考え、この時期を戦時体制下として区分」している（『放送五十年史』p.860）。『日本放送史』(1965)は、1934年の機構改革を画期としているが、同書も「講演放送の主軸は、日華事変以後、戦局の拡大するにつれ、軍および政府によって強調された、(中略) 全国民を総動員する総力戦の思想を高揚することに協力する」ことになり「この期の教養放送の発展の姿は、だいたい、日華事変を中心として、前後の二つに分けて特徴づけることができる」としている（『日本放送史上』pp.351-352）。

盛時代に比肩するほどのテレビ接触が行なわれていることは明らか<sup>66</sup>になり、ラジオからテレビへの転換が完了した<sup>67</sup>とみなせることに拠る。

次に、1953年2月1日のテレビ放送開始以降、1981年度末までをテレビ発展期とする。テレビ発展期に関しては、テレビ放送開始以来の経過を通観するため、その始まりを1953年2月1日とし、その初期をラジオからテレビへの転換期と重複して扱う。テレビ発展期の終わりを1981年度末までとするのは、1970年代半ばにピークに達したテレビの視聴時間量が、この年度まで、「漸減しながらではあるが、比較的安定した状態」<sup>68</sup>を保ったことに拠る。

次に、1982年度以降、1992年度末までをテレビ変化期とする。テレビ変化期の始まりを1982年度とするのは、この年度に女性視聴者層の視聴時間量の落ち込みが最低点に達し、かつ、「テレビ30年調査」において「テレビに対して興味のある人」の割合が減少し「テレビ離れ」が鮮明となったことに拠る。終わりを1992年度末までとするのは、この年度におこなわれた「テレビ40年調査」において「テレビに対して興味のある人」の割合が上昇して視聴意向の回復が示されたことに拠る。なお、この時期に関しては、1980年代を通観して変化を観察するために、調査および分析に際しては、始まりをテレビ発展期末の2年間と重複して1980年度からとする。

本研究が調査と考察の対象とする女性向け教養番組における「花」を主題とする講座には、これらの時期に相応した特徴が存すると想定され、研究上の課題も、これらの時期に即して設定しうる。

ラジオ草創期については、「花」の歴史に関する複数の文献に「花」を主題とする講座に関する言及があることから、多くの放送がおこなわれ、文化の伝播に貢献したことは明らかである。そこには、文化の伝播に関してラジオという新興メディアならではの特徴が存すると考えられ、その特徴を明らかにすることが課題となる。

一方、その後のラジオについては、「花」の歴史に関する文献に「花」を主題とする講座についての記述を見いだすことはできない。戦時中は「花をいけるよりは芋を作れ」といわれた<sup>69</sup>と伝えられる時期であることから、「花」を主題

<sup>66</sup> 山本透「番組視聴の諸相 a.『ラジオ志向』から『テレビ志向』へ」日本放送協会総合放送文化研究所放送学研究室編『放送学研究 10 共同研究 日本におけるテレビ普及の特質 3分冊の3』1965, p.233

<sup>67</sup> 各年度の編成概要を記述した『NHK年鑑』では、1964年度の『NHK年鑑'64』まで、まずラジオ、次にテレビという記載順だったものが、1965年度から、まずテレビ、次にラジオという順に変わっていることも、この時点でラジオからテレビへの転換が完了したことの傍証とみなすことができよう。

<sup>68</sup> 戸村栄子「データにみる80年代のテレビ視聴動向 その1 テレビ視聴の変化」『放送研究と調査』1991年6月号, p.67

<sup>69</sup> 日本経済新聞社編『私の履歴書 文化人6 勅使河原蒼風』日本経済新聞社, 1983, p.312

とする講座の放送もほとんどおこなわれなかったと考えられる。ところが、戦後、占領下にあつて「花」が「いち早く復興し、たくましく発展」<sup>70</sup>した時期にあつてもなお、「花」を主題とする講座の放送に関する記述は、「花」の歴史に関する文献に現れない。占領期について記述が無いことは、放送がほとんどおこなわれなかったことに起因すると仮定できるが、そこには戦時中とは異なるこの時期特有の要因が存在するはずである。したがって、戦時中および占領下の「花」を主題とする講座の放送実績について調査し、両時期を対照することで、それぞれに特有の要因を明らかにし、両時期の相違点あるいは共通点を明らかにすることが課題となる。

ラジオからテレビへの転換期については、「花」を主題とする講座はテレビでも放送されたという記述が文献にある<sup>71</sup>ことから、ラジオとテレビとで同時に「花」を主題とする講座が編成された可能性がある。テレビは映像を有しているため、造形芸術である「花」を伝播するにはラジオよりも適していたと考えられる。ラジオとテレビとで同時期に「花」を主題とする講座が放送されていたとすれば、そこには、ラジオとテレビそれぞれのメディアの特性に即した差異が生じていたと想定される。したがって、この時期の放送実績を調査した上で、「花」を主題とする講座における、それぞれのメディアの特徴、とりわけ、テレビという新しいメディアの特徴を明らかにすることが課題になる。

テレビ発展期では、「いけばなを上品な趣味として」<sup>72</sup>楽しむ風潮が広まったことから、「花」の行動者数は「一千万人」<sup>73</sup>と推定されるに至った。このことから、テレビでも「花」を主題とする講座は数多く放送されたと想定される。また、この時期には「茶」についても「茶」の歴史に関する文献に女性向け教養番組による伝播の記述がある<sup>74</sup>。したがって、「花」および「茶」をそれぞれ主題とする講座は同時期にテレビで編成されていた可能性がある。「花」と「茶」は共に伝統文化でありながら、近代におけるその発展は異なっている。同じく家元制の元で飛躍的に成長したとはいえ、「茶」には、「花」に匹敵するような近代流派の勃興や前衛ブームが生じなかった。また、その流派の数や行動者数にもかなりの差がある。これらのことから、「花」と「茶」のテレビでの伝播のされ方には違いがあると想定される。したがって、「花」と「茶」それぞれを主題とする講座の編成を比較することによって、テレビによる日本文化伝播の様相を明らかにすることが課題となる。

---

<sup>70</sup> 工藤昌伸『日本いけばな文化史 四 前衛いけばなと戦後文化』同朋舎出版、1994、p.48

<sup>71</sup> 水尾比呂志『いけばな 花の伝統と文化』美術出版社、1966、p.139

<sup>72</sup> 久保田滋、瀬川健一郎『日本花道史』光風社書店、1971、p.87

<sup>73</sup> 『週刊朝日』1966年12月23日号、p.16

<sup>74</sup> 熊倉功夫『近代茶道史の研究』日本放送出版協会、1980、p.354 および久田宗也「NHKテレビ『茶道講座』のまとめ」『茶道雑誌』1967年3月号、河原書店、pp.11-21

テレビ変化期では、教養と娯楽を融合した新機軸番組が出現した。にも関わらず、この時期に、女性向け教養番組における「花」を主題とする講座には新たな形式は現れなかった。視聴時間量の落ち込みは、まず女性視聴者層において顕著に示された<sup>75</sup>ことから、女性向け教養番組でもなんらかの対応があったと想定される。その対応は、どのようにおこなわれたのかを明らかにし、この時期の「花」を主題とする講座をテレビの「変化」と照応して考察することが課題となる。

#### 1.4.3 調査資料と分析項目

これらの課題について、本研究は、放送の送り手の側である編成の実績を調査し分析することによって、考察する。

田村（1967）は、「ラジオ聴取に関連するさまざまな面を考えたとき、『送り手』のもつ比重は極めて大きい。受け手側の立場としては、現実には、現行のラジオ編成という限定された条件のワク内で、ラジオをきくかきかないか、どれをきくか、というような選択を行なっているのである。」<sup>76</sup>と指摘している。

『送り手』のもつ比重は極めて大きい」という指摘は、ラジオのみならずテレビにもあてはまる。本研究はこの考え方に立脚し、送り手の側、すなわち、編成について調査し、分析することを研究方法の骨子とする。

編成の実績を調査する対象としては、各年度<sup>77</sup>の『年鑑』および『番組確定表』を基礎資料とする。

このうち『年鑑』が各年度の編成を年度終了後に振り返って、概要を記述した資料であるのに対し、『番組確定表』はリアルタイムで放送データを記録した原資料であって集計や加工は施されていない。

『番組確定表』は「番組の公式記録」<sup>78</sup>であり、長廣（2004）は、『番組確定表』を「NHKの放送を、記録の上からたどることができる唯一の第一次資料」<sup>79</sup>と評している。そこには、放送が確定した番組の放送枠（番組）名、副題、出演者などが放送時刻順に記録され、変更も追記されている。

---

<sup>75</sup> 戸村栄子「データにみる80年代のテレビ視聴動向その2 視聴動向の特徴」『放送研究と調査』1991年8月号, p.48

<sup>76</sup> 田村穰生「ラジオ聴取の変容とその将来」NHK総合放送文化研究所編『NHK放送文化研究年報 一第12集一』1967, p.203

<sup>77</sup> 放送番組の編成が通常4月期の改編を基準として年度ごとに区切られることから、本研究では、放送実績の計測において、原則として年度を単位とする。

<sup>78</sup> NHK ONLINE「番組表ヒストリーについて」より。

〈<https://www.nhk.or.jp/archives/chronicle/pg/page000-02.html>〉[2017年5月1日閲覧]

<sup>79</sup> 長廣比登志「現代邦楽放送年表——NHKラジオ番組『現代の日本音楽』放送記録(64.4～72.3)」京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター編『日本伝統音楽研究 第1号別冊改訂版』2004, p.7. 長廣は、日本放送協会に勤務した後、京都市立芸術大学教授となった。

『番組確定表』は、制作担当者が、番組の放送日時と曜日、放送波、番組名、副題、出演者などの番組情報を記して編成担当者に送付する『番組通知票』を元に作成される。このことから、『番組確定表』は、制作担当者の番組への意図が端的に反映された資料であるといえる。

『番組確定表』は「NHK アーカイブスに保存され、放送記録の確認や放送文化の研究のために利用されて」<sup>80</sup>いる。『番組確定表』に基づき、特定の放送枠内での副題によって放送の内容を実証的に分析し、当該放送番組（放送枠）が持つ歴史的意義を明らかにした研究には、「現代邦楽放送年表——NHK ラジオ番組『現代の日本音楽』放送記録（64.4～72.3）」<sup>81</sup>を始め、「昭和初期のラジオが提供した『婦人』向け学習プログラム ——1925-33年の番組分析から——」<sup>82</sup>、『アメリカ占領期の民主化政策 ——ラジオ放送による日本女性再教育プログラム』<sup>83</sup>、「昭和初期におけるラジオ放送による大学開放講座」<sup>84</sup>、「1925～1926年にかけてのJOAKにおけるオペラ関連番組」<sup>85</sup>、「NHK ラジオ番組『幼児の時間』における音楽教育プログラムとその変遷—1935年から1952(昭和27)年を中心に—」<sup>86</sup>がある。

この『番組確定表』に記された放送実績に対し、本研究は、放送本数の年度ごと推移、放送内容に関する連続性の有無とその程度、番組副題の内容語抽出あるいは形態素解析、出演者構成の流派比率あるいは男女比率の対比などを分析し、考察をおこなう。

本研究においては、調査および考察の範囲を公共放送の女性向け教養番組に限ることとする。その理由は、女性向け教養番組における「花」を主題とする講座が、民間放送が存在しなかった1951年8月まで<sup>87</sup>はもちろんのこと、その

---

<sup>80</sup> NHK ONLINE「番組表ヒストリーについて」より。

<https://www.nhk.or.jp/archives/chronicle/pg/page000-02.html> [2017年5月1日閲覧]

<sup>81</sup> 長廣比登志「現代邦楽放送年表——NHK ラジオ番組『現代の日本音楽』放送記録（64.4～72.3）」京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター編『日本伝統音楽研究 第1号別冊改訂版』2004, pp.1-192

<sup>82</sup> 野村和「昭和初期のラジオが提供した『婦人』向け学習プログラム ——1925-1933年の番組分析から——」『日本社会教育学会紀要』第40号, 2004, pp.51-59

<sup>83</sup> 岡原都『アメリカ占領期の民主化政策——ラジオ放送による日本女性再教育プログラム』明石書店, 2007, 294p.

<sup>84</sup> 野村和「昭和初期におけるラジオ放送による大学開放講座」『UEJ ジャーナル』第3号, 2011, pp.11-16

<sup>85</sup> 佐藤英「1925～1926年にかけてのJOAKにおけるオペラ関連番組」『桜文論叢』第85号, 2013, pp.135-157

<sup>86</sup> 大地宏子「NHK ラジオ番組『幼児の時間』における音楽教育プログラムとその変遷—1935(昭和10)年から1952(昭和27)年を中心に—」『岐阜聖徳学園大学紀要 教育学部編』第53号, 2014, pp.181-199

<sup>87</sup> 「新日本放送株式会社（大阪）と中部日本放送株式会社（名古屋）の二社が昭和二十六年九月一日に開局し（中略）ここにわが国最初の商業放送局が誕生」した（日本放送協会

後においてもほとんど公共放送においてのみ編成され<sup>88</sup>、通時的な研究の対象とはならないと考えられることに拠る。

また、考察にあたっては、番組に関連して出版された講演集やテキスト、放送史および「花」の歴史に関する資料も参照する。

以下、本研究では、第2章でラジオ草創期、第3章でラジオ戦時期および占領期、第4章でラジオからテレビへの転換期、第5章でテレビ発展期、第6章でテレビ変化期について、各時期での女性向け教養番組における「花」を主題とする講座の編成と放送の内容を調査、分析し、考察する。ラジオ戦時期と占領期については、共に、放送が統制下であり、「花」の歴史に関する文献に記述が無いという相似性を有することから、第3章において両者を併置して分析し、その相違点および共通点を考察する。また、これらの各時期を調査あるいは考察するに際し、前あるいは後の時期と比較対照することによって、各時期の特徴をより明確に把握できると考えられる場合は、それぞれの時期区分を越えて前あるいは後の時期にまたがった調査と分析をおこなうこともある。第7章においては、各時期の特徴を踏まえた上で、女性向け教養番組における「花」を主題とする講座の通時的な特徴と歴史的意義を考察する。

---

放送史編修室編『日本放送史 下巻』日本放送出版協会、1965, p.198)。

<sup>88</sup> 女性向け教養番組における「花」を主題とする講座は、公共放送ではラジオ放送の開始時から1990年代にいたるまで編成されていたが、民間放送では定時番組としては一時的にしか編成されなかったと考えられる(荒牧富美江「テレビ放送における婦人番組の変遷」『立正女子大学短期大学部研究紀要』第12号、1968, pp.22-43 参照)。

## 第 2 章 ラジオ草創期

## 2.1 ラジオ草創期の女性向け教養番組

ラジオ開始時に総裁後藤新平が唱えた「文化の機会均等」という職能を發揮させるために編成された女性向け教養番組群について、『日本放送協會史』は、「家庭婦人向放送は教養放送中古き歴史を持つ」<sup>89</sup>として、草創期の系譜を記している。すなわち、放送開始初年の1925年5月24日に「早くも初の『料理献立』を放送し續いて二十七日は又最初の『家庭講座』を放送した」<sup>90</sup>。翌1926年2月には「午前の『家庭講座』に加ふるに午後の『婦人講座』も生れて、『家庭講座』は家事に関する実用的のもの、『婦人講座』は婦人の一般教養向上に資するものと區別して取扱ふに至つた。」<sup>91</sup>更に、その翌1927年5月には、「婦人に一層高級なる學理的知識を體系的に與へる爲め『家庭大学講座』を加へ、爾来この三種の講座を久しく行つて來た」<sup>92</sup>という。

第1章1.4.1項で示した『日本放送史』での定義<sup>93</sup>に照らせば、『家庭講座』が「実用・実利を主体とするもの」、『婦人講座』が「知識の啓発に資するもの」、『家庭大学講座』が「いわゆる教育的なもの」に該当するとみなせるだろう。したがって、『婦人講座』の記述にある「一般教養」とは「知識」を指すものと考えられ、「一般」とは言い条、「実用」や「教育」までを含むものではないことに留意する必要がある。

「家庭婦人向放送」としては『料理献立』が『家庭講座』の3日前に放送を開始されている。しかし、『日本放送協會史』の記述では、『家庭講座』、『婦人講座』、『家庭大学講座』を「この三種の講座」として、それぞれ内容を記しているのに対し、『料理献立』はその埒外に置かれている。このことから、「文化の機会均等」を図るための講座番組は、『家庭講座』、『婦人講座』、『家庭大学講座』の3番組（放送枠）とされていたといえる。

野村（2004）は、この3番組について『番組確定表』の副題から内容を分析し、「それぞれが設立趣旨に基づき生活に役立つ実用的な内容、時事的な内容、専門的内容を扱うという異なる性格を有していた」<sup>94</sup>としている。すなわち、『家庭講座』が「実用」、『婦人講座』は「時事」、『家庭大学講座』が「専門」という役割分担である。『家庭講座』は、「実用」とはいつても、料理、裁縫、育児など実用情報の提供と「花」や「茶」など日本文化の伝播という主題を併せ持

<sup>89</sup> 社団法人日本放送協會編『日本放送協會史』日本放送出版協會，1939，p.200

<sup>90</sup> 社団法人日本放送協會編『日本放送協會史』日本放送出版協會，1939，p.200

<sup>91</sup> 社団法人日本放送協會編『日本放送協會史』日本放送出版協會，1939，pp.200-201

<sup>92</sup> 社団法人日本放送協會編『日本放送協會史』日本放送出版協會，1939，p.201

<sup>93</sup> 日本放送協會放送史編修室編『日本放送史 上』日本放送出版協會，1965，p.86

<sup>94</sup> 野村和「昭和初期のラジオが提供した『婦人』向け学習プログラム—1925-1933年の番組内容分析から—」『日本社会教育学会紀要』第40号，2004，p.57

っていた。一方、『婦人講座』は、野村によれば「社会的な問題を女性の立場や視点と結びつけた放送内容が多く、女性の自覚を促し、啓蒙することを目的」<sup>95</sup>としていたとみなされている。また、『家庭大学講座』は「その内容が非常に学術的」で「放送を担当した講師陣は大学教授が中心となっており、高等教育レベルの学習機会を女性に提供」<sup>96</sup>するという特徴を有していたという。

一方、1931年発行の『ラヂオ年鑑』には、3者の対象聴取者層について次のように記されている。すなわち、『家庭講座』は、「家庭にある女性のために日常生活の上に於いて必要な知識を極く平易に説明する爲め」<sup>97</sup>の番組、『婦人講座』は、「一步進んで婦人の社会常識を涵養する目的を以て（中略）女学校卒業程度の婦人に目標を」<sup>98</sup>置く番組、『家庭大学講座』は「同じく女学校卒業程度の婦人に對して、専ら學問的に社会常識上必須な課目を選び、該方面の専門學者に委嘱して、」<sup>99</sup>講義をおこなう番組という仕分けである。『婦人講座』と『家庭大学講座』が共に、「女学校卒業程度」という限られた層の女性に向けたものであるのに対し、『家庭講座』は、「家庭にある女性のために」「平易に説明する」番組であり、家庭にいる女性をすべて対象としている。『家庭講座』は、東京放送局仮放送開始時の理念である「家庭にいる女性への文化の機会均等」を最もよく具現化する番組だったことになる。

野村（2004）は、これら女性向け教養番組群は、「家庭に閉じこもりがちな主婦など当時の女性に、最新の知識や技術を各分野の権威から学べる新しい可能性を開いた。著名人の講演を聞く、もしくは家元などから直接稽古を受けるなど、それまでには普通持ち得なかった学習機会がラジオによって、全国の女性に広く提供された」<sup>100</sup>と評している。

これら女性向け教養番組の制作を担当していたのは、大澤豊子という女性だった。大澤について、『日本女性人名辞典』は次のように記している。

明治六年（一八七三）一二月三十一日～昭和一二年（一九三七）六月一五日

明治～昭和期のジャーナリスト。（明治）三二年時事新報社に速記の手腕

<sup>95</sup> 野村和「昭和初期のラジオが提供した『婦人』向け学習プログラム—1925-1933年の番組内容分析から—」『日本社会教育学会紀要』第40号，2004，p.59

<sup>96</sup> 野村和「昭和初期のラジオが提供した『婦人』向け学習プログラム—1925-1933年の番組内容分析から—」『日本社会教育学会紀要』第40号，2004，p.55

<sup>97</sup> 社団法人日本放送協會編『昭和六年 ラヂオ年鑑』誠文堂，1931，p.324

<sup>98</sup> 社団法人日本放送協會編『昭和六年 ラヂオ年鑑』誠文堂，1931，p.326

<sup>99</sup> 社団法人日本放送協會編『昭和六年 ラヂオ年鑑』誠文堂，1931，p.326

<sup>100</sup> 野村和「昭和初期のラジオが提供した『婦人』向け学習プログラム—1925-1933年の番組内容分析から—」『日本社会教育学会紀要』第40号，2004，p.57

をかわれて入社、(中略) 婦人記者の草分けとして名声があった。大正一五年(一九二六) 記者をやめ、開設したばかりの東京中央放送局(NHK)に招聘され、家庭婦人部主任として婦人講座や教育番組を担当した。(後略)

101

また、1932年発行の婦選獲得同盟機関紙『婦選』には、次のようにある。

大澤さんはJOAK<sup>102</sup>の社会教育課の中に在る家庭部の主任なのである。

(中略)

社会教育課の仕事である所の

講演

○家庭講座

○婦人講座

○家庭大学講座

○朝の料理

子供の時間(以上第一放送)教育放送(第二放送)

の中で、○のついてゐるのが大澤さんの擔當であり、これを引くるめて家庭部、その主任としてプログラムの編成出演の交渉から梗概作成、テキスト作成、放送に関する一切についてわが大澤さんは、六年間殆ど三百六十五日働きつゞけて来たのである。<sup>103</sup>

大澤は『家庭大学講座』を新設した時の抱負を次のように述べている。

女学校を出て家庭に入った主婦の方、学校を出て、社會へと巣立つた職業婦人方には、此ラヂオこそ絶好の修学機関である。之に因つて婦人が高級な常識を涵養し得るならば、文化の恩澤之に過ぎるものはない。(中略) 外に出ることの困難な、読むものの少ない相当知識ある階級の婦人は、悉く此講座を利用すべきである。<sup>104</sup>

---

<sup>101</sup> 芳賀登ほか監修『日本女性人名辞典(普及版)』日本図書センター、1998、p.195

<sup>102</sup> 日本における放送は、社団法人東京放送局(JOAK)、社団法人大阪放送局(JOBK)、社団法人名古屋放送局(JOCK)の3局体制で始められた。その後、3局は社団法人日本放送協会に統合され、東京放送局は関東支部(放送時の呼称は東京中央放送局)となったが、JOAKのコールサインは残った。

<sup>103</sup> 青鉛筆の記者「JOAK家庭部主任 大澤豊子女史」婦選獲得同盟『婦選』1932年3月号、1932、pp.65-66

<sup>104</sup> 大澤豊子「愛宕山を下つて——婦人界に報告することども——」『婦人公論』1934年10月号、1934、p.141

「外に出ることの困難な」女性たちも「高級な常識を涵養し得る」ことをめざした大澤は、後藤新平が東京放送局開局にあたって説いた放送の職能、すなわち、家庭にいる女性に対する「文化の機会均等」を押し進める存在だったといえるだろう。

就任後、大澤は『家庭講座』の放送開始時刻を変更した。それまでの『家庭講座』は午前9時30分からの放送だった。それを「午前九時三十分は家庭婦人にとって忙しい時である。」<sup>105</sup>として、「十時三十分に改め」たのである。

大澤は、午前9時30分は家庭にいる女性にとって忙しい時であるとしているが、当時の生活実態はどのようなものだったのか。少し後の時期の資料ではあるが、日本での「戦前の国民各層の時間の過ごし方を全国的にとらえた唯一の調査」<sup>106</sup>である1941年の『国民生活時間調査』<sup>107</sup>によって検証する。図1は、俸給生活者女子家族21歳-30歳の午前中の家事従事者率の時間推移を表すグラフである。

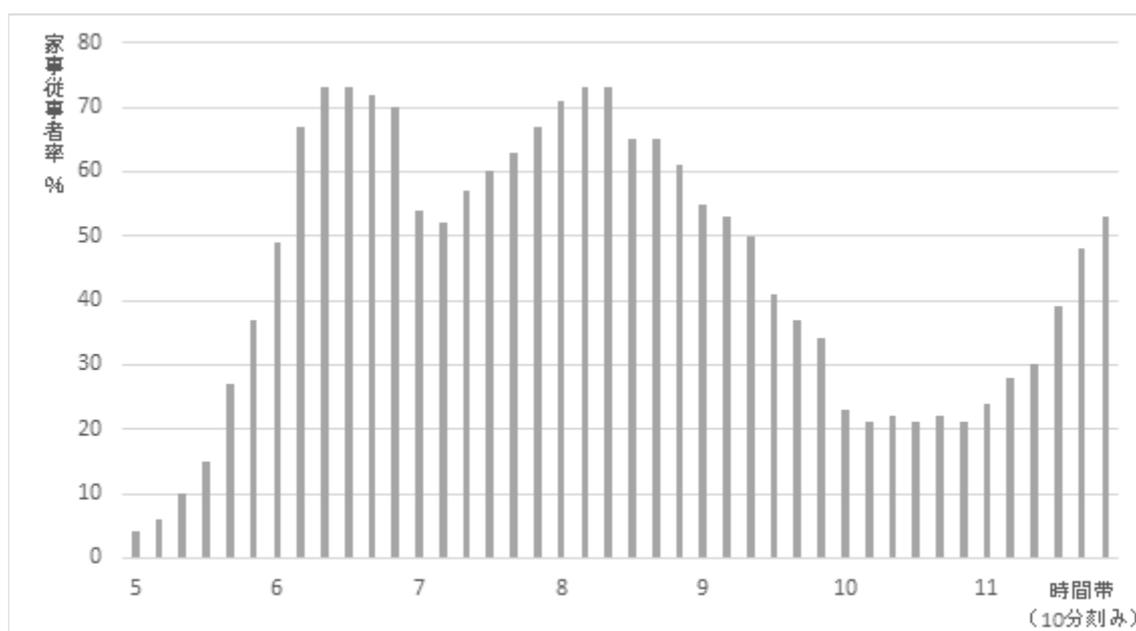


図1 1941年における俸給生活者女子家族21歳-30歳の家事従事者率<sup>108</sup>

<sup>105</sup> 大澤豊子「愛宕山を下って ——婦人界に報告することども——」『婦人公論』1934年10月号, 1934, p.139

<sup>106</sup> 鈴木泰「刊行にあたって」社団法人日本放送協会編『国民生活時間調査(昭和16年調査)』大空社, 1990〔復刻版〕巻頭頁

<sup>107</sup> 社団法人日本放送協会編『国民生活時間調査 一般調査報告 俸給生活者工場労働者女子家族編』日本放送協会, 1943

<sup>108</sup> 社団法人日本放送協会編『国民生活時間調査 一般調査報告 俸給生活者工場労働者女子家族編』日本放送協会, 1943, pp.12-13に掲載の表より作成。

図1に示したとおり、同調査の「調査結果表」のうち、全国俸給生活者女子家族21歳-30歳[午前]での「家事」従事者の比率<sup>109</sup>は、午前6時20分-30分と同6時30分-40分が共に73%と第一の山を形成した後、午前7時台は50ないし60%台で推移し、午前8時10分-20分と同8時20分-30分が同じく73%と第二の山を形成している。その後、8時台後半は60%台、9時台前半では午前9時00分-10分が55%、同9時20分-30分が53%、同9時20分-30分が50%と半数以上が家事に従事している。その後、9時台後半は10分刻みで41%、37%、34%と漸減した後、午前10時台になって一期に10ポイント近く低下して23%となる。以下、10時台は10分刻みで21%、22%、21%、22%、21%とほぼ変わらない。午前11時台になると上昇に転じ、10分刻みに24%、28%、30%、39%、49%、53%と急増して、正午に至っている。

なお、この「調査結果表」には、「時刻別聴取適否参考図」が付せられており、その分類では、「家事」は、「並行してラジオが聴取され得るもの、即ち『食事』『針仕事』及び『内職』」には含まれず、ラジオ聴取には「不適」とされる項目に類別<sup>110</sup>されている。

調査の結果は、午前9時30分の時点では、まだ半数以上の女性が家事に従事していること、および午前10時台が午前中の家事労働におけるボトムを形成する時間帯であることを示している。この傾向、すなわち、家庭にいる女性の午前中での生活態様は、他の年層（女子家族31歳-45歳、同46歳-60歳）でも、ほぼ同様である。

この調査は1941年に実施されたものではあるが、「終戦間近かのような異常時ではなく、戦前の生活の概略を示す資料になる」<sup>111</sup>と評されている。こうした評価のとおりとするならば、大澤は、当時の家庭にいる女性の状況を的確に把握した上で、放送時間帯の変更を提言し、実施したことになる。

ムーアとカースリー（2004）は、ラジオ（とテレビ）の長所として「即時性がある」ことや「大量の情報を伝達できる」ことを挙げる一方、その短所として「リアルタイムで利用する（時間に拘束される）」ことを挙げている<sup>112</sup>。大澤の放送時間帯変更は、ラジオという新しいメディアが持つ「時間に拘束される」

<sup>109</sup> 社団法人日本放送協会編『国民生活時間調査 一般調査報告 俸給生活者工場労働者女子家族編』日本放送協会、1943, pp.12-13

<sup>110</sup> 社団法人日本放送協会編『国民生活時間調査 一般調査報告 俸給生活者工場労働者女子家族編』日本放送協会、1943, p.99

<sup>111</sup> 鈴木泰「刊行にあたって」社団法人日本放送協会編『国民生活時間調査（昭和16年調査）』大空社、1990〔復刻版〕巻頭頁

<sup>112</sup> マイケル・G. ムーア、グレッグ・カースリー（Moore, Michael G. & Kearsley, Greg）[著]/高橋悟編訳『遠隔教育 生涯学習社会への挑戦』海文堂出版、2004, p.120

という短所を、編成によって緩和しようとする試みであった。ラジオは、家にいながらにして臨場感のある講義を受けることができるという点で「空間の拘束」を解き放った。しかしながら、放送での講義は決まった時刻から開始されるために「時間の拘束」をも解き放つまでには至らなかった。ラジオが持つそうした「時間の拘束」に、大澤は放送開始時刻の変更によって対応したことになる。

大澤は、1934年、退職する。女性向け教養番組の放送枠は、同年「秋頃に至りこれ等を整理して家事、家計等に関するものは『家庭講座』、育児家庭教育に関するものは『母の時間』、婦人の教養向上に関するものは『婦人の時間』と改称」<sup>113</sup>され、『家庭大学講座』は、1934年度内に廃止<sup>114</sup>された。その他、女性向け教養番組として当時の資料に類別されている放送枠では、「季節々々の家庭に必要な注意事項を放送」<sup>115</sup>する番組として、1933年9月に『家庭メモ』、1934年10月に『衛生メモ』が新設された。また、1935年度には、「毎月末に當月起つた主なる婦人問題を捉へて時事評論的に解説放送」<sup>116</sup>する『何月の婦人界』<sup>117</sup>が編成された。

## 2.2 ラジオ草創期の「花」を主題とする講座

ラジオ草創期における女性向け教養番組において、「花」を主題とする講座が編成された放送枠は、1934年度までは『家庭講座』であり、1935年度以降は『婦人の時間』も加わった<sup>118</sup>。以下、『番組確定表』の調査結果に基づき、まず、「花」を主題とする講座の年度ごと放送本数推移を示す。次に、放送の連続性と副題の分析から、講座の内容と類型を考察する。次に、講座の類型とテキストとの関連を示した上で、ラジオと出版という新旧メディアの関係を考察する。最後に、出演者の構成を分析し、ラジオの影響力と「花」における近代流派の

---

<sup>113</sup> 社団法人日本放送協會編『日本放送協會史』日本放送出版協會，1939，p.201。ただし、『婦人講座』という呼称は、この後の『番組確定表』にも現れることから、『婦人の時間』と改称した時期は明確ではない。本研究では、『日本放送協會史』の記述とおりに、1934年秋としておく。

<sup>114</sup> 社団法人日本放送協會編『昭和十年 ラジオ年鑑』日本放送出版協會，1935，p.133。

<sup>115</sup> 社団法人日本放送協會編『日本放送協會史』日本放送出版協會，1939，p.201

<sup>116</sup> 社団法人日本放送協會編『昭和十一年 ラジオ年鑑』日本放送出版協會，1936，p.37

<sup>117</sup> それまで『週間女性展望』の名称で毎週初めに放送されていたインテリ婦人向きの講演を改題した「もの」という（社団法人日本放送協會編『昭和十一年 ラジオ年鑑』日本放送出版協會，1936，p.37）。

<sup>118</sup> 1935年度以降における女性向け教養番組の系統は、『家庭講座』だけでなく『婦人の時間』でも「花」を主題とする講座が放送されたことが示すように、それ以前の3系統体制のように明確に内容を分別されたものではなかったと考えられる。また、放送枠の呼称としても、1935年9月以降の『番組確定表』に『婦人講座』も現れることから必ずしも統一されていないことが窺える。

普及との関係を考察する。

### 2.2.1 放送本数の推移

ラジオ草創期における女性向け教養番組で、最初に「花」を主題とする講座が放送されたのは、1925年11月2日から7日まで連日放送された「盛花講習」（講師は工藤光洲）においてである。次いで同年12月21日と22日に「お正月向きの投入」（講師は久野連峰）が放送<sup>119</sup>された。

この最初の回以降、ラジオ草創期における「花」を主題とする講座の放送本数<sup>120</sup>は、1937年6月15日から29日まで毎週火曜日と木曜日に放送された「手軽な生花 実用の投入花」（講師は勅使河原蒼風）に至るまで、足かけ13年の間に99である。この13年間の、年度ごと放送本数の推移を図2に示す。

---

<sup>119</sup> 大澤は自身の入局時期について、「大正十五年の一月十四日始(ママ)めて JOAK の一員として愛宕山に登った」(大澤豊子「愛宕山を下って —— 婦人界に報告することども——」『婦人公論』1934年10月号, 中央公論社, 1934, p.138) と手記に記している。したがって、1925年に放送された工藤光洲と久野連峰の講座については、大澤の担当ではない。大澤は、「大正十四年頃緑(ママ)川女史が計画されて、生花、刺繍の放送に(後略)」(大澤豊子「愛宕山を下って —— 婦人界に報告することども——」『婦人公論』1934年10月号, 中央公論社, 1934, p.140) と記しているから、女性向け教養番組において最初に「花」を主題とする講座を編成したのは、「女性アナウンサー第1号」として知られる翠川秋子だったことになる。

<sup>120</sup> 大阪局や札幌局など東京以外の放送局でも「花」を主題とする講座を各地域向けに放送していたことが、複数の文献の記載から窺える(相良忠道編『大阪放送局沿革史』社団法人日本放送協会関西支部, 1934, p.318、工藤昌伸『日本いけばな文化史 三 近代いけばなの確立』同朋舎出版, 1993, p.105、海野弘『花に生きる 小原豊雲伝』平凡社, 2010, p.83)。ただし、本研究は、東京放送局の開局時に職能として期待された「文化の機会均等」の様相を解明することを目的としており、東京以外の各局からの放送は限られた地域向けであることから、『番組確定表』に全国中継と記載されている場合を除いて、地域向けの講座は対象としていない。

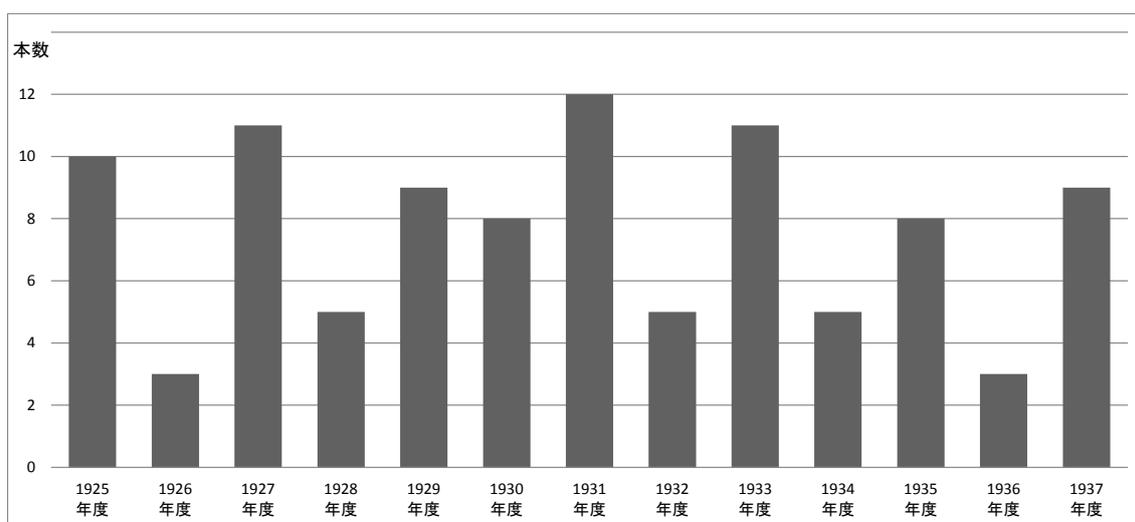


図 2 ラジオ草創期女性向け教養番組における「花」を主題とする講座の年度ごと放送本数（1925年3月22日～1937年7月7日）

少ない年度は3本、多い年度は12本と、年度ごとの本数には多寡があるが、毎年度、「花」を主題とする講座が放送されている。当該期間における1年度あたりの平均本数は、7.6（小数点第2位四捨五入・以下同）、標準偏差は3.0である。

### 2.2.2 講座の類型と内容

『番組確定表』の副題には、回数表記が付されている場合があり、講座には、1回かぎりのいわば「単発型」と、2回以上連続のいわば「連続型」という二つの類型があったことが示されている。

講座の連続回数ごとに事例数をまとめた結果を表1に示す。また、その割合を視覚的に把握するための一助として円グラフを図3に示す。

表 1 連続型講座の回数別事例数とその割合

連続講義回数	複数講師による連続講義を一つにまとめた場合の事例数	全放送回数に占める割合
1	45	45%
2	6	12%
3	1	3%
4	0	0%
5	0	0%
6	1	6%
7	2	14%

8	0	0%
9	1	9%
10	1	10%

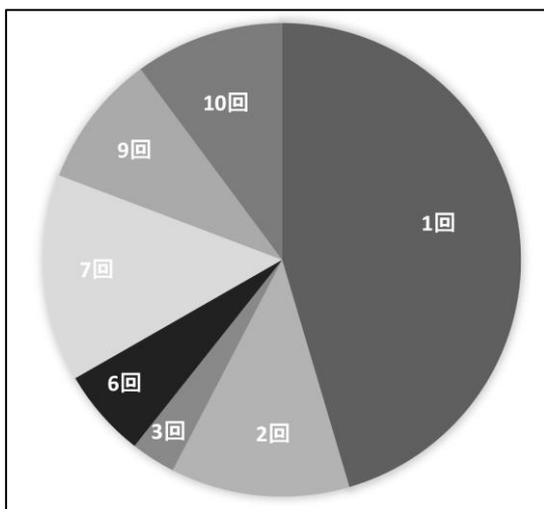


図 3 連続型講座回数別の事例数とその割合

計 99 本の放送のうち、半分近い 45 本が 1 回のみの講座だった。一方、複数の講師によって連続型講座が実施される場合もあり、それを一続きの連続型講座とみなした場合、連続 6 回以上の大規模な講座がおこなわれたことが 5 度ある。1925 年（工藤光洲による連続 6 回）、1927 年（岡田廣山による連続 10 回）、1929 年（勅使河原蒼風による連続 7 回）、1935 年（安達潮花と兒島文茂による連続 7 回）、1937 年（小原光雲と勅使河原蒼風による連続 9 回）の 5 度である。足かけ 13 年のうち、三分の一以上の年で連続型講座が放送され、その放送回数合計は全放送回数の 4 割近くに達している。ラジオ草創期での「花」を主題とする講座は、放送回数の点では、1 回のみのいわば「単発型」の講座と 6 回以上の大規模な連続型講座とに二分されていたといえる。

『番組確定表』には、番組の放送枠名（『家庭講座』など）とは別に、原則としてその放送回の副題（「おひなさまへ供へる花」など）が付されている。副題は、その回の主題を示すために付されるものであり、副題の記述を分析することにより、番組の内容を把握することが可能である。

ラジオ草創期の女性向け教養番組における「花」を主題とする講座について、その内容を番組の副題によって分析すると、単発型と連続型には、以下のような傾向の違いがある。

単発型の副題には、放送開始初年度の久野連峰の回が「お正月向き」と題せられているのを始めとして、「櫻花」、「秋草」、「晩秋」、「お盆」、「初秋」など季

節ないし時節を冠するものが多い。特に顕著なのは、1931年である。この年は1月を除き毎月1回、定期的に単発型講座が放送された。そして、3月を除き、2月から12月まで、いずれの回の副題にも「二月の」、「四月の」、「五月の」、「六月の」など、その月の名が冠せられている。また、3月も「雛節句の」と季節を表す語が冠せられている。単発型講座の内容は、季節性を主旨とするものが多かったといえる。

一方、連続型講座の副題は、放送初年度の工藤光洲の回が「講習」と題せられているのを始めとして、6回以上の連続型講座（複数講師による講座を含む）は、1935年（安達潮花と児島文茂による連続7回）を除き、いずれも「手ほどき」、「誰にでも出来る」、「手軽な」といった入門講座としての性格を示す語が付けられている。単発型講座にも「活け方に就いて」、「どなたにも活けられる」など、入門の性格を示す語が付けられた回が8回あるが、そのうち4回は「櫻花」、「四月の」、「桃と菜の花」、「お正月花」というように季節ないし時節を示す語が冠せられている。これに対し、連続型講座の副題には、特に季節ないし時節を示す語は付けられていない。

単発型と連続型という、放送の連続性による二つの類型は、その講義内容においても性格を異にしていたことになる。これらのことから、ラジオ草創期の女性向け教養番組における「花」を主題とする講座は、季節性を主旨とする単発型講座と入門性を主旨とする連続型講座に二分できるといえる。

このうち、後者には、前者には無い特徴がある。入門性を主旨とする連続型講座には、テキストが発行されていたのである。

### 2.2.3 テキストの機能

工藤（1993）は、ラジオで「花」を講義する際の「最大の欠点は、テレビのように映像が対象に伝わらないことである」<sup>121</sup>と記している。「花」のような造形芸術を映像無しで講義するための補助として用いられたのが、テキストの出版である。

勅使河原蒼風は1929年に連続型講義を担当した時のことを、「昭和四年には本格的に取り組むことになった。“だれにでもできる新しいいけばな”というテキストを作り、絵や写真を入れて」<sup>122</sup>と回想している。テキストの絵や写真によって、映像が無いというラジオの欠点を補ったのである。

<sup>121</sup> 工藤昌伸『日本いけばな文化史 三 近代いけばなの確立』同朋舎出版、1993、p.105

<sup>122</sup> 日本経済新聞社編『私の履歴書 文化人6 勅使河原蒼風』日本経済新聞社、1983、p.301。なお、蒼風はこの時の講義回数を「十二回ほど」と述懐しているが、実際には7回である。蒼風は、この年が7回の連続講義であり、もう一つの連続講義である1937年の講義が連続5回であることから、両者の講義回数を足して「十二回ほど」と表現したとも考えられる。

テキストが作られたのは、蒼風の講座においてだけではなく。1925年に工藤光洲がおこなった最初の「花」を主題とする連続型講座において、『ラジオ家庭講座』副題「裁縫・手芸・生花」と題するテキストがすでに作られていた。

この光洲の連続型講座は、テキストとは別に放送後に講義録が出版された。したがって、講義の内容がどのようなものだったか、その詳細を知ることができる。光洲の講義は次のように始まっている。

これから盛花のお話をいたします。パンフレットの十九頁を開いて戴きませう、今日は盛花に用ゐます道具のお話から申し上げます。<sup>123</sup>

このようにパンフレットを開くところから講義が始まり、以下、随所でパンフレット、すなわち、テキストの参照が求められる。

一方、光洲の1か月後に連続型講座を持った久野連峰の講義も、放送後に講義録が出版されている。連峰の講義は次のように始まっている。

前以てお断りを申し上げて置きますが、何時もお花の教授をいたしますのには実物を見た上でその物に就ての解釈をして居りますので、ただ話すだけでは皆様の御満足を得られるかといふ事は到底むづかしいやうに思ひます。(中略)然し折角お招きを受けた限りは、皆様の御期待に叛かないやうにお話したいと思ひます。<sup>124</sup>

連峰は「ただ話すだけ」と述べており、その講義録には、テキストへの言及は無い。連峰の講義ではテキストは出版されていなかったと推定できる。

表2は、ラジオ草創期の女性向け教養番組における「花」を主題とする講座に関するテキストの書名、副題、講座の放送年月日、講座回数の一覧<sup>125</sup>である。

---

<sup>123</sup> 工藤光洲「家庭講座 家庭盛花」東京放送局編『ラジオ講演集 第9輯』日本ラジオ協会、1925, p.260

<sup>124</sup> 久野連峰「京都古流花留なしの法」日本放送協会関東支部編『ラジオ講演集 第12輯』日本ラジオ協会、1925, p.210

<sup>125</sup> 掲載テキストのうち、『ラジオ家庭講座 裁縫・手芸・生花』、『JOAK TEXT (家庭講座テキスト) 誰れにも出来る投入花と盛花』、『ラジオ・テキスト婦人講座 生花と盛花』、『ラジオ・テキスト婦人講座 手軽な生花』は、本研究の調査で確認。『ラジオテキスト 秋期婦人家庭講座 投入花の手ほどき』は、野村(2004)に拠る。

表 2 ラジオ草創期の女性向け教養番組における「花」を主題とする講座のテキスト

書名	副題	講師	放送年月日	講座回数
ラヂオ家庭講座 <sup>126</sup>	裁縫・手芸・生花	工藤光洲	1925年 11月2日～7日	連続6回
ラジオテキスト 秋期婦人家庭講座	投入花の手ほどき	岡田廣山	1927年 10月24日～12月26日	連続10回
JOAK TEXT (家庭講座テキスト) <sup>127</sup>	誰れにも出来る 投入花と盛花	勅使河原蒼風	1929年 11月11日～12月24日	連続7回
ラヂオ・テキスト婦人講座 <sup>128</sup>	生花と盛花	安達潮花 兒島文茂	1935年 5月17日～6月28日	合計 連続7回
ラヂオ・テキスト婦人講座 <sup>129</sup>	手軽な生花	小原光雲 勅使河原蒼風	1937年 6月1日～29日	合計 連続9回

いずれも、講座回数が複数にわたる連続型講座である。それぞれのテキストについて講座の回数は、1例目の工藤光洲が6回、2例目の岡田廣山が10回、3例目の勅使河原蒼風が7回、4例目は安達潮花と兒島文茂が合冊になっており計7回、5例目も小原光雲と勅使河原蒼風が合冊になっており計9回である。ラジオ草創期の女性向け教養番組における「花」を主題とする講座は、講座回数の点では、1回のみ単発型講座と6回以上の大規模な連続型講座とに二分されていたことを示したが、テキストはこのうちの連続型講座の時に発行されていたことになる。

ラジオ放送においてテキストが発行されたのは、「花」が初めてではなかった。1925年7月20日に始まった『英語講座』で既にテキストが発行されていた。『日本放送史』には、この講座は「岡倉由三郎らを講師として、夏期六週間連続放送したもので、(中略)いちはやく、テキストとして『ラジオ英語講座資料』<sup>130</sup>

<sup>126</sup> 発行者は東京放送局。

<sup>127</sup> 発行者は社団法人日本放送協會関東支部東京中央放送局。

<sup>128</sup> 発行者は日本放送出版協會。

<sup>129</sup> 発行者は日本放送出版協會。

<sup>130</sup> この英語講座の「企画打合せ資料」である「ラヂオ英語講座要項 東京放送局」には、講座の「聴講申込方法」が記されている。それによると、「テキスト希望ノ方ハ (中略) 振替貯金ニテ実費 (送料ヲ含ム) トシテ金 50 銭送金シテ下サイ」、「テキスト発送方法」は「2

を発行している。これは、当時の番組担当者が、放送の機能と限界を認識し、その効果を高めるために考案したもので、テキストつき講座番組のはりりとなっている。」<sup>131</sup>と記されている。ラジオという聴覚メディアの限界を出版という視覚メディアの特性を利用して補ったのである。

工藤（1993）は「大正年間のいけばなの出版物をみると、それまでに比べて顕著であるのは講義録の出版であり、とくに盛花、自由花という新しい傾向のいけばな講義録が多い。」<sup>132</sup>と記している。この記述から、「花」を主題とする講座においてテキストが出版された背景には、大正時代の講義録出版の影響もあると考えられる。

一方、ラジオにおける講座用のテキストが後に出版される書籍の基礎となった例もある。勅使河原蒼風が1929年におこなった連続型講座のテキスト『誰れにも出来る投入花と盛花』である。

このテキストの歴史的意義について、『創造の森 草月 1927-1980』には、「後に草月流花型法として完成されるものの出発であり、基礎でもある」<sup>133</sup>と記されている。同書にはまた「一九三三年（昭和八年）十二月十一日、主婦の友社発行の『新しい生花の上達法』で蒼風は、基本立真型、基本傾真型、基本垂真型、基本平真型の四つの基本花型と、第一から第五までの応用花型を説明している。それは昭和四年のJOAKのラジオ・テキストの内容をさらに深めたもので、立真型、傾真型など名称は改めているが、基本的なことは変らなかった。」<sup>134</sup>とも記されている。

草月流においては、ラジオにおける講座のテキストが流派の基本花型の出発点となっていたのである。ラジオと出版の連携は、草月流に大きく寄与したといえるだろう。

#### 2.2.4 出演者の構成

工藤（1993）は、ラジオ放送は「流派のいけばなと家元の存在を大衆にアピールする機会」だったとしている。では、その「アピールする機会」の実態はどのようなものだったのか。ラジオ草創期における放送枠である『家庭講座』の放送時間量は年度によって、多少の差があるが、講座の内容は、その都度異なっているため、本研究では、単純な放送時間量の比較ではなく、出演の回数によって、「アピール」の度合を計量する。

---

週間分宛 3 回に互リテ送付シマス」（日本放送協会編『放送五十年史 資料編』日本放送出版協会，1977，p.276）となっている。

<sup>131</sup> 日本放送協会放送史編修室編『日本放送史 上』日本放送出版協会，1965，p.89

<sup>132</sup> 工藤昌伸『日本いけばな文化史 三 近代いけばなの確立』同朋舎出版，1993，p.67

<sup>133</sup> 草月出版編集部編著『創造の森 草月 1927-1980』草月出版，1981，p.30

<sup>134</sup> 草月出版編集部編著『創造の森 草月 1927-1980』草月出版，1981，p.58

ラジオ草創期の女性向け教養番組において、「花」を主題とする講座に出演した講師は、22人を数える。講師には、大妻コタカ<sup>135</sup>のような教育家や重森三玲<sup>136</sup>のような研究者も混じっているが、ほとんどは華道家（実作者）である。

「花」の歴史に関する各文献では、ラジオ草創期に「花」を主題とする講座を担当したのは「自由花、盛花などの近代流派」であり、特に草月流はラジオによって「名を広めた」とされている。

表3は、出演回数<sup>137</sup>について降順に講師名とその流派を示したものである。

表3 ラジオ草創期の女性向け教養番組における「花」を主題とする講座での講師ごと出演回数

講師	出演回数	流派
岡田廣山	22	廣山流
勅使河原蒼風	22	草月流
小島専甫	9	皇国池坊 大和斑鳩御流
工藤光洲	7	小原流
小島泰次郎(松影軒)	6	正風華道
兒島文茂	5	池坊
安達潮花	4	安達式
小原光雲	4	小原流
久野連峰	3	京都古流
その他	18	-

講義回数では、岡田廣山と勅使河原蒼風が共に22回で最多である。以下、小

<sup>135</sup> 『番組確定表』での表記は、大妻こたか。教育家、大妻女子大学長（上田正昭ほか監修『日本人名大辞典』講談社、2001, p.365）。

<sup>136</sup> 作庭家、庭園史・茶道史・花道史研究家（工藤昌伸『日本いけばな文化史 四 前衛いけばなと戦後文化』同朋舎出版、1994, p.193）。

<sup>137</sup> 出演回数が1回または2回しかない講師や流派が不明の華道家・教育家・評論家などは「その他」の項に一括した。また、岡田廣山と勅使河原蒼風は1934年4月23日の講義に揃って出演しているため、各々に1回分を加算している。したがって合計の数値は放送本数の99とは異なり、100となる。

島専甫が9回、工藤光洲が7回、小島泰次郎（松影軒）が6回、兒島文茂が5回で続いている。一方、1回しか出演しなかった講師が9人（「その他」の項に算入）いる。講師ごとの出演回数は均等ではなく、かなりの差があったことになる。

この表を元に、ラジオ草創期における、「花」における近代流派と「花」を主題とする講座の関係を検討する。

講師には、教育家や研究者も混じっているが、華道家として流派が明確に判明する者のうち、工藤（1993）に記されている、勅使河原蒼風（草月流）、岡田廣山（広山流）、安達潮花（安達式）、小原光雲（小原流）の4人をまず「近代流派」とする。さらに小原流の工藤光洲、正風華道（盛花）の小島泰次郎（松影軒）および講義回数は1回のみであるが小原流の平一鶯を「近代流派」に加える。一方、近代流派ではないことが明確である、小島専甫（皇国池坊大和斑鳩御流）、兒島文茂（池坊）、久野連峰（京都古流）の3人を仮に「伝統流派」と名付ける。こうして仕分けした「近代流派」と「伝統流派」について、それぞれの講義回数を算出すると、「近代流派」の講義回数が66であるのに対し、「伝統流派」は17であり、両者の比は、おおよそ「近代流派」4に対し「伝統流派」1である。出演回数をラジオにおける流派の露出度とするならば、「近代流派」は「伝統流派」に対して4倍ほどの露出度を得ていたことになる。ラジオ草創期の「花」を主題とする講座には、「近代流派」のみでなく「伝統流派」の華道家も講師として出演してはいたが、その主流は工藤（1993）が記したとおり「近代流派」であったといつてよいだろう。

次に出演回数で共に22回と他を引き離して回数が多い、岡田廣山（廣山流）と勅使河原蒼風（草月流）を比較する。1929年刊行の『現代華道家名鑑』には、岡田廣山は「大正式廣山流と名命して、瓶花盛花に一新機を出し、（中略）大に流布するに至り」<sup>138</sup>と記されている。一方、勅使河原蒼風が草月流を創流するのは1927年である。同じ近代流派に属するといっても、廣山流が台頭したのは大正期であり、草月流が台頭したのは昭和期以降ということになる。岡田廣山と勅使河原蒼風の二人の出演回数が全体に占める比率は、両者合計で44%と半ば近くに達している。ラジオ草創期に東京から放送された女性向け教養番組にけおる「花」を主題とする講座は、この二人が主役となっていたといえる。しかし、共に22回の講義をおこなっているとはいえ、その放送時期には差異がある。図4は、廣山と蒼風の出演回数を年度別に比較したものである。

<sup>138</sup> 渡邊侃『現代華道家名鑑』現代華道家名鑑刊行會，1929，p.57

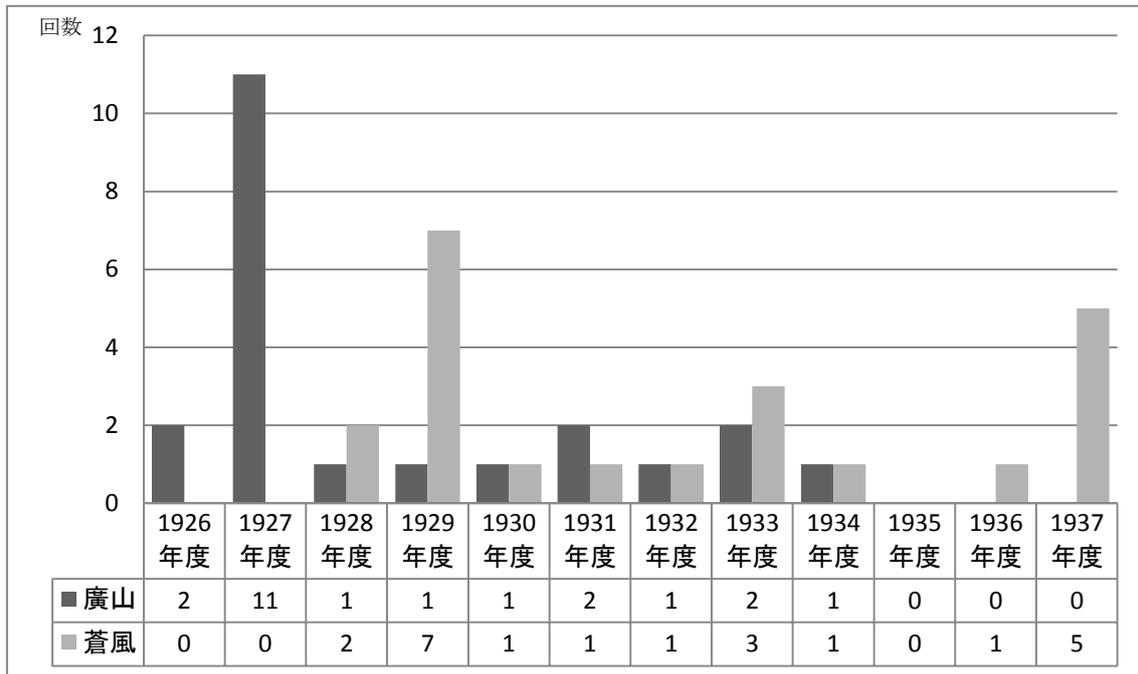


図 4 岡田廣山と勅使河原蒼風の年度別出演回数（1926年度～1937年度）

図 4 に示したように、1926 年度から 1927 年度までの 2 年間は廣山の出演のみで蒼風の出演は無い。この後、1934 年度までは両者が出演しているが、1936 年度以降 2 年間は蒼風の出演のみで廣山の出演は無い。1931 年度までを調査期間の前半、1932 年度以降を後半とすれば、前半は廣山 18 回対蒼風 11 回で廣山が多く、後半は廣山 4 回対蒼風 11 回で蒼風が多い。この前半と後半の差異は重要である。ラジオ放送の受信契約数が前半と後半で大きく異なっているからである。

図 5 は、日本放送協会関東支部（当初は東京放送局）管轄域におけるラジオ放送受信契約数を事業年度ごとに記したグラフである。

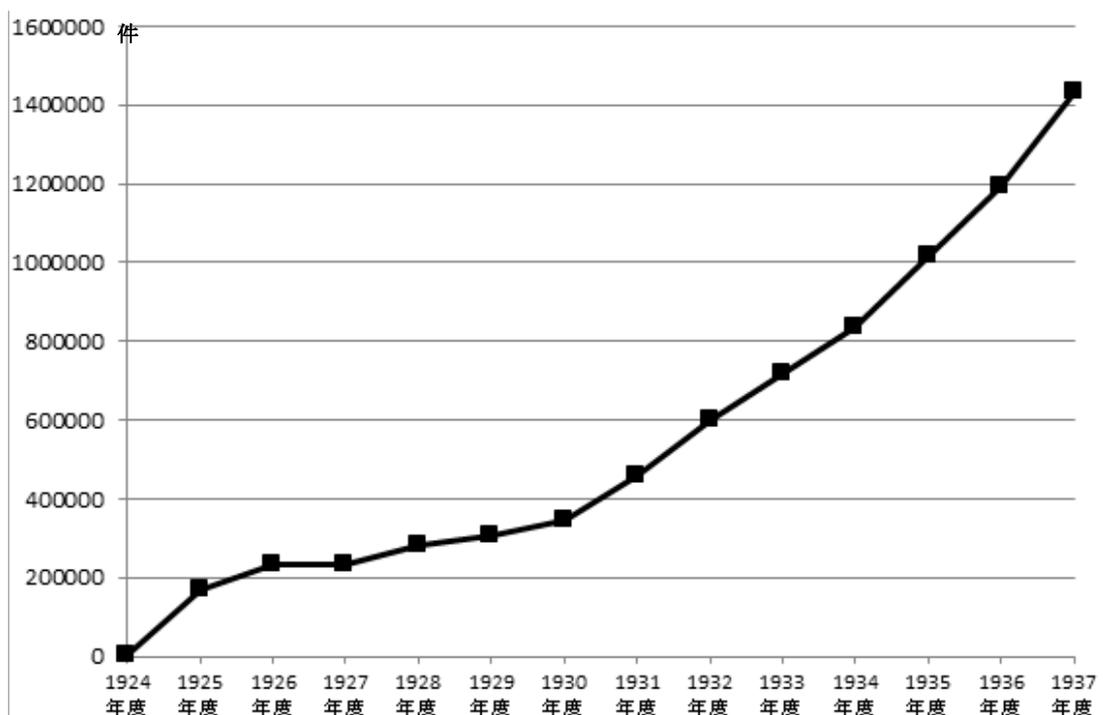


図 5 ラジオ放送受信契約数の事業年度別推移（1924年度～1937年度）<sup>139</sup>

受信契約数は、1925年度が約17万件であるのに対し、1937年度には143万件を超え、8倍以上に増加している。受信契約数はラジオを聴取可能な世帯数とみなすことができるから、放送1回あたりの聴取可能世帯数も8倍以上になっていた<sup>140</sup>ことになる。

廣山と蒼風について、年度ごとに各々の出演回数に受信契約数、すなわち、聴取可能世帯数を乗じた積を当該年度での「花」を主題とする講座が有した「到達可能性」とみなし、その推移を記したグラフを図6に示す。

<sup>139</sup> 社団法人日本放送協会『業務統計要覧 昭和12年度』より作成。

<sup>140</sup> 1928年11月の御大典中継を契機として、ラジオの全国中継網が整備され、以後、全国放送が次第に多くなる。JOAK発の「花」を主題とする講座のうち、全国中継されたものがどれであるかは特定できないが、全国中継された場合、聴取可能世帯数はさらに多くなり、東京圏での放送の1.5倍から2倍以上になると考えられる。

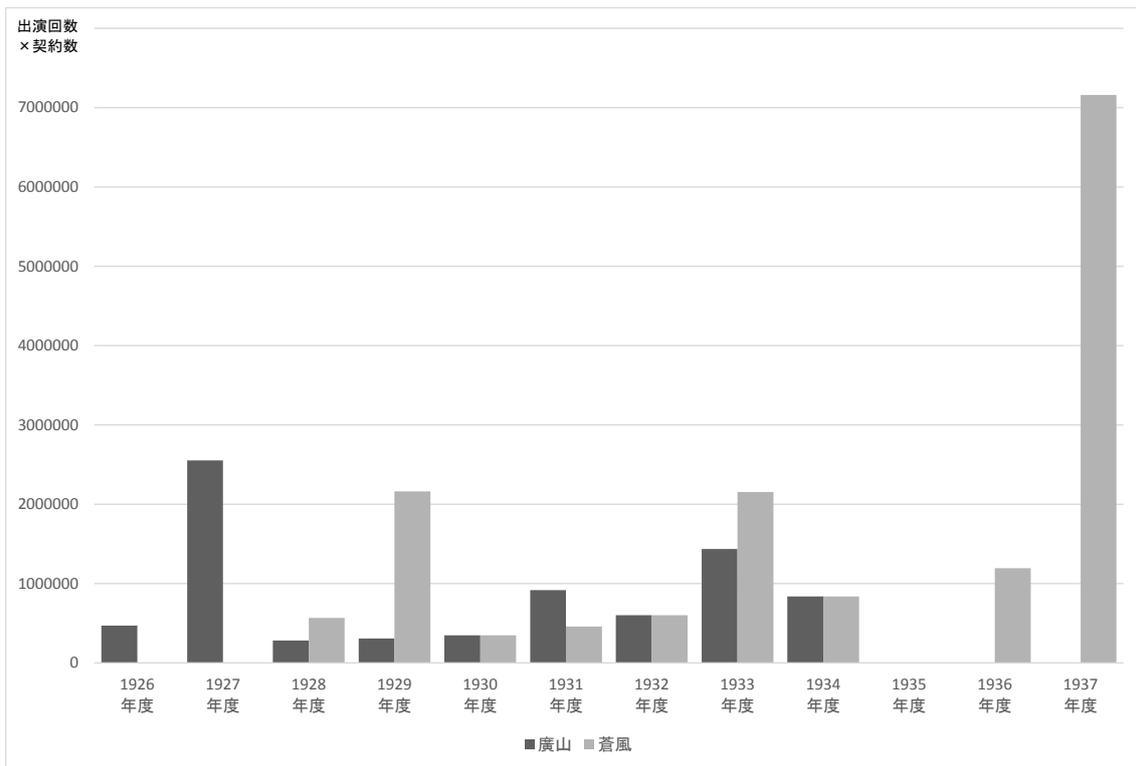


図 6 廣山と蒼風 「花」を主題とする講座の「到達可能性」(1926年度～1937年度)

このグラフは、ラジオを通じた影響力の推移を視覚的に把握する一助となる。

1927年度に廣山がおこなった講義は計11回であり、1929年度に蒼風がおこなった講義は計7回であるが、「到達可能性」を示す柱の高さはほぼ拮抗している。受信契約者数の増加が蒼風の出演回数の少なさを補い、「到達可能性」において廣山に拮抗させたのである。1937年度においては蒼風のおこなった講義は6回<sup>141</sup>だが、柱の高さはかつてなく大きく、1927年度(廣山)および1929年度(蒼風)の柱の高さの3倍ほどに達している。この結果は後年になるほど蒼風の影響力が大きくなる傾向にあることを示している。

単純に年度ごとの放送本数に基づく講義回数を比較しただけでは、1925年度の10本(10回)と1937年度の9本(9回)に大きな差はない。しかし、講義の「到達可能性」においては、1925年度の10回と1937年度の9回では、8倍以上の差があり、後になるほど影響力は大きくなっている。このことは、新しいメディアの普及期においては、そして、それが特に急速に利用者を拡大しつつ普及する場合においては、後になってそのメディアで伝播されたものほど大きな「到達可能性」を有することを示している。

勅使河原蒼風の妻、葉満は1928年の蒼風の最初の出演について、「この放送

<sup>141</sup> 蒼風は1937年度内の1938年2月に1回講義をおこなっている。受信契約数の推移が年度別であるのに合わせて、1937年度の蒼風の講義回数を6とした。

で草月流も蒼風もすっかり世に知られました。(中略) この放送があつてから、だんだん入門の方がふえました。」<sup>142</sup>と述懐している。また、『創造の森 草月 1927-1980』には、「神田神保町でしるこ屋を開いていた」稗田青放が「たまたま聞いた蒼風のラジオ放送にすっかり捉えられ、四十なかばすぎの年齢で、三宅坂の教場の門を叩いた」<sup>143</sup>とある。同書にはまた、大久保雅充が入門したのは、大久保の妹である宮城元子が 1929 年に蒼風がおこなった「JOAK の連続講座を聞いたのが動機で」入門したことがきっかけだったと記されている<sup>144</sup>。いずれもラジオ草創期での女性向け教養番組における「花」を主題とする講座の影響力を物語る逸話である。

草月流は創流当初、弟子がほとんど集まらず、「二十人ぐらい」<sup>145</sup>にすぎなかったという。ところが、1943 年発行の『華道年鑑』では 1942 年末時点で「草月流いけばなの教授をなすもの約二萬数千を数へるに至つた。」<sup>146</sup>と記されている。同書には、岡田廣山の項に「一門、全国各地の支部、門下生は實に數萬」<sup>147</sup>と記されており、同時期に草月流だけでなく廣山流も同等の勢力を持っていたことにはなる。しかし、廣山流は大正期に台頭し 1929 年には既に「大に流布するに至」<sup>148</sup>っていたことを勘案すると、文字どおりゼロから出発した草月流の急成長は廣山流を圧している。この急成長は、流派そのものの魅力や展覧会での評判、雑誌への頻繁な掲載などラジオ以外のさまざまな要因にもよっているが、ラジオこそは、草月流が最もよくその普及の波に乗って勢力を伸張した要因だったといえる。今日、多くの文献において、草月流の項にラジオでの講座に関する記述が掲載されている所以である。

「歴史の上で、『近代のいけばな』が成立するのは大正末年から昭和初期のこと」<sup>149</sup>といわれる。この時期、女性向け教養番組における「花」を主題とする講座は、特に新興の近代流派を、家庭にいる女性に伝える点で大きな役割を果たした。そして、その伝播には、編成上の措置も反映されていたといえる。

もし『家庭講座』が従来どおり 9 時 30 分からの放送のままであったとしたら、聴取可能世帯が増え続けていたとしても、家事に忙しい女性の多くは講義に接することができず、「花」を主題とする講座を聞く人（特にその対象とされていた女性たち）は受信契約数ほどには伸びなかつただろう。ラジオにおいて蒼風

142 勅使河原葉満『女の自叙伝 花に魅せられ人に魅せられ』婦人画報社、1989、p.60

143 草月出版編集部編著『創造の森 草月 1927-1980』草月出版、1981、p.26

144 草月出版編集部編著『創造の森 草月 1927-1980』草月出版、1981、p.32

145 勅使河原葉満『女の自叙伝 花に魅せられ人に魅せられ』婦人画報社、1989、p.58

146 西阪清華編「團體及家元著名花道家」『華道年鑑(昭和十八年版)』華乃葉社、1943、p.364

147 西阪清華編「團體及家元著名花道家」『華道年鑑(昭和十八年版)』華乃葉社、1943、p.324

148 渡邊侃『現代華道家名鑑』現代華道家名鑑刊行會、1929、p.57

149 工藤昌伸『日本いけばな文化史 三 近代いけばなの確立』同朋舎出版、1993、p.52

の「花」（草月流）が大きな「到達可能性」を有したのは、ちょうど蒼風がラジオに登場する時期に、家庭にいる女性たちの状況を考慮できる編成担当者がメディアの側に存在していたことも一助となったと考えられる。

## 2.3 まとめ

本章では、1925年3月22日から1937年7月7日までをラジオ草創期と規定した上で、放送史の諸資料によって同期間の女性向け教養番組の特徴を示した後、『番組確定表』の調査に基づいて、同期間に放送された女性向け教養番組における「花」を主題とする講座について、放送本数の年度ごと推移、放送の連続性、副題の記述、テキストとの連携、出演者の構成という観点から分析した。

その結果を以下に示す。

- ・ラジオ草創期に「文化の機会均等」を図った女性向け教養番組には、『家庭講座』、『婦人講座』、『家庭大学講座』という三つの主な放送枠があった。

- ・当時の資料には、『家庭講座』は「家事に関する実用的なもの」、『婦人講座』は「婦人の一般教養向上に資するもの」、『家庭大学講座』は「婦人に一層高級なる學理的知識を体系的に與へる」ものを題材とすると記されており、『日本放送史』の定義に照らせば、『家庭講座』が「実用・実利を主体とするもの」、『婦人講座』が「知識の啓発に資するもの」、『家庭大学講座』が「いわゆる教育的なもの」に該当する。

- ・『婦人講座』が扱う「一般教養」とは「知識としての教養」の意であると考えられる。

- ・対象視聴者層では、『婦人講座』と『家庭大学講座』が「女学校卒業程度」であるのに対し、『家庭講座』は、家庭にいる女性をすべて対象としていることから、東京放送局仮放送開始時の理念である「家庭にいる女性への文化の機会均等」を最もよく具現化する番組だったと考えられる。

- ・女性向け教養番組を担当した大澤豊子は、『家庭講座』の放送時間帯を変更することによって、ラジオが有する「時間の拘束」を緩和しようとした。

- ・放送本数の推移については、年度ごとの本数には多寡があるが毎年度放送された。

- ・放送の連続性の観点から、講座には、1回限りの単発型講座と複数回にわたる連続型講座の2類型があった。

- ・番組副題の分析からは、単発型講座は季節性を主旨とし、連続型講座は入門性を主旨としていたことが指摘できる。

- ・映像が無いというラジオの欠点を補うため、連続型の入門性を主旨とする講座では、テキストが発行され、旧メディアである出版と連携させて、内容の

理解が図られた。特に草月流においてはラジオ用のテキストが流派の基本花型の出発点となった。

・出演者の構成においては、「近代流派」が「伝統流派」に比して、多くの割合を占めていた。特に草月流においては、出演の時期がラジオ普及の波と最もよく適合し勢力伸張の要因となった。

『日本放送史』は、「教養放送のネットワークは、(中略)東京の仮放送開始第一日に後藤新平総裁がいった『文化の機会均等』を実現していった」<sup>150</sup>と記している。ラングラン(1979)は大衆への教授法として「同時に数百万のひとりに到達できるラジオ番組」<sup>151</sup>が有する優位性を指摘しているが、草創期ラジオにおける「花」を主題とする講座は、ラジオの威力を示す典型的な事例として位置づけられるといえよう。

本章における調査および分析と考察の結果から、ラジオ草創期の女性向け教養番組と「花」を主題とする講座が果たした文化伝播の特徴は、次の諸点にあるといえる。すなわち、(1)草創期の女性向け教養番組は、三つの放送枠を設置して、「教養」の多義性および女性聴取者の知識の程度にきめ細かく対応しようとしていたこと、(2)「花」を主題とする講座には、季節性と入門性それぞれを主旨とする二つの類型があり、そのうち、入門性を主旨とする講座は、テキストを発行することによって映像が無いというラジオの欠点を補い、異なるメディアの連携による相乗効果を発揮していたこと、(3)「花」を主題とする講座の放送が新興流派の発展に寄与したことが、放送というメディアが有する広範な伝達能力を事例として示していることである。

---

<sup>150</sup> 日本放送協会放送史編修室編『日本放送史 上』日本放送出版協会, 1965, p.198

<sup>151</sup> ポール・ラングラン (Lengrand, Paul) [著] 波多野完治訳『生涯教育入門 第二部』日本社会教育連合会, 1979, p.39

### 第 3 章 ラジオ戦時期および占領期

### 3.1 ラジオ戦時期および占領期の女性向け教養番組

1937年7月7日に勃発した盧溝橋事件は、放送の歴史における画期となった。この時以後、戦争の状況に応じ国民を嚮導するために報道放送に最大の比重が置かれる<sup>152</sup>ようになり、放送は戦争遂行の一手段となっていくからである。

すなわち、盧溝橋事件が起きた1937年度には、「支那事變の勃発以来、時局の展開に伴ひ（中略）ラヂオは全機能を擧げて戦時體制下の國策に順應し其の遂行に寄與する事に萬善を期して居る<sup>153</sup>（後略）」という方針が掲げられた。

そして、「教養放送」は、「政府諸般の政策の徹底と國民精神總動員運動に對する協力に主目標を」<sup>154</sup>置かれることになった。この時点での「教養放送」は、「実用」や「知識の習得」ではなく、「教化」を目的とするものとなったといえる。そのことは、教養放送の題材に「民心の作興及正しき輿論の指導を期して政府要路並に民間各方面の有力者に依る特別講演を多く採り入れて居る」<sup>155</sup>という方針にも示されている。

女性向け教養番組についても、翌1938年度に、

事變下に於ては、先づ家事擔當者としての婦人の立場が重要視され、消費節約、貯蓄等の時局經濟への協力、物資不足に對處する代用品知識、廃品回収から、特に銃後隣保活動に於ける婦人の任務等が強調され母性としての正しき時局認識、戦病勇士遺家族の更生問題、銃後保健問題等が主要なる問題であった。<sup>156</sup>

というように、戦時体制への適応がおこなわれた。

さらに翌1939年度には、

家庭問題としては「節米」「代用食」等食料問題を各權威者に依り物資上或は栄養上より繰返し説かれると共に具體的には料理放送に紹介し共同炊事の普及への途も講じられた。物資統制に應じては「物資統制と家庭生活」を、横溝想恵其他商工省當時者より、「家庭燃料講座」は南農林技師其の他より

---

<sup>152</sup> 1937年度における放送番組の構成割合では、報道部門の構成割合が1%、1日あたり平均放送時間が47分増加した（社団法人日本放送協會編『業務統計要覽 昭和12年度』1938, pp.4-5）。

<sup>153</sup> 社団法人日本放送協會編『昭和十三年 ラヂオ年鑑』日本放送出版協會, 1938, p.6

<sup>154</sup> 社団法人日本放送協會編『昭和十三年 ラヂオ年鑑』日本放送出版協會, 1938, p.7

<sup>155</sup> 社団法人日本放送協會編『昭和十三年 ラヂオ年鑑』日本放送出版協會, 1938, p.7

<sup>156</sup> 社団法人日本放送協會編『昭和十五年 ラヂオ年鑑』日本放送出版協會, 1940,

pp.144-145

等々、時局生活の強化と歩調を合せる講座は多い。<sup>157</sup>

と、食糧や燃料等の物資の欠乏と節約を訴える番組が編成された。1937年度、1938年度、1939年度と年を追って情勢が厳しくなり、編成もそれに対応して戦時色が濃い内容の番組が組まれている。

女性向け教養番組の放送枠は、1939年からは『家庭の時間』と『婦人の時間』の2番組体制となった<sup>158</sup>。次いで、1940年度には、『家庭婦人の時間』が設置<sup>159</sup>された。また、同年度には、「食糧増産の一端を荷ふ蔬菜園藝をもつぱらとする」<sup>160</sup>『家庭園藝の時間』も『年鑑』の「家庭・婦人の時間」の項目に記載された。

戦時下の女性向け教養番組は、草創期の理念を失いつつあった<sup>161</sup>が、1941年12月にアメリカ・イギリス等との戦争が始まると、その流れは決定的となった。

開戦と同時に、放送は「原則として東京発全国中継放送だけに制限」<sup>162</sup>されるなど統制が強まり、「番組編成の基本方針は、新聞・出版など他のマスメディアの場合と同じく、政府の言論報道統制の方針に従い、戦況報道と世論指導を二つの柱として人心の安定、国民士気の高揚を図ること」<sup>163</sup>とされた。その結果、「従来晝間の家庭人向放送の時間も、戦争勃発と同時に戦時態勢に改編され、新に『戦時家庭の時間』として、開戦翌日より午前十時半及午後一時半からの時間に放送、婦人の戦時意識の昂揚と家庭生活の戦時態勢化を圖つて積極的活動」<sup>164</sup>をする場<sup>165</sup>となったのである。

図7に、ラジオ草創期から戦時期にかけての主な女性向け教養番組の変遷を示す。

<sup>157</sup> 社団法人日本放送協會編『昭和十六年 ラジオ年鑑』日本放送出版協會，1940，pp.118-119

<sup>158</sup> 日本放送協會放送史編修室編『日本放送史 上』日本放送出版協會，1965，p.363

<sup>159</sup> 1940年5月に「都市放送」（1939年に「第二放送」から呼称変更）に特設。1941年4月より「全国放送」。

<sup>160</sup> 社団法人日本放送協會編『昭和十七年 ラジオ年鑑』日本放送出版協會，1941，p.119

<sup>161</sup> 1939年には、「事変が長期化するにつれ、婦人の職場進出が、婦人の自覚、時局の要請などによって、目だってきた」（日本放送協會放送史編修室編『日本放送史 上』日本放送出版協會，1965，p.364）ことにともない、夜間に『職業婦人の時間』が設置された。女性向け教養番組は、東京放送局仮放送開始時の後藤新平の演説に表されたように、元々「家庭にいる」女性を対象視聴者層として想定したものだったが、戦争の影響によって、その対象視聴者層に、「外に出て働く」女性を加えられたことになる。

<sup>162</sup> 日本放送協會放送史編修室編『日本放送史 上』日本放送出版協會，1965，p.521

<sup>163</sup> 日本放送協會放送史編修室編『日本放送史 上』日本放送出版協會，1965，p.521

<sup>164</sup> 社団法人日本放送協會編『昭和十八年 ラジオ年鑑』日本放送出版協會，1943，pp.42-43

<sup>165</sup> 午後の放送は『新しき生活の建設』と呼称されていた（社団法人日本放送協會編『昭和十八年 ラジオ年鑑』日本放送出版協會，1943，p.17）。

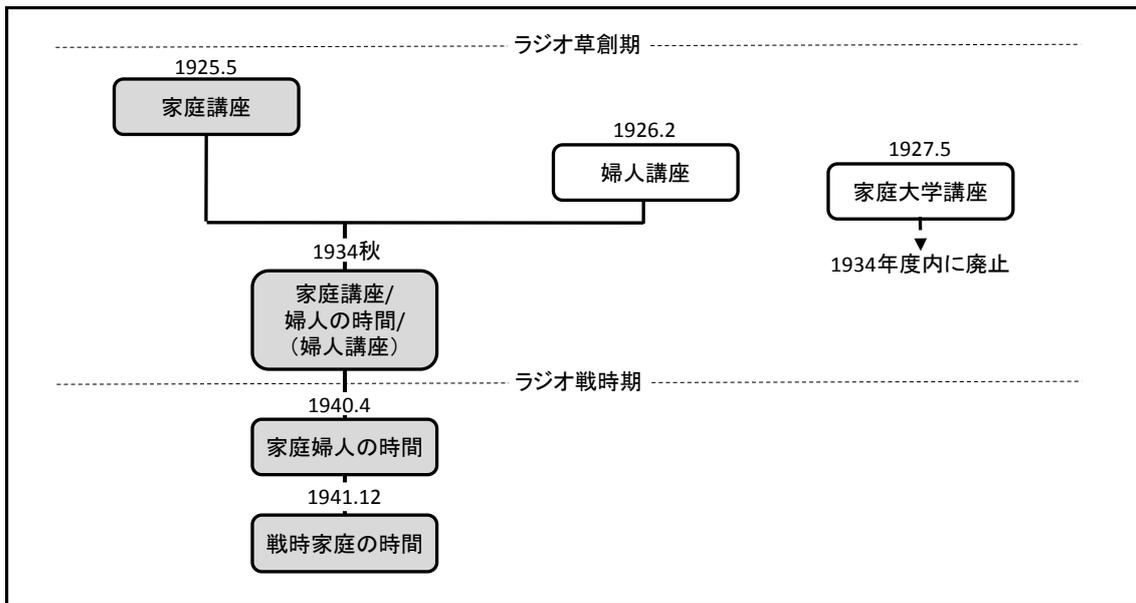


図 7 ラジオ草創期および戦時期における主な女性向け教養番組の系譜

薄墨は「花」を主題とする講座が編成された放送枠、それ以外は主な放送枠を示す。放送枠名上の数字は放送開始年月、下の数字は放送終了年月。ただし、次の放送枠が前の放送枠を継承している場合は、開始年月のみ記載。以下同。

『戦時家庭の時間』編成の理由は当時の資料に次のように記されている。

國のあらゆる力を動員して戦ふ總力戦下、國民の私生活も當然に戦争への歸一を要求せられるのであり、その主たる擔務者たる婦人の意識を昂揚し、生活の隅々までをも完全なる戦時態勢に導き込むことは、不可缺の要件である。「戦時家庭の時間」の狙ひも當然こゝにあつた（後略）<sup>166</sup>

家庭にいる女性に対し、文化の機会均等をおこなおうとした放送開始時の理念は、ここに至って瓦解したとみなすことができよう。

1945年8月15日、玉音放送によって國民に戦争の終結が告げられ、その後、日本はアメリカを中心とする連合軍の占領下におかれることになる。「占領統治の実態がアメリカ軍による単独監理であつたことから、言論表現の自由は、アメリカの世界政策に直接・間接に寄与するようなものであるかぎりにおいて、過去の禁制が打破されることが許容され、かつ奨励された」<sup>167</sup>といわれている。この占領期における放送の特徴の一つとして、女性向け教養番組（当時の用語では「婦人番組」）の強化があげられる。

<sup>166</sup> 社団法人日本放送協會編『昭和十八年 ラジオ年鑑』日本放送出版協會，1943，p.43

<sup>167</sup> 日本放送協會放送史編修室編『日本放送史 上』日本放送出版協會，1965，p.699

その背景には、占領下日本を間接統治した連合軍最高司令官総司令部 (General Headquarters, the Supreme Commander for the Allied Powers 以下 GHQ) の指令があった。「GHQ から出された日本の民主化に関する各種の指令は、番組の企画編成のよりどころ」<sup>168</sup>となっており、GHQ が発したいわゆる五大改革指令では、その筆頭に婦人の解放があげられていたからである。

放送においてもこの大方針を実現するべく、『婦人の時間』を始めとして『主婦日記』などの女性向け教養番組が次々に編成された。

特に「昭和二十三年十二月、NHK の業務組織内に婦人課が新しく設置される前後から、婦人向け放送の内容は急激に多彩と」<sup>169</sup>なった。1948 年度の編成を記録した当時の資料には、社会放送や教育放送と並んで婦人向け放送という分類が別に設けられ、『婦人の時間』、『主婦日記』、『メロディーにのせて』<sup>170</sup>、『勤労婦人の時間』<sup>171</sup>、『私の本棚』<sup>172</sup>という五つの番組が挙げられて<sup>173</sup>一つのジャンルを形成している<sup>174</sup>。

1949 年度ラジオ第一放送の放送時間量における部門別比率<sup>175</sup>では、「婦人(番組)部門」が 8.96%を占めるに至った。

戦後に新設された女性向け教養番組群において、1945 年 10 月 1 日から放送が開始された『婦人の時間』は、「戦争中の婦人向け放送とは違い、一般婦人の政治的・社会的・文化的水準を高め、日本の婦人を苦しめてきた封建性を打破することに重点が置かれた」<sup>176</sup>番組だった。一方、1947 年 7 月から放送が開始された『主婦日記』は、「家庭生活の合理化を図る実用番組」<sup>177</sup>と位置づけられた。

両者のうち、『主婦日記』は、ラジオ草創期の女性向け教養番組における『家庭講座』に対応するとみなすこともできるが、講師のいない番組であり、『家庭講座』に比すると、その構成は簡素である。また、『婦人の時間』は、ラジオ草創期の同名番組とは異なり、「政治・経済・社会・文化の諸問題を扱う民主化教

---

<sup>168</sup> 日本放送協会放送史編修室編『日本放送史 上』日本放送出版協会、1965、p.656

<sup>169</sup> 日本放送協会放送史編修室編『日本放送史 上』日本放送出版協会、1965、p.736

<sup>170</sup> 1948 年 9 月開始 (『日本放送史 上』 p.736)。

<sup>171</sup> 1949 年 1 月開始 (『日本放送史 上』 p.736)。

<sup>172</sup> 1949 年 1 月に「『婦人の時間』の名作朗読を独立させた」(『日本放送史 上』 p.737) 放送枠。

<sup>173</sup> 日本放送協会編『NHK ラジオ年鑑 昭和 24 年版 (1949 年版)』日本放送出版協会、1949、p.5

<sup>174</sup> ラジオの「婦人番組」はその後も拡張され、1953 年度には、「9 番組 1 週間 17 時間余の婦人番組」が編成されるにいたった (日本放送協会編『NHK 年鑑 1955』ラジオサービスセンター、1954、p.87)。

<sup>175</sup> 日本放送協会放送史編修室編『日本放送史 上』日本放送出版協会、1965、p.710

<sup>176</sup> 日本放送協会放送史編修室編『日本放送史 上』日本放送出版協会、1965、p.705

<sup>177</sup> 日本放送協会放送史編修室編『日本放送史 上』日本放送出版協会、1965、p.705

育」に「もっとも重点が置かれた」<sup>178</sup>番組であり、その主軸は「政治的な啓蒙」<sup>179</sup>にあった。

1950年に勃発した朝鮮戦争の特需景気によって日本経済は不況を脱し、鉱工業生産は1950年代始めには戦前の水準に達する。1951年には日本国との平和条約（サンフランシスコ平和条約）が調印され、翌年4月28日、条約が発効して日本は独立国家としての主権を回復する<sup>180</sup>。

この間、「昭和二十五年になると、講和条約締結の機運が高まり、CIEも、徐々に放送の指導や監督をゆるめていき、番組の細部はしだいに担当者に任せられることに」<sup>181</sup>なった。当時の編成方針について、「NHKの婦人向け番組は、婦人が政治・社会の諸問題についてみずから学び、考えて行動するのに役だつことと、生活技術を中心とした実用的知識を豊かにすること、この二点に重点を置いた」<sup>182</sup>とされている。女性向け教養番組（婦人番組）は、この時期にさらに拡大されることになる。

すなわち、従来からの、『婦人の時間』、『主婦日記』<sup>183</sup>、『メロディーにのせて』、『勤労婦人の時間』、『私の本棚』に加え、『若い女性』<sup>184</sup>、『女性教室』<sup>185</sup>、『明るい茶の間』<sup>186</sup>などの番組群が、1950年から1951年にかけて新設されたのである

俯瞰すれば、戦時中および戦後の女性向け教養番組は、戦時中は削減された番組群が、戦後は一挙に拡充されるという対比を示している。また、「花」を主題とする講座においても、戦時中と戦後では、その編成される放送枠が相違していることから、なんらかの差異が生じていたと想定される。

本章では、まず『番組確定表』の調査によって、戦時中から戦後占領下にか

178 日本放送協会放送史編修室編『日本放送史 上』日本放送出版協会、1965、p.734

179 日本放送協会編『NHK年鑑1954』ラジオサービスセンター、1953、p.83

180 日本の放送は、「日本に与ふる放送準則（ラジオコード）」によって統制されていた（日本放送協会編『放送五十年史』日本放送出版協会、1977、pp.205-206参照）。

181 日本放送協会放送史編修室編『日本放送史 下』日本放送出版協会、1965、p.67

CIEはGHQの下部組織。GHQは、放送を管理するための特別部局として、CIE（民間情報教育局）、CIS（民間諜報局）、CCS（民間通信局）を設置し、それぞれ番組管理、放送検閲、電波行政を担当させた（放送史研究グループ「GHQ文書による占領初期放送政策史年表～1945年4月から1946年6月まで～」『平成元年版NHK放送文化調査研究年報一第34集一』1989、p.123参照）。

182 日本放送協会放送史編修室編『日本放送史 下』日本放送出版協会、1965、p.79

183 『主婦日記』は1953年3月の放送記念日にちなんで「料理コンクールを実施」（日本放送協会放送史編修室編『日本放送史 下』日本放送出版協会、1965、p.80）した。

184 1950年3月開始。『若い女性』は、若年女性を対象視聴者層として設定し、「ティーンエージャーという言葉がこの番組の中で使われ、そののち流行語となった」（日本放送協会放送史編修室編『日本放送史 下』日本放送出版協会、1965、p.81）。

185 1950年4月開始（『日本放送史 下』p.81）。

186 1951年4月開始（『日本放送史 下』p.81）。

けての「花」を主題とする講座の放送実績を明らかにする。次に、戦時期と占領期それぞれについて分析をおこなった上で、両者における「花」を主題とする講座の相違点もしくは共通点を考察する。

### 3.2 ラジオ戦時期および占領期の「花」を主題とする講座

#### 3.2.1 放送本数の推移

「花」を主題とする講座は、ラジオ戦時期は、『家庭講座』、およびその後継番組である『婦人の時間』、『家庭婦人の時間』、『戦時家庭の時間』といった放送枠で編成された。ラジオ占領期は、戦後すぐに再開された『婦人の時間』（番組名は同じながら戦前とは内容を一新した実質上の新番組）と1947年に新設された『主婦日記』および1950年に新設された『女性教室』の枠で編成された。

放送本数の推移について、ラジオ戦時期および占領期を通観して、この期間での女性向け教養番組における「花」を主題とする講座の年度ごと放送本数推移を図8に示す。ただし、1937年度は7月7日以降のみで、7月6日以前は含まない。また、1952年度はこの期間においては4月28日までと1か月足らずであり、「花」を主題とする講座の放送もおこなわれなかったことから、図には含めていない。

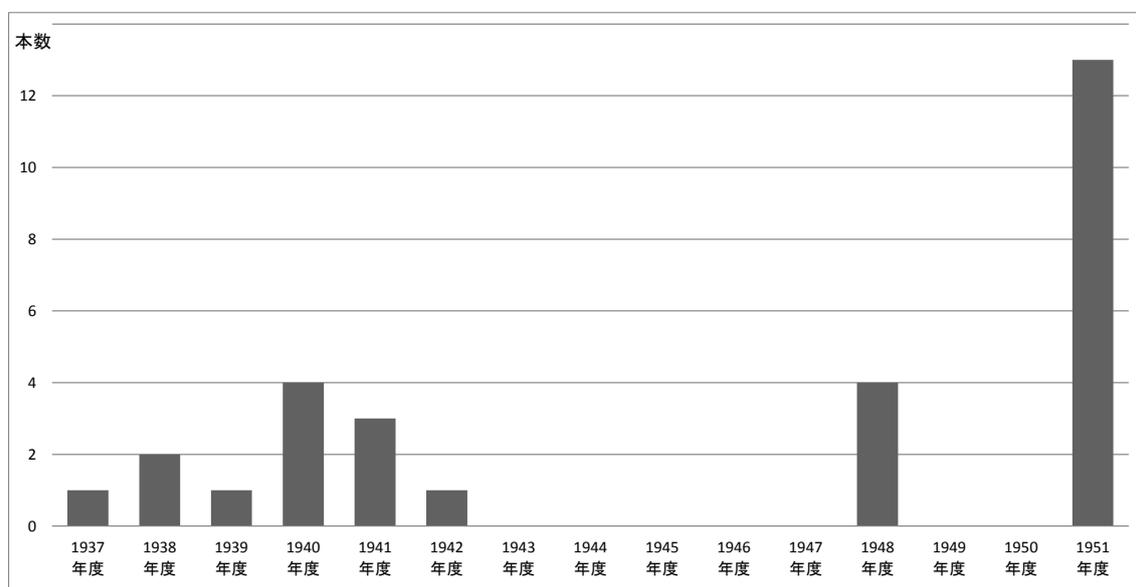


図8 ラジオ戦時期および占領期での女性向け教養番組における「花」を主題とする講座の年度ごと放送本数（1937年7月7日～1952年4月28日）

戦時期および占領期の女性向け教養番組において、「花」を主題とする講座は、

通算して足かけ 15 年の間に 29 本が放送された。

図 8 に示したように、ラジオ戦時期および占領期においては、「花」を主題とする講座は、戦時中の 1943 年度から戦後の 1947 年度まで、放送がおこなわれなかった空白期間がある。また、1949 年度、1950 年度にも放送がなく、図には示していないが 1952 年度にも放送されていない。

1943 年度から 1947 年度までの空白は、ちょうど戦時期と占領期の間に発生している。放送本数の推移の点でも、女性向け教養番組における「花」を主題とする講座は、ラジオ戦時期とラジオ占領期とに明確に分離されていることになる。それぞれの時期における「花」を主題とする講座の放送本数は、戦時期が計 12、占領期が計 17 である。

戦局の悪化にともない、1945 年度は 8 月までほとんど番組の放送がおこなわれなかったことから、戦時期を 1937 年度（ただし、本数の計上は 1937 年 7 月 7 日以降）から 1944 年度までとし、占領期を 1945 年度（ただし、本数の計上は 1945 年 8 月 15 日以降）から 1951 年度までとして、両者の年度あたり平均本数および標準偏差を算出すると、ラジオ戦時期は、平均 1.5、（小数点第 2 位四捨五入・以下同）標準偏差 1.3、ラジオ占領期は、平均 2.4、標準偏差 4.5 となる。

両期に先立つラジオ草創期においては、女性向け教養番組における「花」を主題とする講座は足かけ 13 年で 99 本であり、年度あたり平均本数は、7.6 であったことに比べると、ラジオ戦時期は草創期の五分之一、占領期は三分の一程度に落ちこんでおり、戦時期、占領期ともに草創期よりも放送は低調だったといえる。

なお、ラジオ戦時期および占領期の通算では、放送本数平均は 1.9 となる。年度あたり放送本数の標準偏差は、3.3 である。（ラジオ草創期と計測期間を揃えて、ラジオ戦時期および占領期のうち 1937 年度からの足かけ 13 年について算出すると平均 1.2、標準偏差 1.5 となる。）

比較のため、ラジオ草創期の女性向け教養番組における「花」を主題とする講座の放送本数推移を図 9 に再掲する。

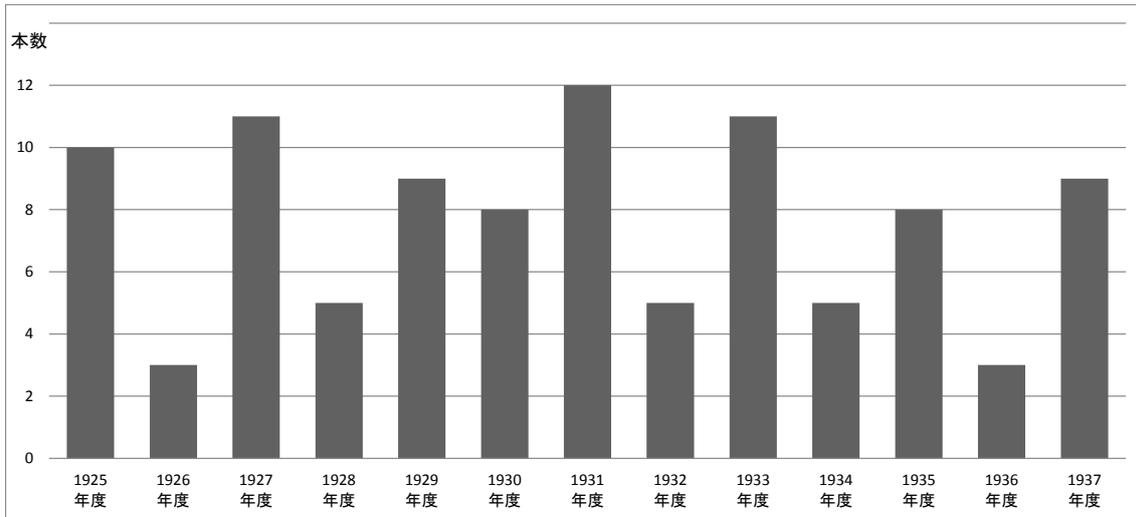


図 9 [再掲 図 2] ラジオ草創期女性向け教養番組における「花」を主題とする講座の年度ごと放送本数 (1925年3月22日～1937年7月7日)

放送の頻度について、ラジオ草創期とラジオ戦時期および占領期を比較すると、ラジオ草創期においては、年度によって本数の差はあるものの、空白年度はなく毎年度欠かさず編成されていた。一方、ラジオ戦時期と占領期は空白期間を有し、特に占領期は放送された年度が2しかなく、頻度の差は大きい。

連続型講座の規模の点では、ラジオ戦時期と占領期はそれぞれ特徴を有している。連続型講座の回数によって2～5回を小規模、6回以上を大規模とすれば、調査期間における計29本の放送のうち、1回のみ単発型講座が9、連続3回と4回という小規模な連続型講座がそれぞれ1、連続13回という大規模な連続型講座がそれぞれ1ある。このうち、小規模な連続型講座は戦時期、大規模な連続型講座は占領期に属している。

これらのことから、ラジオ戦時期と占領期の女性向け教養番組における「花」を主題とする講座を、放送本数、平均/標準偏差、連続型講座の規模という観点によって対比すれば、表4のようになる。

表 4 ラジオ戦時期とラジオ占領期における「花」を主題とする講座の比較

時期	期間	放送枠	放送本数	平均 / 標準偏差	連続型講座の規模
戦時期	1937年7月7日 ～1945年8月15日	家庭講座	12	1.5	小規模
		婦人の時間(旧)		/	
		家庭婦人の時間		1.3	
		戦時家庭の時間			

占領期	1945年8月16日	婦人の時間(新)		2.4	大規模
	～1952年4月28日	主婦日記	17	/	
		女性教室		4.5	

以下、本章では、ラジオ戦時期および占領期における女性向け教養番組による文化の伝播について、「花」を主題とする講座を事例として、まず戦時期、続いて占領期の編成を分析し、特徴を考察する。

### 3.2.2 ラジオ戦時期における類型と出演者および編成の特徴

戦時期における「花」を主題とする講座の放送について、1938年度の計3本と1939年度の1本は、勅使河原蒼風、中山文甫、安達潮花という家元(華道家)たちが担当した、いずれも1回限りの単発型講座である。その内容は副題によれば、「春」、「初秋」という季節性を主旨とした講座が2、「活け方」、「水揚げと活け方」という入門性を主旨とした講座が2であり、ラジオ草創期のような、入門性を主旨とする連続型の講座は放送されていない。

当時の女性向け教養番組における編成方針は、「特に銃後隣保活動に於ける婦人の任務等が強調され母性としての正しき時局認識、戦病勇士遺家族の更生問題、銃後保健問題等が主要なる問題」<sup>187</sup>とされており、戦時体制に順応したものだ。た。「花」を主題とする講座の放送が、盧溝橋事件勃発以前に比して低調となるのは、こうした編成方針を反映したものと考えられる。

ところが、1940年度になると、「花」を主題とする講座の放送は勢いを取り戻し、連続4回という小規模の連続型講座が編成されている。その内容は副題によれば、「初夏のいけばな」であって、連続型でありながら季節性の強いものとなっている。ラジオ草創期にあった、連続型＝入門性、単発型＝季節性という弁別は、ラジオ戦時期では曖昧になり、ラジオ草創期の面影は無い。その様相は図10のようになる。

<sup>187</sup> 社団法人日本放送協会編『昭和十五年 ラジオ年鑑』日本放送出版協会，1940, p.145

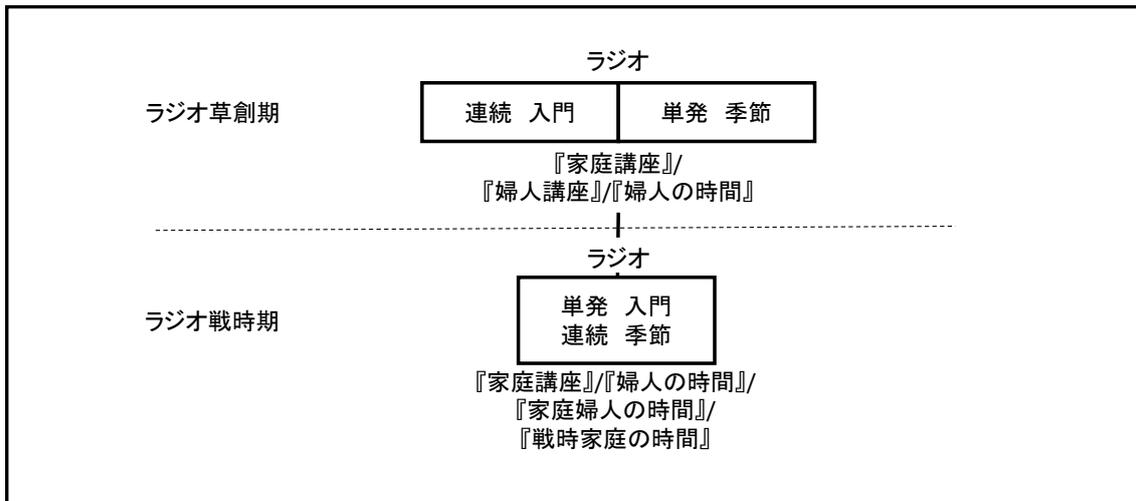


図 10 ラジオ草創期からラジオ戦時期にかけての女性向け教養番組における「花」を主題とする講座の類型

この季節性を主旨とする連続型講座が編成されたのは、都市放送においてだった。都市放送とは第二放送の呼称を改めたもの<sup>188</sup>である。

都市放送、すなわち、第二放送を実施していたのは東京、大阪、名古屋の大都市3局のみで、カバーエリアが限られていた。第二放送の聴取可能世帯は第一放送の五分之一から四分之一だったという推定もあり<sup>189</sup>、第二放送は第一放送に比して、その影響力は小さかった。盧溝橋事件以前のラジオ草創期を含め、それまでの「花」を主題とする講座の放送は、すべて第一放送（1939年以降1945年8月までの呼称は全国放送）において編成されていた。このことからすれば、1940年に、「花」を主題とする講座の放送が、第二放送（当時の呼称では都市放送）において編成されたことは特異な現象である。

この連続型講座の編成について、当時の資料は次のように記している。

五月より、都市放送にて午後一時より一時三十分まで、家庭婦人の時間を特設し、毎日連講の講座式として放送したるは、時間の関係もよく、形式内容も喜ばれて好評を博し、テキストも発行した。（中略）放送内容は、「現代作法常識」「文学鑑賞」等より、「生け花」「琴のお稽古」等の趣味、さては「時局向の裁縫」「料理」「編物」「家庭看護の手引」より「育児の手引」等に及び、時には「時事用語解説」に新知識を興へるなど、女学校を

<sup>188</sup> 1931年に第二放送が開始され、ラジオ放送は2波体制となった。そして1939年には第一放送は全国放送、第二放送は都市放送に呼称を変更された。都市放送は1941年12月8日以降廃止され、全国放送のみの1波体制となった。

<sup>189</sup> 古田尚輝「ラジオ第2放送70年 編成の分析 ～教育放送への道のり～」『放送研究と調査』2001年10月号、p.8

出た若い女性、家を持ちたての若奥様等に向け、四、五回位の連続にて、懇切に根本的の常識を興へた。<sup>190</sup>

「花」を主題とする連続型講座は、都市放送に『家庭婦人の時間』を「特設」して実施されたものだったのである。この「特設」は、時局への対応が行き過ぎたことへの反動であったと考えられる。

1942年版の『ラジオ年鑑』には、1940年度に受け付けた投書についての記述に次のような一節がある。

番組編成基準の改変が行はれその反響は概して良好であつたが、時局を餘りにも強調し稍行過ぎた點に對して、多少の難色が無いでもなかつた。<sup>191</sup>

「時局を餘りにも強調し稍行過ぎた」ことへの反発（文中では「難色」）が相当程度あったことを物語る表現である。次の資料は、女性向け教養番組ではなく、娯楽番組（当時の用語では「慰安放送」）に對して寄せられた投書ではあるが、そうした国民感情の一端を窺うことができる。

「近ごろ、世間に笑ひが乏しくなつた様に思ひます。笑つてゐる時ではないともいへませうが、一日に一回ラジオを取り囲んで家中のものが笑ふことはむしろ益々必要と思ひます。たゞしわざと笑はせる様なものでなくしたいと思ひます」<sup>192</sup>

この記事には、「慰安方面に於ける代表的代辯として」この「一文を掲記して置く」という注釈が付されている。

少し後の時期の記録ではあるが、日本放送協会の機関誌『放送研究』の「反響」欄にある「眞向から覺悟を要請する押しつけがましさが一般大衆に素直に享け入れられぬことは既に我々のよく知る所である」<sup>193</sup>という記述も、当時の編成担当者の心境を窺わせるものである。

こうして「特設」された、「花」を主題とする講座などを擁する『家庭婦人の時間』は聴取者から好評をもって迎えられた。当時の記録には、「形式内容も喜ばれて好評を博し」<sup>194</sup>「教養關係に於ては、都市放送に於ての家庭婦人の時間、

190 社団法人日本放送協會編『昭和十七年 ラジオ年鑑』日本放送出版協會，1941，pp.119-120

191 社団法人日本放送協會編『昭和十七年 ラジオ年鑑』日本放送出版協會，1941，p.27

192 社団法人日本放送協會編『昭和十七年 ラジオ年鑑』日本放送出版協會，1941，p.29

193 社団法人日本放送協會編「反響」『放送研究』1943年2月号，p.119

194 社団法人日本放送協會編『昭和十七年 ラジオ年鑑』日本放送出版協會，1941，p.119

早朝講演、水曜講話、五百萬突破特輯講演『紀元二千六百年を顧みて』の特輯講演等に好反響があつた」<sup>195</sup>と記されている。

この結果を受けて、担当者は、『家庭婦人の時間』を「全国放送と改めたく希望しつゝあつたが、遂に十六年四月の時間改正に考慮さるゝに至つた。」<sup>196</sup>こうして、『家庭婦人の時間』は全国放送となり、1941年4月17日から19日まで連続3回の「花」を主題とする講座が全国放送で編成された。この時の出演者は、確定表には有川ひさえと記されており、園芸学者として知られ、有川創花会を開いた有川ヒサエだったと推定される。

しかし、全国放送に進出を果たした後の『家庭婦人の時間』の寿命は短かった。この年、すなわち、1941年12月にアメリカ・イギリス等との戦争が始まると、「戦時下放送の果すべき重大使命たる國策の徹底、人心の安定、國民士氣の昂揚を番組全般の根本方針とし、この方針を力強く一本に徹底させるため、(中略)比較的不急の番組は悉く廢して番組全般を國家目的に歸一せしめた」<sup>197</sup>結果、「家庭、職場、幼児、學校放送、小國民、等の各對象放送に於ても、その悉くが大東亞戦争の一大國家目的完遂に資する内容に限られ」<sup>198</sup>ることとなつたのである。

『家庭婦人の時間』は『戦時家庭の時間』と改編され、「必勝の經濟生活」<sup>199</sup>、「隣組の決戦態勢」<sup>200</sup>、「米英的な生活の清算」<sup>201</sup>といった主題の講座が並ぶことになった。また、「物の不足が今日の家庭婦人の一番の悩み」<sup>202</sup>となっていることから『戦時家庭の時間』で最近配給の鹽、味噌、醬油等の使ひ方」<sup>203</sup>が放送された。

『戦時家庭の時間』において「花」を主題とする講座は、1942年5月22日に「働く人と活け花」が単発型の講座として編成されている。副題に「働く人」とあるのは、戦時下において一家の働き手だった夫を失って仕事に出ざるをえなくなった女性のために、「近時急激に増加せる職業問題を採り上げ『婦人の爲の職業案内』、『婦人の職場通信』等の連続講座『中年婦人の職業』『職業婦人の衛生』等の單講を入れた」<sup>204</sup>編成方針と呼応したものと考えられる。

この「働く人と活け花」が放送された翌月に生起したミッドウェー海戦を契

- 
- 195 社団法人日本放送協會編『昭和十七年 ラジオ年鑑』日本放送出版協會, 1941, p.30  
196 社団法人日本放送協會編『昭和十七年 ラジオ年鑑』日本放送出版協會, 1941, p.119  
197 社団法人日本放送協會編「番組企畫」『放送研究』1942年1月号, p.14  
198 社団法人日本放送協會編「番組企畫」『放送研究』1942年1月号, p.14  
199 社団法人日本放送協會編『昭和十八年 ラジオ年鑑』日本放送出版協會, 1943, p.43  
200 社団法人日本放送協會編『昭和十八年 ラジオ年鑑』日本放送出版協會, 1943, p.43  
201 社団法人日本放送協會編『昭和十八年 ラジオ年鑑』日本放送出版協會, 1943, p.43  
202 社団法人日本放送協會編「講演放送」『放送研究』1942年4月号, p.49  
203 社団法人日本放送協會編「講演放送」『放送研究』1942年4月号, p.49  
204 社団法人日本放送協會編『昭和十六年 ラジオ年鑑』日本放送出版協會, 1941, p.118

機として、戦局は悪化し、日本は敗戦と占領への途をたどることになる。そして、この放送を最後として戦時期の「花」を主題とする講座の放送は途絶し、以後、足かけ7年の空白期に入る。

### 3.2.3 ラジオ占領期における類型と出演者および編成の特徴

放送史を俯瞰した時、占領期の特徴の一つとして、女性向け番組（当時の用語では「婦人番組」）の強化があげられる。占領直後から3年ほどの間に、『婦人の時間』を始めとして『主婦日記』などの女性向け教養番組が次々に編成されたのである。

「花」を主題とする講座は、これら番組群のうち、「実用性」を旨とする『主婦日記』で3本、「政治的な啓蒙」を旨とする『婦人の時間』で1本の計4本が1948年度に放送された。いずれも単発型の講座である。

その内容は、まず『主婦日記』では、3本の副題に「秋の」、「正月の」、「春の」という語があることから、いずれも季節性を主旨としていたことになる。ラジオ草創期にあった、連続型＝入門性、単発型＝季節性という、機能の弁別は、戦時期では曖昧になったが、占領期の『主婦日記』では、二つのタイプのうちの片方、すなわち、季節性を主旨とする単発型のみが編成されたことになる。ラジオ草創期から戦時期を経て占領期に至る類型の推移は図11のようになる。

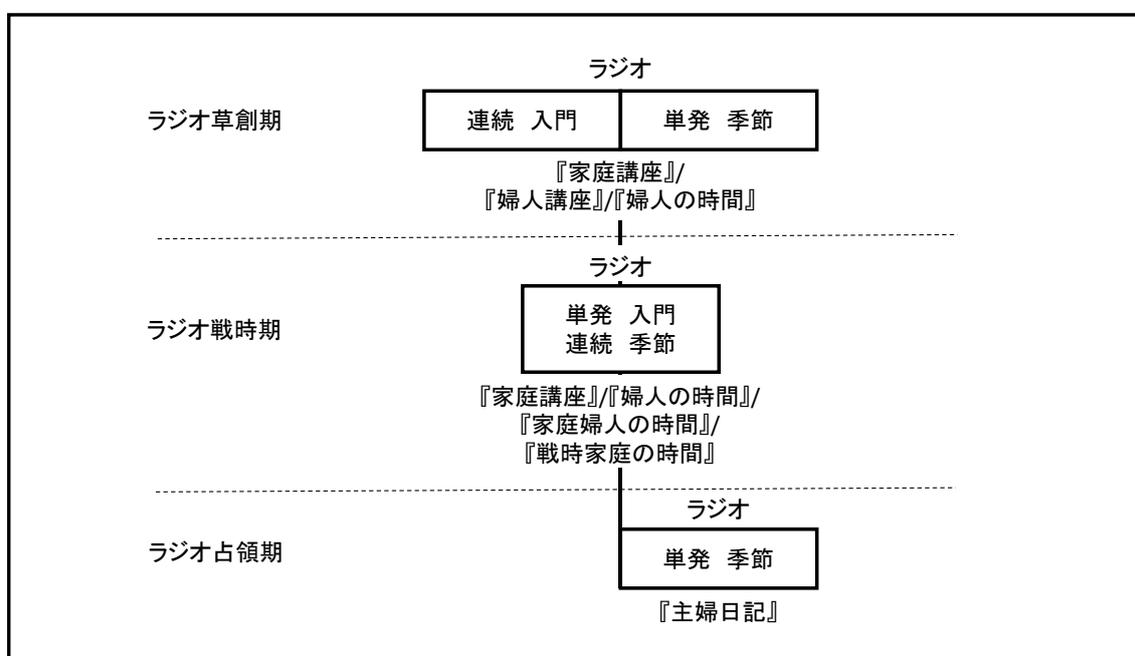


図 11 ラジオ草創期から占領期にかけての女性向け教養番組における「花」を主題とする講義の類型

『主婦日記』の出演者には、3本のうち2本に勅使河原蒼風の名があるが、いずれも（提供）と注記されていて、資料あるいは原稿を提供したのみで実際出演は無かった。

次に、『婦人の時間』では、副題に記された内容は、「華道について」という漠然としたもので、出演は、研究者の西堀一三である。

占領下では、女性向け教養番組に力が入れられたにも関わらず、「花」を主題とする講座は戦時中と同様に低調である。

その一つの理由として、この期においてもなお戦時中と同等あるいはそれ以上の生活難が続いていたことが挙げられる。

1945年12月5日に放送された「座談会」の題目は「今後六ヶ月をどうして食べるか」だった。この時期には、その他にも、『いなごの食べ方』『冠水芋の利用』『青空市場をめぐる』『鯛一ぴきの栄養』『家計簿に現われた闇生活』といった番組<sup>205</sup>が放送された。また、1948年7月14日には「稲と甘薯の作付面積調査について 里芋や甘薯の手入」が、1949年3月12日には「ジャガ芋の育て方と手入」が放送された。勅使河原蒼風は、戦争中、「花をいけるよりは芋を作れ」といわれた<sup>206</sup>と回想しているが、そうした状況は戦後も続いていたのである。

占領期に、「花」を主題とする講座の放送が少ない理由の一つは、こうした社会状況にある。

しかし、「花」を主題とする講座の編成が少ない理由は、当時の女性向け教養番組の編成方針にも求めることができる。

この期における女性向け教養番組の中核は、1945年10月1日に再開された『婦人の時間』だった。『婦人の時間』は、「日曜を除く毎日、第一放送午後一時から六〇分の総合番組で（中略）番組編成の形式は、ニュース・話・対談・座談会・討論会・メモ・ドラマ・音楽などが、総合的に編成され」<sup>207</sup>る、大がかりな構成の、いわゆる総合番組だった。

この『婦人の時間』において、「花」が採り上げられたのは、1949年3月の「華道について」1回きりにすぎない。しかも、この「華道について」は、いくつかのコーナーで構成される総合番組である『婦人の時間』のメインコーナーではなく、4番目のコーナーで採り上げられたにすぎなかった。

この占領期における『婦人の時間』は戦時期におけるそれと同名であっても、また、対象視聴者層も同じく「家庭婦人」<sup>208</sup>であっても、その性格は異にした

<sup>205</sup> 日本放送協会放送史編修室編『日本放送史 上』日本放送出版協会、1965、p.735

<sup>206</sup> 日本経済新聞社編『私の履歴書 文化人6 勅使河原蒼風』日本経済新聞社、1983、p.312

<sup>207</sup> 日本放送協会放送史編修室編『日本放送史 上』日本放送出版協会、1965、p.734

<sup>208</sup> 江上フジ「終戦後の『婦人の時間』」『放送文化』1947年4月号、p.14

番組だった。占領期における『婦人の時間』は、「民主日本の再建、一般婦人の政治的、社会的、文化的水準を高め、封建性を脱却させることに重点が置かれ、戦時のそれとは凡ゆる意味で性格を一変した」<sup>209</sup>番組だったのである。

『婦人の時間』は、GHQの下部組織であるCIE（民間情報教育局）の強力な指導のもとにあり、その主題の選定もCIEの指導下にあった<sup>210</sup>。CIEの日報には、1945年11月8日の項に「CIE企画課、『婦人の時間』についてラジオ課と打ち合わせ」<sup>211</sup>という記録がある。

そこには、

- a. 『婦人の時間』放送に先立ち内容と出演者を点検
- b. 婦人が直面する問題解決のためラジオを活用すること
- c. できるだけ多くの、それも若い婦人を番組に登場させること

という指示が記されている<sup>212</sup>。

その主題は、「第一に民主主義思想の啓発が重点としてとり上げられ、次いで政治キャンペーンに力が注がれた。（中略）例をあげると、『思想の自由』『封建制度と民主主義』『婦人と自由』『私たちと政治』『男女共学事始め』『公娼廃止』『各党の政策をきく』『新憲法草案の解明とその批判』」<sup>213</sup>などだった。ここでいう「キャンペーン」とは、当時の資料によれば、「もともと軍隊用語の『城砦を攻略する』という意味であり、これが平時は政策的に、或は計画的に公共のための色々の働きかけになって、相手に内容を理解させ納得させると共に、大いに関心を高めて世論を醸成したり、行動させたりすることを意味している。」<sup>214</sup>宮田（2015）は、「キャンペーン項目は“キャンペーン・シート”という文書の形でCIEからNHKにいわば下げ渡された。占領政策と結び付いた諸項目が

---

<sup>209</sup> 社団法人日本放送協会編『ラジオ年鑑 昭和二十二年版』日本放送出版協会、1947、p.37  
<sup>210</sup> 放送を管理するための特別部局の一つとして、CIE（民間情報教育局）は、番組管理を担当した（放送史研究グループ「GHQ文書による占領初期放送政策史年表～1945年4月から1946年6月まで～」『平成元年版NHK放送文化調査研究年報—第34集—』1989、p.123）。

<sup>211</sup> NHK放送文化調査研究所放送情報調査部『GHQ文書による占領期放送史年表（昭和20年8月15日～12月31日）付 対日情報政策基本文書』NHK放送文化調査研究所放送情報調査部、1987、p.53

<sup>212</sup> NHK放送文化調査研究所放送情報調査部『GHQ文書による占領期放送史年表（昭和20年8月15日～12月31日）付 対日情報政策基本文書』NHK放送文化調査研究所放送情報調査部、1987、p.53

<sup>213</sup> 日本放送協会放送史編修室編『日本放送史 上』日本放送出版協会、1965、p.734

<sup>214</sup> 長谷耕作「キャンペーンはどう扱うべきか」日本放送協会編『放送文化』1952年11月号、p.11

記された“キャンペーン・シート”は“至上命令的な圧力”を持っていたという<sup>215</sup>と指摘している。この点においては、占領期の女性向け教養番組は、戦時期同様の思想教化の場となっていたといえる。

当時の番組制作担当者だった川崎正三郎は「CIEは、全国の放送局のすみずみにまで、よくにらみをきかせていたし、個々の番組は、お姑さんに箸の上げ下しまで監視され、干渉される嫁のように、スクリプトの書き方から、演出上のこまごまとした御注意まで、つまり、プラン以前から放送後まで、完璧につかまれていた。」<sup>216</sup>と記している。また、CIEが「有能なプロデューサーがみつかった」<sup>217</sup>と評し、後に初代の婦人課長となった江上フジは、「“婦人の時間”の十年」と題した手記で「戦前には逡信省、戦時中は情報局、戦後はCIE」<sup>218</sup>という具合に「何時の時代にもお目附役が存在し」<sup>219</sup>ていたと述懐している。戦時期と占領期における放送メディアは、軍国主義と民主主義と体制は異なるものの、同様に監督機関の強い掣肘を加えられていたのである。

そうした状況下にあっても、江上を始め当時の担当者たちが女性向け番組の制作に真摯に取り組んだことはまちがいない。江上は、「婦人向番組について」と題した一文において、「婦人向放送が現在教養放送の一部となつて」おり「教養放送はあくまで、その内容が持続的に聴取者に影響し、それがその人の知性のなかへとけこみ、未来の行動へも働らきかけるものである」と記した上で、「今日ほど人類の永遠の幸福を見失わない良識を女性に要求しているときはありません。それは、女性が、正しくきく耳と正しくみる眼と、正しくいう口と正しく動く手を持つことのできる教養を身につけることであり、婦人向放送もまたこれにこたえるものでなければならぬ」<sup>220</sup>と、自身の方針を述べている。筒井（1995）は、「教養」は単なる「教化」の道具ではなく、「哲学・歴史・文学など人文学を主に習得することによって身につけてくると考えられるところ」の「人文的教養」<sup>221</sup>であり「人文的教養を身につけていくことによって人は人間についての理解を深め、人生や運命についての洞察力を高めていくとされる」

---

<sup>215</sup> 宮田章「許可された自立～占領期インフォメーション番組におけるメッセージの変容」『放送研究と調査』2015年4月号、p.82

<sup>216</sup> 川崎正三郎「愛されるインフォメーション」日本放送協会編『放送文化』1952年11月号、p.8

<sup>217</sup> NHK放送文化調査研究所放送情報調査部『GHQ文書による占領期放送史年表（昭和20年8月15日－12月31日）付 対日情報政策基本文書』NHK放送文化調査研究所放送情報調査部、1987、p.37

<sup>218</sup> 江上フジ「“婦人の時間”の十年」『婦人公論』1955年8月号、p.165

<sup>219</sup> 江上フジ「“婦人の時間”の十年」『婦人公論』1955年8月号、p.165

<sup>220</sup> 江上フジ「婦人向番組について」『教養放送の研究 一婦人番組篇一』（『放送文化』1951年1月号、pp.4-5）

<sup>221</sup> 筒井清忠『日本型「教養」の運命 歴史社会学的考察』岩波書店、1995、p.175

222ものという考え方があると記している。そうした考え方に通じる理念を、江上は有していたといえるだろう。

「CIEの監理下で注目すべきは、婦人のための番組に力を入れること、政治に対する関心を高めること、この二点はたしかに有益なものであったと断言し得る」<sup>223</sup>という評価も存在する。しかし、そこには、「花」を主題とする講座のような、日本文化の伝播を主眼とする番組が編成される余地は小さかった。

占領期において、女性向け番組が強化拡充されたにも関わらず、「花」を主題とする講座の放送が低調だったのは、女性向け教養番組に対する編成方針によるものでもあったのである。

この状況は、1950年の朝鮮戦争勃発とその後の経済復興に伴って、変化する。

特需景気によって日本経済は不況を脱し、鉱工業生産は1950年代始めには戦前の水準に回復した。こうした社会情勢は、番組の編成方針にも反映され、1950年度には新たな女性向け教養番組（放送枠）として『女性教室』が設置された。この『女性教室』新設の意図について、当時の資料は次のように記している。

新旧9種目、放送時間の約7.6%を占める婦人番組は、今まで番組編成にあたって、常に強いインフォメーションの線を離れることが出来なかった。しかし、漸く作られた婦人の受入れの態勢及び素地に対して、すべての番組をあげて、(中略)日常生活の問題を1つ1つ取り上げていく機会を得た。新番組『女性教室』は、ホーム・メーカーの基本的な問題と取組み、(中略)今後の課題にふさわしく、非常な抱負の下に出発したことはいうまでもない。<sup>224</sup>

この記述にある「インフォメーション」とは、当時の放送用語であり、単に「情報」という意だけではなく「教化」の意を帯びている。1952年当時の日本放送協会社会部長だった片桐頭智は「インフォメーションは、情報として用いられているが、言葉として適切ではない。知しきをゆたかにすることではなく、行わないことを行わせていくちえを持つことである。」<sup>225</sup>と記している。この目的を達成するために設けられたのが「インフォメーション番組」であり、それは「占領軍=CIEの強い指導の下、“国民に徹底さすべき重要事項”の伝達を目的として、占領期に盛んに制作・放送されたラジオ番組群」<sup>226</sup>だった。当時の

222 筒井清忠『日本型「教養」の運命 歴史社会学的考察』岩波書店、1995、p.175

223 高橋邦太郎「放送開始30周年 —NHKの歩み見たり聞いたり—」『放送文化』1955年3月号、p.24

224 日本放送協会編『NHKラジオ年鑑 1951』ラジオ・サービス・センター、1951、p.102

225 片桐頭智「社会放送とは何か」日本放送協会編『放送文化』1952年11月号、p.4

226 宮田章「許可された自立～占領期インフォメーション番組におけるメッセージの変容」

制作担当者は、「インフォメーション番組は、聴取者の知性に訴えて、いままでのその人の考え方、または、その考え方にもとづく行動に、何らかの変化を与えることを目的とするもの（中略）つまり、<sup>ママ</sup>単的に言えば『お説教』番組なのです。」<sup>227</sup>と記している。宮田（2015）によれば、「各番組は、目下の現実をどのように捉え、どのように考えるべきかを、占領政策に則って聴取者・国民に教示することを主な内容として」<sup>228</sup>おり、「占領政策への理解・協力を訴えるプロパガンダ番組の性格を色濃く帯びていた」<sup>229</sup>のである。インフォメーションとは、教養番組による「教化」を徹底する形式であるともいえるだろう。

新設された『女性教室』は、こうした「インフォメーション」の路線から離れ、ホーム・メイキング、すなわち、生活の改善を主眼とした点で、戦後復興を象徴するともいえる番組だった。その題材が「ホーム・メイキング」であることから、『女性教室』は、「家事に関する實用」を主たる題材としていた『家庭講座』の直系にあたるといえる。

図 12 に、ラジオ草創期から占領期に至る女性向け教養番組の系譜を示す。

---

『放送研究と調査』2015年4月号, p.80

<sup>227</sup> 川崎正三郎「愛されるインフォメーション」日本放送協会編『放送文化』1952年11月号, p.8

<sup>228</sup> 宮田章「許可された自立～占領期インフォメーション番組におけるメッセージの変容」『放送研究と調査』2015年4月号, p.80

<sup>229</sup> 宮田章「許可された自立～占領期インフォメーション番組におけるメッセージの変容」『放送研究と調査』2015年4月号, p.80

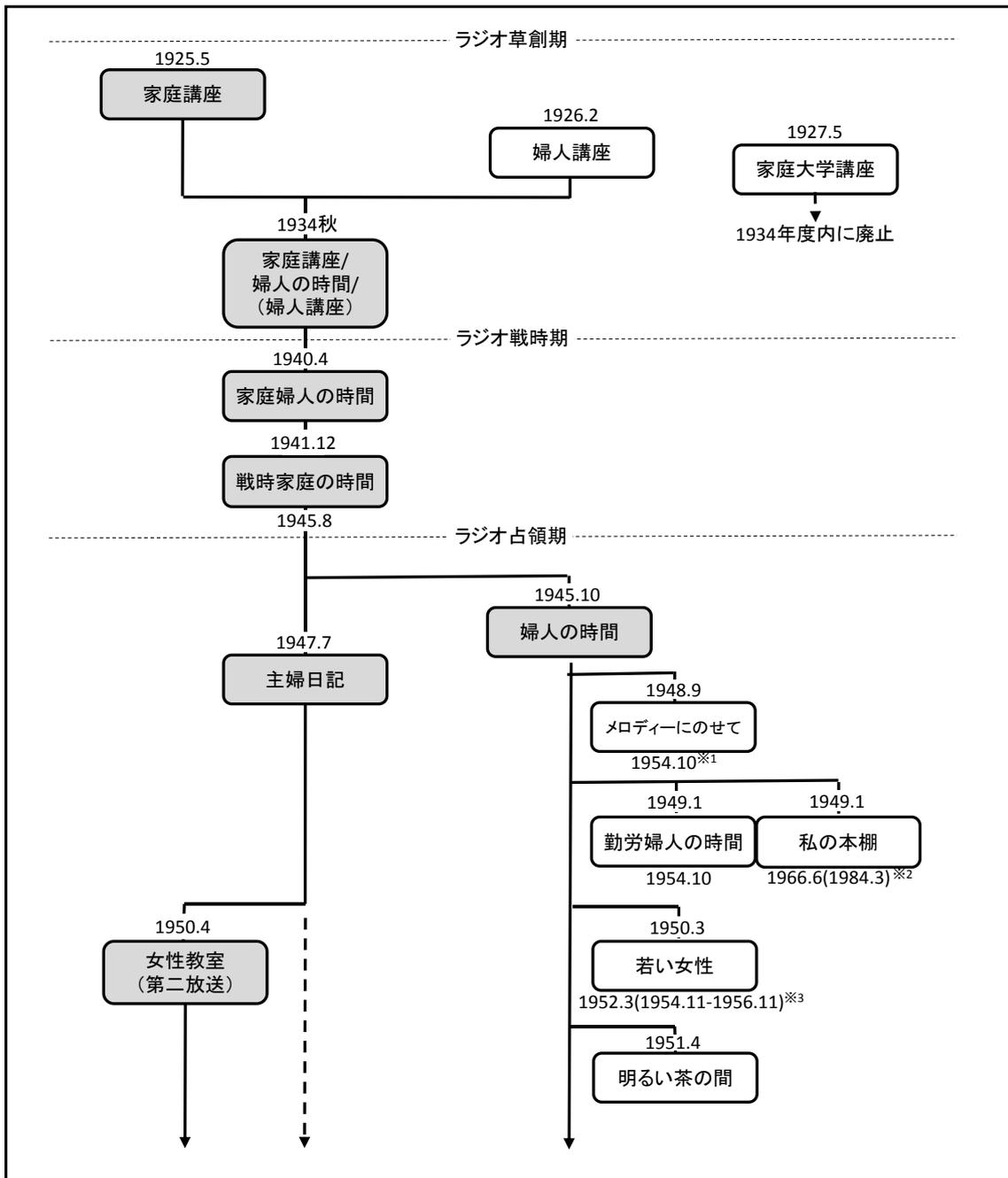


図 12 ラジオ草創期から占領期に至る主な女性向け教養番組の系譜

放送史を俯瞰すれば、ラジオ草創期において、女性向け教養番組群は、実用的な技術と文化の伝播を旨とする『家庭講座』に、社会に関する問題の啓蒙を旨とする『婦人講座』を加えた2系統で始まり、その後、専門知識の講義を旨とする『家庭大学講座』を加えた3系統となった後、戦時期に『家庭の時間』、『婦人の時間』から『家庭婦人の時間』を経て『戦時家庭の時間』へと統合された。そして、占領期には、政治的な啓蒙を旨とする『婦人の時間』（インフォ

メーション性の強い番組) と、実用的技術の解説を旨とする『主婦日記』の2系統に再び分岐したことになる。『女性教室』は、このうち実用情報の提供と文化の伝播を旨とする系統の本格的な放送枠として登場した番組だった。

放送時間は30分間と、『主婦日記』(15分間)の2倍であり、その構成は、2部で成り立つ総合番組で、メインコーナーには毎回、講師が出演者として起用された。また、メインコーナーに採り上げられる主題は、原則として1か月またはそれ以上連続して講義され、テキストも発行された。『女性教室』は、ラジオ草創期の『家庭講座』全盛期におけるような女性への「文化の機会均等」を目的とする講座が編成されるべき放送枠だったのである。

しかし、『女性教室』においても、「花」を主題とする講座の放送は低調を続けた。占領期の『女性教室』では、1951年度に大規模な連続型講座が編成されているため、講座の合計数は計13回と『主婦日記』(3回)の4倍強に増加している。しかし、連続型講座一つを1度と数えると、編成されたのは1度でしかないことになり、『主婦日記』(3度)の三分の一に減少する。

表5は『女性教室』初年度(1950年度)各月<sup>230</sup>のメインコーナー<sup>231</sup>における主題の一覧である。

表5 『女性教室』初年度の主題

月	主題
4	赤ちゃんの歩くまで
5	同上
6	洋裁第一課 子供服
7	洋裁第二課 婦人服
8	同上
9	やさしい経済の話
10	編物講座
11	洋裁講座
12	洋裁講座 子供服
同	洋裁相談室
同	編物相談室
同	冬の育児相談室

<sup>230</sup> 初年度の『女性教室』においては、各月の主題の開始日は必ずしも月初ではなく、月途中での主題交代がある。また、12月は複数の主題が編成された。

<sup>231</sup> 初期『女性教室』は、原則としてメインコーナーとサブコーナーの2部構成で編成された。サブコーナーは設けられないこともあったが、1950年度におけるその主題は、「美容メモ」、「栄養メモ」などである。

この表には、開始当初の『女性教室』が扱う「ホーム・メイキングの基本的な問題」とは実用情報の提供であることが示されている。

初年度においては、4月と12月の育児、9月の経済を除けば、「洋裁」と「編物」が主題になっている。ラジオ草創期に、初めて『家庭講座』においてテキストを伴った連続型講座が編成（1925年11月）された時、その主題は、「裁縫、手芸、生花」だった。このことから、「花」（生花）は、「裁縫」、「手芸」と並ぶ主題として位置づけられていたことが明らかである。しかし、裁縫と手芸が、1950年に（洋裁と編物に変わってはいるが、）再び採り上げられているのに対し、「花」は採り上げられていない。

『女性教室』において、ようやく、「花」を主題とする講座が編成されるのは、翌年度（1951年8月）のことである。この時、編成された「花」を主題とする講座は、連続13回という大規模なものだった。ラジオ草創期にあった連続型入門講座が、ラジオ占領期の末に至って、ようやく復活したのである。その様相は図13（図に楕円で囲った部分）のようになる。

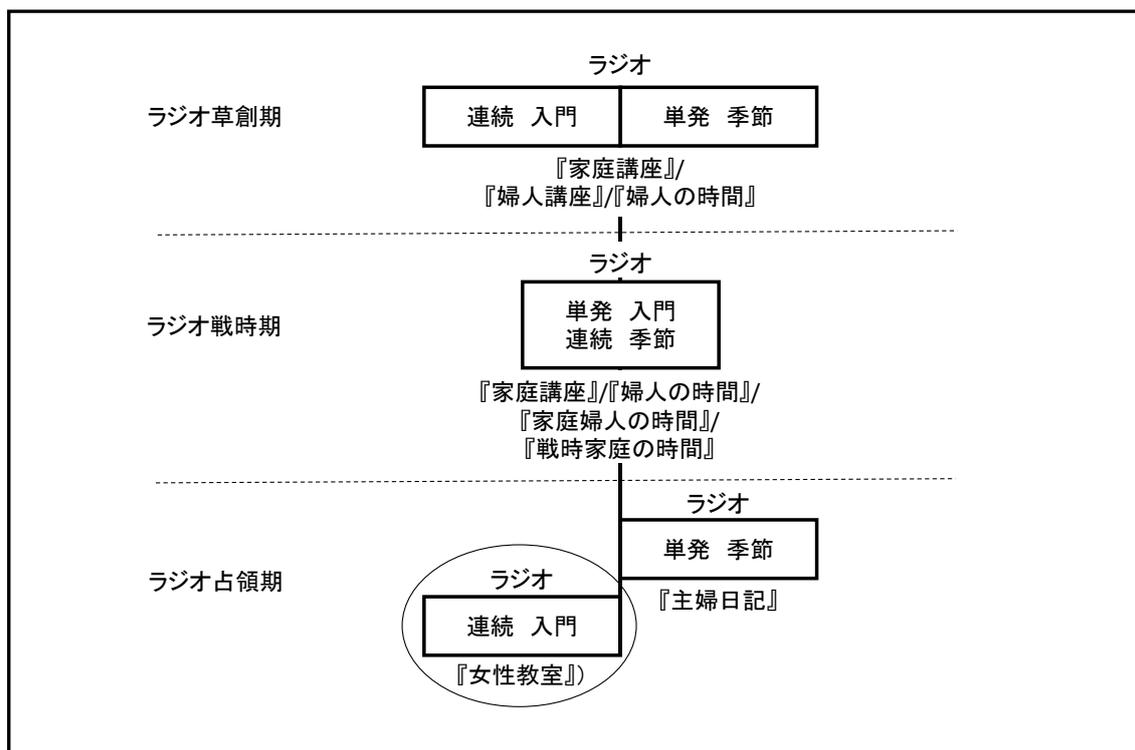


図 13 ラジオ草創期から占領期に至るまでの女性向け教養番組における「花」を主題とする講座の類型

連続型講座が復活したとはいっても、「花」を主題とする講座はこの月のメイ

ンコーナーではなくサブコーナーの扱いだった<sup>232</sup>。また、出演者は「勅使河原蒼風（提供）」と記されており、華道家自身の肉声による講義ではなく、『主婦日記』と同じく専門家からの提供を受けて、語り手が伝える形式のものだった。

『女性教室』の初期においても、「花」を主題とする講座の放送は、戦前のラジオ草創期に比して低調であったといえる。

そして、その理由は、放送の側だけでなく、「花」をめぐる情勢にも求められるのではないかと想定される。ちょうどラジオ放送の編成方針が生活重視に転換し始めた時期である1950年前後に、「花」は「前衛いけばなの全盛期」<sup>233</sup>を迎えていた。前衛いけばなは造形的な作品であり、決められた型があるわけではない。映像がないラジオでは、独創的な造形を伝えることが難しく、教授しにくいという事情が、この時期の『女性教室』において、「花」が避けられた理由の一つではないかとも考えられる。

それは次のことから裏付けられる。占領期が終わった後の時期のことではあるが、「一九五五年ごろにはじまる戦後の相対的安定期は、前衛いけばなを『くらしのいけばな』にまで後退」<sup>234</sup>させ、1955年『いけばな芸術』誌の廃刊とともに、前衛いけばな運動が終焉の時期を迎えた<sup>235</sup>途端に、『女性教室』において、ラジオ草創期をも凌駕する大規模な「花」を主題とする講座が編成されたのである。それは、「前衛いけばなの運動にかげりが生じてきたのは、昭和三十年あたりであったといわれるのは、この頃、戦前に比べて急激に増大したいけばな大衆の日常的ないけばなへの希求が次第に強くなってきたからである。造型的ないけばなに対する芸術的評価をしながらも、経済成長を続ける社会の中で、生活のいけばなまたは暮らしのいけばなを期待するような状況が生じはじめていた」<sup>236</sup>こととも呼応するものであったと考えられる。

1955年1月、あたかも前衛いけばな運動の終焉を待っていたかのようにして編成された連続型講座が、勅使河原蒼風による「暮しを豊かにするいけ花 生花入門」である。勅使河原蒼風は、前衛いけばなブームの中心人物となっていたが、前衛いけばなの「木と石を使い、また建築のセメントのかけらの中に鉄棒の入ったオブジェについて、(中略)会場芸術としてはいいが、普通の家庭の

<sup>232</sup> この月のメインコーナーの主題は、「洗濯の研究」である。

<sup>233</sup> 重森弘淹「現代いけばなの歩み(戦後)」河北倫明編『図説 いけばな大系 第4巻 現代のいけばな』角川書店、1971、p.115

<sup>234</sup> 重森弘淹「現代いけばなの歩み(戦後)」河北倫明編『図説 いけばな大系 第4巻 現代のいけばな』角川書店、1971、p.118

<sup>235</sup> 「前衛いけばなの運動の終焉をいつの時点に置くかについては、(中略)今振り返ってみれば、昭和三十年(一九五五)『いけばな芸術』誌の廃刊とともにその運動は終わったとみてよいのではなからうか。」工藤昌伸『日本いけばな文化史 四 前衛いけばなと戦後文化』同朋舎出版、1994、p.114

<sup>236</sup> 工藤昌伸『日本いけばな文化史 四 前衛いけばなと戦後文化』同朋舎出版、1994、p.77

中にはもってこれないとして、花を使ったいけばなとは峻別して考えて」<sup>237</sup>いたという。こうした蒼風の考え方が、前衛いけばなの旗手でありながら、家庭にいる女性向けの、実用としての「花」を講義することを可能にしたといえるだろう。

この時の講座の連続回数は20を数え、回数としては空前絶後の講座だった。この連続型入門講座に対する反響を、当時の資料は次のように記している。

1月勅使河原蒼風氏による「暮らしを豊かにするいけ花」は平易な話術と美麗懇切なテキストと相俟って、これまでにない聴取率を記録した(後略)<sup>238</sup>

「これまでにない聴取率を記録」という記述は重要な意義を持つ。

先の引用には、「平易な話術」とあるが、前衛を表に出さない「花」は、ラジオに高聴取率をもたらす強力なコンテンツとして、女性向け教養番組の中核に返り咲いたのである。この時の反響の大きさは、「暮らしを豊かにする」文化の伝播こそが、当時の聴取者にとって真に求められていたものであったことを示している。

### 3.3 まとめ

本章では、1937年7月7日から1945年8月15日までをラジオ戦時期、それ以降1952年4月28日までをラジオ占領期とした上で、放送史の諸資料によって両期間の女性向け教養番組の特徴を示した。そして、『番組確定表』の調査に基づいて、両期間に放送された女性向け教養番組における「花」を主題とする講座について、放送本数の年度ごと推移、放送(講座)の連続性、副題の記述、出演者といった観点から分析し、考察した。ただし、占領期の「花」を主題とする講座についての考察では、「前衛いけばな」の影響を示すために、1954年度の放送も視野に入れた。

その結果を以下に示す。

・1937年7月の盧溝橋事件以降、戦時期の女性向け教養番組は、戦争の拡大に伴って、放送枠が縮小され、内容は戦時体制を具現化するものに改められた。占領期には、一転して多くの放送枠が新設され、「政治的な啓蒙」と「実用情報の提供」の2系統となった。

・戦時期と占領期における放送本数の推移では、両期の間に、「花」を主題とする講座の放送が無い空白期が存在し、二つの時期を隔てている。

<sup>237</sup> 工藤昌伸『日本いけばな文化史 四 前衛いけばなと戦後文化』同朋舎出版, 1994, p.85

<sup>238</sup> 日本放送協会編『NHK年鑑1956』日本放送出版協会, 1955, p.87

・戦時期には、副題の内容に戦時色と耐乏生活を示す語が横溢し、「花」を主題とする講座の放送は激減する。ただし、編成の措置によって、例外的に連続型講座が放送され、好評を博していた。

・占領期には、多くの女性向け教養番組放送枠が新設されたにも関わらず、「花」を主題とする講座の放送は低調が続く。その背景には、この時期における女性向け教養番組の主力が政治的な啓蒙を旨としており、「花」を主題とする講座のような日本文化の伝播は主目的とはならなかったことがあると考えられる。

・経済復興が始まる頃になって、女性向け教養番組にも生活水準の向上をめざす放送枠が新設されるが、なお、「花」を主題とする講座の低調は続く。その背景には「前衛いけばな」の影響が考えられるが、占領期が終わり「前衛いけばな」が終焉を迎えると共に、テキストを備えた大規模な連続型講座が編成され、それまでにない聴取率を上げるという現象が生じた。

本章における調査および分析と考察の結果から、戦時期および占領期での女性向け教養番組と「花」を主題とする講座の特徴は、次の諸点にあるといえる。すなわち、(1) 戦時期には女性向け教養番組は1放送枠のみに削減され、占領期には逆に数多くの放送枠が新設されるという相違点があるにも関わらず、いずれの時期においても「花」を主題とする講座の編成は低調であるという共通点があること、(2) 戦時期および占領期の女性向け教養番組は、共に「教化」としての教養を主眼としており、「花」のような生活文化の伝播がおこなわれる余地は小さかったこと、(3) 戦時期の例外的な連続型講座の編成や、占領期の後における大規模連続型講座の復活が、多くの反響と支持を集めたことは、放送メディアが創設時にめざした「文化の機会均等」の重要性を改めて示していることである。

## 第 4 章 ラジオからテレビへの転換期

#### 4.1 ラジオからテレビへの転換期の女性向け教養番組

日本におけるラジオ放送は、日本国との平和条約（サンフランシスコ平和条約）が発効し、占領が終了した頃から最盛期を迎える。「昭和 28 年から 30 年にかけては、いわばラジオの全盛時代」<sup>239</sup>となり、1957 年初頭には、ラジオ受信者は 1450 万<sup>240</sup>を超え、1958 年には普及率 81.3%と最高度<sup>241</sup>に達する。

一方、日本におけるテレビの本放送は 1953 年 2 月 1 日に始まった。草創期における「テレビの普及率（世帯あたり）は僅か 0.3%で、受信機の所有者といえはほとんどラジオだけの所有者を意味していたほど」<sup>242</sup>だった。ところが、その後、テレビは、1959 年の皇太子ご結婚特別放送などを経て急速に普及し、1963 年 12 月末には受信契約数が 1500 万を突破、「世帯単位普及率は 73.4%となり、受信機の絶対数ではアメリカについて世界第 2 位」<sup>243</sup>という「驚くべき普及」<sup>244</sup>を示すに至った。

その結果、日本におけるラジオとテレビの地位はどのように変化したか。図 14 は、テレビ放送が始まった 1952 年度から 1964 年度にかけての、ラジオ/ゴールデンアワー<sup>245</sup>（関東）の聴取率とテレビ普及率の変化を一つにまとめたグラフである。

---

<sup>239</sup> 山本透「番組視聴の諸相 a. 『ラジオ志向』から『テレビ志向』へ」日本放送協会総合放送文化研究所放送学研究室編『放送学研究 10 共同研究 日本におけるテレビ普及の特質 3 分冊の 3』1965, p.230

<sup>240</sup> 日本放送協会編『NHK 年鑑 1959』日本放送出版協会, 1958, p.44

<sup>241</sup> 辻村明「日本におけるテレビ普及の特質 研究目的」日本放送協会総合放送文化研究所放送学研究室編『放送学研究 8 共同研究 日本におけるテレビ普及の特質 3 分冊の 1』1964, p.9

<sup>242</sup> 山本透「番組視聴の諸相 a. 『ラジオ志向』から『テレビ志向』へ」日本放送協会総合放送文化研究所放送学研究室編『放送学研究 10 共同研究 日本におけるテレビ普及の特質 3 分冊の 3』1965, p.230

<sup>243</sup> 辻村明「日本におけるテレビ普及の特質 研究目的」日本放送協会総合放送文化研究所放送学研究室編『放送学研究 8 共同研究 日本におけるテレビ普及の特質 3 分冊の 1』1964, p.9

<sup>244</sup> 辻村明「日本におけるテレビ普及の特質 研究目的」日本放送協会総合放送文化研究所放送学研究室編『放送学研究 8 共同研究 日本におけるテレビ普及の特質 3 分冊の 1』1964, p.9

<sup>245</sup> 19 時から 22 時までの夜間聴取好適時間帯。ゴールデンタイムとも呼ばれる。

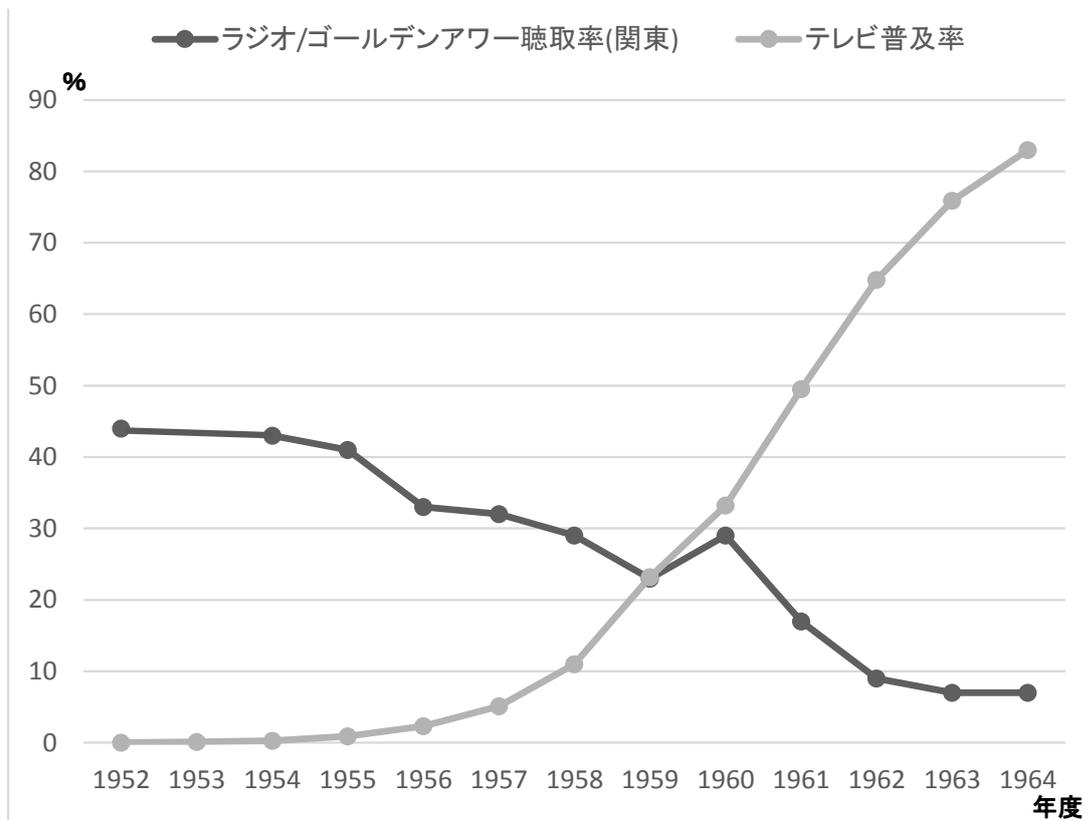


図 14 ラジオ聴取率とテレビ普及率<sup>246</sup>

図 14 に示したとおり、テレビは 1959 年頃を境として急激に普及の度を強め、1964 年度には普及率が 80% を超えるに至っている。一方、ラジオ/ゴールデンアワー（関東）の聴取率は、1952 年度の 44% から、1964 年度には 7% にまで下がっている。

この時期における、ラジオとテレビに対する聴取者と視聴者の状況について、調査結果を元におこなわれた報告には、聴取率調査の結果を分析した「ラジオのきかれ方とテレビのみられ方 ——37 年 7 月の聴視率調査の結果を中心に——」<sup>247</sup>や嗜好調査の結果を分析した「ラジオ嗜好とテレビ嗜好」<sup>248</sup>がある。

1965 年発行の『放送学研究』によれば、図 14 に示したようなラジオ聴取率

<sup>246</sup> 山本透「番組視聴の諸相 a. 『ラジオ志向』から『テレビ志向』へ」日本放送協会総合放送文化研究所放送学研究室編『放送学研究 10 共同研究 日本におけるテレビ普及の特質 3 分冊の 3』1965, p.231 の第 6-55 図「ラジオ・ゴールデンアワー聴取率の推移」および同書付録に所収の「付表」を元に作成。なお、1953 年度のラジオ/ゴールデンアワー聴取率は原資料に記載が無いため、図には記していない。

<sup>247</sup> 吉田潤「ラジオのきかれ方とテレビのみられ方 ——37 年 7 月の聴視率調査の結果を中心に——」『文研月報』1963 年 3・4 月号、日本放送出版協会、1963, pp.9-25

<sup>248</sup> 堀明子「ラジオ嗜好とテレビ嗜好」『NHK 放送文化研究所年報』第 8 集、1963, pp.59-80

の減少に加え、1964年「夏 NHK 放送文化研究所が調査した全国テレビ所有者（中略）の1日あたり視聴時間が、平均2時間33分であり、全体の約92%の人が1時間以上見ているという事実。なかでも家庭婦人の平均視聴時間が3時間9分に及んでいるという事実」<sup>249</sup>などから、1964年には、「人びとのテレビ視聴がすでにラジオ聴取にとってかわり、かつてのラジオ全盛時代に比肩するほどのテレビ接触が行なわれていることは明らか」<sup>250</sup>となった。

新しいメディアが生まれた時、そこには、コンテンツが必要となる。テレビは、当初、制作能力の限界から独自番組では埋めきれない放送時間に対して、映画およびラジオという先行するメディアにコンテンツの供給を求めた。

映画からテレビへのコンテンツ供給においては、日本の映画会社がテレビを脅威とみなして提供禁止の申し合わせがなされた。その結果、コンテンツ不足に陥った日本のテレビには、アメリカ製テレビ映画が大量に流入した<sup>251</sup>ことが知られている。

では、ラジオからテレビへのコンテンツ供給ではどうだったか。日本でテレビが始まった当時、公共放送は既に30年近くに渡ってラジオ放送を続けており、多くのコンテンツを有していた。初期のテレビでは、ラジオの中継放送などを活用し、R・T同時と呼ばれる番組をラジオとテレビ双方で同時に放送することもおこなわれた。

やがて、テレビの制作体制が整うにつれ、R・T同時というラジオの流用番組はほとんど姿を消し、テレビ独自の番組が量産されるようになった。女性向け教養番組では、1957年度に、「機構改革でラジオ、テレビの制作部門が一体化された」結果、「ラジオ、テレビの企画実施が1つの機構の中で、協力して、それぞれのメディアの特質を生かした企画内容の婦人番組を放送する体制」<sup>252</sup>となった。また、1961年度の編成についての記録には、「基本的な考え方としては、ラジオ、テレビそれぞれのもつ機能的な特性を生かして番組を制作し、編成する」<sup>253</sup>と記されている。

---

<sup>249</sup> 山本透「番組視聴の諸相 a.『ラジオ志向』から『テレビ志向』へ」日本放送協会総合放送文化研究所放送学研究室編『放送学研究 10 共同研究 日本におけるテレビ普及の特質 3分冊の3』1965, p.233

<sup>250</sup> 山本透「番組視聴の諸相 a.『ラジオ志向』から『テレビ志向』へ」日本放送協会総合放送文化研究所放送学研究室編『放送学研究 10 共同研究 日本におけるテレビ普及の特質 3分冊の3』1965, p.233

<sup>251</sup> 古田尚輝「テレビジョン放送における『映画』の変遷」『成城文藝』第196号, 2006, pp.266(1)-213(54)

<sup>252</sup> 日本放送協会編『NHK年鑑1959』日本放送出版協会, 1958, p.91

<sup>253</sup> 日本放送協会編『NHK年鑑1962No.2』日本放送出版協会, 1962, p.4。『NHK年鑑』は、1960年度の記録が『1962年版』として発行され、1961年度の記録が『1962年版No.2』として発行された。『1962年版』までは表題と発行年が1年ずれているが、『1962年版No.2』

女性向け教養番組に関して、旧メディアであるラジオと新メディアであるテレビの間では、それぞれの特性に即した番組制作と編成上の措置が図られるようになったのである。

一方、その対象聴取者および視聴者層はどうだったか。

1960年の「国民生活時間調査」<sup>254</sup>では、「家庭婦人の場合には、正午からの一時間だけでなく、午前九時から午後五時ごろまでの昼間の時間には、他に比べて、ラジオをきいている人が多い」<sup>255</sup>という結果が得られ、この時点のラジオにおいては、特に日中の時間帯で家庭にいる女性が主な聴取者だった。一方、先に記したとおり、1964年の調査では、家庭にいる女性の1日あたり平均テレビ視聴時間は3時間9分に及んでいた<sup>256</sup>。さらに、1965年の「国民生活時間調査」<sup>257</sup>では、「家庭婦人の場合、テレビをみる時間は他の職業の人に比べてかなり多かった」<sup>258</sup>という結果が得られている。テレビが普及する過程での主要な視聴者層は、家庭にいる女性であり「テレビの最大の“おとくいさま”」<sup>259</sup>と評された。1960年代前半では、ラジオとテレビとは、共に、家庭にいる女性を対象聴取者あるいは視聴者層としていたことになる。

本研究では、日本国との平和条約（サンフランシスコ平和条約）が発効した1952年4月28日から「テレビ視聴がラジオ聴取にとってかわった」年度である1964年度末<sup>260</sup>までを、ラジオからテレビへの転換期と規定している。この間、各年度の『年鑑』に記載されるラジオとテレビそれぞれの女性向け教養番組は、次のように推移した。

まず、ラジオでは、ラジオ占領期の末から放送されていた番組群に加え、1953年度には『料理クラブ』、『NHK美容体操』、『社会時評』、1954年度には『我が家のリズム』、『教養特集—ラジオ家族会議』、1955年度には『ラジオ育児室』、『新・家庭読本』、1956年度には『ラジオ家庭欄』、『妻をめとらば』、1959年

---

以降は表題と発行年が一致する。

<sup>254</sup> 日本放送協会放送文化研究所編『国民生活時間調査』日本放送出版協会、1962

<sup>255</sup> NHK放送文化研究所編『日本人の生活時間』日本放送出版協会、1963, p.135

<sup>256</sup> 山本透「番組視聴の諸相 a.『ラジオ志向』から『テレビ志向』へ」日本放送協会総合放送文化研究所放送学研究室編『放送学研究10 共同研究 日本におけるテレビ普及の特質 3分冊の3』1965, p.233

<sup>257</sup> 日本放送協会放送世論研究所編『昭和40年度国民生活時間調査』日本放送出版協会、1966

<sup>258</sup> 日本放送協会放送世論研究所『テレビと生活時間』日本放送出版協会、1967, p.29

<sup>259</sup> 藤原功達「家庭婦人はテレビ・ラジオをどのようにみききしているか」『文研月報』1965年12月号, p.14

<sup>260</sup> 本研究では、1964年度末を1965年4月3日とする。放送番組の編成は、定曜定時の放送を基準とする放送枠がほとんどであることから、原則として週単位でおこなわれ、放送の年度替わりは週の切れ目である日曜または月曜からとされる。したがって、暦の上での年度末である3月末日とは、放送年度の末日が異なることがある。

度には『NHK 婦人学級』といった放送枠が新設され、「ラジオの全盛時代」を現出した。しかし、これらの放送枠は、その後、次々に廃止され、1964年度には、『女性教室』、『私の本棚』、『みんなの茶の間』、『午後の散歩道』、『ラジオ文芸』の5枠となった。

次に、テレビでは、放送開始から1956年度までは『ホーム・ライブラリー』の1枠のみだった。その後、1957年度に『きょうの料理』と『婦人こどもグラフ』<sup>261</sup>、1959年度に『婦人百科』、『テレビ婦人の時間』、『おかあさんといっしょ』、『みんなで歌を』、『話の四つかど』、1960年度に『婦人の話題』、『回転いす』、1961年度に『美容体操』、『婦人学級』、1963年度に『くらしの窓』、1964年度に『季節のいけばな』、『お茶のすべて』、『絵画・書道』などが次々に新設された。これらの放送枠のいくつかは早期に終了し、1964年度には、『婦人百科』、『きょうの料理』、『婦人の時間』、『美容体操』、『婦人学級』、『くらしの窓』、『季節のいけばな』、『お茶のすべて』、『絵画・書道』の9枠となった。

この間、「花」を主題とする講座などの文化伝播を旨とする放送枠は、ラジオとテレビとで、共に編成され続けた。そこで、本章では、女性向け教養番組における「花」を主題とする講座を事例として、ラジオからテレビへの転換期での編成を調査し、それぞれの特徴を考察することとする。

#### 4.2 ラジオからテレビへの転換期の「花」を主題とする講座

図15に、ラジオからテレビへの転換期において、「花」を主題とする講座が編成された放送枠の系譜を示す。

---

<sup>261</sup> 1958年度に『婦人グラフ』と改称し1959年度に終了。

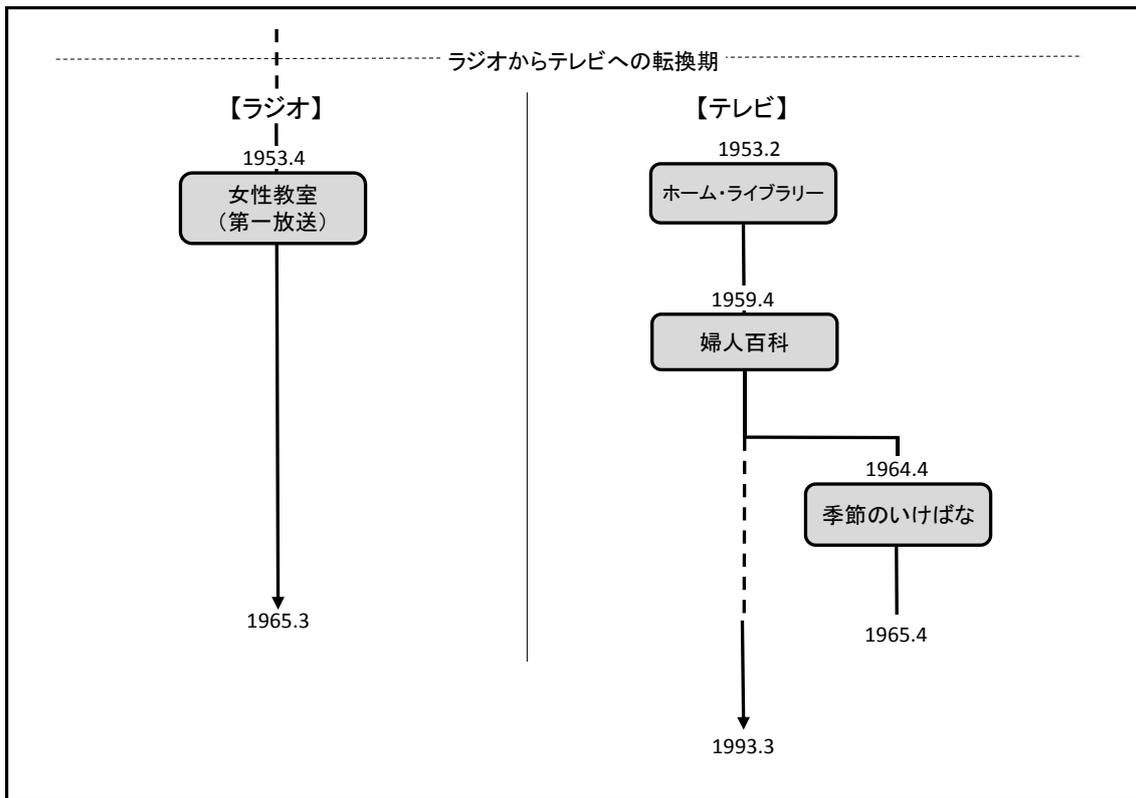


図 15 ラジオからテレビへの転換期において、「花」を主題とする講座が編成された放送枠の系譜

図 15 に示したとおり、この時期には、ラジオでは『女性教室』<sup>262</sup>、テレビでは『ホーム・ライブラリー』、『婦人百科』、『季節のいけばな』といった放送枠が並立している。ラジオでの「花」を主題とする講座を編成した女性向け教養番組『女性教室』は、1950 年度に第二放送において新設されたが、テレビ放送開始後の 1953 年度に第一放送に移設された。そして、1964 年度末に終了した。この間、テレビでは、「花」を主題とする講座を編成した女性向け教養番組は、『ホーム・ライブラリー』から『婦人百科』を経て『季節のいけばな』へと変遷した。これらの放送枠では、ラジオとテレビとで、同じ「花」という題材を扱っていたため、編成および番組内容において、なんらかの措置が図られていたと想定される。

図 16 に、1950 年度から 1964 年度までの期間における、「花」を主題とする講座が編成された女性向け教養番組の放送時間帯について、その推移を示す。

<sup>262</sup> 『女性教室』は、1960 年度には『主婦の時間』の 1 コーナー、1963 年度には『午後の茶の間』の 1 コーナーとなったが、『女性教室』の呼称は残り、放送時刻の上でも他のコーナーと区別されているため、放送枠としての独立性は保っている。

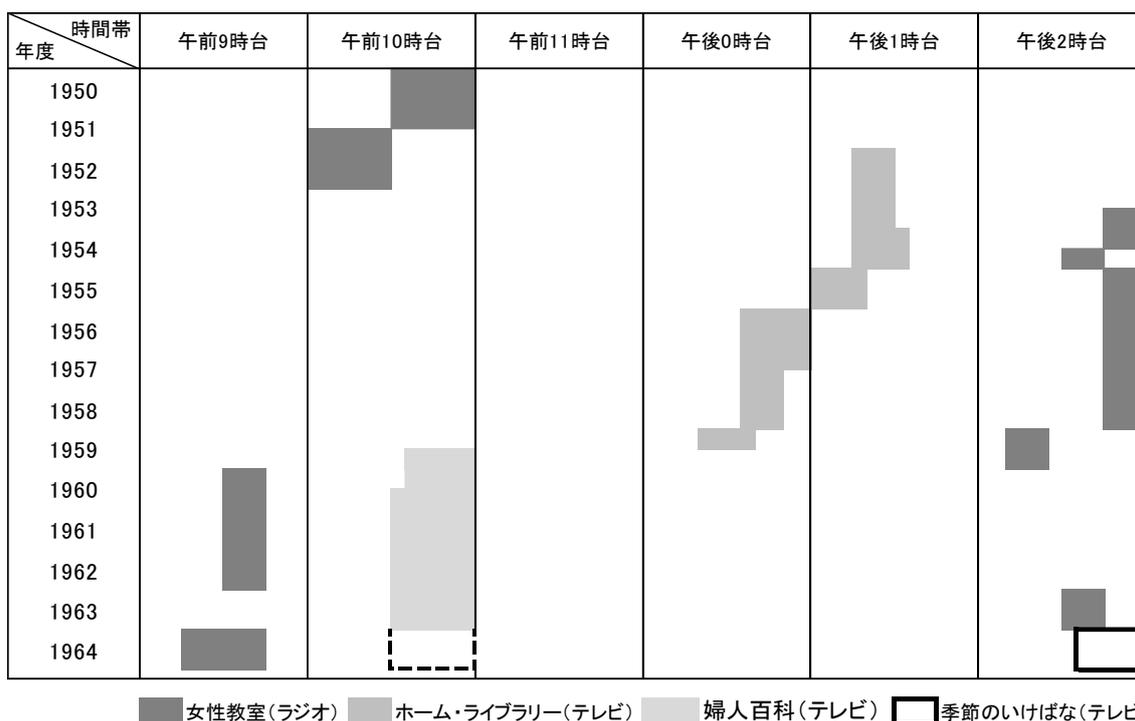


図 16 1950 年度から 1964 年度までのラジオとテレビでの女性向け教養番組における放送時間帯の推移（1964 年度は『婦人百科』の放送は継続しているが、「花」を主題とする講座は『季節のいけばな』で編成された。）

ラジオでの女性向け教養番組『女性教室』の放送時間帯は、1950 年度の放送開始から 1953 年度途中まで午前 10 時台（10 時または 10 時 30 分から）、1953 年度途中から 1959 年度まで午後 2 時台（ほとんど 2 時 45 分から、まれに 2 時 5 分または 2 時 30 分から）、1960 年度から 1962 年度まで午前 9 時台（9 時 30 分または 31 分から）、1963 年度は午後 2 時 30 分から、1964 年度（放送終了年度）は午前 9 時 15 分から、であった。

テレビでの女性向け教養番組放送枠である『ホーム・ライブラリー』の放送時間帯は、1952 年度の放送開始から 1958 年度の放送終了まで午後 0 時台または 1 時台（0 時 20 分または 0 時 35 分からと 1 時または 1 時 15 分から）、同じく『婦人百科』は 1959 年度の放送開始から同年度の 9 月まで 0 時台（0 時 20 分から）だったが、1959 年 10 月以降 1963 年度まで午前 10 時台（10 時 30 分または 35 分から）、そして 1964 年度に放送された『季節のいけばな』は午後 2 時台（2 時 35 分から）であった。

ラジオとテレビとが併存している 1952 年度以降で両者の時間帯を比較すると、1952 年 2 月から 1953 年 12 月までの 10 か月ほどは、ラジオ午前、テレビ午後と分かれているが、以降、1959 年 10 月まではラジオ、テレビ共に午後の時間帯に編成されている。1959 年 10 月にテレビで『婦人百科』が新設されて

以降は、当初半年ほどはラジオ午後、テレビ午前と分かれていたが、1960年度にラジオの『女性教室』が午前に移設され、以後1962年度までラジオ、テレビ共に午前の時間帯に編成されている。1963年度は、ラジオ午後、テレビ午前と分かち、1964年度は、ラジオ午前、テレビ午後と分かれている。

ラジオ、テレビ共に午前、あるいは、ラジオ、テレビ共に午後に編成されている場合でも、その放送時間帯は、ラジオ9時台に対しテレビ10時台、ラジオ2時台に対しテレビ0時台または1時台というように、重なることがないように編成されている。

生物学では「生活様式がよく似た二つ以上の個体または種が空間的または時間的に生活の場を異にすること」<sup>263</sup>を棲み分けという。生物学の用語ではあるが、「干渉測定型チャンネル棲み分け」<sup>264</sup>、「多文化共生の智慧としての『棲み分け』」<sup>265</sup>、「インドネシアのアートワールドにおける緩やかな境界と棲み分け」<sup>266</sup>などというように、棲み分けという語は他の学問分野でも用いられている。ラジオからテレビへの転換期における女性向け教養番組の編成にこれを敷衍すれば、ラジオの女性向け教養番組放送枠とテレビの女性向け教養番組放送枠に関して、家庭にいる女性を共に対象としながら、その放送時間帯について、棲み分けが図られていたといえるだろう<sup>267</sup>。

こうした時間帯の棲み分けが図られていた時期においては、メディアごとの講座の内容にも、それぞれに即した特性が生じていたと考えられる。

以下、本章では、ラジオからテレビへの転換期での女性向け教養番組における「花」を主題とする講座について、それぞれのメディアにおける放送本数の推移、講座の内容と類型、テキストの機能、出演者の構成といった観点から分析

---

<sup>263</sup> 沼田真『生態学方法論』古今書院、1979、p312

<sup>264</sup> 天間克宏、安達文幸、単麟、大和田泰伯、服部聖彦、浜口清「干渉測定型チャンネル棲み分けに基づく動的チャンネル配置の収束性に関する一検討」『電子情報通信学会技術研究報告=IEICE technical report 信学技報』第115巻第472号、2016、pp.169-174

<sup>265</sup> 堀内俊郎「一仏教的観点による多文化共生の智慧としての『棲み分け』一」『国際哲学研究』第4号、2015、pp.151-158

<sup>266</sup> 廣田緑「現代美術・伝統絵画・『売り絵』——インドネシアのアートワールドにおける緩やかな境界と棲み分け」『メタプティヒアカ 名古屋大学大学院文学研究科教育研究推進室年報』第9巻、2015、pp.91-97

<sup>267</sup> 本研究では、調査と考察の対象を、公共放送のラジオおよびテレビとしている。1953年以降、民間放送では、日本テレビ（1953年）、ラジオ東京（1955年）、大阪テレビ放送および中部日本放送（共に1956年）などがテレビ放送を開始した。このうち日本テレビはラジオ放送をおこなっていない。また、他の局もラジオ放送の開始がテレビ放送開始の2年足らず前にすぎないことから、「各社は正直なところラジオの経営に精一杯で、テレビにまでは手が回らないというのが実情であった」（山本透「日本におけるテレビ普及の特質 送信者の実態 放送局」日本放送協会総合放送文化研究所放送学研究室編『放送学研究8 共同研究 日本におけるテレビ普及の特質 3分冊の1』1964、p.69）。したがって、ラジオとテレビとの棲み分けを考慮した編成に本格的に取り組む状況には無かったと考えられる。

し、考察する。

#### 4.2.1 放送本数の推移

図 17 は、1952 年度から 1964 年度にかけての「花」を主題とする講座のラジオおよびテレビでの放送本数の推移である。

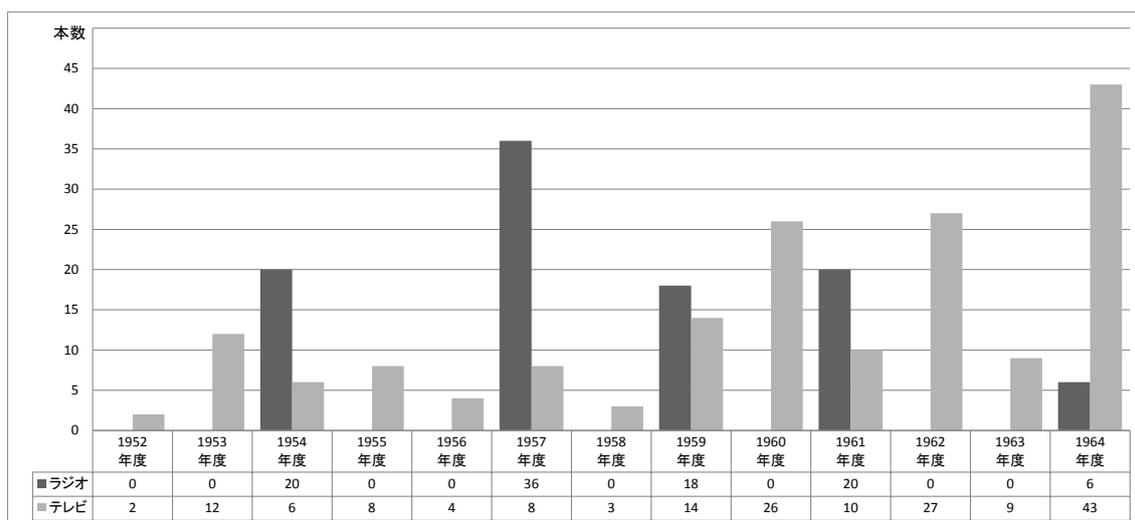


図 17 ラジオおよびテレビの女性向け教養番組における「花」を主題とする講座の年度ごと放送本数（1952 年度～1964 年度）<sup>268</sup>

1952 年度から 1964 年度までの間に、ラジオでは 100 本、テレビでは 172 本、「花」を主題とする女性向け教養番組が放送された。この期間における年度あたり平均本数は、ラジオが 7.7 (小数点第 2 位四捨五入・以下同)、テレビが 13.2 であり、標準偏差は、ラジオが 11.4<sup>269</sup>、テレビが 11.4<sup>270</sup>である。期間内でラジオでの放送があった年度は 5、テレビでの放送があった年度は 13 であって、ラジオでの放送はテレビに比して間断的である。ただし、ラジオとテレビ双方で放送がある年度では、最後の年度を除き、ラジオでの放送本数がテレビでのそれを上回っている。

#### 4.2.2 講座の種類と内容

ラジオからテレビへの転換期における「花」を主題とする講座の内容はその副題から推し量ることができる。この期間におけるテレビでの放送枠は、1958

<sup>268</sup> テレビでの「花」を主題とする講座は、放送開始年度である 1952 年度から編成（1953 年 3 月 26 日～27 日「テレビ生花教室」）された。

<sup>269</sup> 小数点第 5 位まで示せば、11.39085

<sup>270</sup> 小数点第 5 位まで示せば、11.40954

年度まで『ホーム・ライブラリー』、1959年度以降『婦人百科』、1964年度は『季節のいけばな』となっている。一方、この期間におけるラジオでの放送枠は『女性教室』で一貫している。『女性教室』と『ホーム・ライブラリー』が並立していた時期を前期、『女性教室』と『婦人百科』あるいは『季節のいけばな』が並立していた時期を後期とすれば、前期には、その副題に記された内容に、ラジオとテレビとで明らかな性格の違いがある。

まず、ラジオでの副題について、その性格を示す。

第3章に記したとおり、1954年度には、ラジオで連続20回という大規模な講座が編成されている。この講座のテキストには、作例に加えて、「いけばなの歩み」、「独習の要領」、「基本的な用語や方法」などの解説が付されており、放送の内容も同様のもの、すなわち、「花」を基礎から体系的に講義するものだったと推定できる。

それ以降、1958年度までの前期におけるラジオでの副題は、「暮しを豊かにするいけ花 生花入門」、「いけばな—いけばなについて」、「いけばな 池坊いけばなについて」、「いけばな 池坊いけばなの基本」、「生花と室内装飾—盛花の基礎」といったように、入門講座の性格をうかがわせるものばかりとなっている。また、1959年度以降の後期においても、その副題は、「いけばな—やさしい盛花」、「いけばなと俳句 —花型の基本—」、「室内装飾 —いけ花の基本—」といったように、入門講座としての性格をうかがわせるものがほとんど<sup>271</sup>である。

次に、前期におけるテレビでの副題について、その性格を示す。

テレビでの副題には、入門講座の性格を窺わせるものは、1952年度小原豊雲の「テレビ生花教室」、1955年度大井ミノブ他の「いけばなの歴史」など僅かしかない。

入門性を特徴とするラジオに対し、テレビは、半数以上の講座の副題に時節が冠せられており、季節性が表されている。たとえば、1954年度のテレビにおける講座は、「新春の生花」、「春の生花」、「三月の生花」などすべて時節を冠した副題が付けられており、基礎からの講義というよりも季節に合わせた作例紹介という内容になっている。テレビでは、他にも「季節のお花」、「季節の生花」、

---

<sup>271</sup> ラジオでは、唯一、1961年度の小原豊雲による連続7回の講座における副題が季節性のみを有して入門性が無い。しかし、この時の講座は「いけばなと俳句」という副題のもとで、池坊専永、小原豊雲、勅使河原和風がリレー式に講義したものであり、池坊専永と勅使河原和風は、共に入門性を有する講義をおこなっているから、全体として入門性を有するとみなすこともできるだろう。その中で、小原豊雲が季節性を有する講義をおこなったのは、「いけばなと俳句」というタイトルに合わせるためだったとも考えられる。副題が「いけばなと俳句」となっているのは、この月の下旬に中村汀女による俳句の講座が設定されていたためである。

「季節の花をいける」、「ひなまつり」、「クリスマスと正月」など、時節に関するものが多い。

以上は副題についての分析だが、前期におけるラジオとテレビでは、放送の連続性においても明らかな違いがある。ラジオではすべてが6回以上の大規模な連続型講座であるのに対し、テレビでは単発型の講座が多い。

図18に、ラジオ草創期とラジオからテレビへの転換期のうち1958年度までの期間それぞれにおける、「花」を主題とする講座の類型を記す。

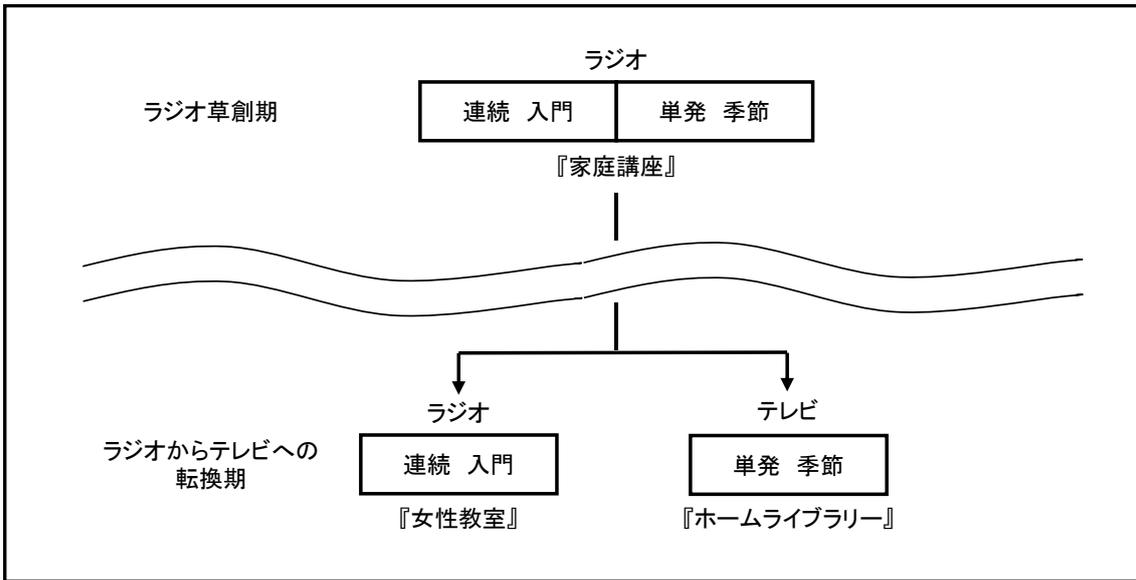


図18 ラジオ草創期およびラジオからテレビへの転換期での女性向け教養番組における「花」を主題とする講座の類型分化

図18に示したように、ラジオ草創期の「花」を主題とする講座の内容は、入門性と季節性を併せ持っていたが、ラジオからテレビへの転換期のうち1958年度までの期間における「花」を主題とする講座の内容は、ラジオはもっぱら入門性を主旨とする連続型講座、テレビはもっぱら季節性を主旨とする単発型講座に分化したことになる。

こうした分化は両者のメディアとしての特性の違いに起因するものであろう。

ムーアとカースリー（2004）が指摘するのように、ラジオと同様テレビにも「リアルタイムで利用する（時間に拘束される）」<sup>272</sup>という短所がある。当時、家庭用のオーディオテープレコーダーやビデオ録画機は普及しておらず、放送はリアルタイムで聴取または視聴することしかできず、反復学習には向いてい

<sup>272</sup> マイケル・G. ムーア、グレッグ・カースリー（Moore, Michael G. & Kearsley, Greg）[著] /高橋悟編訳『遠隔教育 生涯学習社会への挑戦』海文堂出版，2004，p.120

なかった。ところが、ラジオでは、映像が無いという欠点を補うために従来からテキストが発行されていた。テキストがあれば、いつでも随意の箇所を読み返すことができるという随時参照性を有するため、反復学習が可能であり、初心者にも追従できる。その結果、ラジオにおいてはもっぱら入門性を有する講座が編成されることになったのであろう。また、『女性教室』のテキストは原則として月刊であったため、月単位でテーマを決める必要があった。そのため、放送においても月単位で編成され、必然的に連続型講座となったと考えられる。実際にラジオにおける講座は、1964年度を除き、ラジオからテレビへの転換期すべてを通じて、1か月を一つの区切りとして放送されている。

一方、テレビでは、この時期、原則としてテキストは発行されていない。しかし、テレビは映像を有するため、作例を詳細に見せることができる。そこで、季節に即した花材をとりあげて講師の作例を見せる、いわばショーケースともいえる内容になったと考えられる。ただし、テキストが無いため、何度も反復して確認することが必要となるような複雑な内容は放送できない。故にテレビでは、単発型の季節性を主旨とする内容となったのであろう。

こうしてラジオは入門性を主旨とする連続型、テレビは季節性を主旨とする単発型という分化が生じたわけだが、転換期の後期、テレビに『婦人百科』が新設された1959年度から、状況に変化が生じる。連続型講座の回数について年を追って分析すると、連続型講座が編成されるメディアが前期と後期を境としてラジオからテレビへと移っていくことが確認できるのである。

表6は、ラジオからテレビへの転換期における、ラジオおよびテレビそれぞれの「花」を主題とする講座の連続回数とその出現度数を示したものである。

表6 ラジオからテレビへの転換期における「花」を主題とする講座の連続回数と出現度数（表中の数字は連続回数×出現度数）

年度	1952	1953	1954	1955	1956	1957	1958	1959	1960	1961	1962	1963	1964
ラジオ	0	0	20x1	0	0	15x1 11x1 10x1	0	9x2	0	7x2 6x1	0	0	6x1
テレビ	2x1	2x3 1x5	1x6	1x8	1x4	2x2 1x4	1x3	13x1 1x1	8x1 5x1 4x1 3x1	4x2 1x3	13x1 8x1 4x1 1x1	9x1	13x1 11x1 10x1 9x1

ラジオでは1954年度の1度および1957年度の3度がすべて10回以上連続だったのに対し、1959年度以降はすべて1桁に減少している。一方、テレビで

は1958年度まではすべて単発型ないし連続2回<sup>273</sup>という小規模な連続型講座だったのが、1959年度に13回という大規模な連続型講座が出現して以降、連続4～5回の小規模連続型講座や連続10回以上の大規模連続型講座が頻出するようになる。

この現象には、女性向け教養番組における編成方針が要因として介在していると考えられる。1959年度の編成方針を記録した資料には、「テレビの普及にともない、婦人番組でも、ラジオ・テレビの特質を、それぞれ十分に発揮させるよう編成したことはもちろんである。一例をあげると、家庭生活を豊かにする実技の指導は、テレビで綿密に系統だてて取り扱うこととし、10月から婦人番組が増設されたのを機会に、その大部分を家庭実用番組にあて、内容を充実強化した。一方、ラジオの家庭実用番組は、きき易く親しみ易くするために、ディスクジョッキーを取り入れるなど、耳できく実用知識の紹介に重点をおいた。」<sup>274</sup>と記されている。そして、「放送開始以来7年目をむかえたテレビ放送は、(中略)地域的拡大とともに受信者の急増をみ、番組に対する要望もとみにたかまってきた」<sup>275</sup>ため、テレビの編成において「『ホーム・ライブラリー』を廃止し、新たに午後1時20分より20分間『婦人百科』を編成して、婦人聴視者の要望にこたえた」<sup>276</sup>という。こうして1959年度に新設された『婦人百科』においては、10月に勅使河原霞による連続13回というテレビでは空前の規模の「花」を主題とする講座が編成された。

勅使河原霞の講座は、その副題によれば、第1回が「いけばなの使用用具」、第2回が「基本花型」、以下「水揚げ法」、「材の焼め方」、「投入の基本」と続いており、体系的な入門講座の様相を呈している。一方、12月には「クリスマス飾る花」という季節性を主旨とする講座も編成されている。総体としては、この連続型講座は、従来、季節性を主旨としていた、テレビでの「花」を主題とする講座に、それまではラジオでの「花」を主題とする講座が主旨としていた入門性が接種されたものだったといえる。

1959年度においては、ラジオでも計18回の講座が編成されているが、これは、小原豊雲と勅使河原和風の講座を合計した数字であり、それぞれの講座数は共に9回であって、テレビにおける勅使河原霞の13回よりも少ない。入門講

---

<sup>273</sup> 1953年6月17日から19日にかけて『ホーム・ライブラリー』で放送された、安達潮花出演の「六月の生け花」は、17日と18日が共に「(1)水仙」、19日が「(2)山百合」となっている。18日には再放送の表記が無いため、本研究では本放送として扱っているが、連続回数を計上する上では、副題の表記に準じて2回とした。

<sup>274</sup> 日本放送協会編『NHK年鑑1961』日本放送出版協会、1960、p.113

<sup>275</sup> 日本放送協会編『NHK年鑑1961』日本放送出版協会、1960、p.178

<sup>276</sup> 日本放送協会編『NHK年鑑1961』日本放送出版協会、1960、p.178

座としての連続回数規模の点においても、テレビはラジオを凌駕して逆転が生じたことになる。

1959年度以降、ラジオにおける「花」を主題とする講座の存在は薄らいでいく。その要因は、前記のようなテレビの普及拡大に伴うテレビ編成の強化に加えて、ラジオにおける番組のワイド化にも求められる。ワイド化とは端的には長時間化の意であるが、当時は、「ラジオの特性を生かして番組を組むための一つの方法として、流動感のあるワイド番組というものが大いに注目され（中略）聴取者がなにか行動しながら聞く、また、どこから聞いてもわかる番組いわゆるながら番組を打ち出したところに特色がある」<sup>277</sup>編成手法と位置づけられていた。

1960年度には、「ラジオの機能と特性を最大限に発揮してラジオ独自の分野を確立すること、——総合、ワイド番組の編成、ラジオ、テレビの効果的編成（後略）」<sup>278</sup>が主眼となり、『女性教室』は『主婦の時間』という、より大型のワイド番組の「一こまに組み入れられた」のである。そこでは、「常にテキストを追わなければ出来ないようなテーマは避け」<sup>279</sup>られた。

こうした方針によって、ラジオの女性向け教養番組はワイド番組の「一こま」となった。1960年度にラジオにおいて、「花」を主題とする講座が編成されていないのは、「常にテキストを追わなければ出来ない」ラジオでの講座がテーマとして避けられたからと考えられる。

これに対して、テレビにおいては『婦人百科』の充実強化が図られ、1960年9月以降は、『美容体操』を別時間帯とし、30分の充実した時間を確保すること」<sup>280</sup>が実施された。その結果が、1960年度におけるテレビでの、「花」を主題とする講座の放送本数26という編成になって現れたといえる。

「テレビの婦人向け番組は、（中略）ますますキメの細かい編成が求められた。他方、ラジオは、ききやすく親しみやすくするためにディスクジョッキーを取り入れ、また『主婦の時間』や『婦人の時間』のように一時間近くのワイド化を図るなど、いわば総合的な編成をとり始めた。つまりこれらは、かつてラジオの婦人向け番組が家庭婦人の生活時間の中で占めていた座に、こんどはテレビが迫ろうとしている現われ」<sup>281</sup>だったのである。

---

277 吉田行範、坂本朝一、岡本正一、山崎誠「座談会 ラジオ・テレビの特性を生かして——新しいNHK放送番組の編成方針」『放送文化』1961年4月号、p.12

278 日本放送協会編『NHK年鑑1962』日本放送出版協会、1961、pp.54-55

279 日本放送協会編『NHK年鑑1962』日本放送出版協会、1961、p.100

280 日本放送協会編『NHK年鑑1962』日本放送出版協会、1961、p.195

281 日本放送協会放送史編修室編『日本放送史 下』日本放送出版協会、1965、p.520

1961年度には揺り戻しが生じ、ラジオの『女性教室』で「新しい試みとして、『いけばなと俳句』」<sup>282</sup>が放送された。その結果、この年度の「花」を主題とする講座の放送本数は、ラジオ 20 対テレビ 10 となり、再びラジオがテレビを逆転した。しかし、これは、本来「1 か月間 1 つのテーマを通して放送」<sup>283</sup>する枠だった『女性教室』に、「いけばなと俳句」という二つのテーマを設けるといふ変則的な編成だった。講師は池坊専永、小原豊雲、勅使河原和風と 3 人が交替制であたっており、1 人あたりの講座回数は 6 ないし 7 回とさらに細分化されていて、かつての大型講座の面影は無い。

1963年度には再び方針が一転し、ワイド化がまたも押し進められた。すなわち、ラジオでの「ながら聴取態様に適合」<sup>284</sup>することを目的として 2 時間という大型のワイド番組『午後の茶の間』が新設され、『女性教室』は六つあるコーナーの最後に組み込まれたのである。こうした方針の結果、ラジオにおける「花」を主題とする講座は再びその居場所を失った。

ラジオからテレビへの「花」を主題とする講座の移行は、テレビが映像を有する点で優位であったことに加え、ラジオが「専念聴取」ではなく「ながら聴取」をするものとなっていく<sup>285</sup>過程においても余儀なくされたものでもあったといえる。ワイド化され、ディスクジョッキーによる「ながら聴取」が主流となったメディアには、「花」を主題とする講座のような「専念聴取」が要求されるコンテンツの居場所は求め難かったと考えられるからである。

1964年度はラジオでの「花」を主題とする講座の放送枠である『女性教室』の最終年度となった。この年度にはラジオにおいて 6 本、「花」を主題とする講座が放送されているが、それは、この月の主題である「室内装飾」の一部分としてという変則的なものだった。本来は「1 か月間 1 つのテーマ」<sup>286</sup>だった『女性教室』は、この時、「室内装飾」という名の元に「室内装飾」、「手作りの室内装飾品」、「住まいと家具」、「暮らしを美しく (いけばな)」という四つのコーナーを 4 人の講師がそれぞれ担当するという、これまでで最も細分化されたものになっていた。

一方、テレビでは、「従来『婦人百科』に含まれていた『いけばな』『お茶』などの趣味ものを、午後の別の番組として独立させ、より実用性を強く」する

---

282 日本放送協会編『NHK 年鑑 1962No.2』日本放送出版協会, 1962, p.42

283 日本放送協会編『NHK 年鑑 1962No.2』日本放送出版協会, 1962, p.42

284 日本放送協会編『NHK 年鑑'64』日本放送出版協会, 1964, p.75

285 日本放送協会編『NHK 年鑑 1962No.2』には、「最近の傾向として、ラジオの聴取好適時間帯は、夜間から朝の 6~7 時台に移行し、同時に、聴取態度では“重なり行動を伴う聴取”、すなわち、何かほかの仕事をしながらかくといいた態度が顕著にみられる。」という記述がある (日本放送協会編『NHK 年鑑 1962No.2』日本放送出版協会, 1962, p.4)。

286 日本放送協会編『NHK 年鑑 1962No.2』日本放送出版協会, 1962, p.42

施策が実施されて、「花」を主題とする講座の独立した放送枠である『季節のいけばな』が新設された。1925年のラジオ放送開始当初から「花」を主題とする講座は編成されていたが、それはすべて『家庭講座』、『女性教室』、『婦人百科』など、他の主題も扱う放送枠の中においてであった。それが、1964年度について、「花」のみを扱う女性向け教養番組が生まれるに至ったのである。

その『季節のいけばな』の内容は、「家庭婦人および一般を対象に、季節の花をつかって、各流派の家元クラスの人がいけばなのバリエーションを見せるとともに、いけばなの基本をおりこみ、とくに花と花器、飾る場所との関連に重点」<sup>287</sup>が置かれるというものであり、「初歩からわかりやすく指導してゆこうとする」、「初心者にもわかりやすい趣味のシリーズ番組」<sup>288</sup>だった。この記述によれば、『季節のいけばな』には、テレビでの「花」を主題とする講座が主旨としていた「季節性」とラジオにおけるそれが主旨としていた「入門性」が共に織り込まれていたことになる。

図18に示したラジオからテレビへの転換期の前期におけるメディアごとの内容の分化は、こうして、後期には『婦人百科』を経て、『季節のいけばな』によって、最終的にテレビに統合される結果となった。その様相を図19に示す。

---

<sup>287</sup> 日本放送協会編『NHK年鑑'65』日本放送出版協会、1965、p.150

<sup>288</sup> 「新番組ライン・アップ」『放送文化』1964年4月号、p.66

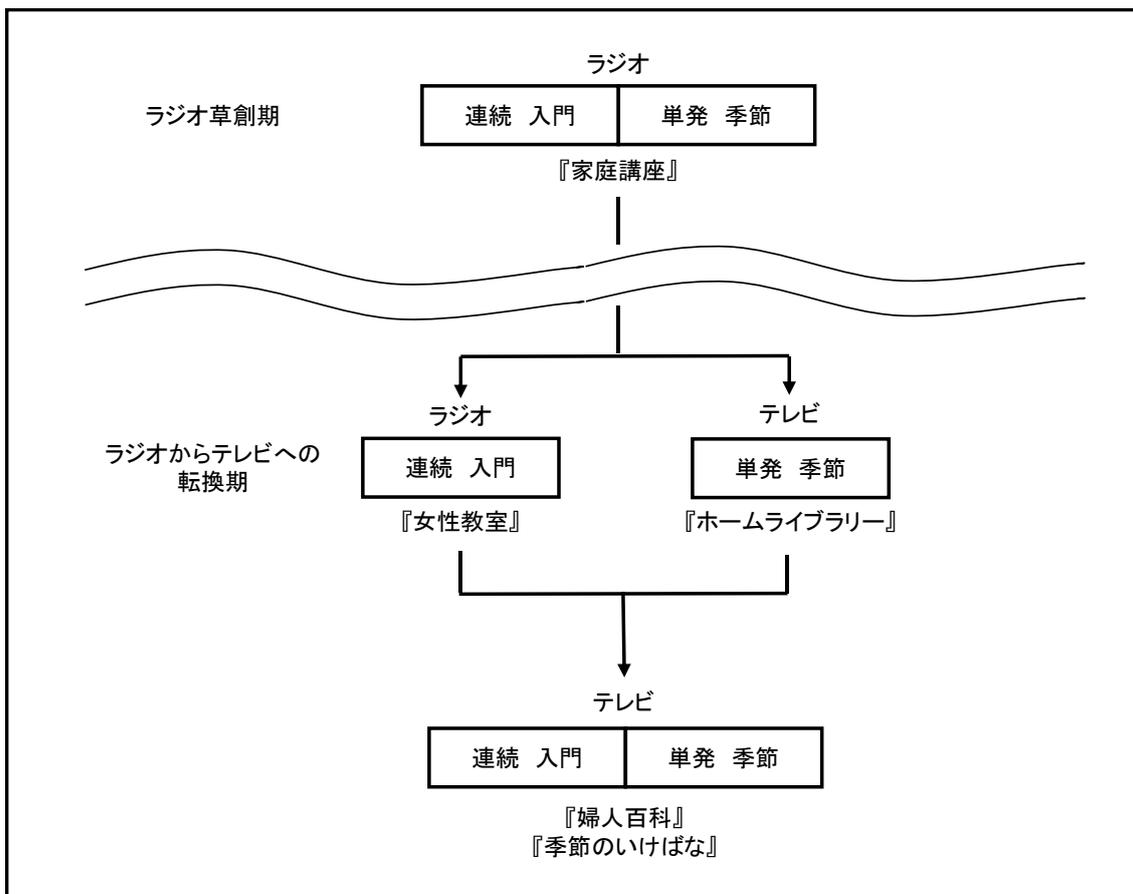


図 19 ラジオ草創期およびラジオからテレビへの転換期での女性向け教養番組における「花」を主題とする講座の類型再統合

以上、本項では、ラジオからテレビへの転換期での女性向け教養番組における「花」を主題とする講座について、そのメディアごとの編成の特徴と変遷について、講座の内容と類型の観点から考察した。

その結果、ラジオからテレビへの転換期の前期においては、例外はあるものの、テレビでは季節性を主旨とした単発型講座が主に編成されたのに対し、ラジオでは入門性を主旨とした連続型講座が編成されたこと、したがって、ラジオ草創期における「花」を主題とする講座が併せ持っていた入門性と季節性は、ラジオとテレビとに分化したこと、そうした内容のメディアごとの特徴づけは組織的に実施されていたこと、そして、後期からテレビにも大規模な連続型講座が編成され、最終的に季節性と入門性を統合した内容を有する独立した放送枠がテレビに編成されることによって、分化は解消し、ラジオでの「花」を主題とする講座は終焉を迎えたこと、を示した。

### 4.2.3 テキストの機能

ラジオ草創期においては、連続型の入門性を主旨とする講座に対してテキストが発行され、映像が無いというラジオの特性を補う働きをしていた。では、ラジオとテレビが併存し、類型の分離と統合が生じた、ラジオからテレビへの転換期においては、テキストはどのような機能を果たしていたのだろうか。

図 20 は、ラジオからテレビへの転換期における女性向け教養番組について、テキスト発行の有無を年度別に示したものである。(図中、薄墨は番組の放送がある年度、黒線はテキストが発行された年度、黒丸はテキストの発行開始および終了時点を表す。矢印はその年度以降もテキストが発行されていることを示す。1964年度の破線は、テレビでのテキストがラジオでのテキストの付録のような形で発行されていたことを示す。)

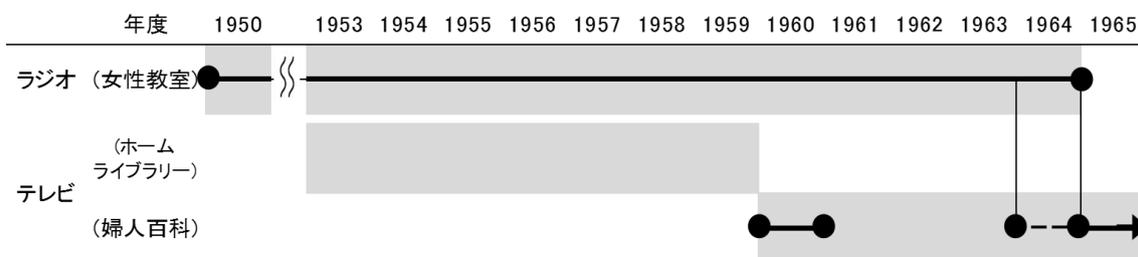


図 20 ラジオからテレビへの転換期における女性向け教養番組のテキスト発行年度

期間中、ラジオでは一貫してテキストが発行されているのに対して、テレビにおけるテキストの発行は間歇的であり、1960年度と1964年度（およびそれ以降）しか無い。

もともと、ラジオの女性向け教養番組において、テキストは映像が無いというラジオの欠陥を補うものとして重視され、特に、造形芸術としての「花」をラジオで講義するにあたっては、重要な役割を果たしてきた。第2章に記したとおり、1925年11月に初めてラジオで「花」を主題とする講座が放送された際、既にテキストが発行されていたのを始め、1929年に勅使河原蒼風が発行したテキストには、豊富な図案と写真が掲載され、このテキストは本格的な指導書として「後に草月流花型法として完成されるものの出発であり、基礎」<sup>289</sup>ともなっている。また、第3章に記したとおり、1955年に、勅使河原蒼風によるテキスト「暮しを豊かにするいけばな」が発行され、その放送は「平易な話術と美麗懇切なテキストと相俟って、これまでにない聴取率を記録」<sup>290</sup>するなど、テキストはラジオの女性向け教養番組に大きく寄与する存在だった。

<sup>289</sup> 草月出版編集部編著『創造の森 草月 1927-1980』草月出版、1981、p.30

<sup>290</sup> 日本放送協会編『NHK年鑑 1956』日本放送出版協会、1955、p.87

一方、テレビにおいては、テレビ放送開始と共に始まった『ホーム・ライブラリー』では、テキストは発行されていない。

ラジオ草創期の女性向け教養番組における「花」を主題とする講座は、季節性を主旨とする単発型講座と入門性を主旨とする連続型講座に二分されていた。そして、テキストが発行されたのは、入門性を主旨とする連続型講座のほうであった。ラジオからテレビへの転換期において、当初、ラジオは入門性を主旨とする連続型講座、テレビは季節性を主旨とする単発型講座に分化していたことから、ラジオでテキストが発行され、テレビでは発行されなかったことは当然であるともいえる。

ところが、1960年度には、テレビ『婦人百科』において、一時的にテキストが発行された。また、これに先立つ1956年度において、『ホーム・ライブラリー』の内容の一部をラジオの『女性教室』と同じテーマにして放送することをおこない、「テキストによって、放送だけでは、メモをとりきれないときや、放送の内容のもっと広い応用など、相互の長所を生かして、視聴者からよこばれた。」<sup>291</sup>ということがあった。

フィスクは、テレビの特徴は「同時性」にあるとしている<sup>292</sup>。この同時性という特徴がもたらす結果として、バーワイズとエーレンバーグ（1991）は、テレビでは「提示できる言語的情報のペースが、とりわけその連続的な順序が、すこぶる融通のきかないものになっている」<sup>293</sup>と述べ、印刷物のように、「とばして読んだり、立ち止まったり、読み直したりすることが」<sup>294</sup>可能ではないとしている。米倉（2013）は、放送メディアの特性である「『時間依存性』『非選択性』といった論点は、本格的なテレビ時代に入っても繰り返し指摘され」<sup>295</sup>たと述べている。ラジオとは違って映像を有するテレビでも、印刷物が有する随時参照性はラジオ同様に有していない。テレビでも徐々にテキストが発行され始めたことは、ラジオ同様、テレビでもテキストが有用であることが明らかになってきた結果であろう。

---

<sup>291</sup> 日本放送協会編『NHK年鑑1958』日本放送出版協会、1957、p.220

<sup>292</sup> ジョン・フィスク（Fiske, John）[著] 伊藤守訳『テレビジョンカルチャー ポピュラー文化の政治学』梓出版社、1996、p.36

<sup>293</sup> パトリック・バーワイズ、アンドルー・エーレンバーグ（Barwise, Patrick & Ehrenberg, A. S. C.）[著] / 田中義久、伊藤守、小林直毅訳『テレビ視聴の構造 多メディア時代の「受け手」像』法政大学出版局、1991、p.223

<sup>294</sup> パトリック・バーワイズ、アンドルー・エーレンバーグ（Barwise, Patrick & Ehrenberg, A. S. C.）[著] / 田中義久、伊藤守、小林直毅訳『テレビ視聴の構造 多メディア時代の「受け手」像』法政大学出版局、1991、p.223

<sup>295</sup> 米倉律「初期“テレビ論”を再読する 【第1回】ジャーナリズム論 ～ラジオジャーナリズムからテレビジャーナリズムへ～」『放送研究と調査』2013年8月号、p.10

特に、1959年度にテレビで連続13回という大型の連続型講座が出現し、ラジオと同様の入門性を主旨とするようになると、テレビでのテキストの必要性はより明確になったと考えられる。

この『婦人百科』におけるテキストの発行は、1960年度のみで打ち切られてしまう。ところが、テキストが無いことはテレビの視聴者にとって不便なものだった。随時参照性を欠いたテレビにおいては、講座の受講に際してテキストは有用なものだったからである。

結局、「視聴者の希望が多いため、39年度<sup>296</sup>からラジオ『女性教室』のテキストに付録のような形で」<sup>297</sup>テレビでのテキスト発行が再開される<sup>298</sup>。図20に破線で示した部分がそれである。この年度には、一つのテキストにラジオとテレビの二つの番組が共存するという、放送番組のテキストとしては変則的な発行形態<sup>299</sup>が出現することになった。

こうした変則的な措置も、しかし、1年しか続かず、翌1965年度にはテレビ『婦人百科』のテキストが独立して発行されることになる。「花」は、その一部に「趣味のコーナー」として毎号掲載されることになった。ラジオの女性向け教養番組『女性教室』は、前年度末をもって終了し、15年に渡る歴史の幕を閉じた。

以上、本項では、女性向け教養番組におけるメディアごとの特徴について、テキストの観点から分析し、考察した。

その結果、当初、テレビでの女性向け教養番組にはテキストは発行されていなかったが、その有用性が明らかになった結果、一時的にテレビでもテキストが発行されたが、1年度のみで中止されたこと、そして、結局、視聴者の要望もあって、テレビでのテキスト発行再開に至ると共に、ラジオでの女性向け教養番組『女性教室』は終了したことを示した。

#### 4.2.4 出演者の構成

転換期におけるラジオおよびテレビにおいて、番組の出演者、すなわち、講師については、メディアごとにどのような特徴があったか。

まず、ラジオでの「花」を主題とする講座における講師ごとの出演回数を降順に列挙した結果を表7に示す。

---

<sup>296</sup> 原文ママ。昭和年号表記。

<sup>297</sup> 日本放送協会編『NHK年鑑'65』日本放送出版協会、1965, p.149

<sup>298</sup> ただし、「花」を主題とする講座はこの年度には『季節のいけばな』として独立して編成されていたため、テキストには収録されていない。

<sup>299</sup> 放送番組のテキストは通常、一つの番組（放送枠）ごとに発行される。たとえば同じ英語講座でもラジオとテレビではテキストは別である。

表 7 転換期のラジオでの「花」を主題とする講座における講師ごとの出演回数

講師	出演回数	流派	性別
勅使河原蒼風	33	草月流	男
小原豊雲	26	小原流	男
勅使河原和風	16	和風会	男
石山文恵	10	池坊	女
池坊専永	7	池坊	男
大野典子	6	国際いけばな協会	女
勅使河原霞	2	草月流	女

続いて、テレビでの「花」を主題とする講座における講師ごとの出演回数を降順に列挙した結果を表 8 に示す。

表 8 転換期のテレビでの「花」を主題とする講座における講師ごとの出演回数

講師	出演回数	流派	性別
勅使河原霞	34	草月流	女
勅使河原和風	29	和風会	男
安達瞳子	24	安達式	女
池田理英	22	古流松藤会 <sup>300</sup>	女
小原豊雲	17	小原流	男
池坊専永	6	池坊	男
押川如水	5	松風流	女
佐藤秀抱	5	秀抱流	男
安達潮花	5	安達式	男
藤原幽竹	5	池坊	男
山中阿屋子	3	草月流	女
大野典子	3	国際いけばな協会	女
中山文甫	3	未生流中山文甫会	男
河村萬葉庵	2	萬葉流	男
中山尚子	2	未生流中山文甫会	女
勅使河原蒼風	2	草月流	男
大井ミノブ	2	研究者	女
小立千蓉 <sup>301</sup>	1	(未詳)	(未詳)

<sup>300</sup> 『番組確定表』では、肩書に古流家元と表記されている場合がある。

<sup>301</sup> 小立千蓉は、『番組確定表』に流派や肩書の記載が無い。

臼井桂鳳	1	桂鳳流	(未詳)
工藤和彦	1	小原流	男
大槻秀楓 <sup>302</sup>	1	(未詳)	(未詳)
長谷川菊洲	1	嵯峨流・未生御流	男
未生院翁甫	1	未生流	男
安達武子	1	安達式	女

1人の講師による講座の最多回数は、ラジオで33、テレビで34、次点は、ラジオで26、テレビで29と上位での回数に大きな差は認められない。

しかし、表の下位においては大きな違いがある。講座回数が1桁の者が、ラジオでは3人に対しテレビでは19人、講座回数5回以下では、ラジオ1人、テレビ18人、さらに講座回数が1回しか無い者は、ラジオ0人に対しテレビ7人と、ラジオとテレビの間で下位にいくほど差が開いている。

1回ないし2回しか出演が無い講師が多数登場していることが、転換期におけるテレビでの「花」を主題とする講座の特徴であり、テレビではラジオよりも講師の顔ぶれの細分化が生じていたことになる。

また、テレビでは、戦後、「日本花道展<sup>303</sup>、通称『日花展』を通じ、(中略)『彗星のごとく現れた』作家」<sup>304</sup>である河村萬葉庵や「日花展で賞を受賞した作家で、その後の前衛いけばな運動の中で活躍」<sup>305</sup>した工藤和彦、そして、「前衛いけばな運動の中で生花流派としては考えられないほどの大胆な造形作品を発表した」<sup>306</sup>池田理英といった作家が講師として登用されている。

また、テレビでの「花」を主題とする講座には、勅使河原霞、安達瞳子、池田理英など女性講師による講座が多い。ラジオでの1人の講師による最小講座回数は2回であるから、テレビでの末端値である1回しか講座を持たなかった者を除外して、2回以上講座を持った女性講師の総出演数を算出すると、ラジオでは18回で男女全体の18%であるのに対し、テレビでは87回で男女全体の51%<sup>307</sup>と過半を超える。また、2回以上講座を持った女性講師の人数では、ラジオでは男女合計7人のうち2人であるのに対し、テレビでは男女合計17人のうち7人と、ラジオよりもテレビのほうが、人数が多く割合も大きい。女性講

<sup>302</sup> 大槻秀楓は、番組確定表に流派や肩書の記載が無い。

<sup>303</sup> 文部大臣招待の「日本花道展」とコンクール制による「日本花道展」があった(工藤昌伸『日本いけばな文化史 四 前衛いけばなと戦後文化』同朋舎出版, 1994, p.51)。

<sup>304</sup> 工藤昌伸『日本いけばな文化史 四 前衛いけばなと戦後文化』同朋舎出版, 1994, p.51

<sup>305</sup> 工藤昌伸『日本いけばな文化史 四 前衛いけばなと戦後文化』同朋舎出版, 1994, p.53

<sup>306</sup> 工藤昌伸『日本いけばな文化史 四 前衛いけばなと戦後文化』同朋舎出版, 1994, p.102

<sup>307</sup> 2回以上講座を担当した出演者の講座回数合計値169で除した。

師の数が多く割合も大きいことは、テレビにおける「花」を主題とする講座が持つ著しい特徴である。

1960年におこなわれた国民生活時間調査の結果を掲載した「秋季属性別生活時間数表」によれば、調査時点<sup>308</sup>でのテレビでの「花」を主題とする講座の放送時間帯（放送枠は『婦人百科』）である平日午前10時30分における自宅でのテレビ視聴は、男性0.3%に対して女性0.6%だった<sup>309</sup>。また、同じくラジオでの「花」を主題とする講座の放送時間帯（放送枠は『女性教室』<sup>310</sup>）である平日午前9時30分における自宅でのラジオ聴取は、男性2.1%に対して女性4.6%だった<sup>311</sup>。いずれも女性が男性に対して2倍以上の結果となっており、ラジオとテレビで男女比に大きな違いは無い。それにも関わらず、テレビのほうが女性講師の数が多く割合も大きい。当該期における「花」を主題とする講座の放送枠だった『女性教室』、『婦人百科』は共に放送枠としての番組名に「女性」、「婦人」が冠せられていること、また、当時の記録<sup>312</sup>では「婦人番組」に分類されていることから、送り手の側が対象として想定した視聴者層がどちらも女性であることは明らかであるが、テレビでは講師の姿そのものが映しだされるだけに、視聴者層の親近感をより高めるために視聴者層と同性の講師が起用されたと考えられる。テレビでは、映像を有するという特性に呼応した出演者が起用されたことになる。

第2章で示したように、新しい作家の登用については、ラジオ草創期の「花」を主題とする講座においても、流派を興して間もない勅使河原蒼風が講師として抜擢された事例があった。蒼風は後に「これが私が世に紹介される端緒であった。」<sup>313</sup>と回想している。この勅使河原蒼風を始めとして、戦前のラジオにおいて登用された講師の多くは、「自由花、盛花などの近代流派を代表する花道家たち」<sup>314</sup>で、放送は彼らが世に出るきっかけとなったばかりでなく、「放送に出演した花道家たちにとっては、流派のいけばなと家元の存在を大衆にアピールする機会」<sup>315</sup>ともなったのである。ラジオ草創期における「花」を主題とす

<sup>308</sup> 調査がおこなわれたのは、1960年10月である。

<sup>309</sup> 日本放送協会放送文化研究所編『国民生活時間調査』日本放送出版協会、1962、p.37 および p.43

<sup>310</sup> 『主婦の時間』の1コーナーに組み込まれてはいたが、『女性教室』としての放送時間帯は、原則として9時30分-9時45分（流動あり）とされていた。

<sup>311</sup> 日本放送協会放送文化研究所編『国民生活時間調査』日本放送出版協会、1962、p.37 および p.43

<sup>312</sup> 日本放送協会編『NHK年鑑1962』日本放送出版協会、1961他、各年度の年鑑を参照。

<sup>313</sup> 日本経済新聞社編『私の履歴書 文化人6 勅使河原蒼風』日本経済新聞社、1983、p.301

<sup>314</sup> 工藤昌伸『日本いけばな文化史 三 近代いけばなの確立』同朋舎出版、1993、p.105

<sup>315</sup> 工藤昌伸『日本いけばな文化史 三 近代いけばなの確立』同朋舎出版、1993、p.105

る講座が、草月流を始め、特に都市での新しい生活様式に適合した新興流派の発展に大きく寄与したことは、放送メディアによる文化伝播のめざましい例として特筆すべき事象だった。

では、ラジオからテレビへの転換期における流派は、どのような顔ぶれになっていたのだろうか。

ラジオにおける「花」を主題とする講座での各流派について、出演総数に対する占有率は図 21 のとおりである。

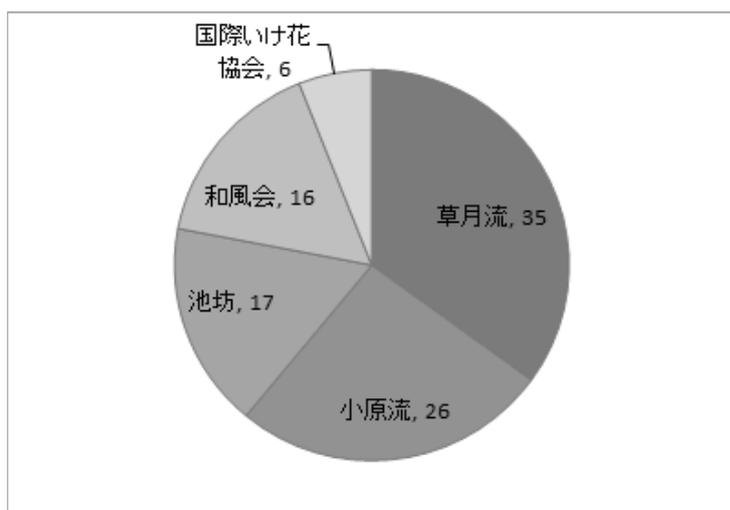


図 21 転換期のラジオにおける「花」を主題とする講座での流派と占有率

続いて、テレビにおける「花」を主題とする講座での各流派について、出演総数に対する占有率は図 22 のとおりである。

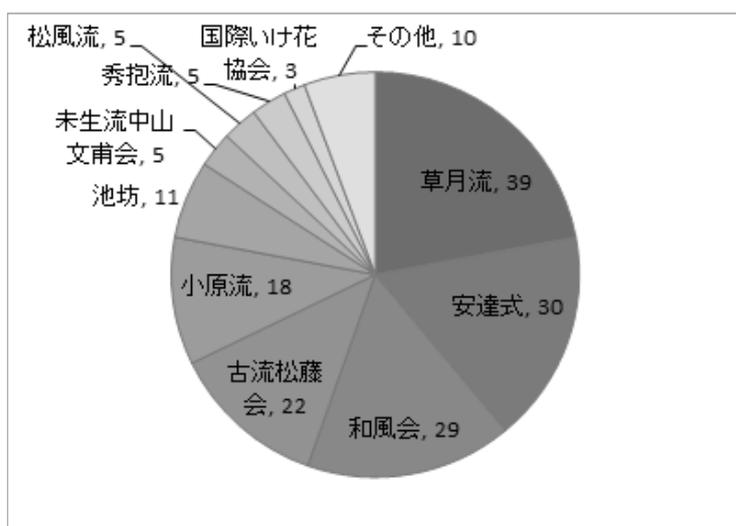


図 22 転換期のテレビにおける「花」を主題とする講座での流派と占有率

ラジオでは、流派は五つしかない。一方、テレビでは流派は講師同様に細分化している。とはいえ、2桁以上の占有率を持つ上位流派の顔ぶれは、ラジオでは、草月流、小原流、池坊、和風会であり、テレビではこれに安達式と古流松藤会が加わるのみで、ほとんど変わっていない。このうち、草月流、小原流、池坊は、いわゆる「三大流派」であり、それがラジオからテレビへと転換しても、なお同様の占有率を得ているということは、ラジオ草創期に最大の占有率を得ていたのが（当時の）新興流派である草月流だったことと比較すると大きな違いである。また、安達式、古流松藤会はラジオでは占有率が高くなかったが、いずれもテレビが登場する前から著名な流派だったことには変わりはない。ラジオが新しいメディアとして登場した時には、そのメディアとしての力が新興流派の発展に寄与したが、テレビという新しいメディアにおいては、既存の流派の占有率は変わらず、新興勢力が既存勢力を覆すまでには至らなかったことになる。

なお、出演者についても、「前衛」作家が起用されているとはいっても、家元制の元でなんらかの流派に属する華道家たちであり、中川幸夫のような家元制に属さない（流派を脱した）芸術家は、この後のテレビ発展期を含めて、「花」を主題とする講座には出演していない<sup>316</sup>。女性向け教養番組に出演した「前衛」的な作風の作家たちも、池田理英の出演時における副題が「夏のお花 グラジオラスのいけ方」および「夏のお花 ダリヤのいけ方」（連続2回）、河村萬葉庵の出演時における副題が「野の花を生ける」、工藤和彦の出演時における副題が「すずしいいけ花」などとなっていることから、放送では家庭向けの平易な「花」を講義していたと推定される。

ラジオからテレビへの転換期において、ラジオ、テレビ共に、流派別占有率順位の1位に位置しているのは、草月流である。草月流が占有率順位の1位であることは、草創期から占領期にかけてのラジオにおいても一貫しており、草月流は、放送による「花」を主題とする講座の主役であったといえる。

ところが、同じ草月流ではあるが、その講師は、ラジオとテレビとで完全に入れ替わっている。すなわち、ラジオでは、勅使河原蒼風が33回で最上位に位置しているのに対し、テレビでは蒼風の娘である勅使河原霞が34回で同じく最上位に位置しているのである。勅使河原蒼風はテレビでは2回、霞はラジオでは2回と、二つのメディアにおける出演の度合いはほぼ対称になっている。

同様の現象は、安達式でも生じている。安達式は、この時期のラジオにおいては講座が無いが、それ以前の戦前から戦後にかけてのラジオでは、計5回「花」を主題とする講座を担当しており、講師はいずれの場合も安達潮花だった。と

<sup>316</sup> 中川幸夫は、1990年代後半以降の美術番組やドキュメンタリー番組には出演している。

ころが、テレビでは、潮花の娘である安達瞳子が 24 回で 3 位に位置しているのに対し、潮花は 5 回にしかすぎない。ここでも、父と娘の逆転が生じていることになる。

初めてテレビでの「花」を主題とする講座を担当した時、勅使河原霞は 21 才<sup>317</sup>、安達瞳子は 19 才<sup>318</sup>だった。共に、実力はあるとはいえ、その流派の家元である父が存命であり、まだ流派を継いでいないのに若くして起用されたのは抜擢といえる<sup>319</sup>だろう。

テレビでの女性向け教養番組への出演を重ねた後、勅使河原霞は 1961 年の『紅白歌合戦』に、安達瞳子は 1965 年の『紅白歌合戦』に、それぞれ審査委員として出演<sup>320</sup>しており、国民的人気を集める存在となっていたことがうかがえる。

勅使河原霞が初めてテレビの女性向け教養番組に出演してから 10 年ほど後の 1963 年 11 月、雑誌『女性自身』が「世論調査/美しい人」と題する読者投票の結果を掲載<sup>321</sup>した。勅使河原霞は、投票総数 16614 票のこの投票で 814 票を獲得し 8 位となったが、10 位までの他の顔ぶれは、美智子妃を除き、新珠三千代、山本富士子、高峰秀子などすべて女優で占められていた。勅使河原霞は、女優に伍する存在となっていたことになる。

安達瞳子もまた、後にクイズ番組の回答者として定期的に出演する<sup>322</sup>など、華道家にとどまらない活躍をみせるようになる。

勅使河原霞と安達瞳子はテレビ出演において、従来 of 華道家の枠を超えた人気を有することとなったのである。その要因には、「いけばなブーム」だけでなく、二人がテレビに出演することによって多くの人に知られる存在となったこともあると考えられる。

テレビに映像があるということは、単に造形芸術としての「花」が映像をもって伝えられるようになっただけでなかった。テレビには映像があるために、

---

<sup>317</sup> 勅使河原霞は、1932 年 10 月 20 日生まれ（上田正昭ほか監修『日本人名大辞典』講談社、2001、p.1257）。テレビでの「花」を主題とする講座への初出演は 1954 年 3 月 2 日である。

<sup>318</sup> 安達瞳子は 1936 年 6 月 22 日生まれ（上田正昭ほか監修『日本人名大辞典』講談社、2001、p.56）。テレビでの「花」を主題とする講座への初出演は 1956 年 3 月 1 日である。

<sup>319</sup> 二人は、「花」を主題とする講座だけでなく、当時開発中だったカラーテレビの実験放送にも複数回出演（勅使河原霞は、1958 年 9 月 11 日および 1959 年 8 月 24 日、安達瞳子は、1959 年 5 月 28 日および 1959 年 10 月 20 日）しており、いわゆる「テレビ写り」も評価されていたと考えられる。

<sup>320</sup> 『紅白歌合戦』出演までの期間における 2 人のテレビでの「花」を主題とする講座への出演回数は、勅使河原霞が 23、安達瞳子が 24 である。

<sup>321</sup> 『女性自身』1963 年 11 月 18 日号、pp.46-49

<sup>322</sup> 安達瞳子は 1970 年代にクイズ番組「連想ゲーム」の回答者を務めた。

作品だけでなくその作者も映しだされることになり、作者にも映像メディアであるテレビに適した条件が自ずと求められるようになった。

テレビという新しいメディアが登場した時に、新しい出演者が登用されたが、それは新しいメディアの特性に即した出演者であったことは、テレビでの「花」を主題とする講座における、「前衛」作家の登用、女性華道家のラジオに比した数の多さと割合の大きさ、そして、勅使河原霞と安達瞳子の抜擢といった事項に象徴的に現れているといえる。

### 4.3 まとめ

本章では、1953年2月1日から1965年4月3日（放送年度での1964年度末）までをラジオからテレビへの転換期と規定した上で、放送史の諸資料によって同期間の女性向け教養番組の特徴を示した。そして、『番組確定表』の調査に基づいて、同期間に放送された女性向け教養番組における、ラジオとテレビそれぞれの「花」を主題とする講座について、放送本数の年度ごと推移、放送（講座）の連続性、副題の記述、テキストとの連携、出演者の構成といった観点から分析した。

その結果を以下に示す。

- ・ラジオからテレビへの転換期において、ラジオの女性向け教養番組とテレビの女性向け教養番組は、共に家庭にいる女性を対象聴取者および視聴者層としていた。

- ・女性向け教養番組における「花」を主題とする講座の放送枠は、ラジオでは『女性教室』、テレビでは『ホーム・ライブラリー』、『婦人百科』、『季節のいけばな』だったが、放送時間帯は「棲み分け」が図られていた。

- ・テレビの普及が進むにつれ、ラジオは「ながら聴取」が主流となり、テキストの参照が必要であるような講座は編成されにくくなった。

- ・「花」を主題とする講座の内容と類型は、転換期の前期においては、テレビでは、映像を生かすことができる「季節性」を主旨とした単発型の講座が主であり、ラジオでは、「入門性」を主旨とした大規模な連続型の講座が主だった。後期には、徐々にテレビにも連続型の入門性を主旨とする講座が編成され、最終的に季節性と入門性を兼ね備えた独立した放送枠がテレビに編成されることによって、ラジオでの「花」を主題とする講座は終焉を迎えた。

- ・テキストは、当初、ラジオのみにおいて発行されていたが、その有用性がテレビでも明らかになった結果、一時はテレビでもテキストを発行した。しかし、ラジオからテレビへの転換が露わになった時点で、テレビではテキストの発行を中止するという差別化が生じた。結局、視聴者の要望もあって、テレビ

でのテキストは再び、発行されるに至った。ラジオの「花」を主題とする講座の放送枠だった『女性教室』は終了した。

・出演者の構成は、テレビではその特性に即した女性の出演が著しく多く、ラジオとの相違が転換期を通じて生じていた。たとえば、草月流ではラジオに父の勅使河原蒼風、テレビに娘の勅使河原霞、安達式ではラジオに父の安達潮花、テレビに娘の安達瞳子という対照があった。映像を有するテレビでは女性の登用による女性視聴者層への訴求があったと考えられる。

本章における調査および分析と考察の結果から、ラジオからテレビへの転換期での女性向け教養番組と「花」を主題とする講座の特徴は、次の諸点にあるといえる。すなわち、放送時間帯はラジオとテレビとで棲み分けが図られた上で、(1) 女性向け教養番組における「花」を主題とする講座の二つの類型のうち、入門性を主旨とする連続型講座は、テキストと連携していたラジオに、季節性を主旨とする単発型講座は、映像を有するため四季折々の花を視覚的に伝えることができるテレビにと、大まかに分化したこと、(2) その後、ラジオは「ながら聴取」が主流となり、テキストを用いる講座は編成されにくくなる一方、テレビにも入門性を主旨とする連続型講座が編成されるようになり、映像を有するテレビでもテキストの随時参照性が求められ、出版という異なるメディアとの連携が有効であることが明らかになったこと、(3) テレビでは、女性出演者（講師）が登用され、講座の内容だけでなく講師の映像も重要な要素となることを示したことである。

## 第 5 章 テレビ発展期

## 5.1 テレビ発展期の女性向け教養番組

日本におけるテレビ放送は、1953年2月1日の放送開始から当初5年ほどは普及が低迷しながらも1959年度あたりから急速に発展し、高度成長期を通じて視聴時間を拡大しながら、1970年代半ばに視聴時間のピークを記録した。そして、1981年ごろまでは「漸減しながらではあるが、比較的安定した状態」<sup>323</sup>を保った。このことによって、本研究においては、1953年2月1日から1981年度末までを「テレビ発展期」と規定する。この期のうち1953年2月1日から1964年度末までは「ラジオからテレビへの転換期」と重複するが、テレビ放送開始よりの変化を通観するため、この期に含めて扱う。

松下(1986)は、「六十年代(中略)社会教育行政に衝撃となったのはテレビの普及である。社会教育行政によって公民館に<集める>時代から、テレビによって家庭に<配る>時代へと移行したのである」<sup>324</sup>と述べている。

そうしたテレビの衝撃が顕著となった時期において、家庭にいる女性は、テレビの「最大の“おとくいさま”」<sup>325</sup>だった。例えば、テレビが家庭に浸透しつつある時期の1958年には、「だいたい毎日のようにテレビをみる主婦」は広島で90%、札幌で95%に達したという記録<sup>326</sup>が残されている。こうした女性視聴者層に向けて、テレビ発展期における女性向け教養番組は、数多く新設された後、さまざまな分化と消長を経ていく。

テレビ放送開始当初の1953年2月には、「テレビ婦人向け番組は『ホームライブラリー』(月～金)の一本だけ」であり、この状態は1957年10月まで続いた<sup>327</sup>。この『ホーム・ライブラリー』は、「家庭婦人を対象とし、家庭教育・時事解説・芸術鑑賞など一般教養番組のほか、美容・料理・洋裁・編み物・生花・茶道・作法・育児などの実用番組を編成」<sup>328</sup>した放送枠だった。この記述には『ホーム・ライブラリー』は、ラジオ草創期の女性向け教養番組群における、「一般教養」(『婦人講座』)と「実用」(『家庭講座』)に加え「料理」(『料理献立』)までをも包含した放送枠だったことが示されている。なお、ここでも「一般教養」とは、『婦人講座』におけるそれと同様、「知識の啓発」を指すものとみなすべきであろう。

<sup>323</sup> 戸村栄子「データにみる80年代のテレビ視聴動向 その1 テレビ視聴の変化」『放送研究と調査』1991年6月号, p.67

<sup>324</sup> 松下圭一『社会教育の終焉』筑摩書房, 1986, p.239

<sup>325</sup> 藤原功達「家庭婦人はテレビ・ラジオをどのようにみききしているか」『文研月報』1965年12月号, p.14

<sup>326</sup> 日本放送協会放送史編修室編『日本放送史 下』日本放送出版協会, 1965, p.787

<sup>327</sup> 日本放送協会放送史編修室編『日本放送史 下』日本放送出版協会, 1965, p.349

<sup>328</sup> 日本放送協会放送史編修室編『日本放送史 下』日本放送出版協会, 1965, p.459

この『ホーム・ライブラリー』では、放送開始の翌1954年にNHK美容体操のコーナーが設けられた後、「服飾・美容・生花・茶道などを『きょうも美しく』（昭三一～三二）に一括」<sup>329</sup>して編成していた。「花」（生花）や「茶」（茶道）といった日本文化が、美容と「一括」されている点に注目する必要がある。ラジオ放送開始時期に『家庭講座』のテキストが制作された時、「花」は、和裁、洋裁、手芸といった生活の糧となる技術と一括りにされていた。一方、テレビ放送開始時期では、「花」は実用の範疇においてではあるが、美容と共に『きょうも美しく』のコーナーに編成され、生計のための技術ではなく、「暮らしを豊かにする」ための技術として扱われるようになったのである。

その後、1957年11月には、「開局以来『ホーム・ライブラリー』の一部」<sup>330</sup>だった料理番組が『きょうの料理』として独立<sup>331</sup>する。また、同年同月には、「季節的な話題をトップに」<sup>332</sup>おく『婦人こどもグラフ』<sup>333</sup>も新設された。

さらに、1959年には、「テレビ受信者の急激な増加により、（中略）四月の改定では（中略）従来零時台にあった『ホーム・ライブラリー』を廃止し、新たに午後一時二〇分から二〇分間の『婦人百科』を設けて婦人層の要望にこたえ」<sup>334</sup>たのに続いて、「同年八月、東京放送会館新館に四つのスタジオが完成したことにより大幅な時間増が可能となり（中略）十月に放送時刻の改定をおこない、一日一時間の時間増がおこなわれた。改定の重点は、昼間の家庭婦人向け番組の強化と、『お知らせ』の時間を新增設してNHKの番組・事業のPRに新生面を開いたことである。すなわち、『婦人百科』の実用番組的な面と教養番組としての要素を、おのおの別な番組として独立させ、『婦人百科』は午前に移して美容体操をも含めた実用番組とし、午後は『テレビ婦人の時間』として教養的なものとした」<sup>335</sup>結果、「婦人向け番組は（中略）、実用番組としての要素と、教養番組としての要素を分離して、おのおの別の番組として独立させることに」<sup>336</sup>なった。女性向け教養番組では、ラジオ草創期において、実用情報の提供と文化の伝播を旨とする『家庭講座』と、社会に関する問題の啓蒙を旨とする『婦

<sup>329</sup> 日本放送協会放送史編修室編『日本放送史 下』日本放送出版協会、1965, p.523

<sup>330</sup> 日本放送協会放送史編修室編『日本放送史 下』日本放送出版協会、1965, p.521

<sup>331</sup> 第2章2.1節の『婦選』記事の引用で示したとおり、料理番組はラジオ草創期においても『家庭講座』や『婦人講座』とは別の独立した放送枠である『朝の料理』として編成されていた。このことから、本研究においては、『きょうの料理』など実用情報に特化して独立した料理番組は、日本文化の伝播を旨とする女性向け教養番組の系統には含めず、別の系統として扱い、詳細な分析の対象とはしない。

<sup>332</sup> 日本放送協会編『NHK年鑑1959』日本放送出版協会、1958, p.165

<sup>333</sup> 翌1958年度には『婦人グラフ』と改称され、1959年度まで継続。

<sup>334</sup> 日本放送協会放送史編修室編『日本放送史 下』日本放送出版協会、1965, p.470

<sup>335</sup> 日本放送協会放送史編修室編『日本放送史 下』日本放送出版協会、1965, p.470

<sup>336</sup> 日本放送協会放送史編修室編『日本放送史 下』日本放送出版協会、1965, p.519

人講座』が並立（草創期の半ばまではこれに『家庭大学講座』を加えた3系統が鼎立）し、ラジオ占領期において、やはり実用情報の提供や文化の伝播を旨とする『主婦日記』や『女性教室』と政治的な啓蒙を旨とする『婦人の時間』が並立していた。テレビ発展期の放送枠においても、それと同様の2系統体制が構築されたことになる。

なお、ここでいわれている「教養番組としての要素」には、『テレビ婦人の時間』という放送枠名が示すように、ラジオ占領期の『婦人の時間』が主眼としていた「政治的な啓蒙」が含まれていることに留意する必要がある。

1959年10月の改定では、新造スタジオ群の稼働にともなう時間増に対応して、『婦人百科』と『テレビ婦人の時間』に加え、「午後一時四〇分から二時に、」<sup>337</sup>『おかあさんといっしょ』など、「午後のひとときのいこいとなるような軽いムードの娯楽番組を編成」<sup>338</sup>した結果、『みんなで歌を』、『話の四つかど』といった番組群が新設された。

『日本放送史』は、このことを「テレビの婦人向け番組は、ようやく受信機が家庭への浸透速度を一段と速めるなかで、家庭婦人の教養を高めること、みて楽しくすぐ役に立つことを二つの柱として、『ホーム・ライブラリー』を中心に年々拡充してきたが、昭和三十四年同番組の終了とともに飛躍的に発展することになった」<sup>339</sup>と評している。

これらの番組（放送枠）群のうち、『おかあさんといっしょ』は「学齢前の家庭にいる幼児、特に2歳～4歳の幼い子どもと母親を対象とした、テレビ開局以来初めての試みとして組んだ番組」<sup>340</sup>であり、「人間形成の中で非常に大切なこの時期に豊かな情操と感受性を養うことを目的とし、身につけたいよい習慣を楽しみながらの楽しいミュージカルのうちに巧みに織り込んだのが大きな特徴」<sup>341</sup>だった。『みんなで歌を』は『「家庭の主婦に明るい歌声を・・・」というのがねらい」<sup>342</sup>で『歌』を、素朴な『生活の声』と考える立場から、家庭的な楽しい番組にすることを<sup>343</sup>ねらった番組だった。『話の四つかど』は、「家庭婦人を対象とする教養的なバラエティ番組」<sup>344</sup>で「内容はエチケットを扱ったコント、身の周りに起りがちなトラブルについて司会者がユーモアにあふれた解決策を示す身の上相談」

<sup>337</sup> 日本放送協会放送史編修室編『日本放送史 下』日本放送出版協会、1965、p.470

<sup>338</sup> 日本放送協会放送史編修室編『日本放送史 下』日本放送出版協会、1965、p.470

<sup>339</sup> 日本放送協会放送史編修室編『日本放送史 下』日本放送出版協会、1965、p.519

<sup>340</sup> 日本放送協会編『NHK年鑑1961』日本放送出版協会、1960、p.210

<sup>341</sup> 日本放送協会編『NHK年鑑1961』日本放送出版協会、1960、p.210

<sup>342</sup> 日本放送協会編『NHK年鑑1961』日本放送出版協会、1960、p.210

<sup>343</sup> 日本放送協会編『NHK年鑑1961』日本放送出版協会、1960、p.210

<sup>344</sup> 日本放送協会編『NHK年鑑1961』日本放送出版協会、1960、p.210

345などで構成されていた。

『日本放送史』は、これらの番組を「多分に娯楽的な番組」と形容しており<sup>346</sup>、女性向け教養番組群は、『婦人百科』と『テレビ婦人の時間』の2系統からさらに、「多分に娯楽的な番組」群を加えた3系統に分化したことになる。その様相を図23に示す。

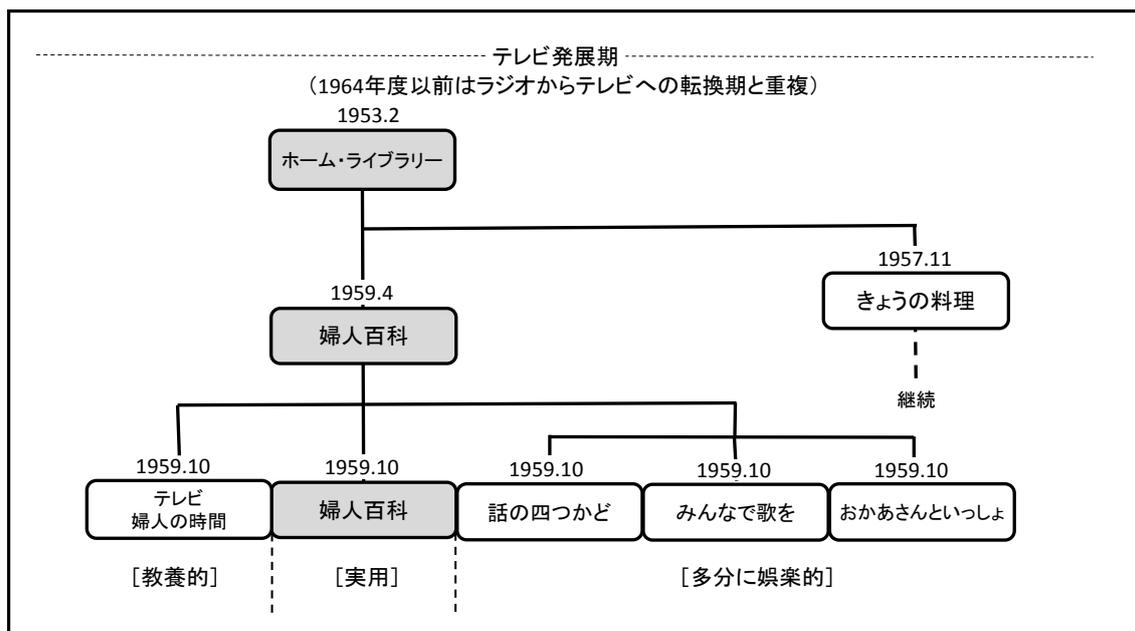


図 23 テレビ発展期における主な女性向け教養番組の分化（薄墨は「花」を主題とする講座が編成された放送枠）

ラジオ草創期の女性向け教養番組においても、『家庭講座』、『婦人講座』、『家庭大学講座』という3系統の鼎立があったが、それは、「実用・実利」、「知識の啓発」、「いわゆる教育的」という類別<sup>347</sup>だった。こうした類別構成のあり方に、ラジオ草創期とテレビ発展期初頭との女性向け教養番組群の性格の差異が示されているといえる。生田（1964）は、教養番組には娯楽番組も含まれうるとしているが、女性向け教養番組群は1959年の時点で「娯楽」をも包含した広範な教養を扱う集団となっていたのである。

テレビにおける女性向け教養番組の増設は、翌1960年度にも続く。「九月には霞ヶ関別館に三つのスタジオが完成したのにもとない、平日五〇分の時間増をおこなったほか、総合・教育併設局では学校放送の総合・教育同時放送を中

<sup>345</sup> 日本放送協会編『NHK年鑑1961』日本放送出版協会、1960、p.210

<sup>346</sup> 日本放送協会放送史編修室編『日本放送史 下』日本放送出版協会、1965、p.519

<sup>347</sup> 日本放送協会放送史編修室編『日本放送史 上』日本放送出版協会、1965、p.86

止し、そのあとへ家庭の主婦・児童向けの番組を編成」<sup>348</sup>した結果、『婦人の話題』と『回転いす』が新設されたのである。このうち、『婦人の話題』は「婦人向け番組にさらに社会的・時事的な要素を加味」<sup>349</sup>した番組、『回転いす』は「生活上の価値基準をどこに置くべきかを考える」<sup>350</sup>番組で、共に『婦人の時間』の系統に属する番組（放送枠）だった。また、1961年度には、ラジオで開設されていた『NHK 婦人学級』が『婦人学級』としてテレビでも開始された。その「ねらいは、小集団による共同学習を行なう受信者に学習の素材を提供し、グループ活動の一助とする」<sup>351</sup>というものだった。

1957年度から60年度にかけての番組部門別比率は、表9<sup>352</sup>のようになっており、教養部門の比率が一貫して最も大きく、1960年度には前年度より2.5%増加して29%と全体の3割近くを占めるに至っている。

表 9 1957年度から1960年度までの番組部門別比率推移

年度	報道	教養	教育	娯楽	スポーツ	(%)
1957	15.0	26.0	15.3	24.8	18.9	
1958	15.6	24.6	16.3	22.9	20.6	
1959	19.3	26.5	13.4	22.8	18.0	
1960	23.3	29.0	8.7	23.8	15.2	

この時期における総放送時間の増加に対応して新設された女性向け教養番組群が、こうした教養部門伸張の一翼を担ったことになる。

ところが、この時期に新設された番組（放送枠）群の多くは、幼児向けとなった『おかあさんといっしょ』<sup>353</sup>およびラジオとテレビの同時放送となった『婦人学級』<sup>354</sup>を除き、長く続かなかつた。

1959年度に新設された番組（放送枠）群では、『話の四つかど』と『みんなで歌を』が1961年3月に終了した。また、1960年度に新設された『婦人の話

<sup>348</sup> 日本放送協会放送史編修室編『日本放送史 下』日本放送出版協会、1965、p.471

<sup>349</sup> 日本放送協会放送史編修室編『日本放送史 下』日本放送出版協会、1965、p.520

<sup>350</sup> 日本放送協会放送史編修室編『日本放送史 下』日本放送出版協会、1965、p.520

<sup>351</sup> 日本放送協会編『NHK年鑑1962No.2』日本放送出版協会、1962、p.40

<sup>352</sup> 日本放送協会放送史編修室編『日本放送史 下』日本放送出版協会、1965、p.473 掲載の表をもとに作成。

<sup>353</sup> 『おかあさんといっしょ』は1961年度の編成を記録した年鑑で、幼児番組（上位分類は教育放送）に類別されるようになった（日本放送協会編『NHK年鑑1962No.2』日本放送出版協会、1962、p.106）。

<sup>354</sup> 『婦人学級』は1970年度まで放送された（『NHK年鑑'71』p.138）。1971年度は『家庭学級』が1年度のみ放送された（『NHK年鑑'72』p.196）。

題』と『回転いす』も共に1961年3月に終了<sup>355</sup>した。1959年度に新設された『テレビ婦人の時間』は、比較的長く続いたものの1965年4月に終了（1962年4月からは『婦人の時間』と改称）した。

一方、1960年代には、実用を旨とする新たな番組（放送枠）群が増設される。まず、1962年度には、『くらしの窓』が「楽しみながら家庭生活に役立つ知識を提供するスタジオ番組」<sup>356</sup>として新設された。この放送枠は、実用情報の提供を旨としてはいるが、出演者は専門家ではなく、「歌手・芦野宏、音楽評論家・牧芳雄、俳優・三井美奈、小島文子」<sup>357</sup>となっており、「タレント司会により音楽を織り込んだ親しみやすい雰囲気」<sup>358</sup>が主旨として掲げられていることから、スタジオをベースとしたトーク番組の性格が強い。東京放送局開局時に掲げられた「文化の機会均等」に基づいて、さまざまな題材の講座を編成する女性向け教養番組の系譜とは異なるもの<sup>359</sup>といえるだろう。

続いて、1964年度には、それまで『婦人百科』という放送枠の中で主題として採り上げられていた、「花」、「茶」、「日本画」および「書道」が、それぞれ『季節のいけばな』、『お茶のすべて』、『やさしい日本画（絵画・書道）』という独立した放送枠として新設された<sup>360</sup>。これらの放送枠は、文化の伝播を旨とするもので、その後、翌1965年度に『午後のひととき』<sup>361</sup>というワイドショーの1コーナー<sup>362</sup>とされた後、翌1966年度には再び独立したものの『趣味のコーナー』という一括りの放送枠名<sup>363</sup>を冠せられた。そして、さらに翌1967年度に改めて

---

<sup>355</sup> 『婦人の話題』は『テレビ婦人の時間』に統合された（日本放送協会編『NHK年鑑1962No.2』日本放送出版協会，1962，p.117）。

<sup>356</sup> 日本放送協会編『NHK年鑑'63』日本放送出版協会，1963，p.116

<sup>357</sup> 日本放送協会編『NHK年鑑'63』日本放送出版協会，1963，p.117

<sup>358</sup> 日本放送協会編『NHK年鑑'65』日本放送出版協会，1965，p.149

<sup>359</sup> 『くらしの窓』は1965年度で終了し、1966年度からは後継番組として『こんにちは奥さん』が新設された。この放送枠は「一般主婦向けのワイド番組」（『NHK年鑑'67』p.120）で、いわゆる朝のワイドショーの先駆ともいえる。『こんにちは奥さん』は1973年度終了。1974年度からは「討論番組」（『NHK年鑑'75』p.112）として『奥さんごいっしょに』、1980年度からは「朝のいわゆるモーニングショー」（『NHK年鑑'81』p.124）である『おはよう広場』へと変遷し、1983年度まで続いた。

<sup>360</sup> この時は、『趣味の園芸』と『邦楽のとびら』も新設されたが、『年鑑』では、女性向け教養番組（当時の用語では婦人番組）には類別されていない。

<sup>361</sup> 1965年度新設。「インタビュー」、「話題の人の紹介」、「あなたの相談室」、「趣味のコーナー」（『NHK年鑑'66』p.114）などで構成された。翌1966年度には、「内容を刷新」し、「科学の話題」、「ニュースの窓」、「ことばとわたし」、「音楽」という四つのコーナーからなる「今日性のある教養ワイド番組」（『NHK年鑑'67』p.121）とされたが、同年度で終了した。

<sup>362</sup> それぞれに『午後のひととき 季節のいけばな』、『午後のひととき 茶道講座』などと前年度の番組名が併記され、番組としての独立性は残されていた。

<sup>363</sup> それぞれに『趣味のコーナー いけばな』、『趣味のコーナー お茶』などと主題が併記され、主題ごとの独立性は残されていた。

『婦人百科』に統合される。

女性向け教養番組の系譜を 1925 年の放送開始から俯瞰してみれば、実用情報の提供と文化の伝播を旨とする『家庭講座』から始まった女性向け教養番組は、3 系統の鼎立ないし 2 系統の並立など、分化と消長を繰り返しながら<sup>364</sup>も、40 年あまりのち、結局、開始時の『家庭講座』同様、実用情報の提供と文化の伝播を旨とする『婦人百科』が残った<sup>365</sup>ことになる。テレビ発展期における番組（放送枠）群の分化と消長は、図 24 のようになる。

---

<sup>364</sup> 1967 年度には『午後のひととき』をうけつぐものとして『女性手帳』が新設され、1981 年度まで継続した。この放送枠は、「ニュースの窓」、「話の招待席」「ことばとわたし」、「音楽」という四つのコーナー（『NHK 年鑑' 68』 p.130）で構成されたワイドショーである。本研究の対象である「文化の機会均等」を使命とした女性向け教養番組の系譜には属しないといえる。

<sup>365</sup> 女性向け（婦人番組）という類別がある最後の『年鑑』で記載されているのは、『婦人百科』と『きょうの料理』のみである（『NHK 年鑑' 85』 pp.169-170）。『きょうの料理』を『料理献立』の系列に連なる番組とみなすこともできようが、女性向け教養番組の系譜においては、時に他の放送枠に料理が吸収されるなどして、必ずしも継続した歴史を有していない。

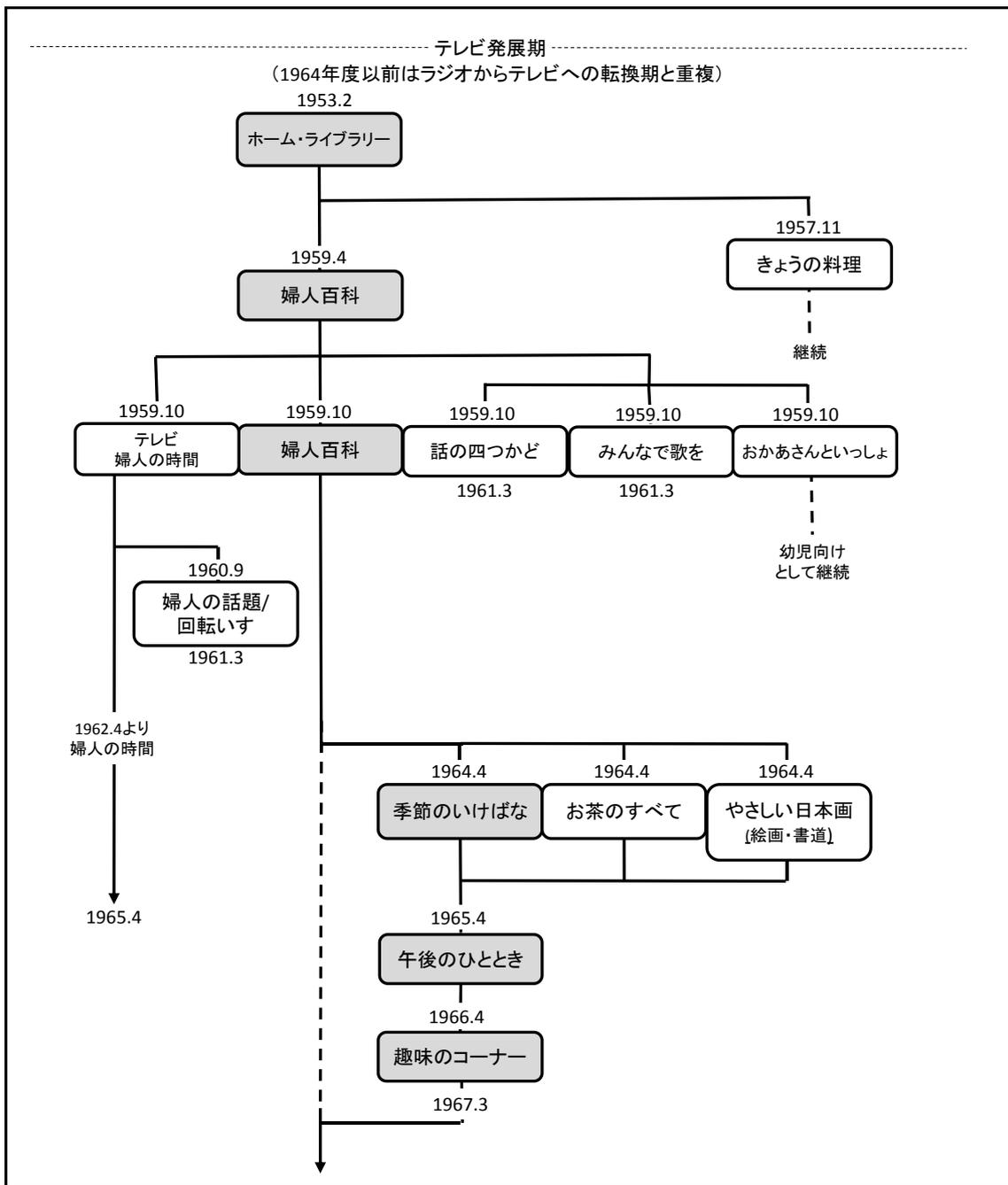


図 24 テレビ発展期における主な女性向け教養番組の分化と消長 (薄墨は「花」を主題とする講座が編成された放送枠)

最終的に『婦人百科』に集約された『季節のいけばな』、『お茶のすべて』、『やさしい日本画 (絵画・書道)』といった番組群は、いずれも日本文化が主題であり、さらに高い視点から放送史を鳥瞰した場合、家庭にいる女性層に向けて文化を伝播する目的においては、『婦人百科』は「文化の機会均等」という放送開始時に唱えられた職能に立ち戻って歴史を収斂させたことにもなるといえよう。

1959年秋の改定において、『婦人百科』の放送開始時刻は、午前10時35分からとされた<sup>366</sup>。そして、1年足らず後の1960年9月には、午前10時30分開始と改められた<sup>367</sup>。以後、1992年度末の放送枠廃止まで30年以上の間、『婦人百科』は、午前10時30分開始であり続ける<sup>368</sup>。この開始時刻は、第2章で述べた、1926年に大澤豊子が設定した時間帯と合致しており、この点でも、『婦人百科』は、大澤が『家庭講座』で設定した「家庭にいる女性のための時間」での放送に立ち戻ったことになる。

『婦人百科』において、「花」を主題とする講座は、日本文化を「上品な趣味」<sup>369</sup>として、女性たちが実際に習得することができるようにしている点で、ドキュメンタリー（文化映画）や教育番組にみられるような日本文化の記録と紹介を旨とした番組群とは一線を画していた。「生活と芸術が一体であり、また一体になろうとするとともに日本の生活文化が成立」<sup>370</sup>し、「生活の様式でありながら芸術の様式でもある」<sup>371</sup>「花」が、実践を通じて伝授されるものであるとすれば、実用的な生活技術の教授を旨とする女性向け教養番組である『婦人百科』こそが、そうした日本文化の伝播を担うにふさわしい存在だったといえる。

このテレビ発展期においては、「茶」についても、「茶」の歴史に関する文献に女性向け教養番組による伝播の記述がある<sup>372</sup>。また、「花」と同様に「茶」についても『お茶のすべて』という独立した放送枠が設けられたことから、この時期、「茶」は「花」と並んで本格的な伝播がおこなわれた<sup>373</sup>といえる。

1973年の調査<sup>374</sup>によれば、学習講座や趣味講座などさまざまな講座をおこなう番組群のうち、最もよく利用されている番組は『婦人百科』で利用率42.3%、次いで『趣味の園芸』40.2%、『テレビ英会話』26.1%の順だった。こうした調

---

<sup>366</sup> 1959年10月5日から。前週までは、午後1時20分開始。

<sup>367</sup> 1960年9月5日から。前週までは、午前10時35分開始。

<sup>368</sup> 放送終了時刻は、1964年度（1965年4月2日）まで午前11時、1965年度（1965年4月5日）からは午前10時59分。

<sup>369</sup> 久保田滋、瀬川健一郎『日本花道史』光風社書店、1971、p.87

<sup>370</sup> 熊倉功夫『茶の湯といけばなの歴史 日本生活文化』左右社、2009、p.5

<sup>371</sup> 重森弘淹「現代いけばなの諸問題」河北倫明編『図説 いけばな体系 第4巻 現代のいけばな』角川書店、1971、p.132

<sup>372</sup> 熊倉功夫『近代茶道史の研究』日本放送出版協会、1980、p.354 および久田宗也「NHKテレビ『茶道講座』のまとめ」『茶道雑誌』1967年3月号、河原書店、pp.11-21

<sup>373</sup> 「ラジオ草創期」から「ラジオ戦時期」、「ラジオ占領期」を経て「ラジオからテレビへの転換期」に至るまでの期間に、「茶」を題材とする講座が編成されなかったわけではない（熊倉功夫『近代茶道史の研究』日本放送出版協会、1980、pp.311-313参照）。また、講座ではないが、大規模な茶会が中継放送されて大きな反響を呼んだこともあった（熊倉功夫『近代茶道史の研究』日本放送出版協会、1980、pp.318-319）。

<sup>374</sup> 神山順一、藤岡英雄、岩崎三郎「講座番組の研究1<講座番組はどれだけ利用されているか>—横浜調査の結果から—」『文研月報』1974年1月号、p.14

査の結果からも、テレビ発展期における女性向け教養番組は、かなりの程度、家庭にいる女性に日本文化を伝播したことが窺える。

## 5.2 テレビ発展期の「花」を主題とする講座

### 5.2.1 放送本数の推移

図 25 に、「テレビ発展期」における「花」を主題とする講座について、その年度ごと放送本数の推移を示す。

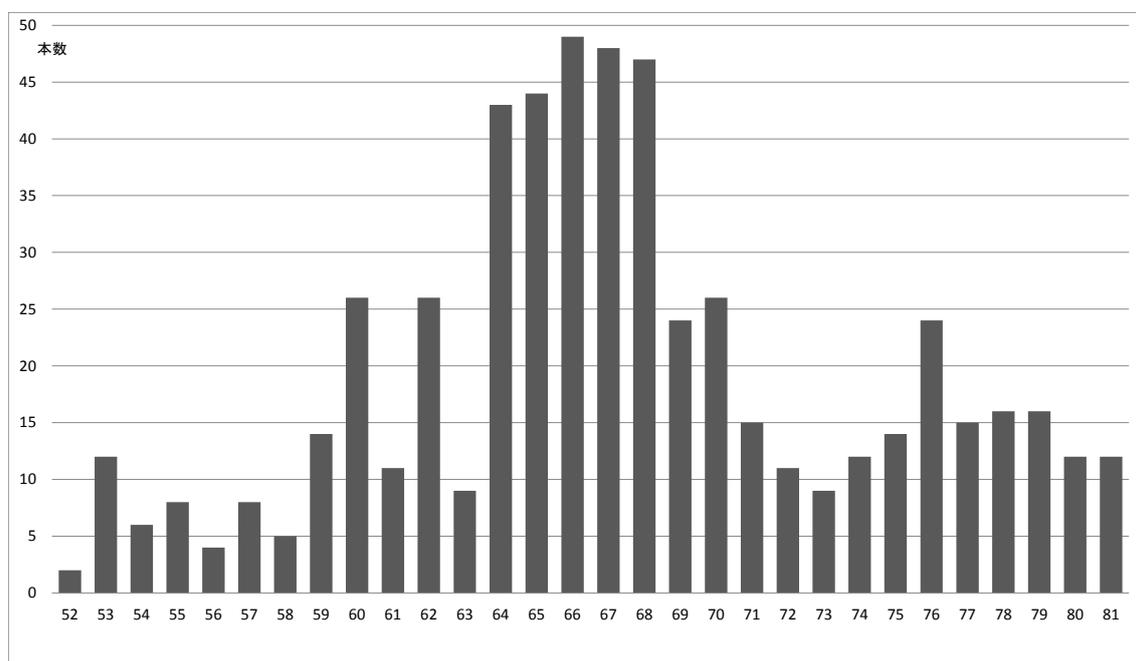


図 25 テレビ発展期での女性向け教養番組における「花」を主題とする講座の年度ごと放送本数 (1952 年度～1981 年度)

テレビ発展期、すなわち、1952 年度から 1981 年度までの 30 年間ににおける「花」を主題とする講座の総放送本数は 568、年度あたり平均は 18.9 (小数点第 2 位四捨五入・以下同)、標準偏差は 13.7 である。

表 10 に、テレビ発展期に至るまでの各時期における女性向け教養番組での「花」を主題とする講座の年度ごと平均本数および標準偏差の一覧を示す。

表 10 テレビ発展期までの「花」を主題とする講座の年度あたり平均本数と標準偏差

	平均本数	標準偏差
ラジオ草創期	7.6	3.0
ラジオ戦時期	1.5	1.3

ラジオ占領期	2.4	4.5
ラジオからテレビへの転換期・ラジオ	7.5	10.9
ラジオからテレビへの転換期・テレビ <sup>375</sup>	11.5	11.5
テレビ発展期 <sup>376</sup>	18.9	13.7

テレビ発展期はそれまでの各時期より、平均本数が最も多くなっている。

この表の各時期は本研究での区分であるため、計測期間はそれぞれ異なっている。また、ラジオからテレビへの転換期とテレビ発展期のうち 1952 年度から 1964 年度までが重複している。そこで、計測期間を 10 年として、ラジオは 1925 年度から 10 年刻み、テレビは 1952 年度から 10 年刻みで年度あたり平均本数と標準偏差を求めた結果を表 11 に示す。

表 11 放送メディアの各時期における「花」を主題とする講座の年度あたり平均本数と標準偏差（10 年区分）

ラジオ	平均本数	標準偏差
1925 年度-1934 年度	7.9	3.0
1935 年度-1944 年度	2.3	2.3
1945 年度-1954 年度	3.7	6.7
1955 年度-1964 年度	8.0	11.9
テレビ	平均本数	標準偏差
1952 年度-1961 年度	9.6	6.5
1962 年度-1971 年度	33.1	14.1
1972 年度-1981 年度	14.1	3.9

表中、ラジオでの 1925 年度から 1934 年度は概ねラジオ草創期、1935 年度から 1944 年度は概ねラジオ戦時期、1945 年度から 1954 年度は概ねラジオ占領期、1955 年度から 1964 年度は概ねラジオからテレビへの転換期に相当する。また、テレビ発展期は、1952 年度から 1981 年度の 30 年間に相当する。10 年刻みで観測した結果は、テレビ発展期中期にあたる 1962 年度から 1971 年度までが平均本数が最も多くなっている。

テレビ発展期における放送本数の年度ごと推移を示したグラフの形状は凸型をなしており、この凸型の左端部はテレビ放送開始からの 10 年間（1952 年度-1961 年度）、中央部はその後の 10 年間（1962 年度-1971 年度）、右端部はさらにその後の 10 年間（1972 年度-1981 年度）に、2 ないし 3 年のずれをもって符

<sup>375</sup> テレビ発展期のうち 1952 年度から 1964 年度までにあたる。

<sup>376</sup> ラジオからテレビへの転換期におけるテレビを含む。

合している。凸型の中央部を形成している 1964 年度から 1968 年度までを剔出すれば、年度あたり平均本数 46.2、標準偏差 2.3 となる。1964 年度は、「花」のみを扱う独立した放送枠である『季節のいけばな』が設けられた年度であり、この年度以降『午後のひととき』、『趣味のコーナー』、そして再び『婦人百科』へと放送枠が移り変わった 5 年間は、女性向け教養番組における「花」を主題とする講座の最盛期であったといえる。この最盛期が始まる 1964 年度はちょうど「ラジオからテレビへの転換期」の終期に合致しており、この点でも、最盛期の開始点は、ラジオからテレビへの転換が完了し、テレビでの「花」を主題とする講座による文化の伝播が本格的に始まったことを示すものといえる。

こうした「最盛期」を中央に持つ凸型の遷移は、なぜもたらされたのか。その要因には、編成方針の変転および、その背景としての社会情勢の変動が介在していると想定される。

編成の観点からすれば、テレビ発展期における女性向け教養番組の特徴は、1964 年度に、「花」と共に「茶」にも独立した放送枠が設けられたことにある。これら独立した放送枠においてのみならず、『ホーム・ライブラリー』と『婦人百科』においても、「花」と「茶」を主題とする講座は、この時期には、ほぼ毎年度、編成された<sup>377</sup>。

「花」と「茶」では、近代以降におけるその発展が少なからず異なっている。同じく家元制の元で飛躍的に成長したとはいえ、「茶」には、「花」に匹敵するような近代流派の勃興や前衛ブームがみられない。また、その流派の数や行動者数にもかなりの差がある。これらのことから、「花」と「茶」を比較することによって、この時期の「花」を主題とする講座の特徴と意義をよりの確に考察することができると考えられる。

次節では、まず『番組確定表』に記された、テレビ発展期の女性向け教養番組における「花」および「茶」それぞれを主題とする講座の年度ごと放送本数の推移を分析<sup>378</sup>する。その上で、放送本数の推移を参照しつつ、「花」と「茶」の出演者構成および副題に表された内容のそれぞれについて、分析と考察をおこなう。

---

<sup>377</sup> 「花」と「茶」以外に長期に渡り多数の番組が定期的に編成された主題には、「料理」、「園芸」、「手芸」、「書道」などがあるが、いずれも実用が主たる目的となっており、「花」や「茶」とは性格を異にしている。また、「香」や「日本舞踊」はほとんど編成されておらず、「能」、「狂言」、「歌舞伎」など素人の弟子を採らない伝統文化は女性向け教養番組の主題とはなっていない。

<sup>378</sup> 「花」および「茶」が編成された放送枠は時期によって異なるが、いずれの時期においても、放送枠の放送時間帯および枠内での放送時間量は同一だった。両者の間で数量的に差異が生じるのは放送本数である。したがって、放送本数の比較をもって、両者の数量的差異とその遷移を示すことが可能である。

### 5.3 「花」を主題とする講座と「茶」を主題とする講座の比較

#### 5.3.1 「花」を主題とする講座と「茶」を主題とする講座の放送本数推移と凸型形状の照応

本節では、テレビ発展期の女性向け教養番組における「花」および「茶」を主題とする講座の放送本数の年度ごと推移について、その分析結果を述べる。

まず、図 25 で示した 1952 年度から 1981 年度までにおける「花」を主題とする講座の年度ごと放送本数推移に「茶」を主題とする講座の年度ごと放送本数推移を重ねて対比した折れ線グラフを、図 26 に示す。

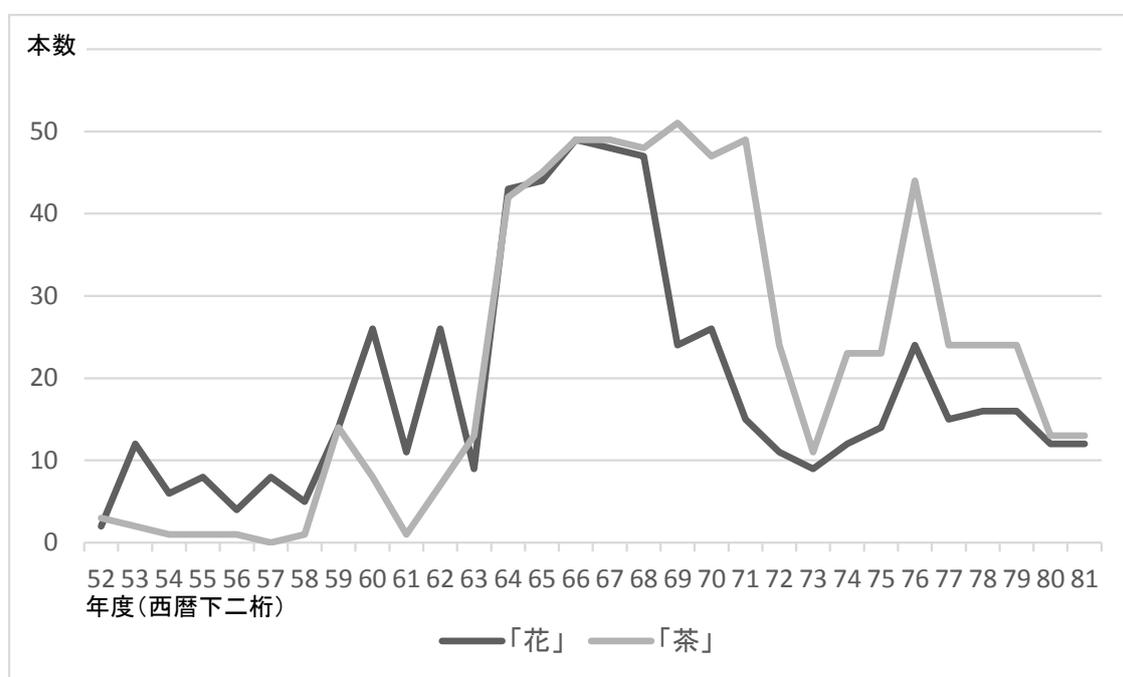


図 26 女性向け教養番組における「花」および「茶」それぞれを主題とする講座の年度ごと放送本数

調査期間全体、すなわち、1952 年度から 1981 年度までの 30 年間における総放送本数は、「花」568 に対し「茶」655 である。両者の年度あたり平均放送本数は、「花」18.9 に対し、「茶」21.8 である。年度あたり平均放送本数の標準偏差は、「花」が 13.7、「茶」が 18.3 である。この 30 年間における両者の年度あたり平均放送本数の比は概ね 1 対 1.2 である。この比を基準として、調査期間における両者の年度あたり放送本数の比の推移を分析すると、両者の比が基準とは大きく異なる時期が二つ、確認できる。

一つは 1952 年度から 1963 年度までの 12 年間で、ちょうどテレビが「驚くべき普及」<sup>379</sup>をする時期<sup>380</sup>である。「花」を主題とする講座の放送本数推移が形成する凸型では左端部にあたる。

この時期における、「花」および「茶」の放送本数は、「花」が 131、「茶」が 52 であり、年度あたり平均放送本数は、「花」が 10.9、「茶」が 4.3 であって、両者の比は概ね 2.5 対 1 である。標準偏差は、「花」が 7.5、「茶」が 4.1 である。

もう一つは、1969 年度から 1981 年度までの 13 年間で、テレビの視聴時間が拡大を続け、ピークに達した後、高原状態を保つ時期である。「花」を主題とする講座の放送本数推移が形成する凸型では右端部にあたる。

この時期における、「花」および「茶」の放送本数は、「花」が 206、「茶」が 370 であり、年度あたり平均放送本数は、「花」が 15.8、「茶」が 28.5 であって、両者の比は概ね 1 対 1.8 である。標準偏差は、「花」が 5.2、「茶」が 13.7 である。

この二つの時期に挟まれた中間の時期、すなわち、1964 年度から 1968 年度までの 5 年間は、「花」を主題とする講座の放送本数推移が形成する凸型では中央部にあたる。

この時期における、「花」および「茶」の放送本数は、「花」が 231、「茶」が 233 であり、年度あたり平均放送本数は、「花」が 46.2、「茶」が 46.6 であって、両者の比は、期間内の各年度を通してほぼ 1 対 1 で推移している。標準偏差は、「花」が 2.3、「茶」が 2.7 である。

「花」と「茶」の年度あたり平均放送本数の比は、凸型の中央部を挟んで左端部と右端部では逆転していることになる。

こうした年度あたり平均放送本数の「花」と「茶」の比に基づいて、テレビ発展期は次のように、三つの時期に分けることができる。

- ・第 1 期 (1952 年度～1963 年度) : 「花」と「茶」の年度あたり平均放送本数の比は概ね 2.5 対 1 で、「花」が優勢の時期
- ・第 2 期 (1964 年度～1968 年度) : 「花」と「茶」の年度あたり平均放送本数の比は概ね 1 対 1 で、「花」と「茶」が拮抗する時期
- ・第 3 期 (1969 年度～1981 年度) : 「花」と「茶」の年度あたり平均放送本数の比は概ね 1 対 1.8 で、「茶」が優勢の時期

これら三つの時期区分を記した年度ごと放送本数の推移を、改めて図 27 に示

---

<sup>379</sup> 辻村明「日本におけるテレビ普及の特質 研究目的」日本放送協会総合放送文化研究所放送学研究室編『放送学研究 8 共同研究 日本におけるテレビ普及の特質 3 分冊の 1』1964, p.9

<sup>380</sup> 辻村 (1964) によれば、1963 年 12 月末には受信契約数が 1500 万を突破、世帯普及率は 73.4% となり、受信機の絶対数ではアメリカについて世界第 2 位となった。

す。

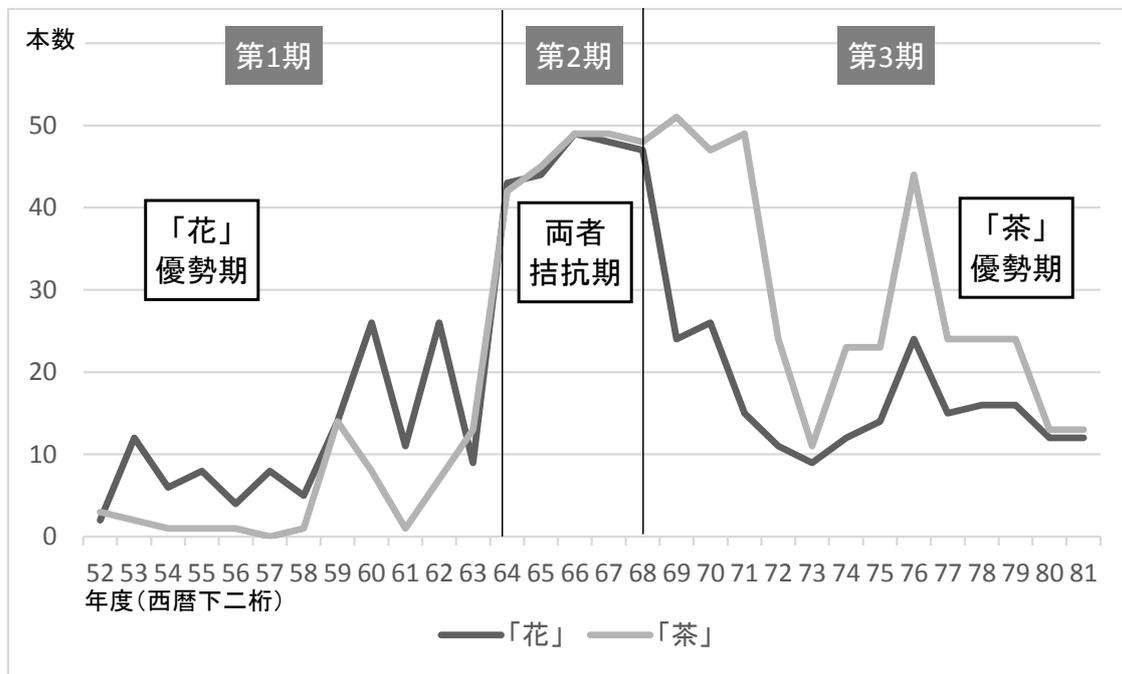


図 27 女性向け教養番組における「花」および「茶」それぞれを主題とする講座の年度ごと放送本数（時期区分あり）

毎年度の放送本数においても、第1期における1952年度<sup>381</sup>、1959年度<sup>382</sup>および1963年度<sup>383</sup>を除外すれば、第1期では「花」が「茶」を上回り、第3期では「茶」が「花」を上回って<sup>384</sup>推移している。

こうした現象の背景には、各時期における「花」および「茶」に対する番組の主題としての位置づけの変化があると考えられる。また、番組の出演者や内容も影響していると考えられる。

以下、テレビ発展期における「花」および「茶」それぞれを主題とする講座の編成について、本節で示した三つの時期区分ごとに分析し、考察する。

### 5.3.2 本数比「花」優勢期（凸型左端部）の編成

凸型左端部である第1期、すなわち、1952年度から1963年度までは、「花」が「茶」を上回っている、「花」優勢期である。

<sup>381</sup> この年度は、「花」2に対し「茶」が3で、「茶」が「花」を上回る。

<sup>382</sup> この年度は、「花」と「茶」が共に14で両者が拮抗。

<sup>383</sup> この年度は、「花」9に対し「茶」が13で、「茶」が「花」を上回る。

<sup>384</sup> ただし、第3期においては、1973年度が「花」9に対し「茶」11、1980年度と1981年度が共に「花」12に対し「茶」13と、両者がほぼ拮抗している年度が3回ある。

1954年度に実施されたアンケート調査では、『『ホーム・ライブラリー』の放送内容として、どんな種目を希望しますか。』<sup>385</sup>という質問の選択肢に「生花」が挙げられていた。このことから、「花」（生花）は、この時期、放送の側からはテレビにおける女性向け教養番組の中核的存在として位置づけられていたことが窺える。これに対し、「茶」はこの時の調査の項目に挙げられていない。

「花」は戦後、いわゆる高度成長期における行動者数の増大により空前のブームを迎えた。「昭和三十年代からのいけばな人口の増加は、自立した経済力をもつようになった職業婦人たち、現代でいうOLたちの参加によるものであった。嫁入り修業としてのいけばなは、自立した女性たちが身につける教養の一つに変貌し、いけばなの歴史上かつてみることのできない膨大な『いけばな大衆』を出現させた」<sup>386</sup>のである。

1962年に発行された雑誌『朝日ジャーナル』の記事には、「いわゆる前衛いけばなの人口は五百万といわれ、押しも押されもせぬ一つの文化現象として、広く社会に浸透している」<sup>387</sup>と記されている。また、「花」・「茶」拮抗期にあたる時期の資料ではあるが、1966年の雑誌『週刊朝日』には「華道の流派、なんと三千流。いけばなをたしなむ“華道人口”一千万人という未曾有のいけばなブーム」<sup>388</sup>という記述がある。「数ある伝統芸術のなかで、いけばな人口は圧倒的」<sup>389</sup>だったのである。

これに対して「茶」は、戦後復興を果したというものの、「花」に匹敵するような大規模なブームは訪れなかった。廣田（2012）は1950年時点での裏千家の組織力を10万人程度と考察している<sup>390</sup>。裏千家は明治以後、学校教育への進出などによって、いわゆる三千家のうちでは最も門下数が多いといわれている。1950年頃においては、その裏千家の規模が「花」における池坊の十分の一程度だったと推定できることになる。

いずれにせよ「花」に比べて「茶」の行動者数がこの時期にかなり少なかったことは事実であろう。

1970年代のデータではあるが、1976年の「社会生活基本調査」<sup>391</sup>によれば、「花」（この調査では「華道」）の行動者率は女性が17.19%に対し男性が0.61%

385 日本放送協会編『NHK年鑑1956』日本放送出版協会、1955、p.341

386 工藤昌伸『日本いけばな文化史 四 前衛いけばなと戦後文化』同朋舎出版、1994、p.132

387 『朝日ジャーナル』1962年6月10日号、p.51

388 『週刊朝日』1966年12月23日号、p.16

389 重森弘淹「現代いけばなの諸問題」河北倫明編『図説 いけばな体系 第4巻 現代のいけばな』角川書店、1971、p.132

390 廣田吉崇『近現代における茶の湯家元の研究』慧文社、2012、pp.265-266

391 総理府統計局『昭和51年社会生活基本調査報告 全国Ⅱ 行動者編』日本統計協会、1978、pp.20-21

となっており、女性は男性の 28 倍強であって圧倒的に女性の比率が高い。「花」（いけばな）は女性が嗜むものという明治以降定着したイメージ<sup>392</sup>どおりの比率であり、このイメージは 1950 年代においても大きくは変わらなかったと想定される。

1964 年夏の調査では、家庭にいる女性の 1 日あたり平均テレビ視聴時間は 3 時間 9 分に及んでいた<sup>393</sup>。家庭にいる女性はテレビ発展期の主要な視聴者層であり「テレビの最大の“おとくいさま”」<sup>394</sup>だった。「花」の行動者はその殆どが女性であることから、放送の側では、女性視聴者層に訴求するための有力な主題として「花」に着目し、その結果が、『ホーム・ライブラリー』の調査となったと考えられる。

「花」による女性視聴者層への訴求は、出演者の構成にも現れている。表 12 は、第 1 期における「花」および「茶」それぞれの出演者について、その出演回数を降順に列挙したものである。なお、表 12 は、ラジオからテレビへの転換期におけるテレビでの出演者順位を示した表 8 の結果から 1964 年度の数値を除外したものと等しい。

表 12 第 1 期における「花」および「茶」の出演者順位<sup>395</sup>

(左列から順に出演者名、性別、出演回数)

「花」(1952 年度-1963 年度)			「茶」(1952 年度-1963 年度)		
勅使可原霞	女	22	塩月弥栄子	女	19
勅使河原和風	男	20	久田宗也	男	13
小原豊雲	男	17	千宗興	男	8
池田理英	女	13	山村宗謙	男	4
安達瞳子	女	12	桑田忠親	男	1
池坊専永	男	6	千宗守	男	1
安達潮花	男	5	泉谷松風庵	男	1

<sup>392</sup> 工藤 (1993) は、「いけばなが女性のものだと決めつけられるようになるのは、近代の明治になってからのことではないか」と考察している (工藤昌伸「女性たちといけばな 近世から近代へ」『日本いけばな文化史 三 近代いけばなの確立』同朋社出版, 1993, p.94)。

<sup>393</sup> 山本透「番組視聴の諸相 a. 『ラジオ志向』から『テレビ志向』へ」日本放送協会総合放送文化研究所放送学研究室編『放送学研究 10 共同研究 日本におけるテレビ普及の特質 3 分冊の 3』1965, p.233

<sup>394</sup> 藤原功達「家庭婦人はテレビ・ラジオをどのようにみききしているか」『文研月報』1965 年 12 月号, p.14

<sup>395</sup> 「花」の出演者順位について、第 4 章の表 8 では、1964 年度までを示したが、ここでは「茶」との比較のために 1963 年度までを示した。

押川如水	女	5	中村如遊	男	1
佐藤秀抱	男	5			
中山文甫	男	5			
藤原幽竹	男	5			
山中阿屋子	女	3			
大野典子	女	3			
河村 <sup>ママ</sup> 万葉庵	男	2			
大井ミノブ	女	2			
勅使河原蒼風	男	2			
臼井桂鳳	(未詳)	1			
工藤和彦	男	1			
小立千蓉	(未詳)	1			
大槻秀楓	(未詳)	1			
長谷川菊洲	男	1			
直井輝子	女	1			
未生院翁甫	男	1			

「花」においては、「茶」に比して女性講師の出演が多い。「花」での女性講師が、未詳の者を除き、勅使河原霞、池田理英、安達瞳子、押川如水、山中阿屋子、大野典子、大井ミノブ、直井輝子と8人であるのに対し、「茶」での女性講師は、塩月弥栄子1人である。

「花」(いけばな)の出演者には、「いけばながつねに現代的な感覚を下から求められて変わらざるをえなかったということが、他の伝統芸術と異なるところである」<sup>396</sup>と評されたことに呼応して、第4章で記したとおり、戦後、「彗星のごとく現れた」<sup>397</sup>河村萬葉庵や「前衛いけばな運動の中で活躍」<sup>398</sup>した工藤和彦、そして、「前衛いけばな運動の中で(中略)大胆な造形作品を発表した」<sup>399</sup>池田理英といった作家が含まれている。

一方、「茶」の出演者は、三千家の家元や茶道家、あるいは評論家であって、「花」のような傾向はみられない。「茶」と「花」のこうした差異は、「お茶も

<sup>396</sup> 重森弘淹「現代いけばなの諸問題」河北倫明編『図説 いけばな体系 第4巻 現代のいけばな』角川書店、1971、p.133

<sup>397</sup> 工藤昌伸『日本いけばな文化史 四 前衛いけばなと戦後文化』同朋舎出版、1994、p.51

<sup>398</sup> 工藤昌伸『日本いけばな文化史 四 前衛いけばなと戦後文化』同朋舎出版、1994、p.53

<sup>399</sup> 工藤昌伸『日本いけばな文化史 四 前衛いけばなと戦後文化』同朋舎出版、1994、p.102

能も全然変わらないのに、いけばなだけがその時代時代で様式が変わって」<sup>400</sup>きたことに起因しているといえるだろう。

『近代茶道史の研究』には、「テレビによる茶道教室がはじまったのは、昭和三十九年正月のこと」<sup>401</sup>と記されている。また、表千家の久田宗也は『茶道雑誌』に「NHK テレビ『茶道講座』のまとめ」<sup>402</sup>という記事を執筆しているが、そこでは1963年以前の「茶」を主題とする講座については触れられていない。これらのことから茶道界の側からは、テレビ発展期当初の「茶」を主題とする講座が本格的なものとはとらえられていなかったことが窺える。

第1期において、「花」を主題とする講座の放送本数が「茶」を主題とする講座に比して多く推移していること、および「花」を主題とする講座で女性出演者が「茶」を主題とする講座よりも多く起用されていることには、社会的なブームとなった「花」が女性視聴者層に訴求するための主題として期待されたことが示されていると考えられる。

### 5.3.3 本数比「花」・「茶」拮抗期（凸型中央部）の編成

凸型の中央部である第2期、すなわち、1964年度から1968年度までは、「花」と「茶」の拮抗期である。

この時期は日本が1964年の東京オリンピック（第18回夏季オリンピック）から1970年の大阪万博（日本万国博覧会）へと向かう、高度成長の最盛期にあたる。この時期に、「花」、「茶」共に年度あたり平均放送本数は各期を通じての最高値を記録している。公共放送における女性向け教養番組の本来の職能である「文化の機会均等」を図るための一手段としての日本文化の伝播が、テレビにおいて本格的におこなわれるようになったことが示されているといえる。

この時期の初めにあたる1964年度には、「花」、「茶」共に、独立した放送枠である『季節のいけばな』と『お茶のすべて』が編成され、お盆や年末年始を除いて概ね毎週1本の放送が実施された。「花」と並んで「茶」も本格的な伝播の時期に入ったことを示しており、「茶」を主題とする講座の「花」に匹敵する編成は、女性向け教養番組による文化の機会均等という目的の充実であるともいえる。翌1965年度には、『午後のひととき 季節のいけばな』、『午後のひととき 茶道講座』、さらに翌1966年度には『趣味のコーナー いけばな』、『趣味のコーナー お茶』が後継の放送枠<sup>403</sup>として編成された。その後、1967年度

---

400 工藤昌伸『日本いけばな文化史 四 前衛いけばなと戦後文化』同朋舎出版、1994、p.168

401 熊倉功夫『近代茶道史の研究』日本放送出版協会、1980、p.354

402 久田宗也「NHK テレビ『茶道講座』のまとめ」『茶道雑誌』1967年3月号、pp.11-21

403 『趣味のコーナー』は、『午後のひととき』の一部を分離した放送枠だった（『NHK年鑑'67』p.121参照）。

には、「花」と「茶」は『婦人百科』の一枠となったが、やはり概ね毎週1本の放送が実施され、1968年度までこの編成は続く。

この時期において、両者の放送本数はほぼ同数と拮抗しているが、放送内容にはなんらかの差異を示す傾向があるだろうか。

放送内容の傾向を数量的に把握するためには、番組副題に含まれる語を抽出して分析することが、一つの手段として考えられる<sup>404</sup>。そこで、本項では、副題に含まれる語を詳細に抽出し類別することによって、第2期での「花」と「茶」の放送内容における差異を数量的に把握するための分析をおこなう。

分析は、まず番組副題に含まれる語から内容語として、名詞、動詞、形容詞、形容動詞、副詞を抽出した。そして、(1) 冠称としての「花」または「茶」、(2) 季節、(3) 花材または茶道具、(4) 技法、(5) その他という五つに類別した上で、その比率を算出することによっておこなった。

冠称としての「花」または「茶」という分類項を設けたのは、副題には、その講座を識別するための冠称として「いけばな」、「いけ花」、「生花」や「茶道」、「お茶」、「茶の湯」、「煎茶」といった語が付せられていることが多いことに拠る。類別に際しては、「花」および「茶」という名辞を設定し、「花」(名辞)には、「いけばな」、「いけ花」、「生花」などを含め、「茶」(名辞)は「茶道」、「お茶」、「茶の湯」、「煎茶」などを含めた<sup>405</sup>。また、「花」において「花材」、「茶」において「茶道具」をそれぞれ分類項として設けたのは、いずれも稽古の主要な手段となることから対比が可能と判断したことによる。「花」における盛花、投入れなどの活け方を表す語、「茶」における点前、さばきなどの作法を表す語は、共に技法という分類項に類別し、「茶」における濃茶、薄茶は、いずれも点て方、いただき方などの作法を表す語と共に記載されているため、「花」における、投入れ、盛花などに対応するものとして、やはり技法という分類項に類別した。また、類別は名詞に対してだけでなく、「涼しい」や「涼しくする」は「季節」に、「やさしい」や「合わせて」は「技法」というように、他の品詞に対してもおこなった。上記の範疇に収まらない語は「その他」という分類項に仕分けした。

分析の結果を、表13に示す。また、その割合を視覚的に把握するための一助として図28を示す。

---

<sup>404</sup> たとえば、「茶」の副題における「茶の湯」という語は、第1期には1回しか出現しないが、第2期には122回、第3期には372回、出現している。このことは、第1期における「茶」を主題とする講座の位置づけが、他の期とは異なっていることと関連していると考えられる。

<sup>405</sup> 総称としての「花」あるいは「茶」ではなく、花材としての「花」あるいは茶道具の形容としての「茶」が用いられている場合は、名辞ではなく、それぞれ花材あるいは茶道具の項に含めた。

表 13 「花」と「茶」それぞれの番組副題における内容語の出現順位および割合

「花」(1964年度-1968年度)			「茶」(1964年度-1968年度)		
	回数	割合		回数	割合
「花」(名辞)	257	39.4%	「茶」(名辞)	260	39.9%
季節	95	14.6%	季節	10	1.5%
花材	124	19.0%	茶道具	44	6.7%
技法	52	8.0%	技法	284	43.6%
その他	124	19.0%	その他	54	8.3%

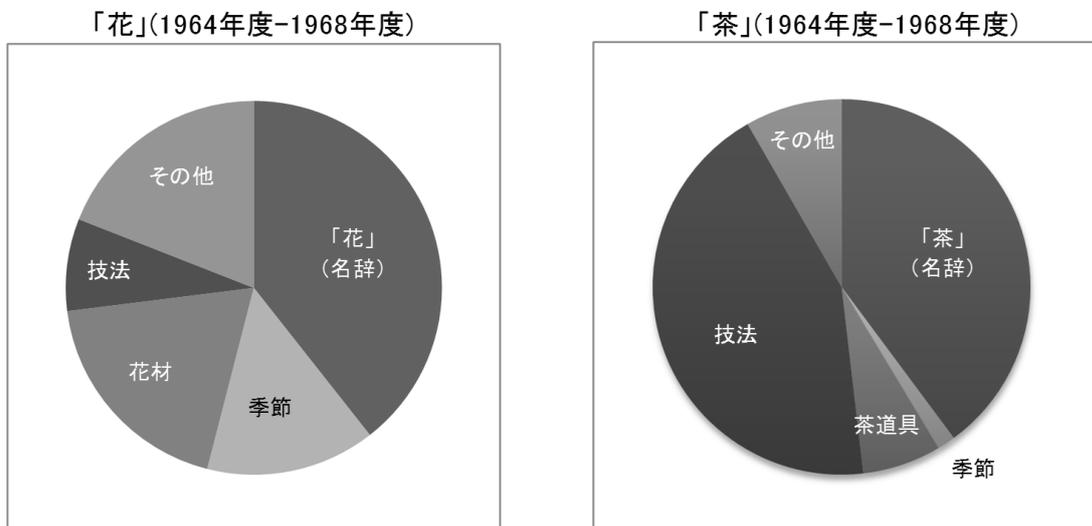


図 28 「花」と「茶」それぞれの番組副題における内容語の出現順位および割合

表 13 および図 28 に示したように、「花」においては名辞を除けば、季節と花材に関する語の占める割合が大きく技法のそれは小さい。一方、「茶」においては名辞を除けば、技法に関するその割合が大きく季節は小さい。花材もまた四季折々の草花が用いられることから季節性を帯びたものとみなせば、「花」と「茶」の番組内容は、「花」においては季節が主で技法は従、「茶」においては技法が主で季節が従という対照をなしていることになる。

「花」は造形芸術であるから、映像が無いラジオによる伝播には限界があった。テレビであれば、映像によって形状を伝えることができる。したがって、花材を主題とする内容が多くなったと考えられる。また、1年を通じて日常生活の中で定期的に放送されるテレビ番組は、四季折々の花々を見せるのに好適なメディアであり、そのことが季節に関する主題が多いことにつながったと考え

られる。

図としては示していないが、第2期以外の時期における副題については、次のような傾向がある。

まず「花」については、第1期では、「花」(名辞) 48.5%、季節 16.2%、花材 10.0%、技法 11.7%、その他 13.7%であり、第3期では、「花」(名辞) 48.3%、季節 8.3%、花材 14.6%、技法 12.6%、その他 16.2%である。「花」(名辞) とその他を除けば、第1期では季節の比率が最も大きく、第3期では花材の比率が最も大きい。ここでも花材について季節性を持つものとみなせば、どの期においても番組内容は季節を主題とするものの比率が大きいということになる。季節と花材を合わせた比率は、第1期 26.2%、第2期 33.6%、第3期 22.9%であり、第2期が最も大きい。

技法とは活け方を示すものであり、したがって、入門性を示すものとすれば、テレビ発展期における「花」を主題とする講座は、第4章で述べたとおり、入門性と季節性を併せ持っていたことになる。ただし、その比重は季節性のほうが大きいことは、この期に設置された「花」のみを主題とする放送枠『季節のいけばな』に冠せられた「季節」という語が象徴的に示してもいる。

次に「茶」については、第1期では、「茶」(名辞) 38.8%、季節 2.2%、茶道具 6.7%、技法 35.1%、その他 17.2%であり、第3期では、「茶」(名辞) 42.9%、季節 1.9%、茶道具 7.5%、技法 36.8%、その他 10.9%である。いずれの時期も、「茶」(名辞) とその他を除けば、季節に関する語と茶道具に関する語の比率が小さく、技法に関する語の比率が大きい。技法の比率は、第1期 35.1%、第2期 43.6%、第3期 36.8%であり、第2期が最も大きい。

第2期は、放送本数においては「花」と「茶」の拮抗期でありながらも、放送内容においては、テレビメディアにおける両者の日本文化としての現れ方の違い、すなわち、「花」は主に季節、「茶」は主に技法という差異が他の期よりも相対的に強く示された時期だったといえる。

#### 5.3.4 本数比「茶」優勢期(凸型右端部)の編成

凸型の右端部である第3期、すなわち、1969年度から1981年度までは、放送本数において「茶」が「花」の1.8倍という、「茶」優勢期である。

この期のうち、1969年度から1971年度にかけての3年間は、「茶」の本数が前期(第2期)と比べて同数あるいはむしろ増加しているのに、「花」のみが激減している。なぜこうした現象が生じたのだろうか。

変化が最初に現れるのは1969年度である。当時の資料には、この年度の『婦人百科』における制作体制について「地方制作として、大阪(いけばな・書道)

京都（茶の湯）が参加した。」<sup>406</sup>と記されている。それまで東京の本部で制作していた『婦人百科』の一部を地方局（大阪局は近畿本部という位置づけ）へ移したのである。さらに1971年度には、『婦人百科』を「近畿本部、および京都局で制作した」<sup>407</sup>。こうした制作体制の変更が「花」を主題とする講座の放送本数に大きな影響を与えたと考えられる。

制作体制の変更が放送本数に与えた影響について、「花」における出演者が属する流派の変動を分析することにより考察する。第1期から第3期までの華道における流派ごと占有率の推移を表14に示す。また、その割合を視覚的に把握するための一助として図29を示す。

表14 「花」を主題とする講座における流派ごと占有率の推移（「その他」の括弧内数字は、流派の数）

第1期(1952年度-1963年度)			第2期(1964年度-1968年度)			第3期(1969年度-1981年度)		
	回数	割合		回数	割合		回数	割合
草月流	27	20.5%	草月流	31	13.1%	小原流	34	16.5%
勅使河原和風会	20	15.2%	小原流	28	11.8%	龍生派	23	11.2%
小原流	18	13.6%	勅使河原和風会	22	9.3%	勅使河原和風会	17	8.3%
安達式	17	12.9%	嵯峨流	22	9.3%	御室流	14	6.8%
古流松藤会	13	9.8%	池坊	20	8.4%	草月流	13	6.3%
池坊	12	9.1%	安達式	19	8.0%	正風遠州流	13	6.3%
秀抱流	5	3.8%	未生流中山文甫会	19	8.0%	斑鳩流	11	5.3%
松風流	5	3.8%	桑原専慶流	18	7.6%	古流松藤会	10	4.9%
未生流中山文甫会	5	3.8%	古流松藤会	17	7.2%	紫雲華	10	4.9%
国際いけ花協会	3	2.3%	専慶流	12	5.1%	都未生流	10	4.9%
その他(7)	7	5.3%	その他(3)	29	12.2%	その他(18)	51	24.8%

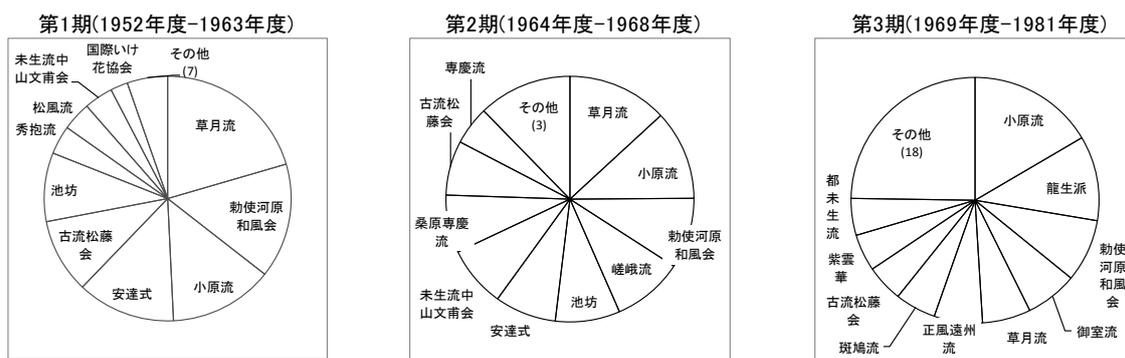


図29 「花」を主題とする講座における流派ごと占有率の推移（「その他」の括弧内数字は、流派の数）

406 日本放送協会総合放送文化研究所放送史編修室編『NHK年鑑'70』日本放送出版協会，1970，p.202

407 日本放送協会総合放送文化研究所放送史編修室編『NHK年鑑'72』日本放送出版協会，1972，p.195

第1期および第2期で最も大きな比率を占めており、第1位だった草月流が、第3期では、それまでの半分以下と比率を小さくし、第5位に順位を下げている。なお、表および図には示していないが、出演者では、草月流を代表する華道家である勅使河原霞の出演が1969年度に1回あるのみで、1970年度と1971年度は共に出演が無い。勅使河原霞の出演は、その前の1968年度、すなわち、第2期の最終年度に8回を数えていたことと比べると甚だしく減少している。

制作拠点が大阪に移った後、「花」の本数が減少したのは、草月流の出演数減少によるものだったことになる。

草月流はラジオ草創期から放送メディアへの出演が多く、ラジオ草創期、ラジオ戦時期および占領期、ラジオからテレビへの転換期のいずれにおいても、そしてテレビ発展期においても凸型中央部にあたる第2期までは、常に最も大きな占有率を有しており、「花」を主題とする女性向け教養番組の主演ともいえる存在だった。その草月流が首位の座を小原流に明け渡したということは、「花」と放送メディアとの歴史において画期となる出来事である。

草月流は東京が本拠である。一方、小原流は関西が興隆の地であり、関西に拠点を持つ。女性向け教養番組の制作拠点が関西に移ったことが、収録の利便性に影響し、両者の出演回数の差をもたらしたと考えられる。

一方、「茶」を主題とする口座の本数が前期（第2期）と比べて同数あるいはむしろ増加しているのは、「茶」の三千家が京都を本拠としていたことに起因するといえるだろう。制作局が関西に移ったことは、「茶」を主題とする講座の制作にとって、収録の利便性が増すことになったと考えられるからである。

第1期から第3期までの「茶」における流派ごと占有率の推移を表15に示す。また、その割合を視覚的に把握するための一助として図30を示す。

表15 「茶」を主題とする講座における流派ごと占有率の推移

第1期(1952年度-1963年度)			第2期(1964年度-1968年度)			第3期(1969年度-1981年度)		
	回数	割合		回数	割合		回数	割合
裏千家	27	56.3%	裏千家	113	48.5%	表千家	157	41.2%
表千家	13	27.1%	表千家	70	30.0%	裏千家	104	27.3%
茶道家	4	8.3%	煎茶	26	11.2%	武者小路千家	68	17.8%
煎茶	2	4.2%	武者小路千家	13	5.6%	藪内流	44	11.5%
歴史学者	1	2.1%	藪内流	11	4.7%	宗偏流	4	1.0%
武者小路千家	1	2.1%				遠州流	4	1.0%

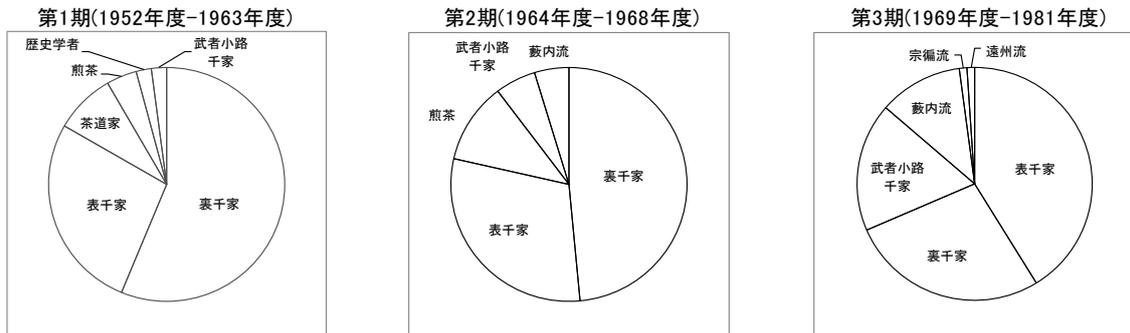


図 30 「茶」を主題とする講座における流派ごと占有率の推移

流派の比率について、「花」と「茶」を比較すると、「花」においては流派が細分化されているのに対し、「茶」では煎茶を除けばほぼ三千家（表千家、裏千家、武者小路千家）によって寡占されている<sup>408</sup>という違いがある。

「花」が昭和初期の草月流の勃興に表されるように、東京にも大きな流派を生み出し、前衛いけばなが流行するという、従来の枠にとらわれない変化を続けてきたのに対し、「茶」には「花」のそれに匹敵するような新興流派の登場や前衛ブームはみられず、京都を拠点とし続けてきた。「ある茶道の家元が、(中略)強い言葉で前衛いけばなを非難したということだが、彼らにとってはこうしたいけばなはまったく理解できないものであった」<sup>409</sup>とも評される。こうした日本文化としての「花」と「茶」のあり方の違いが、制作拠点の東京から関西への移動により、両者の放送本数の差となって現れたといえるだろう。

制作拠点の移動という女性向け教養番組制作体制変更の背景には、当時の社会情勢があった。東京オリンピックから大阪万博へと至る高度成長によって豊かになった日本では、余暇の増大に伴う新たなレジャー志向が強まった結果、1970年頃にはボウリングブームやゴルフ場の建設ラッシュが起こり、カメラの普及が進んだ。また、1973年には釣りを主題とする漫画が人気を博した。こうした社会情勢に対応するため、「花」および「茶」を主題とする女性向け教養番組の、もともとの拠点であった東京本部は、この時期、『婦人百科』とは異なる、別の放送枠の開発と制作を新たに担うこととなった。

<sup>408</sup> 三千家の合計占有率は第2期84.1%、第3期86.4%とほとんど変化していないものの、三千家と同じく京都に拠点を持つ藪内流が第2期の4.7%から第3期には11.5%に増加しているのは、制作局が関西に移ったことによって収録の利便性が増したことの現れとも考えられる。

<sup>409</sup> 工藤昌伸『日本いけばな文化史 四 前衛いけばなと戦後文化』同朋舎出版、1994、p.68。ただし、「花」の側においても、「いけばな界の一部では、東京の安達潮花、大阪の堀口玉方などを代表とする保守的な花道家たちが、前衛的いけばなを『邪道』であるとして、『正調いけばな』を標榜し、反対運動を起こし」ていた(同書、p.62)。

別の放送枠とは、1971年度に新設された『趣味の30分』である。これは、視聴者層を女性に限らない放送枠で、主題は、「釣り」、「ボウリング」、「写真」、「コレクション」、「ゴルフ」、「ビリヤード」などである。放送開始時刻は、午後11時15分に設定された。勤務先から帰宅した男性層がニュースなど他の番組を見終わる頃に合わせた戦略的な設定といえる。当時の編成の記録には、この『趣味の30分』について「余暇の拡大とともに、趣味人口の増加、その多様化など、現代のくらしのなかに占める趣味の比重は年毎に重くなってきている。そうした時代的要請に応えるために新設した」<sup>410</sup>と記されている。

一方、この年度の『婦人百科』は前年度まで月曜日から木曜日までの4枠だったのが、1枠削られて月曜日から水曜日までの3枠になり、空いた1枠（木曜日）には『趣味の30分』の再放送が設置されることになった。

こうした編成は、東京オリンピックから大阪万博へと至る高度成長に伴う趣味の多様化という社会情勢を反映するものでもあったといえる。

日本人の余暇の過ごし方の変化に教養番組のあり方が呼応することは、既に1960年代末に荒牧（1968）が「これは教養・娯楽費の支出の漸増とともに、映画・演劇・『見るスポーツ』等から、旅行・『するスポーツ』『日曜大工・庭いじり』など能動的な余暇利用の仕方の増大に見合うともいえよう。」<sup>411</sup>と指摘していたことであつた。

また、1973年に刊行された『婦人百科』テキストの誌面には、番組制作側の問題意識を伝える次のような一文がある。

余暇ということが、今日ほど盛んに論議されたことはありません。

つい数年前まで、余暇はまだ私たちの生活の中に定着しておらず、何か“ぜいたく”な感じのすることばとして受け取られていました。ところが、今や余暇はお金とひまをもてあまして人々だけの問題ではなく、くらしの中で“自由に選択し行動する時間”として毎日の生活に深い関係をもつことになったのです。<sup>412</sup>

こうした問題意識が当時の番組編成に反映されているとみなすこともできるだろう。

その後、1970年代中盤以降、「茶」の放送本数は、相対的には「花」に対し

---

<sup>410</sup> 日本放送協会総合放送文化研究所放送史編修室編『NHK年鑑'72』日本放送出版協会、1972, p.197

<sup>411</sup> 荒牧富美江「テレビ放送における婦人番組の変遷」『立正女子大学短期大学部研究紀要』第12号、1968, p.34

<sup>412</sup> NHK こんにちは奥さん担当 宇野英男「主婦と余暇」『NHK婦人百科』1973年11月号, p.48

て優位を保ちつつも、「花」の後を追うように減少した。そこには、二度の石油ショックによる低成長下での余暇増大と更なるレジャーの多様化において、「花」および「茶」という「お稽古ごと」は沈滞していく傾向が窺えるといえるだろう。

第3期の「花」を主題とする講座においては、1977年に連続12回の「いけばなの基礎」が編成されている。この講座は、入門性と季節性を併せ持つ連続型講座だったが、この講座を最後として、以後、女性向け教養番組における「花」を主題とする講座から明確な入門性は消失し、季節性が残存する。そして、連続型講座における放送の連続数も、これ以後、年度を追って減少し、テレビ発展期の末にあたる1980年度、1981年度は、毎月1本が定期的に放送される単発型のみとなる。

#### 5.4 まとめ

本章では、1952年度から1981年度までをテレビ発展期と規定した上で、放送史の諸資料によって同期間における女性向け教養番組の分化と消長を示した。そして、『番組確定表』の調査に基づいて、同期間に放送された女性向け教養番組のうち、「花」および「茶」を主題とする講座について、放送本数の年度ごと推移、副題の記述、出演者の構成という観点から、「花」と「茶」を比較しつつ分析した。

その結果を以下に示す。

- ・テレビ発展期の女性向け教養番組は、当初、『ホーム・ライブラリー』の1放送枠のみだったが、まず、料理番組として『きょうの料理』が独立し、その後、一旦『婦人百科』に引き継がれた後、「実用」の『婦人百科』と「教養的」の『テレビ婦人の時間』に分化した。

- ・さらにその後、『おかあさんといっしょ』、『みんなで歌を』、『話の四つかど』といった「多分に娯乐的」な放送枠や『婦人の話題』や『回転いす』といった「社会的・時事的要素を加味した」放送枠が設置された。しかし、新設された放送枠は、幼児番組となった『おかあさんといっしょ』を除き、長くは続かなかった。

- ・1960年代の半ばには、『季節のいけばな』、『お茶のすべて』、『やさしい日本画（絵画・書道）』といった、実用を旨とする新たな放送枠が設けられ、それまで『婦人百科』内で編成されていた題材が、独立した。

- ・これらの放送枠は、『午後のひととき』、『趣味のコーナー』と変遷したのち、再び『婦人百科』に統合された。

- ・ラジオ草創期に順次設置された「実用」、「知識の啓発」、「教育的」という

三つの放送枠のうち、女性向け教養番組の系譜において最後まで継続したのは、最初に設置された「実用」だった。

- ・テレビ発展期には、「花」を主題とする講座は、年度あたり放送本数の点で、最盛期を迎えた。

- ・この時期には、「茶」についても、その女性向け教養番組における伝播が文献に記され、「花」と同様に放送枠も設けられたことから、「花」と「茶」を比較して、分析し考察することが有効である。

- ・テレビ発展期での女性向け教養番組における「花」と「茶」を主題とする講座は、放送本数の多寡によって、「花」優勢期、両者拮抗期、「茶」優勢期の3期に分けられる。両者拮抗期は、「花」、「茶」共に、放送本数が他の時期よりも多く、放送史の全期間を通じても最多である。

- ・出演した講師および流派の構成は、「花」は時期によって変化し多様性があったのに対し「茶」は相対的に変化が少なく推移した。

- ・番組の内容は、「花」は季節を主旨とするものの比率が相対的に大きかったのに対し、「茶」は技法を主旨とするものの比率が相対的に大きかった。

- ・制作拠点が東京から大阪へ移転した時期に、「花」の放送本数は減少したが、このことは「花」が東京に大流派を擁していたことと関連があると考えられる。

- ・その後、「茶」も「花」と同様に放送本数が減少するが、その背景には、女性向け教養番組における両者の題材としての相対的な位置の低下があったといえる。

本章における調査および分析と考察の結果から、テレビ発展期の女性向け教養番組と「花」および「茶」を主題とする講座の特徴は、次の諸点にあるといえる。すなわち、(1) 女性向け教養番組の系譜は「実用」を旨とするものに収斂し、この期の半ばに、「花」も「茶」も講座の放送本数が最多となって、講座形式による伝統的な生活文化伝播の最盛期を形成したこと、(2) 「花」では、四季折々の花々による作例を紹介する「季節」の内容が主であった一方、「茶」では、所作や点前を教授する「技法」の内容が主であったという点で、テレビにおける両者の伝達のされ方には差異があったこと、(3) 特に「花」は、いけばなブームによる女性視聴者層への訴求やレジャーの多様化による新たな趣味講座番組の開発が放送本数の増減に影響していると考えられる点で、社会情勢とテレビメディアとの連関をより鮮明に反映したといえることである。

## 第6章 テレビ変化期

## 6.1 テレビ変化期の女性向け教養番組

日本におけるテレビ放送は、1970年代半ばに視聴時間量のピークを記録し、その後「漸減しながらではあるが、比較的安定した状態」<sup>413</sup>を保った。ところが、「1980年代に入ると視聴時間に減少の兆しがみえ始め（中略）85年には視聴時間は3時間にまで減少した。」<sup>414</sup>

1980年代におけるテレビを取り巻く状況の変化は早い段階から懸念され、井上（1981）は、テレビが「いつ見てもきまりきったパターンをなぞる（中略）マンネリズムの文化を生み出し（後略）」「新しい価値観を用意するものでもなく、新しい世界を見せるわけでもない、既成の世界をなぞる番組群」が存在すると指摘<sup>415</sup>している。また、「テレビが新しい段階に歩を進め出した、あるいは進めざるをえない段階を迎えるに至ったということは確かなようである。テレビを取り巻く外在的、あるいは内在的な諸条件が、新しい段階を準備しつつあるように思われる。」<sup>416</sup>とも記している。

視聴時間減少の要因については、さまざまな検討がなされた。たとえば、1982年に実施された「テレビ30年調査」は、「人びとのテレビ以外の余暇行動の増加やテレビ自体の放送内容のマンネリ化、質の低下などを指摘」<sup>417</sup>していた。また、この時期には「ニュー・メディア」が喧伝され、「ビデオやテレビゲームの普及は、テレビの位置づけをその利用面において、唯一絶対のメディアから目的によって使い分けられるメディアの1つへと変えていった。」<sup>418</sup>ことも視聴時間減少の要因とみなされていた。

「85年ごろに初めて遭遇したテレビ視聴時間の減少に対し、“テレビ離れ”という言葉も使われ、このままテレビ視聴時間が減り続けるのではないかと、テレビ関係者は危惧した」<sup>419</sup>という。

しかし、1985年を底として、「86年以降視聴時間は漸増傾向に転じ」<sup>420</sup>た。

---

413 戸村栄子「データにみる80年代のテレビ視聴動向 その1 テレビ視聴の変化」『放送研究と調査』1991年6月号, p.67

414 戸村栄子、白石信子「今、人びとはテレビをどのように視聴・評価・期待しているか～『テレビ40年』調査から～」『放送研究と調査』1993年2月号, p.4

415 井上宏「“編成の時代”と編成研究」日本放送協会放送文化研究所編『放送学研究 33 テレビ新時代—80年代テレビへの展望—』1981, p.125

416 井上宏「“編成の時代”と編成研究」日本放送協会放送文化研究所編『放送学研究 33 テレビ新時代—80年代テレビへの展望—』1981, p.123

417 戸村栄子、白石信子「今、人びとはテレビをどのように視聴・評価・期待しているか～『テレビ40年』調査から～」『放送研究と調査』1993年2月号, p.4

418 白石信子、井田美恵子「浸透した『現代的なテレビの見方』」『放送研究と調査』2003年5月号, p.33

419 NHK放送文化研究所編『テレビ視聴の50年』日本放送出版協会, 2003, p.151

420 戸村栄子、白石信子「今、人びとはテレビをどのように視聴・評価・期待しているか

図 31 は 1980 年代（1980 年から 1989 年まで）におけるテレビ視聴時間の推移を示す<sup>421</sup>ものである。

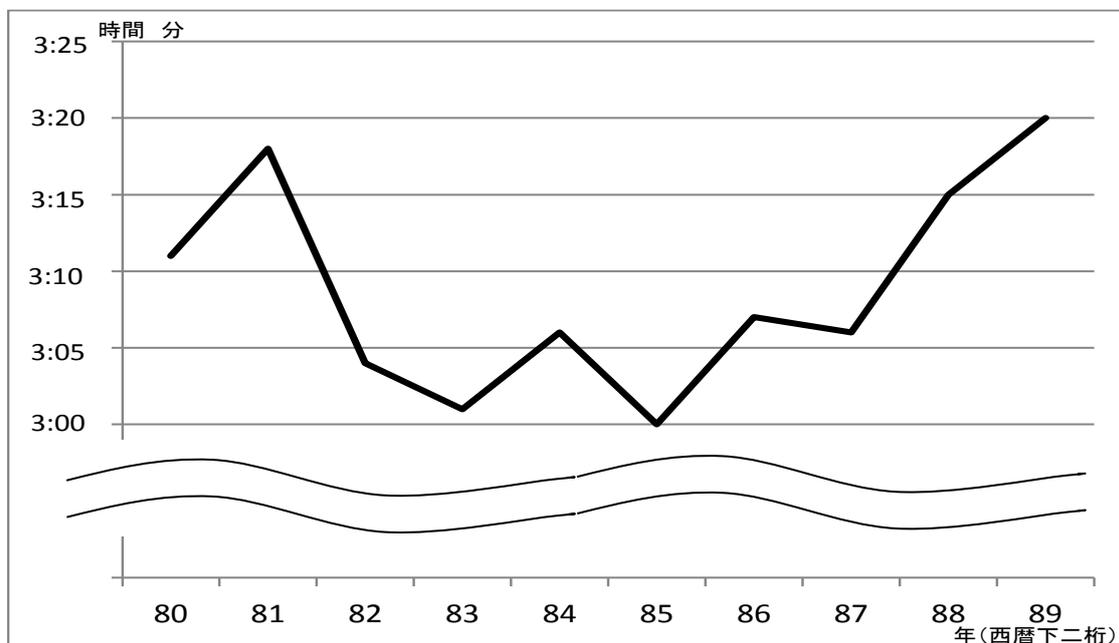


図 31 テレビ視聴時間の推移

図に示したように、視聴時間は、1982年に急落した後、増減を繰り返しながらも、1985年を底とするV字形をなして推移している。視聴時間がV字回復を示すにいたった理由については、新機軸番組の台頭やVTR機材の小型化と中継技術の向上といったテクノロジーの進歩による映像の多様化、あるいは、余暇時間のさらなる増大によるテレビへの回帰など、さまざまな考察が、戸村(1991a)や戸村・白石(1993)らによってなされている。

特に番組については、この時期に、「教養の娯楽化」や「報道の劇場化」という大きな変化が生じ、『クイズ面白ゼミナール』、『なるほど!ザ・ワールド』など教養番組や紀行番組と娯楽番組を融合させたクイズバラエティの台頭<sup>422</sup>や『ニュースステーション』に代表されるニュースショーの出現<sup>423</sup>など、新機軸番組

～『テレビ40年』調査から～『放送研究と調査』1993年2月号, p.5

<sup>421</sup> 戸村栄子「データにみる80年代のテレビ視聴動向」『放送研究と調査』1991年6月号, p.59に掲載の図を元に作成(〈原資料〉「NHK全国視聴率調査」各年6月)。

<sup>422</sup> 1985年の視聴率ベスト10には『クイズ面白ゼミナール』が5位、『なるほど!ザ・ワールド』が6位にランクインしている。

<sup>423</sup> 「1984年には、『ニュースコープ』(JNN・TBS)、『スーパータイム』(FNN・CX)が時間枠を大幅に拡大、装いも新たにスタートした。翌85年には、『ニュースステーション』が(ANB)が夜10時台に80分番組として登場し、ニュース番組としてはこれまでに

が輩出したことが、目にみえる形での変化として挙げられている<sup>424</sup>。生田(1964)は、娯楽番組であっても教養番組となりうると考察していた<sup>425</sup>が、それはジャンルの分別を前提とした議論だった。しかし、1980年代には、テレビ番組におけるジャンルの混淆が進展<sup>426</sup>し、教養番組と娯楽番組が溶融する現象が生じたのである。『NHK年鑑』においても1985年度の編成を記録した『NHK年鑑'86』から、前年度まではあった番組ジャンル別の記載が無くなって、放送時間帯別の記載に変わっている。番組の演出では、タレントの起用、VTR再生の挿入、音楽や効果音の多用などが、「教養の娯楽化」の特徴として挙げられるだろう。1981年に井上が指摘<sup>427</sup>したように、テレビは、1980年代を境として技術や番組の変革に伴う「新しい段階」となったのである。

戸村(1991a)は、1980年代の視聴動向について、1981年頃までを「安定期」、1982年から1987年頃までを「低迷期」としている<sup>428</sup>。戸村(1993)はまた、「国民全体の視聴動向を見る上で、女性はパイロット的役割を果たしている」<sup>429</sup>と評し、「女性の視聴時間がピークとなったのは76年であることは国民全体と同じであるが、最低を記録したのは82年であり、全体が最も低くなった85年より数年早かった」<sup>430</sup>と記している。放送史の上では、1982年度は、テレビ放送開始(1952年度)から30年という節目にあたっており、10月に「テレビ30年調査」が実施された。この時の調査では、「テレビに対して興味のある人」は48%とその前の調査(1974年)から10ポイントも下落<sup>431</sup>し、「テレビ離れ」が視聴意向の点でも鮮明になった。これらのことから1982年度は放送史の上で

---

ない人気を得た。」(上滝徹也「テレビニュースの多様化とその内実」日本放送協会放送文化調査研究所編『放送学研究39』1989, p.173)

<sup>424</sup> 白石信子、井田美恵子「浸透した『現代的なテレビの見方』」『放送研究と調査』2003年5月号, pp.26-55

<sup>425</sup> 生田正輝「第九章 放送内容」日本放送協会放送文化研究所放送学研究室編『放送研究入門』日本放送出版協会, 1964, p.190

<sup>426</sup> 西野(1993)は、1980年代以降の編成動向を分析し、「近年、歌謡曲番組の情報番組化、クイズ番組の知的エンターテインメント番組化など番組のオフ・ジャンル化もますます進んで、番組内容の分類はさらに難しくなっている」と記している(西野泰司「テレビ編成40年の軌跡」『放送研究と調査』1993年2月号, p.20)。

<sup>427</sup> 井上宏「“編成の時代”と編成研究」日本放送協会放送文化調査研究所編『放送学研究33 テレビ新時代—80年代テレビへの展望—』1981, p.123

<sup>428</sup> 戸村栄子「データにみる80年代のテレビ視聴動向 その1 テレビ視聴の変化」『放送研究と調査』1991年6月号, p.67

<sup>429</sup> 戸村栄子「データにみる80年代のテレビ視聴動向その2 視聴動向の特徴」『放送研究と調査』1991年8月号, p.48

<sup>430</sup> 戸村栄子「データにみる80年代のテレビ視聴動向その2 視聴動向の特徴」『放送研究と調査』1991年8月号, p.48

<sup>431</sup> 白石信子、井田美恵子「浸透した『現代的なテレビの見方』」『放送研究と調査』2003年5月号, p.32

一つの画期とみなすことができる。

一方、1982年度から10年後の1992年度はテレビ放送開始40年にあたり、やはり10月に「テレビ40年調査」が実施された。そして、「テレビに対して興味のある人」は54%に回復したのである。また、1992年度には、テレビでの女性向け教養番組『婦人百科』が終了した。これらのことから、1992年度も放送史の一つの画期とみなすことができる。

したがって、本研究では、1982年度から1992年度を女性向け教養番組の歴史における一つの時期区分ととらえ、この時期が放送史の上では、新機軸番組を輩出し、その後のテレビ番組の方向性を決定づけた変化の時期にあたっていることから、テレビ変化期と呼称する。

この時期における女性向け教養番組は、『婦人百科』と『きょうの料理』が継続しており、新たな放送枠は設置されていない<sup>432</sup>。女性向け教養番組の歴史においては、ラジオ草創期に『家庭講座』が創設され、ラジオ戦時期には『戦時家庭の時間』の設置、ラジオ占領期には「性格を一変した」<sup>433</sup>『婦人の時間』の復活や『女性教室』の新設、テレビ発展期には『婦人百科』の新設など、放送史の節目ごとに、その時期を象徴する新番組（放送枠）が設置された。しかし、テレビ変化期には新たな番組（放送枠）は設置されなかった。1980年代における視聴時間の減少は、まず女性層において現れたことから、女性向け教養番組においても、視聴時間量の減少に対して、なんらかの変化が模索されたと想定される。

## 6.2 テレビ変化期の「花」を主題とする講座

### 6.2.1 放送本数の推移

テレビ変化期の『婦人百科』では、「花」、「茶」、「書道」、「短歌」、「俳句」など、さまざまな主題が採り上げられた。このうち、テレビ変化期において毎年度、主題として採り上げられているのは、「花」と「茶」であるが、「花」が毎年度ほぼ毎月一本規則的に編成されているのに対し、「茶」は、1982年度は11月、12月、1月、1983年度は6月、7月、1月、2月、1988年度は6月と2月、1989年度は11月と3月というように、散発的で不定期な編成<sup>434</sup>となっている。

<sup>432</sup> その他の女性向け教養番組では、『女性手帳』が（テレビ発展期末の）1981年度で終了し、『おはよう広場』が1983年度で終了した。

<sup>433</sup> 社団法人日本放送協会編『ラジオ年鑑 昭和二十二年版』日本放送出版協会、1947、p.37

<sup>434</sup> 総合テレビでの本放送のみ、再放送は含まない。なお、1982年度以降、1980年代における「茶」の編成月は、1982年度11月、12月、1月、1983年度6月、7月、1月、2月、1984年度5月、6月、7月、1985年度11月、1月、2月、3月、1986年度5月、10月、2月、1987年度5月、10月、3月、1988年度6月、2月、1989年度11月、3月だっ

また、「書道」は、1983年度までと1988年度にしか採り上げられて<sup>435</sup>おらず、「短歌」と「俳句」は、1984年度までしか採り上げられて<sup>436</sup>いない。

テレビ変化期において、「茶」の放送がテレビ発展期にはあった編成の定期性を喪失したのに対し、「花」は、テレビ変化期においても、その編成の定期性を維持していたことになる。

図32に、テレビ変化期の女性向け教養番組『婦人百科』における「花」を主題とする講座の年度ごと放送本数の推移を示す。

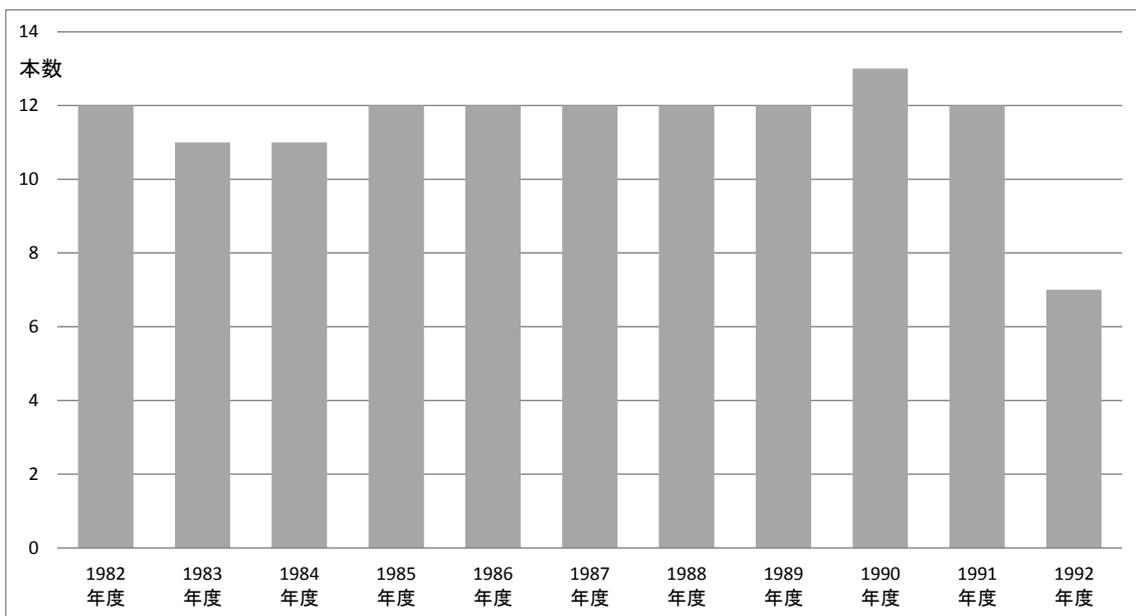


図 32 テレビ変化期の女性向け教養番組における「花」を主題とする講座の年度ごと放送本数（1982年度～1992年度）

テレビ変化期の女性向け教養番組において、「花」を主題とする講座は、126本が放送された。1年度あたりの平均本数は11.5（小数点第二位四捨五入、以下同）、標準偏差は1.5である。

表16は、本研究の各時期区分における「花」を主題とする講座の年度あたり平均本数および標準偏差の一覧である。

た。

<sup>435</sup> 1983年度までは「書道」、1988年度は「実用書道」。

<sup>436</sup> 1984年度まで「短歌入門」および「俳句入門」。1985年度からは、独立した別の放送枠として編成された。

表 16 各時期における「花」を主題とする講座の年度あたり平均本数と標準偏差

時期	平均本数	標準偏差
ラジオ草創期	7.6	3.0
ラジオ戦時期	1.5	1.3
ラジオ占領期	2.4	4.5
ラジオからテレビへの転換期・ラジオ	7.7	11.4
ラジオからテレビへの転換期・テレビ	13.2	11.4
テレビ発展期・第1期(「花」優勢) <sup>437</sup>	10.9	7.5
テレビ発展期・第2期(「花」・「茶」拮抗)	46.2	2.3
テレビ発展期・第3期(「茶」優勢)	15.8	5.2
テレビ変化期	11.5	1.5

数値上でのテレビ変化期における「花」を主題とする講座の特徴は、他の期に比して標準偏差の値が際立って小さいことである。

この表の各時期は本研究での区分であるため、計測期間はそれぞれ異なっている。また、テレビからラジオへの転換期とテレビ発展期・第1期には重複する期間が存在する。そこで、計測期間を10年として、テレビ放送開始の1952年度以後、10年刻みでテレビにおける年度あたり平均本数と標準偏差を求めた結果を表17に示す。

表 17 テレビ放送の各年代における「花」を主題とする講座の年度あたり平均本数と標準偏差

期間	平均本数	標準偏差
1952年度-1961年度	9.6	6.5
1962年度-1971年度	33.1	14.1
1972年度-1981年度	14.1	3.9
1982年度-1991年度	11.9	0.5

テレビ変化期は、この表の1982年度-1991年度に概ね相当するが、この場合でも、他の期に比して標準偏差の値が際立って小さいことに変わりはない。

<sup>437</sup> ラジオからテレビへの転換期のうち、1952年度から1963年度までと重複する。

### 6.2.2 講座の類型と内容

この時期の「花」を主題とする講座は、放送の連続性の観点からは、1992年度末の3回連続講義を唯一の例外として、いずれも1回のみ、すなわち、単発型の講座である。

各回の副題は、1982年度が毎月ごとに「1月のいけばな」、「2月のいけばな」とその月の数を冠したものとなっている<sup>438</sup>のを始め、1983年度以降でも、「秋草」、「正月」、「春の色」（1983年度）、「涼しさ」、「夏草」、「秋草」、「正月」、「春の芽」（1984年度）、「春の彩」、「初夏」、「涼」、「小さい秋」、「秋の実」、「晩秋」、「迎春」（1985年度）、「新緑」、「夏」、「秋草」、「みのりの秋」、「冬」、「春の一輪」（1986年度）、「春の光」、「涼しさ」、「秋の訪れ」、「ゆく秋」、「正月」（1987年度）、「春らんまん」、「初夏の彩り」、「涼風」、「秋の表情」、「迎春」、「春風」（1988年度）、「陽光のみどり」、「緑の風」、「夏の花」、「秋の色」、「枯れ色の秋」、「迎春の松」、「早春」、「春のパーティー」（1989年度）、「淡色の春」、「涼しさ」、「涼をよぶ」、「秋の光」、「早春の息吹」（1990年度）、「春の光」、「新緑」、「初夏」、「晩秋」、「初春」（1991年度）、「雨の風情」、「みのり」、「正月」、「陽春」（1992年度）というように、ほとんどが時節を表すものである。一方、テレビ発展期の連続型講座での副題に付せられていた「いけ方」、「花型」、「基本」、「基礎」といった入門性を表す語は、1993年1月の「はじめてのあなたに」を除いて、この期の副題には付せられていない。

これらのことから、この期の「花」を主題とする講座には、単発型で季節性を主旨とするものがほとんどであったといえる。

季節性を主旨とする単発型講座を毎月1本放送するという形態は、第5章で示したとおり、テレビ発展期の末期である1980年度に出現した編成であるが、テレビ変化期の末期まで踏襲されている。その様相を図33に示す。

---

<sup>438</sup> 毎月ごとにその月の数を冠した副題が付せられるのは、テレビ発展期末の1980年度、1981年度から3年度連続してのことである。

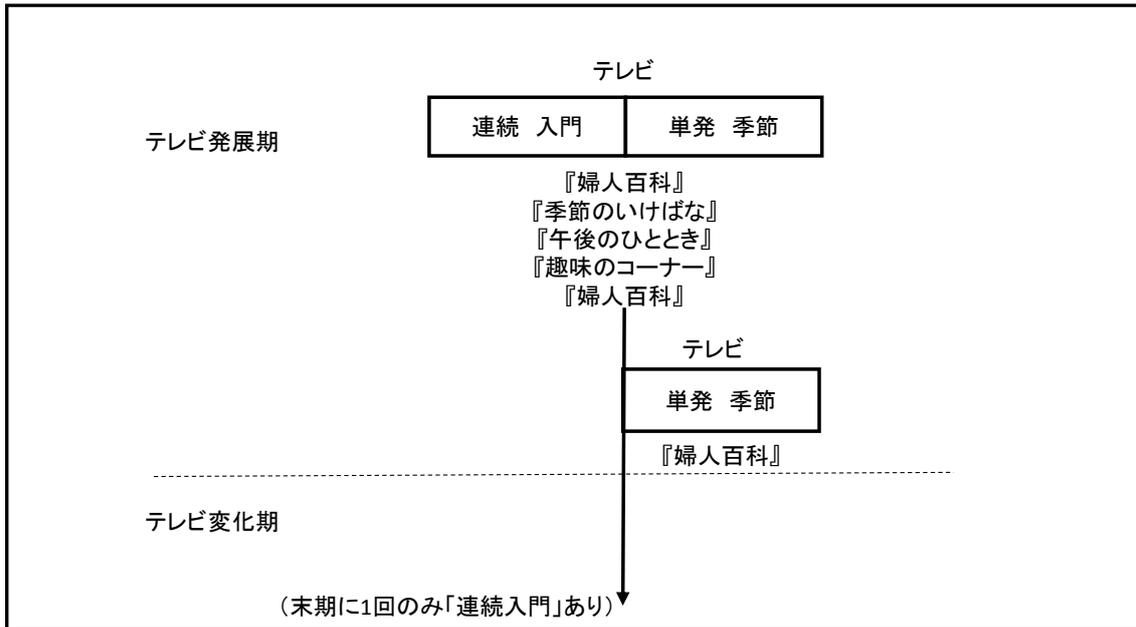


図 33 テレビ発展期からテレビ変化期にかけての女性向け教養番組における「花」を主題とする講座の類型

### 6.2.3 出演者の構成

講師の出演回数では、表 18 に示すように、細分化が進んでおり、際立って多くの出演をしている者は現れない。

表 18 テレビ変化期の女性向け教養番組における「花」を主題とする講座での出演回数ごとと人数

出演回数	6	5	4	3	2	1
人数	1	3	7	9	10	30

### 6.3 副題の形態素解析による内容分析の細分化

テレビ変化期の「花」を主題とする講座は、放送の頻度は月 1 本（期間中 2 度の例外を除く）と定期的であり、連続性の観点からは単発型で一貫しており、副題に示された内容は季節性を主旨とするものがほとんどであり、出演者の構成にも際立った変化が無いといえる。

このように、テレビ変化期のさなかにあるにもかかわらず、女性向け教養番組における「花」を主題とする講座には、表立った変化が現れていない。

とはいえ、副題の記述をより仔細に観察すると、年度を追って、わずかな変

化を認めることができる。表 19 は、1980 年代初頭にあたる 1980 年 4 月、中期にあたる 1985 年 4 月、末期にあたる 1989 年 4 月における、それぞれの副題を比較したものである。

表 19 テレビ変化期の女性向け教養番組における「花」を主題とする講座の時期別副題

放送年月	副題
1980 年 4 月	4 月のいけばな
1985 年 4 月	いけ花—春の彩をいける
1989 年 4 月	陽光のみどりをいける

表に示したとおり、1980 年 4 月の副題は、「4 月のいけばな」と時節（4 月）を表す名詞に「いけばな」という名詞を付した記述であったのが、1985 年 4 月には、「いけ花—春の彩をいける」と「いけ花」という名詞に「春」という季節を表す名詞と「いける」という動詞が付記され、1989 年 4 月には、「陽光のみどりをいける」となって、「いけばな」や「いけ花」など「花」を表す名詞が消失、「陽光」、「みどり」という季節を表す名詞に「いける」という動詞を付した記述となっている。

こうした変化が 1980 年代を通じて、なんらかの規則性をもって生じたものなのか、また、「花」を主題とする講座だけでなく、この年代の女性向け教養番組全体に生じたものなのかを検証するために、本節では、『番組確定表』に記載された番組副題に対して形態素解析をおこない、品詞分布の変遷によって内容の変化を分析する。

番組副題とは、放送枠名とは別に、その放送回の主題を端的に示すために付されるものである。この副題に対して形態素解析を用いて品詞分布の変遷を分析することにより、当時の番組内容の変化を数量的に把握することが可能であると考えられる。

なお、テレビ番組に対して形態素解析を用いた研究は、金・江原・相沢（1992）「形態素解析情報に基づく長い日本語ニュース文の分割」<sup>439</sup>や三上・増山・中川（1999）「ニュース番組における字幕生成のための文内短縮による要約」<sup>440</sup>がある。ただし、いずれもニュース番組の内容を短縮化するための技術的方法を探るものであって、番組内容の精査を目的としたものではない。

季節性を主旨とする連続型講座が月 1 本定期的に放送される編成の形態は、テレビ発展期末の 1980 年度から発生していることから、調査の対象期間は、本

<sup>439</sup> 『情報処理学会第 44 回全国大会講演論文集(人工知能及び認知科学)』1992, pp.179-180

<sup>440</sup> 『自然言語処理』第 6 巻第 6 号, 1999, pp. 65-81

研究でテレビ変化期と規定した 1982 年度から 1992 年度までに、1980 年度および 1981 年度を加え、期をまたいだ変遷を調査し、分析する。

以下、本節では、まず、1980 年度から 1992 年度までの期間における、女性向け教養番組『婦人百科』の副題に対して形態素解析をおこない、その結果を示す。次に、そのうちで、特に「花」を主題とする講座の副題についての解析結果を抽出する。その上で、解析結果に基づき、テレビ変化期における「花」を主題とする講座について考察する。

調査対象期間における『婦人百科』の放送本数は 2411（総合テレビでの本放送のみ、総合テレビおよび他の放送波での再放送を除く。ただし、総合テレビでの本放送が休止され再放送枠が初回放送となった場合、および本放送と再放送が共に休止され教育テレビ枠での放送が初回放送となった場合を加える）である。

形態素解析は、まず副題から放送枠名（『婦人百科』）や記号などを取り除くクリーニングをおこない、次にオープンソース型の形態素解析エンジン MeCab<sup>441</sup>を用いて解析を実施<sup>442</sup>した。たとえば、1990 年 1 月 29 日に放送された『婦人百科』における番組副題「早春のはずむ心をいける」は、「早春 名詞」、「の 助詞」、「はずむ 動詞」、「心 名詞」、「を 助詞」、「いける 動詞」というように解析した。

こうした解析をおこなった上で、年度ごとに動詞、形容詞、形容動詞、名詞、代名詞、連体詞、副詞、感動詞、助詞、助動詞の出現数を数え、出現率を算出した。

調査期間として設定した 1980 年度から 1992 年度まででの『婦人百科』の副題における年度ごとの品詞分布について、出現数を表 20 に示す。また、出現率の変化を視覚的に把握する一助として図 34 を示す。

表 20 『婦人百科』の副題における年度ごとの品詞分布（出現数）

<sup>441</sup> MeCab 0.996 を用いた。

<sup>442</sup> MeCab の文法ルールや辞書による解析の結果に対しては、適宜修整を加えた。たとえば、1982 年 9 月 6 日に放送された『婦人百科』における番組副題「9 月のいけばな ー清風瓶華ー」においては、MeCab によって「いけばな」は「いけ 動詞、自立」、「ば 助詞、接続助詞」、「な 助詞、終助詞」と解析されるが、「いけばな」としてまとめ、一つの名詞とした。また、この例における「清風瓶華」を始めとして、「古流松藤会」、「つり花」、「かけ花」、「小品花」、「温室花」、「夏草」、「秋草」、「枯れ物」、「花木もの」、「涼しさ」、「テーブルコーディネート」、「春らんまん」、「投げ入れ花」などは複数の名詞に分解されるが、複合名詞として、一つにまとめた。また、「華やかに」、「身近な」、「清楚に」などは形容動詞語幹と助詞に分解されるが、一つの形容動詞とした。動詞では「いけなおす」、「いけ直す」などを一つの動詞とした。なお、MeCab の解析では、品詞に加えて品詞細分類が呈示される場合があるが、本研究では細分類は考慮していない。

品詞	年度	1980	1981	1982	1983	1984	1985	1986	1987	1988	1989	1990	1991	1992
動詞		70	55	80	69	98	133	121	95	115	113	87	129	96
形容詞		4	16	8	24	20	24	12	8	16	18	9	20	9
形容動詞		3	13	11	11	20	15	23	18	13	24	20	28	45
名詞		603	551	542	565	561	576	569	552	596	583	620	582	606
代名詞		0	0	0	0	0	0	1	4	6	7	9	0	29
連体詞		1	0	0	0	4	2	8	3	4	3	7	6	4
副詞		0	0	0	0	1	2	0	5	1	2	2	30	29
感動詞		0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0
助詞		231	222	221	283	322	338	332	328	353	342	321	330	385
助動詞		1	2	0	4	10	11	5	6	9	6	4	4	14
総計		913	859	862	956	1035	1099	1071	1014	1112	1096	1077	1099	1188
(参考)														
放送本数		188	185	185	186	182	188	185	186	182	186	182	184	192

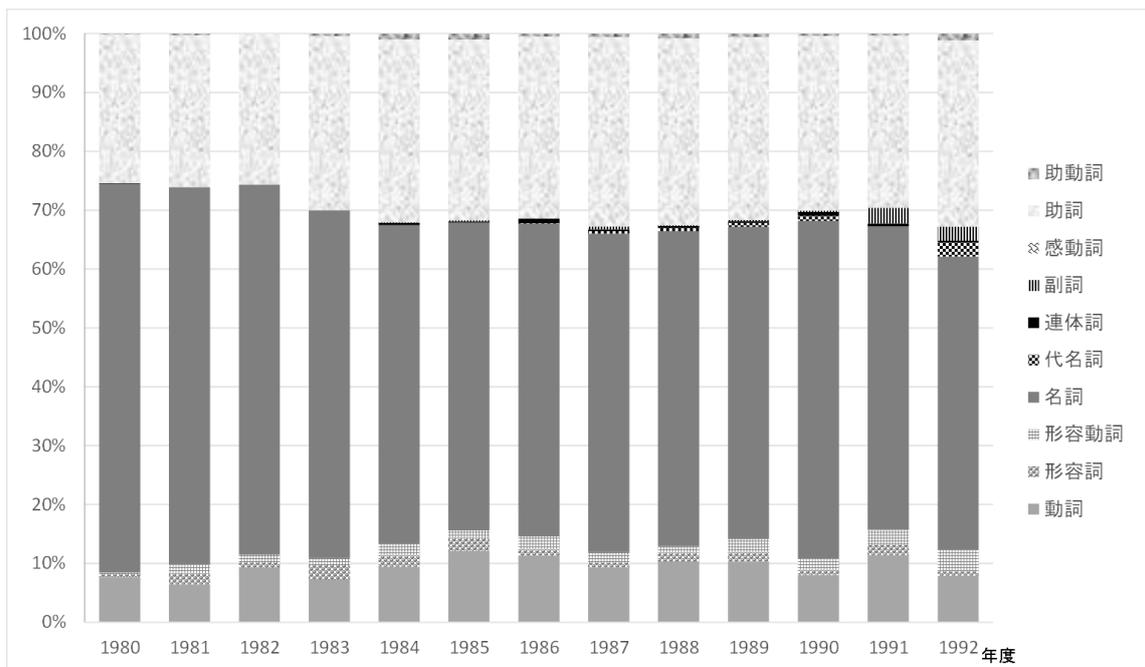


図 34 『婦人百科』の副題における年度ごとの品詞分布（出現率）

この期間における『婦人百科』全放送回での名詞の出現率は、1982年度までは60%台（小数点第1位四捨五入・以下同）であったものが、1983年度に59%に減少し、1984年度に54%となって以降、1980年代は50%台前半で推移している。1990年代に入ると、1990年度のみは一旦50%台後半に増加するが、1991年度からはまた50%台に減少する。一方、この期間における『婦人百科』全放送回での動詞の出現率は、1980年度には8%だったものが、1985年度に12%を記録し、その後、1987年度の9%を除き1980年代は10%台で推移している。

これらのことから、テレビ変化期の女性向け教養番組『婦人百科』では、概ね1984年度から1985年度あたりを境として、名詞の出現率が減少し動詞の出現率が増加するという変化の度合いが大きくなった<sup>443</sup>ことが確認できる。

続いて、テレビ変化期における『婦人百科』での、「花」を主題とする講座の副題に対する形態素解析の結果のみを抽出して、出現数を表21に示す。また、出現率の変化を視覚的に把握する一助として図35を示す。

調査対象期間（1980年度-1992年度）における「花」を主題とする講座の総放送本数<sup>444</sup>（総合テレビでの本放送を算出の対象とするが、本放送休止により教育テレビのみの放送となった場合も対象に加えた）は、150である。

表 21 「花」を主題とする講座での年度ごとの品詞分布（出現数）

品詞 \ 年度	1980	1981	1982	1983	1984	1985	1986	1987	1988	1989	1990	1991	1992
動詞	0	0	0	8	11	12	13	11	11	13	13	12	7
形容詞	0	0	0	0	0	1	2	0	0	0	0	0	0
形容動詞	0	0	0	0	1	1	1	0	0	0	1	0	0
名詞	24	24	26	25	18	31	21	21	21	24	25	26	18
代名詞	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
連体詞	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0
副詞	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
感動詞	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
助詞	12	12	12	17	14	21	17	18	17	23	24	23	15
助動詞	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
総計	36	36	38	50	44	66	56	50	49	60	63	61	40
(参考)													
放送本数	12	12	12	11	11	12	12	12	12	12	13	12	7

<sup>443</sup> 助詞も1984年度あたりを境として出現数および出現率が増えている。これは動詞の増加に伴って名詞と動詞をつなぐ役割を果たす助詞の数も増加したためと考えられる。

<sup>444</sup> 再放送は含まない。

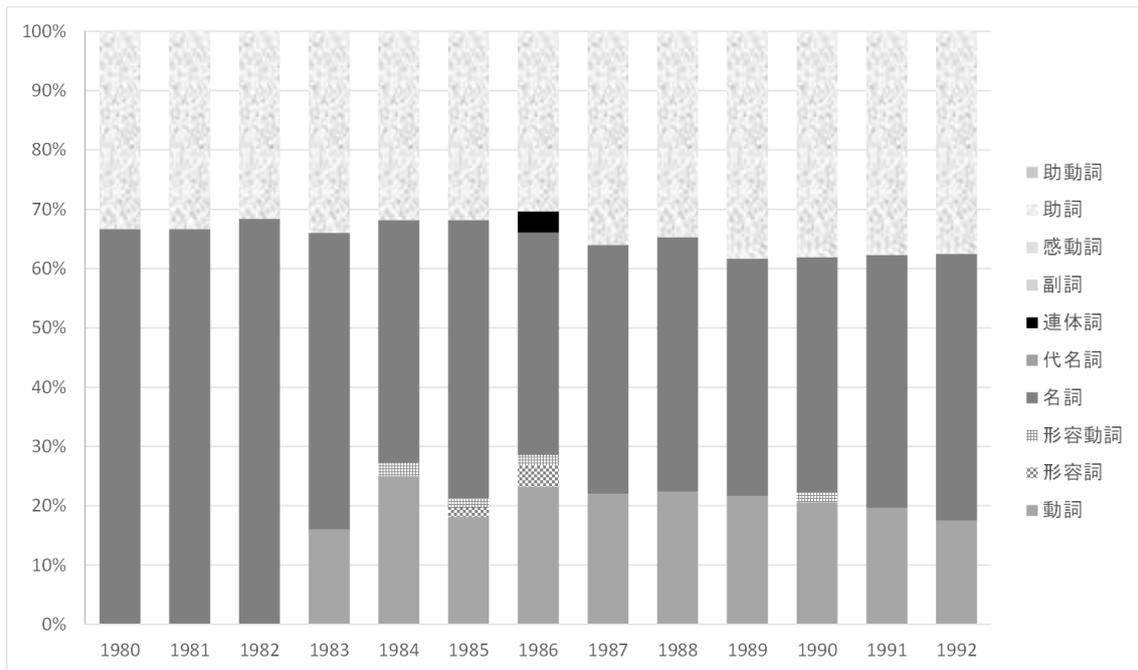


図 35 「花」を主題とする講座での年度ごとの品詞分布 (出現率)

名詞の出現率は1980年度から1982年度までは67~68%と全体の三分の二以上だったが、1983年度には、50%に比率を落とし、1984年度以降は、概ね40%台(1986年度のみ38%)で推移している。

一方、1980年度から1982年度までの3年間はまったく使われていなかった動詞が、1983年度から出現し、1984年度以降の出現率は1985年度および1992年度の18%を除き20%台で推移している。

これらのことから、「花」を主題とする講座においても1980年代中頃から名詞と動詞の出現率に変化が生じたことが明らかである。そして、その変化の現れ方を、『婦人百科』全体の変化のそれと比較すると、1980年代中頃を境として名詞の出現数および出現率の減少と動詞の出現数および出現率の増加が際立つという点で、変化の傾向は概ね合致していると認められる。また、比率の変動は「花」を主題とする講座のほうが『婦人百科』全体より大きいことから、「花」を主題とする講座における変化が『婦人百科』全体の変化に影響している可能性がある<sup>445</sup>といえる。

そこで、「花」を主題とする講座について、より詳細に分析することとし、副

445 調査期間(1980年度-1992年度)での名詞の年度ごと比率遷移における、『婦人百科』全放送回と「花」を主題とする講座の相関係数は $r=0.883381$ 、動詞の年度ごと比率遷移における、『婦人百科』全放送回と「花」を主題とする講座の相関係数は $r=0.544035$ である。1980年代(1980年度-1989年度)での名詞の年度ごと比率遷移における、『婦人百科』全放送回と「花」を主題とする講座の相関係数は $r=0.945815917$ 、動詞の年度ごと比率遷移における、『婦人百科』全放送回と「花」を主題とする講座の相関係数は $r=0.630857$ である。

題に現れた語句のうち、名詞「いけばな」と動詞「いける」を抽出した。副題には表記揺れがあるため、名詞「いけばな」には、「いけ花」、「生花」を含め、動詞「いける」には、「生ける」、「活ける」を含めることによって統制した。また、名詞「お花」および複合動詞「いけ直す」も、この時期の副題においては、それぞれ「いけばな」または「いける」と同様の意味で用いられているものとみなして、「いけばな」または「いける」に分別した。

統制を加えて抽出した「いけばな」と「いける」の比率の年度ごと推移を図36に示す。

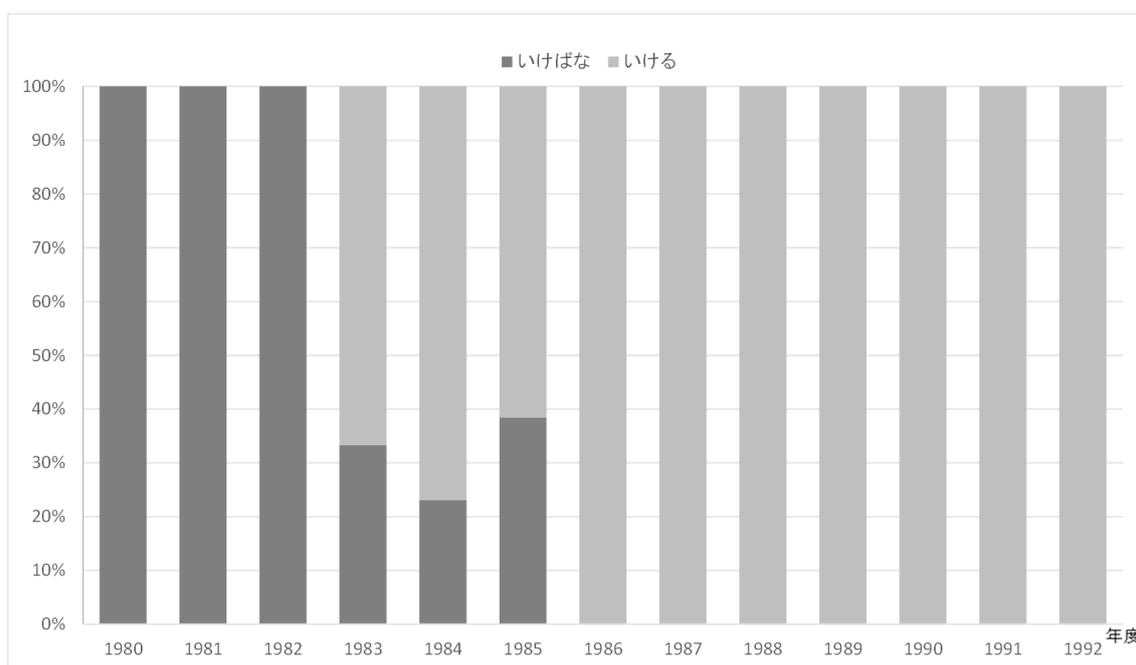


図 36 「花」を主題とする講座における「いけばな」と「いける」の年度ごと比率推移

図36に示すとおり、1980年度から1982年度までの3年間は、「いけばな」のみで、「いける」は現れない。1983年度から1985年度までの3年間は、「いける」と「いけばな」が共存し、割合は「いける」のほうが大きい。1986年度から1989年度以降は、「いける」のみで「いけばな」は現れない。テレビ変化期の『婦人百科』における「花」を主題とする講座は、ほとんどが単発型の季節性を主旨とする内容で一貫している。しかし、その副題の品詞分布には、名詞「いけばな」から動詞「いける」へという遷移が生じていたことになる。

以上、本節では、『番組確定表』の調査に基づいて、テレビ変化期（テレビ発展期の末期2年度を含む）における、女性向け教養番組『婦人百科』の副題および、そのうちの、「花」を主題とする講座の副題に対して、形態素解析をおこなった結果について記した。次節以降では本節の結果について考察する。

#### 6.4 品詞分布の遷移および番組概要の変遷と社会情勢

調査で明らかになった 1980 年代中頃からの『婦人百科』番組副題における、名詞と動詞の比率変化、および、「花」を主題とする講座における名詞「いけばな」から動詞「いける」への遷移には、なんらかの要因が介在していると考えられる。

各年度の『NHK 年鑑』<sup>446</sup>によれば、1980 年代における『婦人百科』の番組（放送枠）概要は、表 22 のように推移している。

表 22 1980 年代における『婦人百科』番組（放送枠）概要の年度ごと変遷

年度	番組（放送枠）概要
1980	家庭婦人を対象とする趣味と教養を兼ねた実用番組。
1981	家庭婦人を対象とする趣味と教養を兼ねた実用番組。
1982	家庭婦人を対象とする趣味と教養を兼ねた実用番組。
1983	家庭婦人を対象とする趣味と教養を兼ねた実用番組。
1984	家庭婦人を対象とする趣味と教養を兼ねた実用番組。
1985	家庭婦人を対象とする、実技指導を中心にした実用番組。
1986	家庭婦人を対象とする、実技指導を中心にした実用番組。
1987	家庭婦人を対象とする、実技指導を中心にした実用番組。 また、“男性”も視聴者に取り込む編成をした。
1988	主に家庭婦人から男性までを対象とする実技指導を中心とした実用番組。
1989	主に家庭婦人を対象に、男性までを含めた、実技指導中心の実用番組。

表 22 に示したように、『婦人百科』の番組概要は、1985 年の時点でそれまでと異なるものに変化している。1984 年度までは「趣味と教養を兼ねた」実用番組だったが、1985 年度以降は「実技指導を中心にした」実用番組となった。また、対象視聴者層についても、1986 年度までは「家庭婦人」のみが対象だったが、1987 年度から「男性」も対象に加える記述が出現する。これらのことから、1980 年代における『婦人百科』は、その対象視聴者層と番組概要に基づき、三つの時期に区分できる。表 22 を整理して、その区分を示せば表 23 のようになる。

<sup>446</sup> 『NHK 年鑑'81』－『NHK 年鑑'90』

表 23 1980年代『婦人百科』の時期区分

時期区分(年度)	対象視聴者層	番組概要
I (1980-84)	家庭婦人	趣味と教養
II (1985-86)	家庭婦人	実技指導
III (1987-89)	家庭婦人と男性	実技指導

表 23 に示したように、『婦人百科』においては、1980年代の半ば以降において、まず番組概要が「趣味と教養」から「実技指導」へと転換された。次いで、対象視聴者層（家庭婦人）の限定を緩和して男性を付加することがおこなわれた。

そこで、本節では、まず、「番組の概要」における記述の変化と副題における名詞と動詞の比率推移の関係について検討<sup>447</sup>する。

「番組の概要」においては、1984年度までは「趣味と教養」がキーワードとなっていたが、1985年度以降は、「実技指導」がキーワードとなっている。

山口明穂編『国文法講座』は、名詞と動詞を対比して論じ、「意味の面からの分類」において、名詞を「ア、事物の名称を表す」ものとし、動詞を「イ、動きのある事態を表す」ものとした上で、「この、意味の面からの分類は、語の形に対応する。アが活用しないのは事物を静の物として捉えたからと考えられる。それに対して、イは動であり、それは刻々と変化していく。変化しない事物、変化する動き、その捉え分けが、アとイとの間の活用しない、するの違いに反映していると考えられる」と述べている<sup>448</sup>。

本研究は、この考え方に立脚し、名詞は事物を「静の物」として捉える性格を有するものとし、動詞は事物を「動（の物）」として捉える性格を有するものとして規定する。

「番組の概要」に現れる「趣味と教養」および「実技指導」は共に名詞ではあるが、前者の「趣味と教養」が「静の物」である名詞「趣味」と「教養」を併置した表現であるのに対し、後者における「指導」はサ変動詞「する」と複合して「指導する」となりうることから動作の意味合いを強く持つ、すなわち、「動」としての性格を有しているといえる。

したがって、「趣味と教養」から「実技指導」へと制作方針が移行されたこと

<sup>447</sup> 語彙指標の計量による内容分析には、鈴木・景浦（2011）による「名詞の分布特徴量を用いた政治テキスト分析」（『行動計量学』第38巻第1号，2011，pp.83-92）があり、国会演説に含まれる名詞を抽出して、それぞれの特徴を分析した結果、小泉純一郎の国会演説が「他の総理大臣に比べて多様な語彙を含み、また、特定語彙への偏りが小さい、すなわち、繰り返しが少ないことによって特徴づけられること」（p.89）を指摘している。

<sup>448</sup> 山口明穂編『国文法講座 別巻 学校文法—古文解釈と文法』明治書院，1988，pp.17-18

と、「静の物」である名詞を使う表現から「動」である動詞を使う表現へと副題における比率が遷移したこととは、呼応しているとみなすこともできるだろう。

次に、『婦人百科』の対象視聴者層が「家庭婦人」のみから「家庭婦人と男性」へと変化したことと副題における名詞と動詞の比率推移の関係について検討する。

対象視聴者層が変化したこと背景には、女性の社会進出によって、家庭にいる女性（家庭婦人）という対象視聴者層の存在が相対的に希薄化したことがある。既に1976年度から『婦人百科』は夜9時台に再放送枠が設けられ、「勤労者や忙しい人たちの要望にこたえ」<sup>449</sup>ていたことも、これを裏付けるといえる。古田（1999）は「『婦人百科』の夜9時台の再放送は、働く女性の増加へのいち早い対応」<sup>450</sup>だったとしている。家庭にいる女性の存在が希薄化した結果が、対象視聴者層において、1987年度以降、表22に示した、「家庭婦人（家庭にいる女性）」のみから「男性も」、「男性までを」、「男性までを含めた」といった記述への変化を生んだのである。なお、対象視聴者層の拡大は、1984年度の組織改正によって、『婦人百科』の担当部局が、それまでの家庭部から新たに設けられた生涯教育部へと移管されたこととも関連していよう。

対象視聴者層が変化したこと背景にはまた、女性の社会進出に加えて、日本人の余暇の過ごし方の多様化も介在していると考えられる。

日本人の余暇の過ごし方の変化に教養番組のあり方が呼応することは、第5章に記したとおり、1960年代末に荒牧（1968）が指摘していた<sup>451</sup>ことであった。

また、同じ頃に見田・吉田（1967）は、教養番組の将来は「スタティックな教養からダイナミックな教養へ」という『教養』概念そのものの不可避的な変革を制作者たちがどのように自覚して先取りしていくか<sup>452</sup>が問題であると述べていた。1980年代に、女性向け教養番組である『婦人百科』の番組概要に示された制作方針の変化は、見田らの先見的な指摘を制作者たちが具現化した結果であるともいえる。

一方、『婦人百科』の対象視聴者層における「女性」の希薄化は、「花」を主題とする講座の副題における名詞「いけばな」から動詞「いける」への遷移とも関連していると考えられる。

---

449 日本放送協会総合放送文化研究所放送史編修室編『NHK年鑑'77』日本放送出版協会、1977、p.121

450 古田尚輝「『技能講座』から『趣味講座』へ ～教育テレビ40年 生涯学習番組の変遷～」『放送研究と調査』1999年11月号、p.46

451 荒牧富美江「テレビ放送における婦人番組の変遷」『立正女子大学短期大学部研究紀要』第12号、1968、p.34

452 見田宗介、吉田潤「教養番組視聴の構造 視聴にみられる理念と行動のずれ」『放送文化』1967年4月号、p.11

なぜならば、「花」は、明治以降、女性の嗜むものとなり<sup>453</sup>、1986年の「社会生活基本調査」<sup>454</sup>によれば、「花」（この調査では「華道」）の行動者率は男性0.3%に対し女性12.1%と女性が男性の40倍強であって、「いけばなは女性のもの」というイメージが極めて強固だった。女性のみでなく、男性をも対象視聴者層に含めるとすれば、女性向けというイメージが強い「いけばな」という語を避ける傾向が生まれるのは自然である。1980年代の副題において、当初、「いけばな」のみであったものが、「いける」が出現し、やがて「いけばな」が消失するに至ることは、このことを反映したものだったのではないだろうか。

1980年度以降における女性向け教養番組『女性百科』での、「花」を主題とする講座は、当初3年間は副題に「いけばな」のみが用いられ、その次の3年間は副題に「いけばな」と「いける」が併存し、それ以降は副題には「いける」のみが用いられる、というように、期を追って変化している。テレビ変化期の「花」を主題とする講座は、副題における名詞「いけばな」と動詞「いける」の比率推移によって、名詞「いけばな」のみの時期、名詞「いけばな」と動詞「いける」が併存する時期、動詞「いける」のみの時期の三つに区分できることになる。

戸村(1991a)は、1980年代の視聴動向について、三つの時期に区分し、1981年頃までを「安定期」、1982～87年頃までを「低迷期」、1988年頃からを「展開期」とした<sup>455</sup>。「花」を主題とする講座における「いけばな」と「いける」の比率推移が示す三つの時期区分は、この戸村の時期区分と1年程度の階差を持って概ね符合している。戸村は、1982年から1987年頃までの「低迷期」を「テレビの送り手は視聴者との新しい関係を模索していたように見える」<sup>456</sup>時期としている。この「模索」が、「いけばな」から「いける」へと遷移する過程での両者の併存に現れているとみなすこともできるだろう。

1980年代だけではなく、それ以前をも視野に入れて俯瞰してみれば、1970年代の『婦人百科』での「花」を主題とする講座においても、動詞「いける」は、1973年度と1974年度を除き、各年度に出現していた。しかし、それは、「花」を主題とする講座が、入門性を主旨とする連続型講座を併せ持っていた時代のことだった。1980年代においては、「花」を主題とする講座は、季節性

---

<sup>453</sup> 工藤昌伸『日本いけばな文化史 四 近代いけばなの確立』同朋社出版、1993、pp.98-100

<sup>454</sup> 総務庁統計局編『昭和61年社会生活基本調査報告 全国 生活行動編 その2』財団法人日本統計協会、1988、p.26

<sup>455</sup> 戸村栄子「データにみる80年代のテレビ視聴動向 その1 テレビ視聴の変化」『放送研究と調査』1991年6月号、p.67

<sup>456</sup> 戸村栄子「データにみる80年代のテレビ視聴動向 その1 テレビ視聴の変化」『放送研究と調査』1991年6月号、p.67

を主旨とする単発型講座に収斂した結果、当初の3年間は、その副題は、当該月の数詞を冠するだけのものに単純化することとなった。その副題に、1980年代半ばから「いける」が出現し、やがて「いけばな」に取って代わって「いける」のみとなるのは、単発型の季節性のみで収斂したとはいっても、時代の変化への対応を余儀なくされた結果だったとも考えられる。

テレビ変化期において、番組の形式には表立った変化がなかった女性向け教養番組『婦人百科』では、女性の社会進出および余暇活用の多様化という社会情勢に呼応して、番組概要が変化しており、その変化の様相は、副題の形態素解析による品詞分布の推移にも現れたといえる。また、特に「花」を主題とする講座では、対象視聴者層の位置づけの変化が、副題における名詞「いけばな」から動詞「いける」への遷移と同期して現れたといえる。

## 6.5 女性向け教養番組における「花」を主題とする講座の終結

テレビ変化期以降、日本におけるテレビの視聴時間は、「1985年前後を底に、再び増加の道をたどりはじめ（中略）、95年に3時間30分を超え、」<sup>457</sup>2003年頃には「3時間45分前後にまで伸びて安定」<sup>458</sup>する。そして、その後、インターネットが台頭するまでの間、テレビは概ね安定した視聴時間量を保ち続けることになる。

一方、女性向け教養番組にとって、1980年代は、その理念の変容へと向かう時期でもあった。1987年度から『婦人百科』の対象視聴者層に男性が加えられ始めた時点で、1925年のラジオ放送開始以来、連綿として受け継がれてきた「女性向け」という類別は意義を失った。その背景にある社会変化には、男女雇用機会均等法が1985年に制定され、翌86年より施行されたことも付加することができよう。女性が「家庭にいる」べき者とのみ見なされた時代がはるかに遠くなった時点で、女性向け教養番組における「文化の機会均等」は、その使命を終えたともいえる。

そして、1980年代における社会情勢はまた、女性向け教養番組の中核的テーマだった「花」にもその位置づけの変化を招いていた。今井（2000）は、「いけばなにおける沈滞要因の考察」において、すでに「いけばな人口は高度成長時代の1970年前後にピークを迎えた以降、減少傾向に」<sup>459</sup>転じていたと記している。

---

457 白石信子、井田美恵子「浸透した『現代的なテレビの見方』平成14年10月『テレビ50年調査』から」『放送研究と調査』2003年5月号、p.34

458 白石信子、井田美恵子「浸透した『現代的なテレビの見方』平成14年10月『テレビ50年調査』から」『放送研究と調査』2003年5月号、p.34

459 今井孝司「いけばなにおける沈滞要因の考察（2）今日の問題の考証」『京都精華大学紀要』第18号、2000、p.108

そして、「女性のライフスタイルが変化したことを受け、いけばなを習おうと考えた場合、親戚縁者の勧誘や紹介ではなく、自由に流派を選べるとするなら、かわいい花を展開している彩色挿花の流派か、フラワー・デザインを選ぶことになる」<sup>460</sup>と考察している。

1991年におこなわれた「社会生活基本調査」では、「花」（この調査では「華道」）の行動者率は男性0.15%（小数点第3位四捨五入・以下同）、女性6.89%と5年前の調査に比して、男女ともほぼ半減した<sup>461</sup>。女性のものというイメージを払拭する暇もなく、「花」は急速に「沈滞」へと向かったのである。

『婦人百科』の「花」を主題とする講座では、「花」が「沈滞」しつつある状況下で、変化への模索が続けられていたことになる。そして、この変化は、1990年代での、女性向け教養番組における新番組の設置へとつながる動きによって、さらに顕著となる。

表24は、1990年度から『婦人百科』が終了する1992年度までの年度ごと編成方針を示す番組（放送枠）概要<sup>462</sup>を列挙したものである。

表 24 1990年代における『婦人百科』番組（放送枠）概要の年度ごと変遷

年度	番組（放送枠）概要
1990	手工芸やニット・和洋裁など実際に作り上げることを知る実用番組。 女性ばかりでなく男性のニーズにもこたえられるカルチャーセンター的要素も盛り込んで放送した。
1991	手工芸・ニット・和洋裁などの実用番組。 ファッション・いけばな・茶の湯など季節のグラビア的な要素も含めて編成した。
1992	手工芸・ニット・和洋裁などの生活実用番組。 4年度 <sup>463</sup> からは月曜を「おしゃれタイム」として新設、装いや住環境のワンランクアップのための情報で内容の充実を図った。

表24に示した番組（放送枠）概要を、表22に示した1980年代における『婦人百科』の番組（放送枠）概要と比較すれば、いずれにおいても「実用番組」

<sup>460</sup> 今井孝司「いけばなにおける沈滞要因の考察（2）今日的問題の考証」『京都精華大学紀要』第18号，2000，p.117

<sup>461</sup> 総務庁統計局編『平成3年社会生活基本調査報告 第4巻 全国生活行動編（その2）（趣味・娯楽，社会的活動，旅行・行楽）』総務庁統計局，1993，pp.94-97。男女の行動者率の比は女性が男性の46倍ほどで5年前よりも女性の割合が大きくなっている。

<sup>462</sup> 日本放送協会放送文化調査研究所放送情報調査部編『NHK年鑑'91』-『NHK年鑑'93』日本放送出版協会，1991-1993に拠る。

<sup>463</sup> 原文ママ。元号表記、平成4年度の意。

と定義されていることに変わりはないが、1980年代にあった「趣味と教養」や「実技指導」といった語に代わって、「手工芸・ニット・和洋裁」という個別の主題を表す語が文頭に掲げられている。「花」（いけばな）は「ファッション」や「茶」（茶の湯）と並んで1991年度の記述に現れているが、「季節のグラビア」と規定されており、テレビ発展期の末から続く「季節性」を主旨とする講座のみへの収斂が、明確に概要に謳われるに至っている。視聴対象者層に関する記述では、1980年代には残っていた「家庭婦人」という語が1990年代には消失した。1925年の放送開始以来、「家庭にいる女性」を対象としてきた女性向け教養番組は、ここに至ってその対象を喪失したといえる。1990年度にはまだ「女性ばかりでなく男性のニーズにも」という記述があり、視聴対象者層の性別への留意が示されているが、1991年度以降は、視聴対象者層そのものの記述がなくなっている。女性向け教養番組は、もはや「女性向け」ではなく、「男性向け」でもなく、特定の層を対象としない番組に変成したのである。

それ以外の記述では、1990年度には「カルチャーセンター的要素」を、1991年度には「グラビア的な要素」を盛り込み、1992年度には「おしゃれタイム」を（月曜日のみ、いわば放送枠内の放送枠として）新設というように、毎年度、なんらかの試みがなされており、新機軸番組への模索が番組形式の上でもおこなわれるようになったことが示されている。

『婦人百科』における副題の品詞分布では、動詞出現率は1990年度8%、1991年度10%、1992年度8%と推移し、名詞出現率は1990年度58%、1991年度53%、1992年度51%と推移している。名詞出現率が、1984年度以降50%台前半で推移していたものが1990年度に一旦50%台後半に増加した後、再び50%台前半に減少するという動きであり、動詞出現率が、1990年度の一桁台から1991年度に二桁台へ増加した後、1992年度に一桁台へ減少という動きであるというように、増減の方向性が乱れている。これは、番組（放送枠）概要に記述されたとおり、新機軸番組への試行が、毎年度、形を変えておこなわれたことに対応した現象であるとみなすこともできるだろう。

1990年代の『婦人百科』における「花」を主題とする講座の年度ごと放送本数は、1990年度13、1991年度12と1980年代同様に推移したが、最終年度の1992年度には7に減少している。副題においては、「いける」のみで「いけばな」は現れない。また、出演者の顔ぶれは細分化したまま、際立った特徴は示されない。内容は単発型の季節性を主旨とするものがほとんどであるが、最終年度の1993年1月には、例外的に、「はじめてのあなたに～花のこころをいける」（講師は肥原碩甫）が連続型（3回連続）の入門性を主旨とする講座として編成されている。ただし、この講座は、この年度の後半に設けられた「はじめてのあなたに」という、いわば放送枠内の放送枠の題材として、「ゆったりすっ

きりセミタイト」、「知っておきたい喪服のマナー」、「一年の想いを絵手紙に」といった題材と合わせて編成されたものであり、新機軸番組へのさまざまな試行の一環とみなすべきものであるといえる。

34年間続いた『婦人百科』は、1992年度末をもって終了の時を迎えた。跡を継ぐ形で翌1993年度に新設された『おしゃれ工房』は、当初は枠名に『新・婦人百科』と併記されるなど、女性向け教養番組の系譜に連なるものと位置づけられようとはしていたものの、キャスターにタレントを起用し、「教養の娯楽化」に追随しようとする姿勢が顕著だった。また、その本放送の放送波は、総合テレビではなく教育テレビであり、文化の伝播を目的とする女性向け教養番組がそれまで原則としてラジオ第一放送や総合テレビで編成されていたことに比べると、放送におけるその位置づけは大きく変化したといえる。そして、番組（放送枠）概要に記されたその編成方針は「個性的で豊かな暮らしの創造を目指す女性たちをターゲットにした生活実用」<sup>464</sup>だった。「女性たち」が再び視聴対象者層として設定されてはいるものの、それは「文明の落伍者たる」、「家庭にいる女性たち」ではなく、「個性的で豊かな暮らしの創造を目指す女性たち」である。この点で、『おしゃれ工房』はそれまでの女性向け教養番組の範疇を超えた放送枠であるといえ、「文化の機会均等」を礎として、その上に「個性の創造」という理念が構築されたことは、平等化を是としていた時代が終わり、多様化が是とされる時代に移ったことを如実に示している。

テレビ変化期の女性向け教養番組における「花」を主題とする講座は、社会情勢に対応した変化を副題の品詞分布に表すというかたちで、女性向け教養番組の範疇を超えた新たな形式の番組が生まれる予兆を示していたといえる。

『おしゃれ工房』においては、「花」を主題とする講座は、放送開始年度の1993年度に1本のみ編成された後、1994年度に6本編成されたのを最多として、21世紀になってからは、編成されても1年度につき1ないし2本である上に、まったく編成されない年度のほうが多く<sup>465</sup>なった。『おしゃれ工房』の18年間における「花」を主題とする講座の1年度あたり平均本数は1.6、標準偏差は1.7であり、ラジオ戦時期と同程度に激減した。

1925年3月の東京放送局仮放送開始以来、「文化の機会均等」に挺身してきた「花」を主題とする講座は、1993年3月の『婦人百科』終了をもって実質的に終結したとみなすことができるだろう。

日本における放送の始まりと共に、家庭にいる女性に対して「文化の機会均

<sup>464</sup> 日本放送協会放送文化調査研究所放送情報調査部編『NHK年鑑'94』日本放送出版協会、1995、p.214

<sup>465</sup> 2010年度に『おしゃれ工房』が廃止されるまでの期間に、21世紀において、「花」を主題とする講座が編成された年度は、2002年度（1本）、2003年度（2本）、2004年度（2本）、2008年度（1本）である。

等」を果たすべく設置された女性向け教養番組における「花」を主題とする講座は、70年近くに渡ってその課題に従事し続けた末、日本社会の変容にともない、ついにその使命を終えたのである。

## 6.6 まとめ

本章では、1982年度から1992年度をテレビ変化期と規定した上で、同時期における女性向け教養番組について記した後、テレビ発展期末の1980年度と1981年度を調査および分析の対象に加え、同期間に放送された女性向け教養番組『婦人百科』の副題の記述に対して形態素解析をおこなった。そして、解析によって示された品詞分布の推移と番組（放送枠）概要に記された編成方針の変遷とを対比して分析した。また、特に「花」を主題とする講座については、形態素解析の結果を踏まえて、副題の記述における名詞と動詞の出現率の推移と社会情勢との関連について考察した。

その結果を以下に示す。

- ・視聴時間量の減少と回復が生じ、新機軸番組が輩出した1980年代において、女性向け教養番組には新たな放送枠は設置されなかった。

- ・番組の形式は従前のままであった『婦人百科』にあっても、その番組内容を表す副題には、品詞分布の遷移が生じていた。

- ・「花」を主題とする講座では、講座の内容は季節性を主旨とする単発型に収束し出演者は細分化してその構成に変化を示さない状態を、テレビ変化期の末まで概ね保持していたものの、その副題の記述には名詞「いけばな」から動詞「いける」へという変化があり、その変化は「花」の社会的位置づけの変容と関連したものと考えられる。

- ・副題の品詞分布における変化は、1980年代半ばにおけるテレビメディアの変化の一端を数量的に可視化するものであり、新番組への予兆を示すものといえる。

- ・1990年代に入ってから、『婦人百科』は廃止され、「個性の創造」を使命とする『おしゃれ工房』が新設された。それにともない、女性向け教養番組における「花」を主題とする講座は、「文化の機会均等」という使命を終えて、実質的に終結した。

本章における調査および分析と考察の結果から、テレビ変化期の女性向け教養番組における「花」を主題とする講座の特徴は、次の諸点にあるといえる。すなわち、(1) 1980年代半ばの「模索の時期」と同期して、副題における品詞分布の遷移が生じており、新たな放送枠が設置されなかった女性向け教養番組にあっても、社会情勢の変化に対応した、なんらかの模索がおこなわれていた

ことを示唆していること、(2) 品詞分布の遷移は、『年鑑』における番組ジャンルごと記載の消滅や対象視聴者層の記述の変化とも同期しており、「家庭にいる女性」という創設以来の対象が消失しつつあったことに連関していると考えられること、(3) テレビ変化期の末に『婦人百科』が終了し、「個性の創造」を目的とする新番組（放送枠）の設置へと向かったことは、文化の機会均等を果たすという使命が終結したことを意味しており、テレビにおける変化のみならず、放送開始以来の日本文化伝播の歩みの上でも終結点を示していることである。

## 第 7 章 結論

本研究は、女性向け教養番組の編成を通観し、「花」を主題とする講座に関する一次資料の調査と分析をおこなうことによって、女性視聴者層への文化伝播の様相を、具体的事例に基づいて考察した。

本研究の成果は、女性向け教養番組における「花」を主題とする講座が、開始時の放送が目的とした「文化の機会均等」に貢献したこと、および、近代流派普及への貢献、「季節性」の一貫した存在、ラジオとテレビ双方におけるテキストの必要性と出版との連携、映像を有するテレビにおける出演者の重要性、社会情勢と放送本数増減の関連などによって、放送というメディアの特性を際立たせていることを、明らかにした点にあるといえる。

第1章では、研究背景と先行研究について述べたあと、研究方法の節において、対象領域と用語定義、時期区分と課題設定、調査資料と分析手法を示した。

対象領域と用語定義では、本研究においては、「婦人家庭向け」や「婦人向け」として各年度の『年鑑』に類別された番組（放送枠）を対象領域とし、「女性向け教養番組」と規定すること、また、これら「女性向け教養番組」のうち、文化の伝播を旨とする放送枠での中核的な題材だった「花」を主題とする講座を調査と分析の主たる対象とし、必要に応じ「茶」など他の主題も対象とすることとした。

時期区分と課題設定では、放送史の画期に準じて、調査期間を、ラジオ草創期、ラジオ戦時期および占領期、ラジオからテレビへの転換期、テレビ発展期、テレビ変化期に区分し、時期ごとに課題を設定して、調査および分析と考察をおこなった後、各時期を通観した考察をおこなうこととした。

調査資料と分析手法では、放送に関する一次資料である『番組確定表』を調査の主たる対象とすること、分析は、『番組確定表』に記された放送実績に対し、年度ごと放送本数の推移、放送内容に関する連続性の有無とその程度、番組副題の内容語抽出あるいは形態素解析、出演者構成の流派比率あるいは男女比率の対比などによっておこなうこととした。

第2章では、ラジオ草創期の女性向け教養番組と「花」を主題とする講座について、文化の伝播に関してラジオという新しいメディアが有した特徴を明らかにすることを課題として、調査および分析と考察をおこなった。

その結果、ラジオ草創期の女性向け教養番組および「花」を主題とする講座について、(1) 草創期の女性向け教養番組は、三つの放送枠を設置して、「教養」の多義性および女性聴取者の知識の程度にきめ細かく対応しようとしていたこと、(2) 「花」を主題とする講座には、季節性と入門性それぞれを主旨とする二つの類型があり、そのうち、入門性を主旨とする講座は、テキストを発行する

ことによって映像が無いというラジオの欠点を補い、異なるメディアの連携による相乗効果を発揮していたこと、(3)「花」を主題とする講座の放送が新興流派の発展に寄与したことが、放送というメディアが有する広範な伝達能力を事例として示していることを考察し、文化の伝播に関してラジオという新しいメディアが有した特徴の一端を明らかにした。

第3章では、ラジオ戦時期および占領期の女性向け教養番組と「花」を主題とする講座について、両時期の放送実績と編成の特徴を対照することで、両時期における女性向け教養番組と「花」を主題とする講座の相違点あるいは共通点を明らかにすることを課題として、調査および分析と考察をおこなった。

その結果、戦時期および占領期での女性向け教養番組および「花」を主題とする講座の特徴は、(1) 戦時期には女性向け教養番組は1放送枠のみに削減され、占領期には逆に数多くの放送枠が新設されるという相違点があるにも関わらず、いずれの時期においても「花」を主題とする講座の編成は低調であるという共通点があること、(2) 戦時期および占領期の女性向け教養番組は、共に「教化」としての教養を主眼としており、「花」のような生活文化の伝播がおこなわれる余地は小さかったこと、(3) 戦時期の例外的な連続型講座の編成や、占領期の後における大規模連続型講座の復活が、多くの反響と支持を集めたことは、放送メディアが創設時にめざした「文化の機会均等」の重要性を改めて示していることを考察し、両時期の相違点と共通点を明らかにした。

第4章では、ラジオからテレビへの転換期の女性向け教養番組と「花」を主題とする講座について、この時期にラジオとテレビ双方で講座が放送されていた場合、それぞれのメディアにおける特徴と、特にテレビという新しいメディアにおける特徴を明らかにすることを課題として、調査および分析と考察をおこなった。

その結果、この時期におけるラジオとテレビの「花」を主題とする講座は、同時期に対象を同じくして放送されていたが、放送時間帯はラジオとテレビとで棲み分けが図られた上で、(1) 女性向け教養番組における「花」を主題とする講座の二つのタイプのうち、入門性を主旨とする連続型講座は、テキストと連携していたラジオに、季節性を主旨とする単発型講座は、映像を有するため四季折々の花を視覚的に伝えることができるテレビにと、大まかに分化したこと、(2) その後、ラジオは「ながら聴取」が主流となり、講座は放送されにくくなる一方、テレビにも入門性を主旨とする連続型講座が編成されるようになり、映像を有するテレビでもテキストの随時参照性が求められ、出版という異なるメディアとの連携が有効であることが明らかになったこと、(3) テレビでは、女性

出演者（講師）が登用され、講座の内容だけでなく講師の映像も重要な要素となることを考察し、ラジオとテレビそれぞれの特徴を明らかにした。

第5章では、テレビ発展期の女性向け教養番組と「花」を主題とする講座について、この時期には「花」と同時に「茶」も女性向け教養番組の主題となったことから、「花」と「茶」それぞれを主題とする講座の放送を比較することによって、テレビによる日本文化伝播の様相を明らかにすることを課題として、調査および分析と考察をおこなった。

その結果、(1) 女性向け教養番組はの系譜は「実用」を旨とするものに収斂し、この期の半ばに、「花」も「茶」も講座の放送本数が最多となって、講座形式による伝統的な生活文化伝播の最盛期を形成したこと、(2) 「花」では、四季折々の花々による作例を紹介する「季節」の内容が主であった一方、「茶」では、所作や点前を教授する「技法」の内容が主であったという点で、テレビにおける両者の伝達のされ方には差異があったこと、(3) 特に「花」は、いけばなブームによる女性視聴者層への訴求やレジャーの多様化による新たな趣味講座番組の開発が放送本数の増減に影響していると考えられる点で、社会情勢とテレビメディアとの連関をより鮮明に反映したといえることを考察し、テレビによる日本文化伝播について、その様相の一端を明らかにした。

第6章では、テレビ変化期の女性向け教養番組と「花」を主題とする講座について、変化の有無を明らかにし、この時期の「花」を主題とする講座が有する特徴をテレビの「変化」と照応することを課題として、調査および分析と考察をおこなった。

調査と分析にあたっては、副題の記述に対して形態素解析をおこない、当該期の副題における品詞分布の変遷と番組概要に記された編成方針との関連を分析した。特に「花」を主題とする講座については、形態素解析の結果を踏まえて、副題の記述における名詞と動詞の出現率の推移と時代背景との関連を分析した。

その結果、テレビ変化期では、番組の形式には表立った変化がなかった女性向け教養番組における「花」を主題とする講座についても、(1) 1980年代半ばの「模索の時期」と同期して、副題における品詞分布の遷移が生じており、社会情勢の変化に対応した、なんらかの模索がおこなわれていたことを示唆していること、(2) 品詞分布の遷移は、『年鑑』における番組ジャンルごと記載の消滅や対象視聴者層の記述の変化とも同期しており、「家庭にいる女性」という創設以来の対象が消失しつつあったことに連関していると考えられること、(3) テレビ変化期の末に『婦人百科』が終了し、「個性の創造」を目的とする新番組（放送枠）の設置へと向かったことは、文化の機会均等を果たすという使命が

終結したことを意味しており、テレビにおける変化のみならず、放送開始以来の日本文化伝播の歩みの上でも終結点を示していることを考察し、この時期の女性向け教養番組と「花」を主題とする講座が有する特徴を明らかにした。

一方、近代日本における「花」の変化が、放送におよぼした影響については、第3章において、占領期が終わった時期に「前衛いけばな」が平易な「生活のいけばな」に転じたタイミングで、大規模な連続型の「花」を主題とする講座が編成され、それまでにない聴取率を記録したこと、第5章において、高度成長期の「いけばなブーム」による膨大な行動者数への訴求が、テレビという新しいメディアによってなされたと考えられること、また第5章および第6章において、「上品な趣味」としての「花」の相対的な地位の低下が、放送本数の減少をもたらしたことを示した。これらのこと、すなわち、各時期の編成が「花」の変化に影響を受けたということは、放送というメディアの本質が同時代性であり、映像だけでなく、編成も「時代を映す鏡」であることを示しているといえよう。

放送史の各時期において、女性向け教養番組群は消長を繰り返したとはいえ、その系譜を整理すれば、当初、「実用・実利を主体とする」<sup>466</sup>放送枠（『家庭講座』）から始まり、そこへ「知識の啓発に資する」<sup>467</sup>放送枠（『婦人講座』）や「いわゆる教育的な」<sup>468</sup>放送枠（『家庭大学講座』）が加わって、3系統が鼎立し、その後、消長を繰り返して、2系統が並立あるいは「多分に娯楽的な」放送枠を加えた3系統が再び鼎立はしたものの、結局、発足時と同様の「実用」を旨とする放送枠（『婦人百科』）1系統が残存するという流路を形成している。ラジオ放送の開始以来、連綿と引き継がれてきた女性向け教養番組は、創設時に打ち立てられた「文化の機会均等」という理念をさまざまに体現しながらも、放送枠としては首尾を整えて終結したといえる。

これまで図7、図12、図23、図24において示してきた各時期の主な女性向け教養番組について、「ラジオ草創期」から「ラジオからテレビへの転換期」までをまとめた系譜を図37に、「テレビ発展期」から「テレビ変化」までをまとめた系譜を図38に示す。

466 日本放送協会放送史編修室編『日本放送史 上』日本放送出版協会、1965、p.86

467 日本放送協会放送史編修室編『日本放送史 上』日本放送出版協会、1965、p.86

468 日本放送協会放送史編修室編『日本放送史 上』日本放送出版協会、1965、p.86

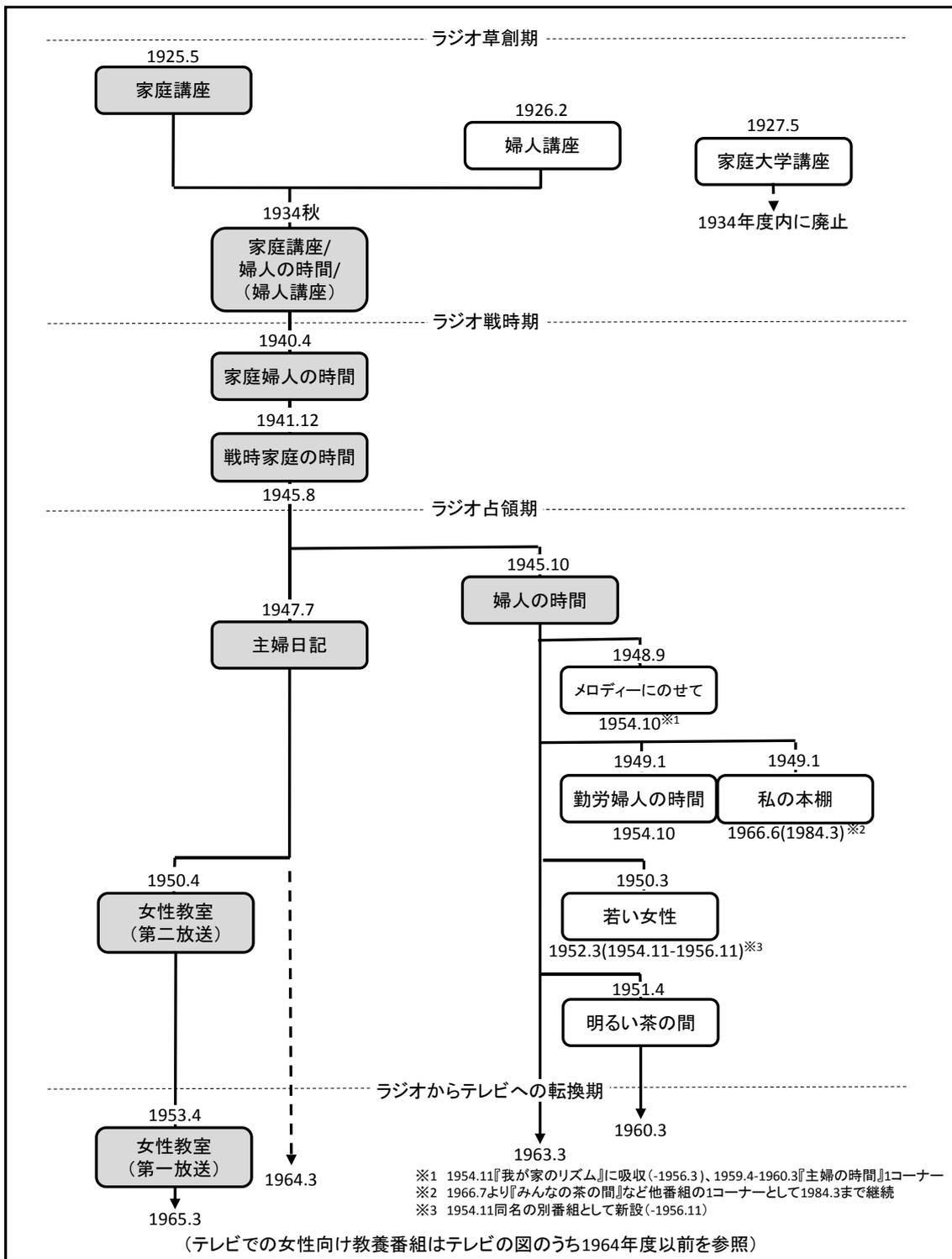


図 37 「ラジオ草創期」から「ラジオからテレビへの転換期」までの主な女性向け教養番組。薄墨は「花」を主題とする講座が編成された放送枠、それ以外は主な放送枠を示す。放送枠名上の数字は放送開始年月、下の数字は放送終了年月。ただし、次の放送枠が前の放送枠を継承している場合は、開始年月のみ記載。

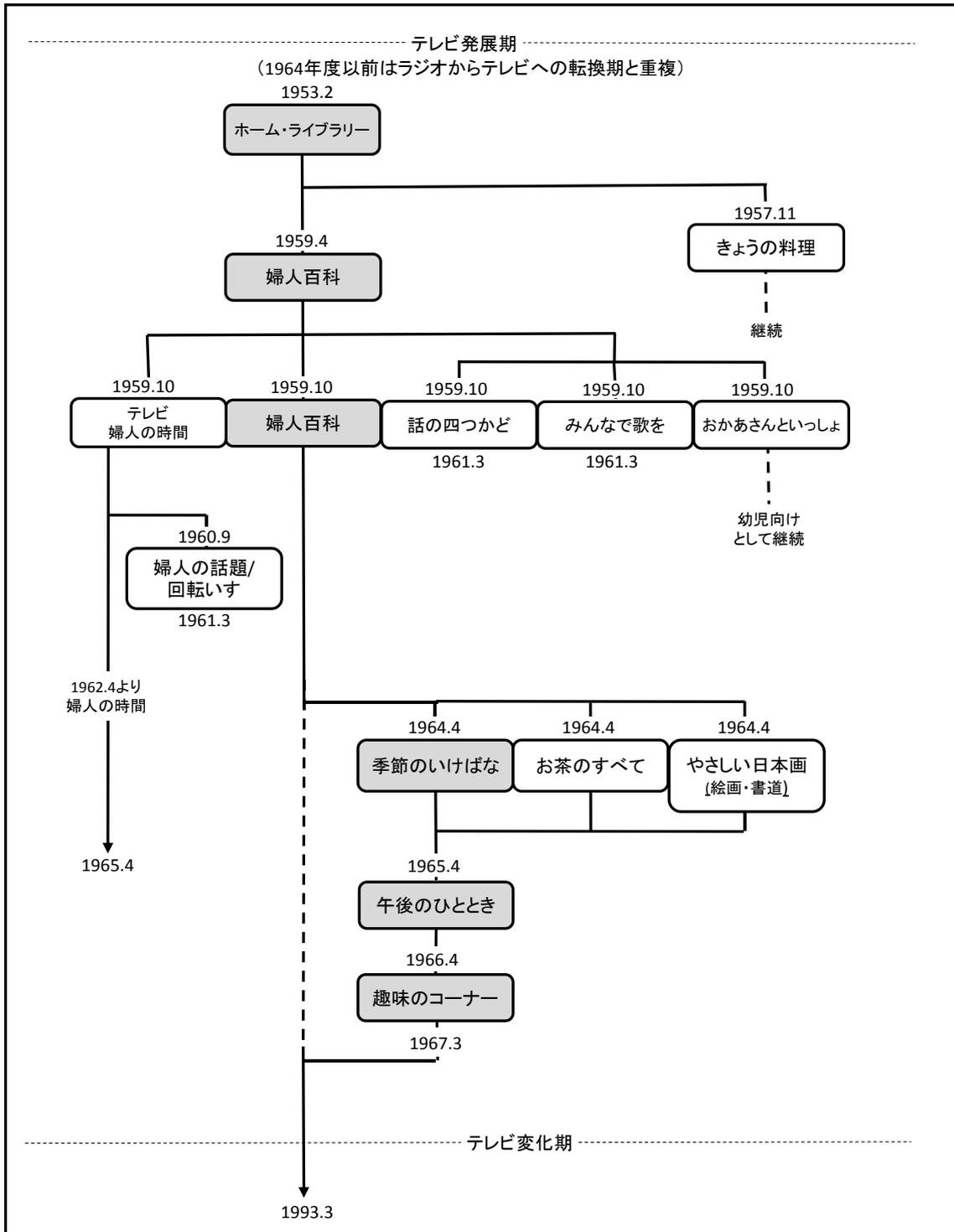


図 38 「テレビ発展期」から「テレビ変化期」までの主な女性向け教養番組。薄墨は「花」を主題とする講座が編成された放送枠、それ以外は主な放送枠を示す。放送枠名上の数字は放送開始年月、下の数字は放送終了年月。ただし、次の放送枠が前の放送枠を継承している場合は、開始年月のみ記載。

図 37 および図 38 には、「花」を主題とする講座が、主に「実用・実利を主体とする」放送枠の系統において、ラジオからテレビへと移り変わった放送史の各時期を通じて編成され続けてきたことが示されている。文献では、ラジオ草創期を除いて、記述が現れないラジオ戦時期や占領期、漠然とした記述があるのみだったテレビ発展期においても、「花」を主題とする講座は盛衰を伴って放送との関わりを持続していたことを、本研究は実証したといえる。

ラジオ草創期に最初の女性向け教養番組放送枠として『家庭講座』が設けられた時、その目的は、「家庭にある女性のために日常生活の上に於いて必要な知識を極く平易に説明する」<sup>469</sup>ことだった。そして、その『家庭講座』が、「日常生活における一つの技芸としていけばなの存在を認めた」<sup>470</sup>ことから、放送による「花」の伝播が始まったのである。また、戦後占領期の末に新設された『女性教室』は、放送がようやく「日常生活の問題を1つ1つ取り上げて行く機会を得た」<sup>471</sup>放送枠だった。そして、その『女性教室』が、「急激に増大したいけばな大衆の日常的ないけばなへの希求」<sup>472</sup>に対応して「生活のいけばな」へと向かいつつあった「花」を題材として採り上げたことが「これまでにない聴取率を記録」<sup>473</sup>し、そのことが後に続く高度成長期での放送による「花」の伝播の最盛期への先駆けともなったのである。これらの記述は、放送と「花」とが、それぞれ「日常」に根ざしたメディアであり文化である点で、強い親和性を有していたことを示している。

本研究は、その「花」を主題とする講座の内容を副題によって分析した結果、「季節性」を主旨とする単発型と「入門性」を主旨とする連続型の2類型が創出され、放送史の各時期において分化や統合はありながらも併存が続いたことを明らかにした。これまで図 10、図 11、図 13、図 18、図 19、図 33 において示してきた各時期の類型とその変遷を、通観して、図 39 に示す。

469 社団法人日本放送協会編『昭和六年 ラジオ年鑑』誠文堂、1931、p.324

470 工藤昌伸『日本いけばな文化史 三 近代いけばなの確立』同朋舎出版、1993、p.105

471 日本放送協会編『NHK ラジオ年鑑 1951』ラジオ・サービス・センター、1951、p.102

472 工藤昌伸『日本いけばな文化史 四 前衛いけばなと戦後文化』同朋舎出版、1994、p.77

473 日本放送協会編『NHK 年鑑 1956』日本放送出版協会、1955、p.87

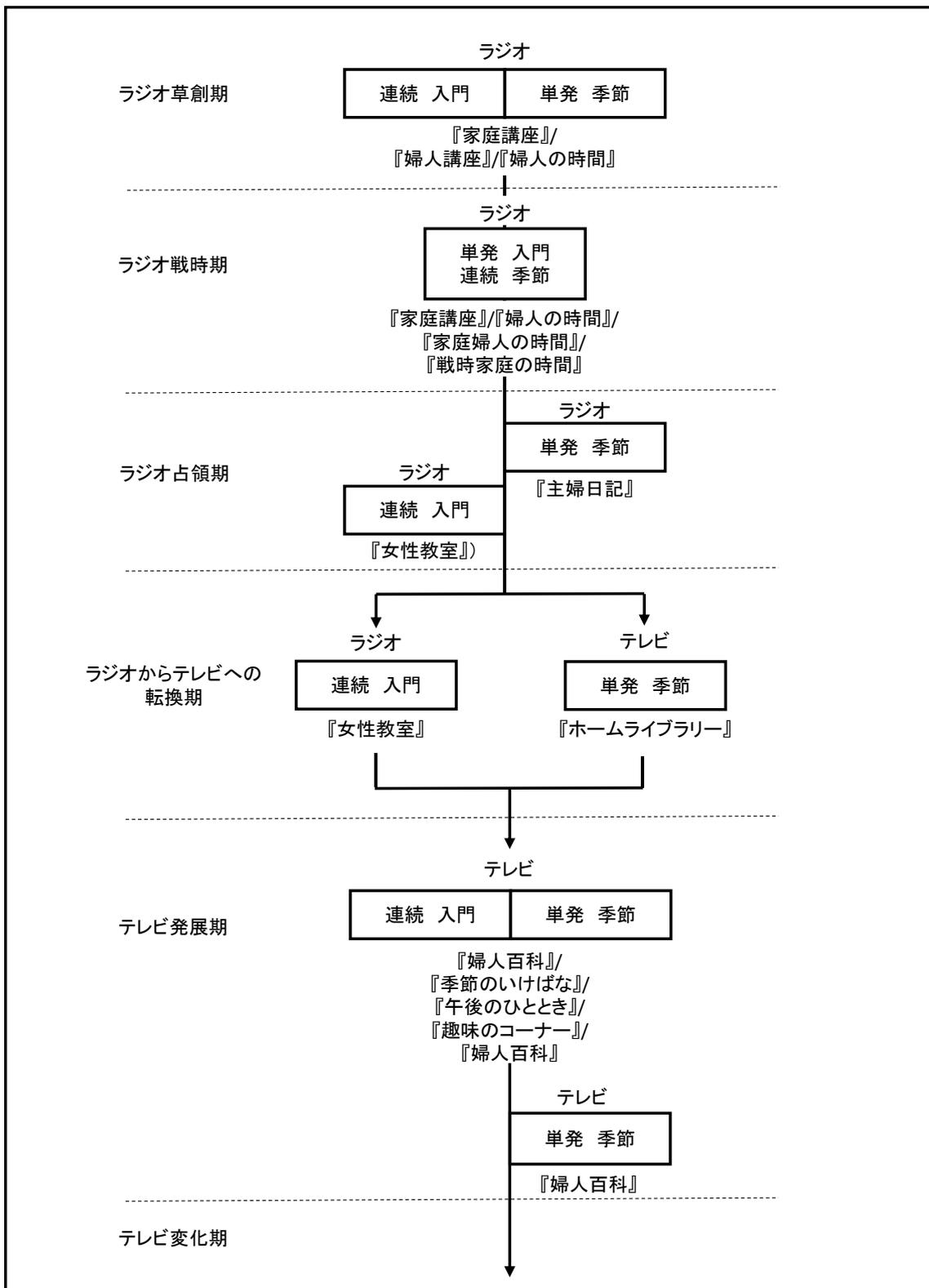


図 39 女性向け教養番組における「花」を主題とする講座の類型と変遷

二つの類型のうち、季節性を主旨とする講座は、四季折々の花々を扱うという点で、家庭での生活において聴取・視聴される放送メディアが有する日常性に添うものといえよう。入門性を主旨とする講座は、ラジオにおいてもテレビにおいてもテキストの発行がおこなわれ、その随時参照性が求められたことから、出版という異なるメディアとの連携が放送による文化の伝播において有効だったことを事例として示している。

また、図 39 に示した変遷において、テレビ発展期の末とテレビ変化期において、「季節性」を主旨とする単発型講座が継続し、「入門性」を主旨とする連続型講座が終了したということは、その時点で、女性向け教養番組における「花」を主題とする講座は、家庭にいる女性たちに向けて文化に接するための手ほどきをするという意味での「文化の機会均等」という使命を終えるに至ったことを示してもいよう。

「文化の機会均等」を使命とする女性向け教養番組の掉尾となった『婦人百科』が終了した 1993 年、画像を扱うことが可能なウェブブラウザである Mosaic が登場した。同年、日本では「JPNIC が設立され、JUNET、CSnet といったそれ以前に運用されていた各ネットワークの統括が行われて、本格的なインターネット時代を迎えることになった。」<sup>474</sup>

その後、インターネットは発展を続け、次第に大容量の音声と映像を伝送できるようになった。そして、2015 年 6 月、日本におけるテレビの視聴時間量は 1980 年代以来、30 年ぶりに下落に転じた<sup>475</sup>。「20～50 代の幅広い層で（テレビを）『ほとんど、まったく見ない』人が増加」<sup>476</sup>し、テレビを欠かせないメディアとする人が減少<sup>477</sup>した。その一方、インターネットを欠かせないメディアとする人は増加<sup>478</sup>したのである。

テレビ変化期では、視聴時間の減少という事態に対して、新機軸番組の台頭だけではなく、既存番組においても、その内容を社会情勢に対応させようという動向が生じていた。このことは、再び「テレビ離れ」が生じている 2010 年代

---

<sup>474</sup> 岩永雅也『現代の生涯学習』放送大学教育振興会、2012、p.237

<sup>475</sup> 木村義子、関根智江、行木麻衣「テレビ視聴とメディア利用の現在 ～『日本人とテレビ・2015』調査から～」『放送研究と調査』2015 年 8 月号、pp.18-47

<sup>476</sup> NHK 放送文化研究所・世論調査部「『日本人とテレビ 2015』調査 結果の概要について」NHK 放送文化研究所、2015、p.1

〈[http://www.nhk.or.jp/bunken/research/yoron/pdf/20150707\\_1.pdf](http://www.nhk.or.jp/bunken/research/yoron/pdf/20150707_1.pdf)〉[2017 年 5 月 1 日閲覧]

<sup>477</sup> 木村義子、関根智江、行木麻衣「テレビ視聴とメディア利用の現在 ～『日本人とテレビ・2015』調査から～」『放送研究と調査』2015 年 8 月号、p.31

<sup>478</sup> 木村義子、関根智江、行木麻衣「テレビ視聴とメディア利用の現在 ～『日本人とテレビ・2015』調査から～」『放送研究と調査』2015 年 8 月号、p.31

においても、情勢に対応した変化がテレビメディアの内部で生じる可能性について示唆を与えてくれる。

岩永（2006）は、1983年に開学した放送大学について論じつつ「放送という一方向の、しかも時間的空間的あるいは学習方法上の拘束性が残存するメディア」<sup>479</sup>の「技術的限界に対しては、すでに1980年代末期から、双方向性と種々の制約の克服を目指すメディア技術のイノベーションを求める声が高まっていた」<sup>480</sup>と指摘している。

21世紀初頭からのインターネットによる動画配信の普及によって、文化の伝播における多様化はさらに進展しつつある。

ムーアとカースリーは、遠隔教育においては、「多数かつ多様な学生の教育にはいくつかのメディアを組み合わせるのが最も効果的であろう。」<sup>481</sup>と述べている。本研究においては、放送と出版という異なるメディアの連携が、女性向け教養番組における「花」を主題とする講座でおこなわれたことを示した。放送は膨大な人びとに対し同時に同一の情報を均等に伝播することに適しており、双方向メディアであるインターネットは随時参照性を有するという点で放送の弱点を補うことができる。今後、放送とインターネットとの連携もさまざまに試みられることになるだろう。

インターネットによる動画配信を利用した文化の伝播についての研究や放送とインターネットとの連携についての研究、あるいは、女性向け教養番組にとどまらない放送メディア全般の『番組確定表』に基づく研究は、今後の課題としたい。

---

<sup>479</sup> 岩永雅也『改訂版 生涯学習論 現代社会と生涯学習』放送大学教育振興会，2006，p.189

<sup>480</sup> 岩永雅也『改訂版 生涯学習論 現代社会と生涯学習』放送大学教育振興会，2006，p.189

<sup>481</sup> マイケル・G. ムーア，グレッグ・カースリー（Moore, Michael G. & Kearsley, Greg）[著] /高橋悟編訳『遠隔教育 生涯学習社会への挑戦』海文堂出版，2004，p.83

謝辭

本研究の核をなす諸論文の発表にあたっては、査読をご担当いただいた先生方を始め、多くの方々から、貴重なご意見とご指導をいただきました。改めてここに謝意を申し上げます。

世話人教員の綿抜豊昭先生には、執筆にあたって、当初より、ご親切なご指導をいただき、本当にお世話になりました。深く感謝申し上げます。

また、本研究に対し、お忙しい中、審査の労をとってくださった中山伸一先生、白井哲哉先生、吉田右子先生、宇陀則彦先生、そして、放送大学の岩永雅也先生に、心より御礼申し上げます。

本研究については、日本の放送に関するさまざまな先行研究に示唆を得ました。本研究の参考にさせていただいた多くの研究者の方々、ならびに放送の実務に携わった多くの先達に深い敬意を表します。

## 文献リスト

### 参考資料

- 『番組確定表』日本放送協会，1925年—  
社団法人東京放送局編『ラヂオ講演集 第1輯—第7輯』日本ラヂオ協会[ほか]，  
1925年—1926年  
社団法人日本放送協会関東支部編『ラヂオ講演集 第8輯—第12輯』日本ラヂ  
オ協会，1927年  
越野宗太郎編『東京放送局沿革史』東京放送局沿革史編纂委員，1928年  
社団法人日本放送協会編『ラヂオ年鑑』誠文堂，1931年—1940年  
社団法人日本放送協会編『日本放送協会調査時報』日本放送協会，1931年—1934  
年  
社団法人日本放送協会編『最近の放送事業』日本放送出版協会，1932年  
社団法人日本放送協会『業務統計要覧』社団法人日本放送協会，1933年—1950  
年  
相良忠道編『大阪放送局沿革史』社団法人日本放送協会関西支部，1934年  
社団法人日本放送協会編『放送』日本放送出版協会，1934年—1941年  
社団法人日本放送協会編『ラヂオ講演講座』日本放送出版協会，1937年—1941  
年  
社団法人日本放送協会編『日本放送協会史』日本放送出版協会，1939年  
社団法人日本放送協会編『ラジオ年鑑』日本放送出版協会，1941年—1948年  
社団法人日本放送協会編『放送研究』日本放送出版協会，1941年—1943年  
社団法人日本放送協会編『國民生活時間調査 一般調査報告 小売業世帯編』  
日本放送協会，1943年  
社団法人日本放送協会編『國民生活時間調査 一般調査報告 俸給生活者・工  
場労働者編』日本放送協会，1943年  
社団法人日本放送協会編『國民生活時間調査 一般調査報告 俸給生活者・工  
場労働者女子家族編』日本放送協会，1943年  
社団法人日本放送協会編『國民生活時間調査 一般調査報告 国民学校児童編』  
日本放送協会，1944年  
日本放送協会『放送文化』日本放送出版協会，1946年—1985年  
日本放送協会編『NHK ラジオ年鑑』日本放送出版協会，1949年—1950年  
日本放送協会編『NHK ラジオ年鑑』ラジオサービスセンター，1951年—1952  
年  
日本放送協会放送文化研究所『文研月報』日本放送出版協会，1951年—1983  
年

日本放送協会編『NHK年鑑』ラジオサービスセンター，1953年－1954年  
日本放送協会放送文化研究所『婦人番組意向調査結果報告』日本放送協会放送文化研究所，1954年  
日本放送協会編『NHK年鑑』日本放送出版協会，1955年－1966年  
日本放送協会放送文化調査研究所『放送学研究』日本放送出版協会，1961年－2001年  
日本放送協会放送文化研究所編『国民生活時間調査』日本放送出版協会，1962年  
日本放送協会放送史編修室編『日本放送史』日本放送出版協会，1965年，3冊  
日本放送協会放送世論調査所編『国民生活時間調査 昭和40年度』日本放送出版協会，1966年  
日本放送協会総合放送文化研究所放送史編修室編『NHK年鑑』日本放送出版協会，1967年－1979年  
日本放送協会放送文化調査研究所編『国民生活時間調査 昭和45年度』日本放送出版協会，1971年  
放送番組センター『「教養番組」制作者の意識調査』放送番組センター，1971年  
日本放送協会放送文化調査研究所編『国民生活時間調査 昭和50年度』日本放送出版協会，1976年  
総理府統計局『社会生活基本調査結果の概要 昭和51年』1977年  
総理府統計局『昭和51年社会生活基本調査報告 全国Ⅱ 行動者編』財団法人日本統計協会，1978年  
日本放送協会編『放送五十年史』日本放送出版協会，1977年，2冊（資料編共）  
日本放送協会総合放送文化研究所放送史編修部編『NHK年鑑』日本放送出版協会，1980年－1983年  
日本放送協会放送世論調査所編『国民生活時間調査 昭和55年度』日本放送出版協会，1981年  
日本放送協会総合放送文化研究所『放送研究と調査』日本放送出版協会，1983年－1984年  
日本放送協会放送文化調査研究所『放送研究と調査』日本放送出版協会，1984年－1990年  
日本放送協会放送文化調査研究所放送情報調査部編『NHK年鑑』日本放送出版協会，1984年－  
日本放送出版協会編『新放送文化』日本放送出版協会，1986年－1993年  
NHK放送文化調査研究所放送情報調査部『GHQ文書による占領期放送史年表（昭和20年8月15日－12月31日） 付 対日情報政策基本文書』NHK

放送文化調査研究所放送情報調査部，1987年  
総務庁統計局編『昭和61年社会生活基本調査報告 全国 生活行動編 その2』  
財団法人日本統計協会，1988年  
NHK 放送文化調査研究所放送情報調査部『GHQ 文書による占領期放送史年表  
(昭和21年1月1日-12月31日)』NHK 放送文化調査研究所放送情報調  
査部，1989年  
日本放送協会放送文化研究所『放送研究と調査』日本放送出版協会，1990年一  
社団法人日本放送協会編『国民生活時間調査(昭和16年調査)』大空社，1990  
年[復刻版]  
総務庁統計局編『平成3年社会生活基本調査報告 第4巻 全国 生活行動編  
(その2)(趣味・娯楽，社会的活動，旅行・行楽)』総務庁統計局，1993  
年

## 参考文献

<著者邦名：50音順>

- 荒牧富美江 1968 「テレビ放送における婦人番組の変遷」『立正女子大学短期大学部研究紀要』第12号，立正女子大学短期大学部，pp.22-43
- 飯森彬彦 1990a 「占領下における女性対象番組の系譜・1 『婦人の時間』の復活」『放送研究と調査』1990年11月号，日本放送出版協会，pp.2-19
- 飯森彬彦 1990b 「占領下における女性対象番組の系譜・2 『婦人課』の誕生」『放送研究と調査』1990年12月号，日本放送出版協会，pp.2-19
- 石井研士 2003 「戦後のラジオでの宗教放送とテレビ放送への移行」『國學院大學紀要』第四十一卷，國學院大學，pp.101-118
- 市川昌 1984 「メディアと教育（その1）——戦前におけるラジオ講演番組の系譜——」『月刊社会教育』第28巻第6号，国土社，pp.56-64
- 井上宏 1981 「“編成の時代”と編成研究」日本放送協会放送文化調査研究所編『放送学研究33 テレビ新時代—80年代テレビへの展望—』日本放送出版協会，pp.123-151
- 今井孝司 1999 「いけばなにおける沈滞要因の考察（1）いけばな史における考証」『京都精華大学紀要』第17号，京都精華大学，pp.115-132
- 今井孝司 2000a 「いけばなにおける沈滞要因の考察（2）今日的問題の考証」『京都精華大学紀要』第18号，京都精華大学，pp.107-129
- 今井孝司 2000b 「いけばなにおける沈滞要因の考察（3）活性化に向けての試案」『京都精華大学紀要』第19号，京都精華大学，pp.153-168
- 岩崎三郎 1974 「講座番組の研究4 利用行動の継続・脱落を規定する要因 『フランス語入門』・『建築士』における事例研究」『文研月報』1974年9月号，日本放送出版協会，pp.20-37
- 岩永雅也 1999 「多様化するメディアと教養」『教育学研究』第66巻第3号，日本教育学会，pp.295-305
- 岩永雅也 2006 『改訂版 生涯学習論 現代社会と生涯学習』放送大学教育振興会，242p.
- 岩永雅也 2012 『現代の生涯学習』放送大学教育振興会，256p.
- 上滝徹也 1989 「テレビニュースの多様化とその内実」日本放送協会放送文化調査研究所編『放送学研究39』日本放送出版協会，pp.171-183.
- 海野弘 2010 『花に生きる 小原豊雲伝』平凡社，327p.
- 大井ミノブ 1990 『いけばな辞典』東京堂出版，434p.
- 大串兎紀夫 1984a 「講座番組はどのように利用されているか 横浜調査の結果から」『放送研究と調査』1984年8月号，日本放送出版協会，pp.40-53

- 大串兎紀夫 1984b 「放送で学ぶ人びと ～講座番組利用者のプロフィール～」『放送研究と調査』1984年12月号, 日本放送出版協会, pp.24-33
- 大串兎紀夫 1991 「講座番組はどのように利用されているか その2 利用の実態 ～『教育・教養番組利用状況調査』から～」『放送研究と調査』1991年12月号, 日本放送出版協会, pp.48-57
- 大串兎紀夫、原由美子 1991 「講座番組はどのように利用されているか その1 利用の状況 ～『教育・教養番組利用状況調査』から～」『放送研究と調査』1991年10月号, 日本放送出版協会, pp.38-47
- 大地宏子 2014 「NHK ラジオ番組『幼児の時間』における音楽教育プログラムとその変遷—1935(昭和10)年から1952(昭和27)年を中心に—」『岐阜聖徳学園大学紀要 教育学部編』第53号, 岐阜聖徳学園大学, pp.181-191
- 岡原都 2007 『アメリカ占領期の民主化政策——ラジオ放送による日本女性再教育プログラム』明石書店, 294p.
- 岡原都 2009 『戦後日本のメディアと社会教育——「婦人の時間」の放送から「NHK 婦人学級」の集団学習まで——』福村出版, 317p.
- 加藤春恵子 1974 「教育・教養番組の視聴実態」『東京大学新聞研究所紀要』第22号, 東京大学新聞研究所, pp.133-186
- 神山順一、藤岡英雄、岩崎三郎 1974 「講座番組の研究1 <講座番組はどれだけ利用されているか>——横浜調査の結果から——」『文研月報』1974年1月号, 日本放送出版協会, pp.1-24
- 河野光子 1995 「戦前の婦人向け番組」『NHK 放送博物館だより』第40号, NHK 放送博物館, pp.14-15
- 金淵培、江原暉将、相沢輝昭 1992 「形態素解析情報に基づく長い日本語ニュース文の分割」『情報処理学会第44回全国大会講演論文集(人工知能及び認知科学)』, pp.179-180
- 工藤昌伸 1993 『日本いけばな文化史 三 近代いけばなの確立』同朋舎出版, 197p.
- 工藤昌伸 1994 『日本いけばな文化史 四 前衛いけばなと戦後文化』同朋舎出版, 197p.
- 工藤昌伸 1995 『日本いけばな文化史 五 いけばなと現代』同朋舎出版, 197p.
- 久保田滋、瀬川健一郎 1971 『日本花道史』光風社書店, 183p.
- 熊倉功夫 1980 『近代茶道史の研究』日本放送出版協会, 414p.
- 熊倉功夫 2009 『茶の湯といけばなの歴史 日本の生活文化』左右社, 227p.
- 桑田忠親 1967 『茶道の歴史』東京堂出版, 245p.
- 向後英紀 2005 「GHQ の放送番組政策 —CI&E の『情報番組』と番組指導」『マス・コミュニケーション研究』第66号, 日本マス・コミュニケーション学

- 会, pp.20-36
- 小林善帆 2007『「花」の成立と展開』和泉書院, 392p.
- 佐藤英 2013「1925~1926年にかけてのJOAKにおけるオペラ関連番組」『桜文論叢』第85号, 日本大学法学部桜文論叢編集委員会, pp.135-157
- 佐藤英 2015『放送歌劇』の興隆と『ヴォーカル・フォア』の結成 1927年のJOAKにおけるオペラ放送』『桜文論叢』第88号, 日本大学法学部桜文論叢編集委員会, pp.25-51
- 重森弘淹「現代いけばなの諸問題」河北倫明編『図説 いけばな体系 第4巻 現代のいけばな』角川書店, 1971, pp.125-134
- 白石信子、井田美恵子 2003「浸透した『現代的なテレビの見方』平成14年10月『テレビ50年調査』から」『放送研究と調査』2003年5月号, NHK放送文化研究所, pp.26-55
- 鈴木崇史、影浦峽 2011「名詞の分布特徴量を用いた政治テキスト分析」『行動計量学』第38巻第1号, 日本行動計量学会, pp.83-92
- 鈴木泰 1971「家庭婦人のテレビ教育教養番組視聴」『文研月報』1971年10月号, 日本放送出版協会, pp.1-19
- 進藤咲子 1973『「教養」の語史』『言語生活』第265号(1973年10月号), 筑摩書房, pp.66-74
- 草月出版編集部編著 1981『創造の森 草月 1927-1980』草月出版, 350p.
- 竹山昭子 1992「太平洋戦争下の放送 —国民はどう受け止めたか—」『学苑』第629号, 昭和女子大学近代文化研究所, pp.72-82
- 竹山昭子 1994『戦争と放送 史料が語る戦時下情報操作とプロパガンダ』社会思想社, 248p.
- 竹山昭子 2002「放送開始から一〇年、受け手のラジオ観」『メディア史研究』第13号, ゆまに書房, pp.37-53
- 竹山昭子 2013『太平洋戦争下 その時ラジオは』朝日新聞出版, 273p.
- 田中秀隆 2007『近代茶道の歴史社会学』思文閣出版, 433p.
- 田村穰生 1967「ラジオ聴取の変容とその将来」NHK総合放送文化研究所編『NHK放送文化研究年報』第12集, 日本放送協会, pp.189-222
- 茶の湯文化学会編 2013『講座日本茶の湯全史 第3巻 近代』思文閣出版, 323p.
- 筒井清忠 1995『日本型「教養」の運命 歴史社会学的考察』岩波書店, 191p.
- 勅使河原葉満 1989『女の自叙伝 花に魅せられ人に魅せられ』婦人画報社, 211p.
- 戸村栄子 1991a「データにみる80年代のテレビ視聴動向 その1 テレビ視聴の変化」『放送研究と調査』1991年6月号, 日本放送出版協会, pp.58-67
- 戸村栄子 1991b「データにみる80年代のテレビ視聴動向 その2 視聴動向の特徴」『放送研究と調査』1991年8月号, 日本放送出版協会, pp.48-59

- 戸村栄子、白石信子 1993 「今、人びとはテレビをどのように視聴・評価・期待しているか～『テレビ 40 年』調査から～」『放送研究と調査』1993 年 2 月号, 日本放送出版協会, pp.4-13
- 長廣比登志 2004 「現代邦楽放送年表——NHK ラジオ番組『現代の日本音楽』放送記録 (64.4～72.3)」京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター編『日本伝統音楽研究』第 1 号別冊改訂版, 京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター, pp.1-192
- 西野泰司 1993 「テレビ編成 40 年の軌跡」『放送研究と調査』1993 年 2 月号, 日本放送出版協会, pp.14-21
- 日本放送協会放送文化研究所放送学研究室編 1964 『放送研究入門』日本放送出版協会, 245p
- 野村和 2004 「昭和初期のラジオが提供した『婦人』向け学習プログラム — 1925-1933 年の番組分析から—」『日本社会教育学会紀要』第 40 号, pp.51-59
- 野村和 2011 「昭和初期におけるラジオ放送による大学開放講座」『UEJ ジャーナル』第 3 号, pp.11-16
- 埴融 1991 「占領初期における CIE の『番組指導』 思想の自由キャンペーンを中心に」『放送研究と調査』1991 年 2 月号, 日本放送出版協会, pp.26-35
- 原由美子 1992 「講座番組はどのように利用されているか その 3 利用者のプロフィール ～『教育・教養番組利用状況調査』から～」『放送研究と調査』1992 年 2 月号, 日本放送出版協会, pp.50-57
- 原由美子 1996 「放送を利用して学ぶ ～教養系番組・生活関連番組・講座番組はどのように見られているか～」『放送研究と調査』1996 年 7 月号, 日本放送出版協会, pp.2-19
- 久田宗也 1967 「NHK テレビ『茶道講座』のまとめ」『茶道雑誌』1967 年 3 月号, 河原書店, pp.11-21
- 廣田吉崇 2012 『近現代における茶の湯家元の研究』慧文社, 412p.
- 藤岡英雄 1974a 「講座番組の研究 2 利用者のプロフィール ——利用者特性と利用規定要因の分析——」『文研月報』1974 年 5 月号, 日本放送出版協会, pp.9-29
- 藤岡英雄 1974b 「講座番組の研究 3 学習手段の関連構造 ——成人学習手段の相互関連と講座番組の位置——」『文研月報』1974 年 7 月号, 日本放送出版協会, pp.24-34
- 藤岡英雄 1975 「講座番組の研究 5 講座番組利用の諸類型 ——利用者の類型化と番組機能の分析——」『文研月報』1975 年 6 月号, 日本放送出版協会, pp.18-43
- 藤岡英雄 1985 「講座番組利用者にもみる学習の諸相 ——横浜調査のケース・ス

- タディから』『放送研究と調査』1985年7月号, 日本放送出版協会, pp.40-47
- 古田尚輝 1999 「『技能講座』から『趣味講座』へ ～教育テレビ40年 生涯学習番組の変遷～」『放送研究と調査』1999年11月号, 日本放送出版協会, pp.40-71
- 古田 尚輝 2006 「テレビジョン放送における『映画』の変遷」『成城文藝』第196号, 成城大学, pp.266(1)-213(54)
- 堀明子 1963 「ラジオ嗜好とテレビ嗜好」『NHK 放送文化研究所年報』第8集, 日本放送協会, pp.59-80
- 松下圭一 1986 『社会教育の終焉』筑摩書房, 244p.
- 三上真、増山繁、中川聖一 1999 「ニュース番組における字幕生成のための文内短縮による要約」『自然言語処理』第6巻第6号, 言語処理学会, pp.65-81
- 見田宗介、吉田潤 1967 「教養番組視聴の構造 視聴にみられる理念と行動のずれ」『放送文化』1967年4月号, 日本放送出版協会, pp.6-11
- 宮田章 2015 「許可された自立 ～占領期インフォメーション番組におけるメッセージの変容～」『放送研究と調査』2015年4月号, 日本放送出版協会, pp.80-101
- 村井康彦 1990 『花と茶の世界—伝統文化史論』三一書房, 323p.
- 村上聖一 2011 「番組調和原則 法改正で問い直される機能 ～制度化の理念と運用の実態～」『放送研究と調査』2011年2月号, 日本放送出版協会, pp.2-15
- 吉田潤 1963 「ラジオのきかれ方とテレビのみられ方 ——37年7月の聴視率調査の結果を中心に——」『文研月報』1963年3・4月号, 日本放送出版協会, pp.9-25
- 吉田裕監修、竹山昭子解説 1992a 『放送関係雑誌目次総覧 1 調査時報、調査月報、放送、放送研究、放送人、放送調査資料』大空社, 本文頁付け無し
- 吉田裕監修、竹山昭子解説 1992b 『放送関係雑誌目次総覧 2 ラジオ講演・講座、放送、放送ニュース解説、国策放送、学校放送研究』大空社, 本文頁付け無し
- 米倉律 2013 「初期“テレビ論”を再読する 【第1回】ジャーナリズム論 ～ラジオジャーナリズムからテレビジャーナリズムへ～」『放送研究と調査』2013年8月号, 日本放送出版協会, pp.2-17

<原著者原語名：アルファベット順>

パトリック・バーワイズ, アンドルー・エーレンバーグ (Barwise, Patrick & Ehrenberg, A. S. C.) [著]/田中義久、伊藤守、小林直毅訳 1991 『テレビ視聴の構造 多メディア時代の「受け手」像』法政大学出版局, 330p.

- ジョン・フィスク (Fiske, John) [著] 伊藤守ほか訳 1996 『テレビジョンカルチャー ポピュラー文化の政治学』 梓出版社, 513p.
- ポール・ラングラン (Lengrand, Paul) [著] 波多野完治訳 1979 『生涯教育入門 第二部』 日本社会教育連合会, 123p.
- ポール・ラングラン (Lengrand, Paul) [著] 波多野完治訳 1980 『生涯教育入門 改訂版』 日本社会教育連合会, 110p.
- マイケル・G. ムーア, グレグ・カースリー (Moore, Michael G. & Kearsley, Greg) [著] /高橋悟編訳 2004 『遠隔教育 生涯学習社会への挑戦』 海文堂出版, 336p.

## 全研究業績のリスト

## 学術雑誌論文

- 1) 辻泰明, 「テレビの変化期における番組副題の形態素解析 —女性向け実用教養番組『婦人百科』を対象として—」, 情報メディア研究, 第16巻第1号, 2018, (採録決定).
- 2) 辻泰明, 「テレビの発展期における伝統文化の伝播 —『華道』と『茶道』の講座番組を比較して—」, 社会文化史学, 第60号, 2017, pp.15-42.
- 3) 辻泰明, 「ラジオからテレビへの転換期におけるメディア編成 —『いけ花講座』番組を中心として—」, 図書館情報メディア研究, 第14巻第1号, 2016, pp.41-60.
- 4) 辻泰明, 「昭和戦中・戦後期ラジオ放送における『いけ花講座』の研究」, いけ花文化研究, 第3号, 2015, pp.21-36.
- 5) 辻泰明, 「初期ラジオ放送における、いけ花講座番組 —メディアが文化の伝播に果たした役割—」, いけ花文化研究, 第2号, 2014, pp.47-73.
- 6) 辻泰明, 呑海沙織, 「動画配信サイトにおける『山崎豊子作品』の動線分析 —デジタルアーカイブの連携効果を探る—」, 図書館情報メディア研究, 第12巻第1号, 2014, pp.1-14.
- 7) 辻泰明, 「俳句番組のオンデマンド配信における視聴実態とその効果」, 短詩文化研究, 第6号, 2014, pp.19-28.

## 専門学術著書

- 1) 辻泰明, 映像メディア論 —映画からテレビへ、そしてインターネットへ、和泉書院. 2016, 208p.

## 口頭発表

- 1) 辻泰明, 「テレビ発展期における日本文化の伝播 — 『華道』と『茶道』を比較して—」, 第 52 回 社会文化史学会大会, 2016 年 9 月.
- 2) 辻泰明, 「VOD 事業におけるマルチデバイスの組み合わせ戦略」, 2011 年映像情報メディア学会冬季大会, 2011 年 12 月 22 日
- 3) 辻泰明, 「放送と通信の融合における独自サービスの可能性」, 2009 年映像情報メディア学会冬季大会, 2009 年 12 月 17 日

## 一般講演

- 1) 辻泰明, 「新局面を迎えた映像配信サービスの将来展望と、製作会社の可能性」, 全日本テレビ番組製作社連盟 (ATP), 2017 年 3 月 29 日
- 2) 辻泰明, 「2016 年 動画配信サービス戦国時代へ 最新動向と今後の展望」, 新社会システム総合研究所, 2016 年 1 月 22 日
- 3) 辻泰明, 「活性化する動画配信市場最新動向」, 新社会システム総合研究所, 2015 年 5 月 26 日
- 4) 辻泰明, 「映像配信と『放送＝通信』の融合」, 新社会システム総合研究所, 2014 年 9 月 26 日
- 5) 辻泰明, 「公共メディアにおける『放送＝通信』の融合」, 映像配信ビジネス研究会, 2014 年 9 月 24 日
- 6) 辻泰明, 「オンデマンドサービスの特徴と『放送＝通信』の融合」, 月刊ニューメディア X デー研究会, 2014 年 6 月 6 日
- 7) 辻泰明, 「テレビからみたネット動画」パネラー, ブライトコーブ動画配信シンポジウム, 2014 年 5 月 30 日

- 8) 辻泰明, 「映像コンテンツ配信事業の最前線」, 新社会システム総合研究所, 2011年12月7日
- 9) 辻泰明, 「映像の世紀～『動く映像』の力と意義」, 日本大学文理学部 映像メディア論 夏期集中講義 (ゲストスピーカー), 2011年9月13日
- 10) 辻泰明, 「映像で見る20世紀の歴史」, 渋谷区教育委員会, 2011年2月3日・10日
- 11) 辻泰明, 「ユーザーに支持される移動体向け放送サービスとは」, デジタルラジオ推進協会, 2010年2月5日
- 12) 辻泰明, 「メディアの転換点における移動体向けコンテンツの条件」, 全日本テレビ番組製作社連盟 (ATP), 2009年8月10日
- 13) 辻泰明, 「『放送と通信の融合』における携帯端末向け独自サービスの可能性」, 新社会システム総合研究所, 2009年6月12日

付録

付表1 年度別『年鑑』掲載女性向け教養番組放送枠一覧

1924年度－1992年度

原則として各年鑑での記載順。放送枠名のみを挙げ、短期的な集中講座などは記載しない。

年度 掲載年鑑	メディア	分類項 (上位分類項)	放送枠
1924-1929 (年鑑の発行無)	ラジオ	家庭婦人 <sup>ママ</sup> 向放送 (教養放送) (『日本放送協會史』に拠る)	料理献立(1925.5) 家庭講座(1925.5) 婦人講座(1926.2) 家庭大学講座(1927.5) (『日本放送協會史』に拠る)
1930 昭和6年ラジオ年鑑	ラジオ	現在の社会教育的放送 <sup>482</sup>	家庭講座 婦人講座 家庭大学講座
1931 昭和7年ラジオ年鑑	ラジオ	婦人関係特殊講座類 (教養放送の現況)	家庭講座 婦人講座 家庭大学講座 料理献立
1932 昭和8年ラジオ年鑑	ラジオ	婦人家庭向きの講演と講座 (教養)	(放送した事項が羅列され、 明確な放送枠名の項目無)
1933 昭和9年ラジオ年鑑	ラジオ	婦人家庭向 <sup>ママ</sup> の放送 (教養放送)	(放送した事項が羅列され、 明確な放送枠名の項目無 <sup>483</sup> )
1934 昭和10年ラジオ年鑑	ラジオ	ラジオと婦人・家庭 (プログラム欄) <sup>484</sup>	家庭メモ・衛生メモ 料理献立 婦人の時間 母の時間 家庭講座
1935 昭和11年ラジオ年鑑	ラジオ	家庭婦人への放送 (講演・講座)	婦人の時間 家庭講座 母の時間 何月の婦人界
1936 昭和12年ラジオ年鑑	ラジオ	家庭及婦人への放送 講演講座放送の一年	家庭講座 母の時間 婦人の時間 何月の婦人界 <sup>485</sup>
1937 昭和13年ラジオ年鑑	ラジオ	家庭婦人向き講演 及び料理、メモ (講演講座放送の一年)	家庭講座 婦人の時間 母の時間 料理献立 家庭メモ 衛生メモ <sup>486</sup>
1938 昭和15年ラジオ年鑑	ラジオ	特定対象への放送(一)家庭 放送 (講演講座放送の一年)	(明確な放送枠名の項目無)

482 女性向けだけの分類項は設けられていない。

483 家庭メモ、料理献立は事項の一項目として記載あり。

484 「放送事項の解説 教養事項 講演講座」欄にも女性向け教養番組についての記載あり。

485 「ラジオ体操他雑種目」の欄に「料理献立、家庭メモ、衛生メモ」の記載あり。

486 「家庭婦人向き講演及び料理、メモ」の欄に「産業メモ」の記載あり。

1939 昭和 16 年ラジオ年鑑	ラジオ	家庭・婦人の時間 <sup>487</sup>	家庭講座 婦人の時間 母の時間 (1939.9 より家庭の時間 婦人の時間) 婦人向けの時事解説「この頃のニュース から」 <sup>488</sup>
1940 昭和 17 年ラジオ年鑑	ラジオ	家庭婦人の時間 (講演) <sup>489</sup>	季節の話題(家庭演芸の時間) 家庭の時間 婦人の時間(1941.4 廃止) 家庭婦人の時間 (1940.5 より都市放送に特設 1941.4 より 全国放送)
1941 昭和 18 年ラジオ年鑑	ラジオ	昼間の家庭向放送 (講演放送)	戦時家庭の時間 新しき生活の建設(午後枠の中で随時) <sup>490</sup>
1942-1945 (年鑑の発行無 <sup>491</sup> )	ラジオ	—	戦時家庭の時間
1946 昭和 22 年ラジオ年鑑	ラジオ	教養放送の概況 (番組編成)	婦人の時間
1947 昭和 23 年ラジオ年鑑	ラジオ	教養放送 (番組編成)	婦人の時間 主婦日記
1948 NHK ラジオ年鑑 1949	ラジオ	婦人向放送 <sup>492</sup> (番組編成)	婦人の時間 主婦日記 私の本棚 メロデー <sup>ママ</sup> にのせて 勤労婦人の時間
1949 NHK ラジオ年鑑 1950	ラジオ	婦人放送 (番組編成)	婦人の時間 私の本棚 勤労婦人の時間 若い女性 メロデー <sup>ママ</sup> にのせて 主婦日記
1950 NHK ラジオ年鑑 1951	ラジオ	躍進する婦人番組 <sup>493</sup>	女性教室 若い女性 婦人の時間 私の本棚 勤労婦人の時間 メロディーにのせて 主婦日記
1951 NHK ラジオ年鑑 1953 (1952 は欠刊)	ラジオ	婦人放送 <sup>494</sup>	明るい茶の間 女性教室 若い女性 婦人の時間 私の本棚 勤労婦人の時間 メロディーにのせて 主婦日記

487 「講演・講座」とは別項目。

488 1939 年 8 月より、月 2 回放送。「正しい時局認識を与えている」との記述あり。

489 「教養」の枠から外れる。

490 『戦時家庭の時間』の午後枠での放送。

491 戦争中の放送全般については『昭和 22 年ラジオ年鑑』に記述あり。

492 「社会放送」などと並ぶ独立枠。

493 上位分類は設けられていない。

494 「戦後脚光を浴びて登場した婦人問題は日本民主化のバロメーター」との記述あり。

1952 NHK 年鑑 1954	ラジオ	婦人放送	明るい茶の間 主婦日記 メロディ <sup>ママ</sup> にのせて 私の本棚 婦人の時間 女性教室 勤労婦人の時間
	テレビ	教養放送	婦人の時間(ホームライブラリー)
1953 NHK 年鑑 1955	ラジオ	婦人放送	明るい茶の間 主婦日記 料理クラブ メロディ <sup>ママ</sup> にのせて NHK 美容体操 私の本棚 婦人の時間 社会時評(婦人の時間から独立) 女性教室 勤労婦人の時間
	テレビ	教養放送	ホームライブラリー <sup>ママ</sup>
1954 NHK 年鑑 1956	ラジオ	婦人放送	明るい茶の間 主婦日記 我が家のリズム メロディにのせて (1954.11 我が家のリズムに吸収) NHK 美容体操 料理クラブ 私の本棚 婦人の時間 女性教室 若い女性 勤労婦人の時間 教養特集—ラジオ家族会議
	テレビ	放送番組 <sup>495</sup>	ホームライブラリー <sup>ママ</sup>
1955 NHK 年鑑 1957	ラジオ	婦人放送	明るい茶の間 主婦日記 わが家のリズム NHK 美容体操 私の本棚 婦人の時間 女性教室 ラジオ育児室 新・家庭読本 教養特集—NHK ラジオ家族会議 おやつ <sup>ママ</sup> の時間(大阪発)
	テレビ	放送番組	ホーム・ライブラリー
1956 NHK 年鑑 1958	ラジオ	婦人放送	明るい茶の間 主婦日記 ラジオ家庭欄 NHK 美容体操 私の本棚 婦人の時間 女性教室 ラジオ育児室 教養特集 NHK ラジオ家族会議 妻をめとらば 新・家庭読本 若い女性

<sup>495</sup> 教養、報道、芸能の比率表記あり（教養が首位）。

	テレビ	放送番組	ホーム・ライブラリー
1957 NHK 年鑑 1959	ラジオ	婦人放送	明るい茶の間 主婦日記 ラジオ家庭欄 NHK 美容体操 私の本棚 婦人の時間 女性教室 お茶のひとつとき—ラジオ育児室 教養特集—ラジオ家族会議 特別教養特集(女性教育史)
	テレビ	婦人放送	きょうの料理 ホーム・ライブラリー 婦人子どもグラフ
1958 NHK 年鑑 1960	ラジオ	婦人放送	明るい茶の間 主婦日記 ラジオ家庭欄 NHK 美容体操 私の本棚 婦人の時間 女性教室 お茶のひとつとき 教養特集ラジオ家族会議 特別教養番組(婦人解放史)
	テレビ	婦人放送	きょうの料理 ホーム・ライブラリー 婦人グラフ くらしの科学(教育) こどもの心(教育)
1959 NHK 年鑑 1961	ラジオ	婦人少年放送 婦人番組	明るい茶の間 主婦の時間 主婦日記 メロディーにのせて(『主婦の時間』内) NHK 美容体操 私の本棚 婦人の時間 女性教室 教養特集文壇よもやま話 特別教養番組(婦人解放史) NHK 婦人学級
	テレビ	婦人少年放送	婦人百科 きょうの料理 テレビ婦人の時間 おかあさんといっしょ みんなで歌を 話の四つかど 婦人グラフ 以下少年番組 わたしはパック びっくり百科 子どもホール はてな劇場
1960 NHK 年鑑 1962	ラジオ	婦人番組 <sup>496</sup> (婦人少年放送)	主婦の時間 (主婦日記、女性教室、美容体操) 私の本棚お茶のひとつとき 婦人の時間 文壇よもやま話 特別教養番組(婦人解放史) NHK 婦人学級

<sup>496</sup> 「少年番組」は別項目

	テレビ	婦人少年放送 <sup>497</sup>	テレビ婦人の時間 婦人の話題 おかあさんといっしょ みんなで歌を 回転いす 話の四つかど きょうの料理 婦人百科 美容体操 (宇宙船シリカ・少年番組)
1961 NHK 年鑑 1962No.2	ラジオ	婦人番組 (教養番組)	婦人の時間 主婦の時間(主婦日記) 私の本棚 NHK 婦人学級 主婦の時間(女性教室) お茶のひとつき 主婦の時間(美容体操)
	テレビ	婦人向け番組	婦人百科 美容体操 料理腕自慢コンクール きょうの料理 婦人学級 テレビ婦人の時間
1962 NHK 年鑑' 63	ラジオ	婦人番組 (教養放送)	主婦日記 女性教室 美容体操 私の本棚 家庭の皆さん 婦人の時間 お茶のひとつき
	テレビ	婦人番組 (教養放送)	きょうの料理 美容体操 ぐらしの窓 婦人の時間 婦人百科 婦人学級
1963 NHK 年鑑' 64	ラジオ	婦人番組 (教養放送)	主婦日記 午後の茶の間(女性教室・私の本棚)
	テレビ	婦人番組 (教養放送)	きょうの料理 ぐらしの窓 婦人百科 婦人の時間 美容体操 R・T <sup>498</sup> 婦人学級 R・T
1964 NHK 年鑑' 65	ラジオ	婦人番組 (教養放送)	私の本棚 女性教室 みんなの茶の間 午後の散歩道 ラジオ文芸 旅と釣(一般対象)
	テレビ	婦人番組 (教養放送)	ぐらしの窓 きょうの料理 美容体操 婦人百科 婦人の時間 季節のいけばな お茶のすべて 絵画・書道 婦人学級 R・T
1965 NHK 年鑑' 66 <sup>499</sup>	ラジオ	婦人番組 (教養放送)	私の本棚 みんなの茶の間 ぐらしのリズム 午後の散歩道
	テレビ	婦人番組 (教養放送)	ぐらしの窓 きょうの料理 婦人百科 午後のひとつき 婦人学級 T・R <sup>500</sup>

497 下位分類項目に「少年番組」

498 ラジオ・テレビ同時番組の略(以下同)

499 この年度より、記載順がそれまでの1.ラジオ2.テレビから1.テレビ2.ラジオに逆転。

1966 NHK 年鑑' 67	ラジオ	婦人番組 (教養放送)	みんなの茶の間
	テレビ	婦人番組 (教養放送)	こんにちは奥さん きょうの料理 婦人百科 趣味のコーナー 午後のひととき 幼児の世界 婦人学級 T・R
1967 NHK 年鑑' 68	ラジオ	婦人番組 (教養放送)	みんなの茶の間
	テレビ	婦人番組 (教養放送)	こんにちは奥さん きょうの料理 婦人百科 女性手帳 幼児の世界 婦人学級 T・R
1968 NHK 年鑑' 69	T・R <sup>501</sup>	婦人番組 (教養放送)	婦人学級 T・R
	テレビ	婦人番組 (教養放送)	こんにちは奥さん きょうの料理 婦人百科 女性手帳 みんなの茶の間(テレビ欄に記載)
1969 NHK 年鑑' 70	ラジオ	婦人番組 (教養放送)	みんなの茶の間
	テレビ	婦人番組 (教養放送)	こんにちは奥さん きょうの料理 婦人百科 女性手帳 婦人学級 T・R
1970 NHK 年鑑' 71	ラジオ	婦人番組 (教養番組)	みんなの茶の間
	テレビ	婦人番組 (教養番組)	こんにちは奥さん きょうの料理 婦人百科 女性手帳 婦人学級 T・R
1971 NHK 年鑑' 72	ラジオ	婦人番組 (教養番組)	みんなの茶の間
	テレビ	婦人番組 (教養番組)	婦人百科 こんにちは奥さん 女性手帳 きょうの料理 家庭学級 T・R
1972 NHK 年鑑' 73	ラジオ	婦人番組 (教養番組)	みんなの茶の間
	テレビ	婦人番組 (教養番組)	婦人百科 こんにちは奥さん 女性手帳 きょうの料理 趣味とあなたと

500 この年度より、ラジオ・テレビ同時番組はテレビ・ラジオ同時番組に呼称変更。略は T・R (以下同)

501 この年度は、1.テレビ 2.T・R の記載順で、ラジオは独立項が無い。

1973 NHK 年鑑' 74	ラジオ	婦人番組 (教養番組)	みんなの茶の間
	テレビ	婦人番組 (教養番組)	婦人百科 こんにちは奥さん 女性手帳 きょうの料理 趣味とあなたと
1974 NHK 年鑑' 75	ラジオ	婦人番組 (教養番組)	みんなの茶の間
	テレビ	婦人番組 (教養番組)	きょうの料理 奥さんごいっしょに 女性手帳 婦人百科
1975 NHK 年鑑' 76	ラジオ	婦人番組 (教養番組)	みんなの茶の間
	テレビ	婦人番組 (教養番組)	きょうの料理 奥さんごいっしょに 女性手帳 婦人百科
1976 NHK 年鑑' 77	ラジオ	婦人番組 (教養番組)	みんなの茶の間
	テレビ	婦人番組 (教養番組)	きょうの料理 奥さんごいっしょに 女性手帳 婦人百科
1977 NHK 年鑑' 78	ラジオ	婦人番組 (教養番組)	みんなの茶の間
	テレビ	婦人番組 (教養番組)	きょうの料理 奥さんごいっしょに 女性手帳 婦人百科
1978 NHK 年鑑' 79	ラジオ	婦人番組 (教養番組)	みんなの茶の間
	テレビ	婦人番組 (教養番組)	きょうの料理 奥さんごいっしょに 女性手帳 婦人百科
1979 NHK 年鑑' 80	ラジオ	婦人番組 (教養番組)	くらしのカレンダー(1978.11 より)
	テレビ	婦人番組 (教養番組)	奥さんごいっしょに きょうの料理 女性手帳 婦人百科
1980 NHK 年鑑' 81	ラジオ	婦人番組 (教養番組)	くらしのカレンダー
	テレビ	婦人番組 (教養番組)	おはよう広場 きょうの料理 婦人百科 女性手帳
1981 NHK 年鑑' 82	ラジオ	婦人番組 (教養番組)	くらしのカレンダー
	テレビ	婦人番組 (教養番組)	おはよう広場 きょうの料理 婦人百科 女性手帳

1982 NHK 年鑑' 83	ラジオ	婦人番組 (教養番組)	くらしのカレンダー
	テレビ	婦人番組 (教養番組)	おはよう広場 きょうの料理 婦人百科
1983 NHK 年鑑' 84	ラジオ	婦人番組 (教養番組)	くらしのカレンダー
	テレビ	婦人番組 (教養番組)	おはよう広場 きょうの料理 婦人百科
1984 NHK 年鑑' 85	区別無	婦人番組 (教育番組)	きょうの料理 婦人百科
1985 NHK 年鑑' 86			
1986 NHK 年鑑' 87			
1987 NHK 年鑑' 88			
1988 NHK 年鑑' 89		『NHK 年鑑' 86』以降は、 ジャンル別の分類が無くなり、波(メディア)と時間帯別の分類となった。	
1989 NHK 年鑑' 90		『きょうの料理』と『婦人百科』は 「総合テレビ 午前 月～土曜」の項に記載されている。	
1990 NHK 年鑑' 91			
1991 NHK 年鑑' 92			
1992 NHK 年鑑' 93			

付表 2 ラジオ草創期の女性向け教養番組における「花」を主題とする講座の放送

1925年3月22日～1937年7月6日<sup>502</sup>

一連の放送において一人の出演者が複数回の講義をおこなっている場合は、副題はそのうちの一つのみを示した。

『放送枠』(放送時間帯 <sup>503</sup> )				
放送波(第二放送開始により複数波となって後)は、全て第一放送				
放送年度	放送年月日	副題	出演者 <sup>504</sup>	講義回数
『家庭講座』(午前9時40分～10時50分)				
1925年度	1925年 11月2日～7日	盛花講習	工藤光洲	6
	12月21日・22日	お正月向きの投入	久野連峰	2
『家庭講座』(午前10時40分～午後0時10分)				
1926年度	1926年 2月19日・20日	おひなさまへ供へる花	大妻こたか	2
	1926年 5月3日	黄菖蒲と蓬の投入	岡田廣山	1
『家庭講座』(午前10時45分～午後0時10分)				
1926年度	1926年 10月15日	菊の盛花	岡田廣山	1
	12月20日	松竹梅の床飾り	小島泰次郎	1
1927年度	1927年 4月9日	櫻花の活け方に就いて	岡田廣山	1
	10月24日～12月26日	投入花の手ほどき	岡田廣山	10

<sup>502</sup> 女性向け教養番組の放送枠での放送ではないが、表に掲げた以外に、「花」に関する放送として、1936年11月27日に海外放送(国外向けの放送)の『講演番組』枠で、「生花と日本人の生活」(出演者はH・H・ゴーハム夫人)が放送されている。

<sup>503</sup> この枠内で放送はされたが、実際の放送時間は、より短い可能性がある。

<sup>504</sup> アナウンサー(司会)のみの出演である『主婦日記』以外の放送枠では、司会役のアナウンサーは除く。

1928 年度	1928 年 5 月 4 日	菖蒲の盛花および瓶花について	工藤光洲	1
『家庭講座』(午前 10 時 40 分—正午)				
	1928 年 9 月 10 日	秋草の盛花	小島松影軒	1
	11 月 2 日	御大典奉祝記念 黄白菊花の盛花	勅使河原蒼風	1
	12 月 27 日	南天と水仙の盛花	岡田廣山	1
	1929 年 2 月 13 日 <sup>505</sup>	日常生活と挿花	勅使河原蒼風	1
1929 年度	1929 年 7 月 13 日	活花について	小島専甫	1
	10 月 10 日	晩秋の尾花の投入	岡田廣山	1
	11 月 11 日～12 月 24 日	誰にでも出来る投入花と盛花	勅使河原蒼風	7
『家庭講座』(午前 10 時 30 分—正午)				
1930 年度	1930 年 7 月 1 日～7 月 3 日	華道と室内装飾	小島専甫	3
	10 月 27 日・28 日	日本花道美術史の外観	重森三玲	2
	12 月 26 日	松の盛花	岡田廣山	1
	1931 年 2 月 18 日	二月の花と盆畫盆石(一) 盛花、投入花、一輪挿のお話	小島泰次郎	1
	3 月 2 日	雛節句の盛花と投入花	勅使河原蒼風	1
1931 年度	1931 年 4 月 1 日	四月の盆花 —缺一丁あれば誰方にも出来る—	山田清雅	1
	5 月 1 日	五月の花「端午の節句と菖蒲」	岸部素堂	1

<sup>505</sup> これまで、勅使河原蒼風は、1928 年 11 月 2 日に初めてラジオ放送で講義をおこない、その一年後の 1929 年 11 月から連続 7 回の講義をおこなったとされてきた。しかし、本研究における調査で、その二つの講義の間に、もう一つ 1929 年 2 月 13 日の講義があったことが明らかになった。それだけ、最初の放送の評判が良く、大澤豊子は、間を置かずに蒼風の次の講義を編成することにしたのだと推測できる。

	6月1日	六月の花	小島専甫	1
	6月20日	生花様式について	齋藤巢潮	1
	6月30日	七月の花(晝顔と朝顔)	岡田廣山	1
	7月21日	八月の花「投入盛花の涼味」	勅使河原蒼風	1
	9月14日	九月の花「秋草挿法の秘訣」	安達潮花	1
	10月1日	「十月の花」 挿花の道の紅葉について	小島泰次郎	1
	11月2日	十一月の花 菊の投入花について	久野連峰	1
	12月1日	十二月の花	平一鶯 <sup>506</sup>	1
	1932年 2月1日	活花の家庭化	山田清雅	1
	2月26日	桃と菜の花の活け方に就て	岡田廣山	1
1932年度	1932年 4月26日	活花を習ふ方の心得問答	(問)廣山社中 A・B・C (答)岡田廣山	1
『家庭講座』(午後2時—午後3時40分)				
	1932年 7月8日	儀式や集會の活花の配合に就て	山田清雅	1
『家庭講座』(午前10時30分—正午)				
	1932年 7月13日	お盆に活ける活花	小島専甫	1
『家庭講座』(午後2時—午後3時40分)				
	1932年 11月14日	挿花の藝術美とは 「小菊やコスモスでまつ試作」 <sup>(ママ)</sup>	勅使河原蒼風	1
『家庭講座』(午前10時30分—正午)				

<sup>506</sup> 『番組確定表』には「平野一鶯」と記されているが、当時の『ラヂオ年鑑』『年誌』には、題目「十二月の花」、放送者「平一鶯」、年月日「十二、一」と記録されており、両者は同一人物と考えられる(社団法人日本放送協會編『昭和八年ラヂオ年鑑』日本放送出版協會, 1933, p.245)。

	1932 年	どなたにも活けられる	押川如水	1
	12 月 24 日	お正月花の活け方		
1933 年度	1933 年	此頃咲く花の活け方	村山是心庵	1
	4 月 13 日			
	6 月 22 日	水草の生方及花菖蒲の投入	小島専甫	1
	7 月 27 日・29 日	四季の杜若の生花に就てのお話	岡田廣山	2
『家庭講座』(午後 2 時—午後 3 時 40 分)				
	1933 年	いけばな新しい秘訣十講	勅使河原蒼風	2
	9 月 1 日・2 日			
『家庭講座』(午前 10 時 30 分—正午)				
	1933 年	葉蘭の活けかた	小島泰次郎	1
	9 月 16 日			
	11 月 27 日	花道を通して女子教育に及ぶ	新井貞里齋	2
	1934 年	一月のいけばな	勅使河原蒼風	1
	1 月 17 日			
	2 月 6 日	盛花の起源及び生方	東山松雪	1
『家庭講座』(午後 2 時—午後 3 時 40 分)				
1934 年度	1934 年	現代のいけばな	岡田廣山	1
	4 月 23 日	(新たに入門する人の爲めに)	勅使河原蒼風	
『家庭講座』(午前 10 時 35 分—正午)				
	1934 年	端午のお節句の縁起と生花	小島専甫	1
	4 月 30 日			
	6 月 8 日	お花をお活けになる心得	前田静水	1
	7 月 6 日	七月の盛花投入	小島泰次郎	1
『家庭講座』(午前 10 時 30 分—正午)				
	1934 年	歳末年始の心得(八) 初春の挿花	兒島文茂	1
	12 月 26 日			

『婦人講座』(午後 2 時—午後 2 時 40 分)				
1935 年度	1935 年 5 月 17 日～6 月 5 日	聴取者二百萬突破記念週間 生花と盛花 盛花	安達潮花	3
『家庭講座』(午後 2 時—午後 2 時 40 分)				
	6 月 7 日～28 日	生花と盛花 生花	兒島文茂	4
『婦人の時間』(午後 2 時—午後 3 時 40 分)				
	1936 年 3 月 18 日	野山に咲く花を活ける話	小島専甫	1
『婦人講座』(午後 2 時—午後 3 時 40 分) <sup>507</sup>				
1936 年度	1936 年 7 月 18 日	夏の生活と生花	西川一草亭	1
『婦人の時間』(午前 10 時 30 分—正午)				
	1936 年 8 月 20 日	初秋の草物と實物の插花に就て	山中保之輔	1
『婦人の時間』(午後 2 時—午後 3 時 40 分)				
	1936 年 12 月 22 日	新年生花のいろゝと勅題田家雪	勅使河原蒼風	1
『婦人講座』(午前 10 時 30 分—11 時)				
1937 年度	1937 年 6 月 1 日～10 日	手軽な生花 盛花 大阪より中継	小原光雲	4
	6 月 15 日～29 日	手軽な生花 實用の投入花 最終回のみ大阪より中継	勅使河原蒼風	5

<sup>507</sup> 「京都より」と付記されている。

付表3 ラジオ戦時期および占領期の女性向け教養番組における「花」を主題とする講座の放送

1937年7月7日～1952年4月28日<sup>508</sup>

一連の放送において一人の出演者が複数回の講義をおこなっている場合は、副題はそのうちの一つのみを示した。

『放送枠』(放送時間帯) 放送波は、特記以外は全て第一放送				
放送年度	放送年月日	副題	出演者 <sup>509</sup>	講義回数
『家庭講座』(午後2時30分～3時10分)				
1937年度	1938年 2月2日	春浅いこのごろのいけ花	勅使河原蒼風	1
『婦人の時間』(午前10時20分～10時40分)				
1938年度	1938年 6月13日	野の花の活け方	中山文甫	1
	8月20日	初秋の生花を語る	安達潮花	1
『婦人の時間』(午後3時～3時20分)全国放送 <sup>510</sup>				
1939年度	1939年 7月3日	野の花の水揚げと活け方	勅使河原蒼風	1
『家庭婦人の時間』(午後1時～2時)都市放送 <sup>511</sup>				
1940年度	1940年 5月7日～10日	初夏のいけばな	勅使河原蒼風	4
『家庭婦人の時間』(午前10時20分～10時40分)全国放送				

<sup>508</sup> 女性向け教養番組の放送枠での放送ではないが、表に掲げた以外に、「花」に関する放送として、1941年1月5日に、都市放送の『特輯講座 伝統の精神』枠で、「花技養心」(出演者は山中松愛齋)が、1947年10月16日に第二放送の『朝の話』枠で「秋の生花と生活」(出演者は長倉知楽)が、1949年7月10日に第二放送の『趣味の時間』枠で「趣味の生花」(出演者は勅使河原蒼風と堀口捨巳、司会は森田たま)が、それぞれ放送されている。

<sup>509</sup> アナウンサー(司会)のみの出演である『主婦日記』以外の放送枠では、司会役のアナウンサーは除く。

<sup>510</sup> 1939年より第一放送の呼称は全国放送と改められた。

<sup>511</sup> 1939年より第二放送の呼称は都市放送と改められた。1941年12月のアメリカなどとの戦争開始に伴って、都市放送は廃止され、戦後、1945年9月より第二放送として再開された。

1941 年度	1941 年 4 月 17 日～19 日	春の生花	有川ひさえ	3
『戦時家庭の時間』(午前 9 時～10 時)レコード演奏含む				
1942 年度	1942 年 5 月 22 日	働く人と活け花	木田光洋	1
(1943 年度～47 年度は放送無し)				
『主婦日記』(午前 9 時 15 分～9 時 30 分)				
1948 年度	1948 年 9 月 15 日	野の花を主とした秋の活花	松内八重子 <sup>512</sup>	1
	12 月 30 日	正月の活け花	松内八重子 勅使河原蒼風 (提供)	1
	1949 年 3 月 3 日	春の活花	松内八重子 勅使河原蒼風 (提供)	1
『婦人の時間』(午前 9 時 15 分～9 時 30 分)				
	1949 年 3 月 24 日	華道について	西堀一三	1
(1949 年度～1950 年度は放送無し)				
『女性教室』(午前 10 時 30 分～11 時)第二放送				
1951 年度	1951 年 8 月 2 日～30 日	花のこころ	勅使河原蒼風 <sup>513</sup> (提供) 最終回はインタビュー	13
(1952 年度は放送無し)				

<sup>512</sup> 1948 年 9 月の『主婦日記』について、『番組確定表』には、レギュラー出演者である松内八重子の名のみが記されており、提供者が誰であったかは不明である。

<sup>513</sup> 蒼風が提供した資料を代読したのが誰であったかは明らかでないが、司会の栗栖琴子だった可能性がある。

付表4 ラジオからテレビへの転換期のラジオ女性向け教養番組における「花」を主題とする講座の放送

1952年4月28日～1965年4月3日

一連の放送において一人の出演者が複数回の講義をおこなっている場合は、副題はそのうちの一つのみを示した。

『放送枠』(放送時間帯) 放送波は、全て第一放送				
放送年度	放送年月日	副題	出演者 <sup>514</sup>	講義回数
(1952年度～53年度は放送無し)				
『女性教室』(午後2時45分～3時)				
1954年度	1955年 1月4日～1月31日	暮しを豊かにするいけ花 生花入門	勅使河原蒼風	20
(1955年度～56年度は放送無し)				
1957年度	1957年 4月1日～4月12日	いけばな—いけばなについて	小原豊雲	10
	4月15日～4月30日	いけばな 池坊いけばなについて	池坊専永	1
		いけばな 池坊いけばなの基本	石山文恵	10
1958年	1月6日～1月24日	生花と室内装飾—盛花の基礎	勅使河原蒼風	13
			勅使河原霞	2
(1958年度は放送無し)				
『女性教室』(午後2時5分～2時20分)				
1959年度	1960年 1月4日～1月15日	いけばな—いけばなについて	小原豊雲	9
	1月18日～1月29日	いけばな—やさしい盛花	勅使河原和風	9
(1960年度は放送無し)				
『女性教室』(午前9時30分～9時45分) <sup>515</sup>				
1961年度	1961年	いけばなと俳句	池坊専永	6

<sup>514</sup> 司会役のアナウンサーは除く。

<sup>515</sup> 『主婦の時間』(午前9時5分～9時59分)の1コーナー。

10月2日～10月7日	—花をいけるために—		
10月9日～10月16日	いけばなと俳句 —秋の花をいける前に—	小原豊雲	7
10月17日～10月23日	いけばなと俳句 —花型の基本—	勅使河原和風	6
10月31日	いけばなと俳句 —質問に答えて—	勅使河原和風	1

(1962年度～63年度は放送無し)

『女性教室』(午前9時15分～9時45分)

1964年度	1964年 12月25日～12月30日	室内装飾 —いけ花の基本—	大野典子	6
--------	------------------------	---------------	------	---

付表 5 ラジオからテレビへの転換期のテレビ女性向け教養番組における「花」を主題とする講座の放送

1952年4月28日～1965年4月3日

一連の放送において一人の出演者が複数回の講義をおこなっている場合は、副題はそのうちの一つのみを示した。

『放送枠』(放送時間帯) 放送波は、全て総合テレビ				
放送年度	放送年月日	副題	出演者	講義回数
テレビ放送開始は 1953 年 2 月 1 日(1952 年度)から				
『ホーム・ライブラリー』(午後 1 時 15 分～1 時 30 分)				
1952 年度	1953 年 3 月 26 日～27 日	テレビ生花教室	小原豊雲	2
1953 年度	1953 年 6 月 17 日～19 日	六月の生花(水仙・山百合)	安達潮花	3
	7 月 8 日～9 日	夏のお花 (グラジオラスのいけ方・ダリヤのいけ方)	池田理英	2
	8 月 5 日・7 日	夏のお花(1)水盤の花(2)コンポー ト	藤原幽竹	2
	10 月 7 日	十月の生花	押川如水	1
	11 月 4 日	季節のお花	藤原幽竹	1
	1954 年 1 月 5 日	新春の生花	安達潮花	1
	2 月 8 日	春の生花 —梅二題—	押川如水	1
	3 月 2 日	三月の生花 お節句の日に	勅使河原霞 <sup>516</sup>	1
『ホーム・ライブラリー』(午後 1 時 15 分～1 時 35 分)				
1954 年度	1954 年 6 月 3 日	季節の生花	小原豊雲	1

<sup>516</sup> 確定表上の表記は「勅使河原 かすみ」。

7月2日	七月のお花	藤原幽竹	1
9月8日	秋のいけ花	未生院翁甫	1
10月1日	秋のいけ花 —菊—	押川如水	1
11月12日	季節のいけ花 菊と柿	池田理英	1
1955年 1月7日	新春のいけ花	臼井桂鳳	1

『ホーム・ライブラリー』(午後1時—1時20分)

1955年度	1955年 5月12日	野の花を生ける	河村 <sup>ママ</sup> 万葉庵	1
	7月21日	夏の生花	小立千蓉	1
	9月22日	秋草を生ける	勅使河原霞	1
	10月20日	いけばなの歴史(1)	大井 ミノブ 藤原幽竹	1
	10月21日	いけばなの歴史(2)	大井ミノブ 池田理英	1
	11月3日	晩秋のいけ花	長谷川菊洲	1
	12月8日	パーティー用の生花	山中阿屋子 倉持百合子	1
	1956年 3月1日	ひなまつりの生花	安達武子 安達瞳子	1

『ホーム・ライブラリー』(午後0時35分—1時)

1956年度	1956年 4月19日	生活と生花	中山文甫	1
	7月12日	部屋を涼しくする生花	大槻秀楓	1
	12月13日	きょうも美しく 「クリスマスと正月の生花」	勅使河原霞	1
	1957年 3月28日	きょうも美しく「春の花を活ける」	山中阿屋子	1

1957 年度	1957 年	いけばな(1)「季節の花をいける」 メモ「お花の留め方」		
	4月5日・12日	いけばな(2) 「和室の花と洋室の花」 メモ「水揚げ」	小原豊雲	2
	4月19日・26日	いけばな(3)「三種いけ」 メモ「材料の整理」 いけばな(4)「いけばなの意匠」 メモ「アクセサリーの花」	池坊専永	2
	5月8日	メモ「庭草を生ける」	山中阿屋子	1
	8月22日	きょうも美しく「涼しい生花」	勅使河原和風	1
	9月20日	女性百科「秋草をいける」	河村萬葉庵	1

『ホーム・ライブラリー』(午後0時35分-0時50分)

	1958 年		勅使河原蒼風	
	1月13日	初春に花をいける	持永禎子	1
			勅使河原霞	
1958 年度	1958 年	秋の生花	勅使河原霞	1
	10月14日		谷井澄子	
	12月25日	新しい年のために(3)「室内装飾」 —生花—	安達潮花 安達瞳子	1
	1959 年		勅使河原蒼風	
	1月6日	新春の生花	持永禎子	1
			勅使河原霞	

『婦人百科』(午後0時20分-0時40分)

1959 年度	1959 年	「真夏のいけ花」	小原豊雲	1
	7月17日			

『婦人百科』(午前10時35分-11時)

	1959年 10月8日～12月31日 <sup>517</sup>	「生花」—いけ花の使用用具—他	勅使河原霞 倉持百合子 <sup>518</sup>	13
1960年度	1960年 4月7日～5月26日 <sup>519</sup>	「いけばな」	池田理英	8
	6月2日～30日 <sup>520</sup>	「いけばな」	佐藤秀抱	5
	7月7日・22日	「いけばな」	大野典子	2
	9月6日～27日 <sup>521</sup>	「いけばな」	勅使河原和風	4
『婦人百科』(午前10時30分～11時)				
	11月22日・29日	「いけばな」	小原豊雲	2
	12月15日・29日	「いけばな」 <sup>522</sup>	押川如水	2
	1961年 3月7日・14日・28日	「いけばな」	安達瞳子	3
1961年度	7月14日	「すずしいいけ花」	工藤和彦	1
	9月21日	「秋の花をいける」	大野典子	1
	12月5日～26日 <sup>523</sup>	「12月のいけばな」(1)(2) —お正月の花—(1)(2)	勅使河原霞	4
	1962年 1月9日～30日 <sup>524</sup>	「くらしのいけばな」 <sup>525</sup>	池坊専永	4
	3月2日	「3月のいけばな」	勅使河原和風	1
1962年度	1962年 4月2日～6月25日 <sup>526</sup>	「いけばな」(1) —花型の構成— 他 <sup>527</sup>	勅使河原和風	13

517 毎週木曜。

518 確定表には11月12日は勅使河原霞の記載のみ。

519 毎週木曜。

520 毎週木曜。

521 毎週火曜。

522 12月29日のみ「—お正月をいける—」の副題あり。

523 毎週火曜

524 毎週火曜

525 1月16日は「—環境をいかすいけ花—」、同30日は「—アイデアをいける—」の副題あり。

	12月27日	「お正月のいけばな」	池田理英	1
	1963年			
	1月7日～2月25日 <sup>528</sup>	「いけばな」	安達瞳子	8
	3月4日～25日 <sup>529</sup>	「いけばな」	中山文甫 中山尚子 <sup>530</sup>	4
1963年度	1963年			
	11月5日～12月31日 <sup>531</sup>	「いけばな」	小原豊雲	9 (7) <sup>532</sup>

『季節のいけばな』(午後2時35分～3時)

1964年度	1964年			
	4月6日～6月29日 <sup>533</sup>	「さくら」他	勅使河原霞 木戸きみえ	13
	7月6日～9月28日 <sup>534</sup>	「たなばた」他	安達瞳子 宮坂花恵 他 <sup>535</sup>	11
	10月5日～12月28日 <sup>536</sup>	「花をいけるころ」他	池田理英 池田昌弘 他 <sup>537</sup>	9
	1965年			
	1月4日～3月22日 <sup>538</sup>	「迎春花」他	勅使河原和風	10

526 毎週月曜

527 4月23日「一花のもとせ方」、同30日「一花菖蒲のいけ方」、5月7日「一投げ入れ花のいけ方」、同14日「一花材のくみあわせ」、同21日「一変型花器」、6月4日「一複体のいけ方」、同11日「一四方面花」、同18日「一書画といけばな」、同25日「一質問に答えて」の副題あり。

528 毎週月曜。

529 毎週月曜。

530 中山尚子は3月4日・11日のみに記載あり、18日・25日は中山文甫のみ。

531 毎週火曜。再放送午後3時～3時30分。

532 括弧内は再放送回数、12月10日(第6回)と12月31日(第9回)は再放送なし。

533 毎週月曜。

534 毎週月曜、8月10日、同17日は休止。

535 宮坂花恵は7月27日まで、8月3日より9月7日までは小林智恵子、9月14日より28日までは皆川信子、他に9月21日に戸板康二がゲスト出演。

536 毎週月曜、10月12日、同19日、11月9日、同23日は休止。

537 池田昌弘は10月5日、11月2日に出演、他に高田敏子(詩人)が10月26日、柳宗理(工業デザイナー)が11月30日、長岡輝子(女優)が12月21日に、それぞれゲスト出演。その他の日は池田理英のみの出演。

538 毎週月曜、1月25日、2月1日は休止。

付表 6 テレビ発展期の女性向け教養番組における「花」を主題とする講座の放送

1953年2月1日～1982年3月31日

連続型講座において複数出演者がいる場合、出演者名横の括弧内数字はそれぞれの出演回数を示す。一連の放送において一人の出演者が複数回の講義をおこなっている場合は、副題はそのうちの一つのみを示した。

1952年度～1964年度は付表4と重複するが、付表6と対照する便宜を図るため敢えて掲載した。ただし、重複部分の注は割愛した。

『放送枠』(放送時間帯) 放送波は、全て総合テレビ				
放送年度	放送年月日	副題	出演者	講義回数
『ホーム・ライブラリー』(午後1時15分～1時30分)				
1952年度	1953年 3月26日～27日	テレビ生花教室	小原豊雲	2
1953年度	1953年 6月17日～19日	六月の生花(水仙・山百合)	安達潮花	3
	7月8日～9日	夏のお花 (グラジオラスのいけ方・ダリヤのいけ方)	池田理英	2
	8月5日・7日	夏のお花 (1)水盤の花(2)コンポート	藤原幽竹	2
	10月7日	十月の生花	押川如水	1
	11月4日	季節のお花	藤原幽竹	1
	1954年 1月5日	新春の生花	安達潮花	1
	2月8日	春の生花 —梅二題—	押川如水	1
	3月2日	三月の生花 お節句の日に	勅使河原霞	1
『ホーム・ライブラリー』(午後1時15分～1時35分)				
1954年度	1954年 6月3日	季節の生花	小原豊雲	1

7月2日	七月のお花	藤原幽竹	1
9月8日	秋のいけ花	未生院翁甫	1
10月1日	秋のいけ花 —菊—	押川如水	1
11月12日	季節のいけ花 菊と柿	池田理英	1
1955年 1月7日	新春のいけ花	臼井桂鳳	1

『ホーム・ライブラリー』(午後1時—1時20分)

1955年度	1955年 5月12日	野の花を生ける	河村万葉庵	1
	7月21日	夏の生花	小立千蓉	1
	9月22日	秋草を生ける	勅使河原霞	1
	10月20日	いけばなの歴史(1)	大井 ミノブ 藤原幽竹	1
	10月21日	いけばなの歴史(2)	大井ミノブ 池田理英	1
	11月3日	晩秋のいけ花	長谷川菊洲	1
	12月8日	パーティー用の生花	山中阿屋子 倉持百合子	1
	1956年 3月1日	ひなまつりの生花	安達武子 安達瞳子	1

『ホーム・ライブラリー』(午後0時35分—1時)

1956年度	1956年 4月19日	生活と生花	中山文甫	1
	7月12日	部屋を涼しくする生花	大槻秀楓	1
	12月13日	きょうも美しく 「クリスマスと正月の生花」	勅使河原霞	1
	1957年 3月28日	きょうも美しく「春の花を活ける」	山中阿屋子	1

1957 年度	1957 年	いけばな(1)「季節の花をいける」		
		メモ「お花の留め方」		
	4月5日・12日	いけばな(2)	小原豊雲	2
		「和室の花と洋室の花」		
		メモ「水揚げ」		
	4月19日・26日	いけばな(3)「三種いけ」		
		メモ「材料の整理」		
		いけばな(4)「いけばなの意匠」	池坊専永	2
		メモ「アクセサリーの花」		
	5月8日	メモ「庭草を生ける」	山中阿屋子	1
	8月22日	きょうも美しく「涼しい生花」	勅使河原和風	1
	9月20日	女性百科「秋草をいける」	河村萬葉庵	1

『ホーム・ライブラリー』(午後0時35分-0時50分)

	1958 年		勅使河原蒼風	
	1月13日	初春に花をいける	持永禎子	1
			勅使河原霞	
1958 年度	1958 年		勅使河原霞	
	10月14日	秋の生花	谷井澄子	1
	12月25日	新しい年のために(3)「室内装飾」	安達潮花	
		—生花—	安達瞳子	1
	1959 年		勅使河原蒼風	
	1月6日	新春の生花	持永禎子	1
			勅使河原霞	

『婦人百科』(午後0時20分-0時40分)

1959 年度	1959 年			
	7月17日	「真夏のいけ花」	小原豊雲	1

『婦人百科』(午前10時35分-11時)

	1959 年		勅使河原霞	
	10月8日~12月31日	「生花」—いけ花の使用用具—他	倉持百合子	13

1960 年度	1960 年 4 月 7 日～5 月 26 日	「いけばな」	池田理英	8
	6 月 2 日～30 日	「いけばな」	佐藤秀抱	5
	7 月 7 日・22 日	「いけばな」	大野典子	2
	9 月 6 日～27 日	「いけばな」	勅使河原和風	4
『婦人百科』(午前 10 時 30 分～11 時)				
	11 月 22 日・29 日	「いけばな」	小原豊雲	2
	12 月 15 日・29 日	「いけばな」	押川如水	2
	1961 年 3 月 7 日・14 日・28 日	「いけばな」	安達瞳子	3
	7 月 14 日	「すずしいいけ花」	工藤和彦	1
	9 月 21 日	「秋の花をいける」	大野典子	1
	12 月 5 日～26 日	「12 月のいけばな」(1)(2) —お正月の花—(1)(2)	勅使河原霞	4
	1962 年 1 月 9 日～30 日	「くらしのいけばな」	池坊専永	4
	3 月 2 日	「3 月のいけばな」	勅使河原和風	1
1962 年度	1962 年 4 月 2 日～6 月 25 日	「いけばな」(1) —花型の構成— 他	勅使河原和風	13
	12 月 27 日	「お正月のいけばな」	池田理英	1
	1963 年 1 月 7 日～2 月 25 日	「いけばな」	安達瞳子	8
	3 月 4 日～25 日	「いけばな」	中山文甫 中山尚子	4
1963 年度	1963 年 11 月 5 日～12 月 31 日	「いけばな」	小原豊雲	9 (7)

『季節のいけばな』(午後 2 時 35 分～3 時)

1964 年度	1964 年	「さくら」他	勅使河原霞 木戸きみえ	13
	4月6日～6月29日			
	7月6日～9月28日	「たなばた」他	安達瞳子 宮坂花恵 他	11
1965 年	10月5日～12月28日	「花をいけるころ」他	池田理英 池田昌弘 他	9
	1965 年	「迎春花」他	勅使河原和風	10
	1月4日～3月22日			

『午後のひととき 季節のいけばな』(午後 1 時 35 分～2 時 29 分<sup>539</sup>)

1965 年度	1965 年	—フリーズアをいける—他	中山尚子	12
	4月5日～6月28日			
	7月12日～9月27日	—秋草をいける—他	桑原専溪	10
1966 年	10月4日～12月27日	—仲秋をいける—他	小原豊雲	12
	1966 年	—現代生花—(柳をいける)他	前田華風(9) 池坊専永(1) <sup>540</sup>	9
	1月10日～3月14日			
1966 年 1 月 11 日	「春をいける」	勅使河原蒼風 池田理英 早川尚洞 五島泰雲 金子憲璋	1	

『趣味のコーナー いけばな』(午前 11 時～11 時 20 分)

1966 年度	1966 年	—盛り花—他	勅使河原霞	9
	4月4日～5月30日			
	6月6日～7月25日	—涼しさをいける—他	吉村華泉	8
	8月1日～9月26日	—風をいける—他	早川尚洞	9
10月3日～12月26日	—菊に寄せて—他	西阪慶美	12	

<sup>539</sup> 『季節のいけばな』は、この時間帯のうちの1コーナー。

<sup>540</sup> 3月14日参加。

	1967年 1月9日～3月27日	—松をいける—他	土本清甫	11
『婦人百科』(午前10時30分～10時59分 <sup>541</sup> )				
1967年度	1967年 4月3日～6月26日	「いけばな」—さくら—他	小原豊雲	14
	7月31日～9月25日	「いけばな」—水辺の趣き—他	勅使河原和風	12
	10月2日～12月25日	「いけばな」—大和路—他	肥原康甫	11
	1968年 1月8日～3月25日	「いけばな」—自然をいける—他	辻井博州(11) 小原豊雲(1) <sup>542</sup>	11
1968年度	1968年 4月1日～5月27日	いけばな「ミモザ」他	勅使河原霞	8
	6月3日～7月29日	いけばな「あじさい」他	安達瞳子	8
	8月5日～9月30日	いけばな「海辺の花」他	中山文甫	7
	10月7日～11月25日	いけばな「ダリヤ」他	池田昌弘	7
	12月2日～ 1969年1月27日	いけばな「クリスマスに生ける」他	池坊専永	9
	2月10日～3月31日	いけばな「梅」他	桑原素子	8
1969年度	1969年 4月7日～5月26日	いけばな「歌によせる花」他	小原豊雲	7
	8月4日～9月22日	いけばな「秋の実をいける」他	宇田土風	7
	9月29日	いけばな「ばらをいける」	勅使河原霞	1
	12月1日～ 1970年1月26日	いけばな「花材からの発想」	吉村華泉	9
1970年度	1970年 10月5日～11月30日	いけばな「基礎—実ものをいける— 他	勅使河原和風	9

<sup>541</sup> 『婦人百科』の放送時間が1分減って、10時59分までとなったのは前年度の1965年4月5日から(放送開始時刻は変わらず)。

<sup>542</sup> 3月25日参加。

	12月7日～ 1971年1月25日	いけ花「菊」他	池田理英	8
	2月1日～3月29日	いけ花「絵画に学ぶ」他	小原豊雲	9
1971年度	1971年 9月13日～10月28日	いけ花の基礎—3本の役枝—他	勅使河原和風	7
	11月8日～12月27日	いけばな「モチーフをいける」	大津隆月	8
1972年度	1973年 1月9日～3月27日	いけ花「松をいける」他	芦田武久	11
1973年度	1973年 10月2日～11月27日	いけばな—水盤に—他	吉村華泉	9
1974年度	1974年 4月3日	「今月のいけばな」	池田昌弘	1
	5月1日	「今月のいけばな」	勝村翠華	1
	6月5日	「今月のいけばな」	大津隆月	1
	7月3日	「今月のいけばな」	池坊専永	1
	8月7日	「今月のいけばな」	中山尚子	1
	9月4日	「今月のいけばな」	早川尚洞	1
	10月2日	「今月のいけばな」	筒井紫雲	1
	11月6日	「今月のいけばな」	芦田武久	1
	12月4日	「今月のいけばな」	林瑛	1
	1975年 1月8日	「今月のいけばな」	小原豊雲	1
	2月5日	「今月のいけばな」	植松雅房	1
	3月6日	「今月のいけばな」	手嶋千俊	1
1975年度	1975年 5月26日	ヤング・ミセス・シリーズ 「くらしのいけ花」	道向達子	1

	10月2日～12月25日	いけばな「ななかまどをいける」他	手嶋千俊	12
	1976年 1月5日	ヤング・ミセス・シリーズ 「春のいけばな」	安達瞳子	1
1976年度	1976年 4月7日～6月30日	「いけばな」―旅によせて―他	小原豊雲	12
	1977年 1月5日～3月30日	「いけばなの基礎」―桃をいける― 他	勅使河原霞	12
1977年度	1977年 4月7日～5月26日	「いけばな」―パンジーをいける― 他	池坊専永	7
	9月1日～10月27日	「いけばな」―紅葉をいける―他	筒井紫雲	8
1978年度	1978年 4月5日～26日	「いけばな」―しだれ柳をいける― 他	植松雅房	4
	7月5日～26日	「いけばな」―ゆりをいける―他	中山尚子	4
	10月4日～11月1日	「いけばな」―コスモスをいける―他	吉村華泉	4
	1979年 1月10日～2月7日	「いけばな」―椿をいける―他	宇田土風	4
1979年度	1979年 4月4日～25日	「いけばな」―雪柳をいける―他	林瑛	4
	7月4日～25日	「いけばな」―ぎぼうしをいける―他	早川尚洞	4
	10月3日～31日	「いけばな」―秋草をいける―他	小原豊雲	4
	1980年 1月9日～2月6日	「いけばな」―フリージアをいける― 他	肥原良樹	4
1980年度	1980年 4月7日	「4月のいけばな」	池坊専永	1
	5月9日	「 <sup>(ママ)</sup> 5月のいけばな」	佐伯一甫	1
	6月2日	「6月のいけばな」	安達瞳子	1
	7月7日	「7月のいけばな」	手嶋千俊	1
	8月4日	「8月のいけばな」	千羽理芳	1

	9月1日	「9月のいけばな」	芦田一馬	1
	10月6日	「10月のいけばな」	筒井紫雲	1
	11月7日	「11月のいけばな」	大津隆月	1
	12月1日	「12月のいけばな」	辻井博州	1
	1981年 1月5日	「1月のいけばな」	早川尚洞	1
	2月2日	「2月のいけばな」	諸泉祐陽	1
	3月2日	「3月のいけばな」	池田昌弘	1
1981年度	1981年 4月6日	「 <sup>(ママ)</sup> 四月のいけばな」	林瑛	1
	5月8日	「5月のいけばな」	粕谷明光	1
	6月1日	「6月のいけばな」	中山尚子	1
	7月6日	「7月のいけばな」	西阪専慶	1
	8月3日	「8月のいけばな」	吉村京子	1
	9月7日	「9月のいけばな」	西村雲華	1
	10月9日	「10月のいけばな」	植松雅房	1
	11月2日	「11月のいけばな」	大野理澁	1
	12月7日	「12月のいけばな」	松本司頌	1
	1982年 1月4日	「1月のいけばな」	小原豊雲	1
	2月5日	「2月のいけばな」	勅使河原和風	1
	3月1日	「3月のいけばな」	勝村翠華	1

付表 7 テレビ発展期の女性向け教養番組における「茶」を主題とする講座の放送

1953年2月1日～1982年3月31日

連続型講座において複数出演者がいる場合、出演者名横の括弧内数字はそれぞれの出演回数を示す。一連の放送において一人の出演者が複数回の講義をおこなっている場合は、副題はそのうちの一つのみを示した。

『放送枠』(放送時間帯) 放送波は、全て総合テレビ					
放送年度	放送年月日	副題	出演者	講義回数	
『ホーム・ライブラリー』(午後1時15分～1時30分)					
1952年度	1953年 2月26日～28日	テレビ茶道教室—お茶と作法—他	山村宗謙	3	
1953年度	1953年 6月2日	お茶の心得	山村宗謙	1	
	1954年 2月25日	茶道物語 —利久のおもかげ—	桑田忠親	1	
『ホーム・ライブラリー』(午後1時15分～1時35分)					
1954年度	1954年 8月31日	茶道教室 夏の煎茶	泉谷松風庵	1	
『ホーム・ライブラリー』(午後1時～1時20分)					
1955年度	1956年 1月5日	煎茶の話	中村如遊 他	1	
『ホーム・ライブラリー』(午後0時35分～1時)					
1956年度	1956年 10月18日	やさしいお茶の作法	千宗守	1	
1957年度	(1957・58年は放送無し)				
『ホーム・ライブラリー』(午後0時35分～0時50分)					

1958 年度	1959 年 1 月 14 日	お茶をたのしむ	塩月彌栄子 他	1
『婦人百科』(午後 0 時 20 分—0 時 40 分)				
1959 年度	1960 年 1 月 7 日~3 月 31 日	お茶—基本動作— 他	塩月彌栄子 他 <sup>543</sup>	13
『婦人百科』(午前 10 時 30 分—11 時)				
1960 年度	1961 年 1 月 10 日~2 月 2 日	お茶	千宗興	4
	2 月 7 日~2 月 28 日	お茶	塩月彌栄子 他 <sup>544</sup>	4
1961 年度	1962 年 1 月 4 日	初釜のこち	塩月彌栄子 他 <sup>545</sup>	1
1962 年度	1962 年 10 月 3 日~24 日	「お茶をたのしく」 —おうすをいただく—	千宗興	4
	(1963 年は放送無し)			
1963 年度	1964 年 1 月 7 日~3 月 31 日	初歩の茶道	久田宗也	13
『お茶のすべて』(午後 2 時 35 分—3 時)				
1964 年度	1964 年 4 月 7 日~10 月 27 日	「けいこを始める前に」「基本の動作」 他	千宗興(19) 井口海仙 (6) <sup>546</sup>	23
	11 月 10 日~12 月 29 日	「炉の準備」「炉薄茶点前」他	千宗室	7
	1965 年 1 月 5 日~3 月 23 日	「新年に茶を語る」「懐石」他	井口海仙 (6) <sup>547</sup> 千宗室(8)	12

<sup>543</sup> 1 月 14 日葛西宗貫が参加、3 月 10 日千宗興が参加。

<sup>544</sup> 2 月 28 日千宗興が参加。

<sup>545</sup> 田中絹代、岡本太郎がゲスト。

<sup>546</sup> 4 月 7 日~9 月 15 日千宗興(うち 5 月 26 日・6 月 2 日は井口海仙参加)、9 月 22 日~10 月 27 日井口海仙。

<sup>547</sup> 1 月 5 日~26 日井口海仙、2 月 2 日~3 月 23 日千宗室(うち 2 月 23 日・3 月 23 日は井口海仙参加)。

---

『午後のひととき 茶道講座』(午後 1 時 35 分—2 時 29 分<sup>548</sup>)

---

1965 年度	1965 年 4 月 6 日～ 1966 年 3 月 22 日	「炉薄茶点前」「濃茶点前」他	久田宗也 (45) 千宗左(3) <sup>549</sup>	45
---------	------------------------------------	----------------	---------------------------------------	----

---

『趣味のコーナー お茶』(午前 11 時—11 時 20 分)

---

1966 年度	1966 年 4 月 5 日～6 月 28 日	「点前の構成」「風炉点前」他	千宗守	13
	7 月 5 日～9 月 27 日	「煎茶」	田中青坡	13
	10 月 4 日～ 1967 年 3 月 28 日	「炉薄茶点前」「炉濃茶点前」他	千宗室(17) 井口海仙 (8) <sup>550</sup>	23

---

『婦人百科』(午前 10 時 30 分—10 時 59 分)

---

1967 年度	1967 年 4 月 4 日～9 月 26 日	「茶の湯」—風炉薄茶点前—他	久田宗也 (25) 千宗左(2) <sup>551</sup>	25
	10 月 3 日～12 月 26 日	「煎茶」	渡辺琢山	13
	1968 年 1 月 9 日～3 月 26 日	「茶の湯」—炉濃茶点前—他	藪内紹智	11
1968 年度	1968 年 4 月 2 日～ 1969 年 3 月 25 日	茶の湯「炉薄茶点前」「炉濃茶点前」 他	千宗室(18) 井口海仙 (32) <sup>552</sup>	48
1969 年度	1969 年 4 月 1 日～9 月 30 日	茶の湯「点て方」「しまい方」他	久田宗也 (26) 千宗左(2) <sup>553</sup>	26

---

<sup>548</sup> 「茶道講座」は、この時間帯のうちの 1 コーナー。

<sup>549</sup> 4 月 26 日・1966 年 1 月 4 日・2 月 22 日千宗左が参加。

<sup>550</sup> 10 月 4 日～12 月 6 日・1967 年 2 月 7 日～3 月 28 日千宗室(うち 10 月 4 日・1967 年 2 月 28 日は井口海仙参加)、1967 年 12 月 13 日～1 月 31 日井口海仙。

<sup>551</sup> 4 月 4 日・9 月 12 日千宗左が参加。

<sup>552</sup> 4 月 2 日～16 日・5 月 7 日・28 日・7 月 2 日・8 月 6 日～9 月 10 日・10 月 15 日・29 日・11 月 5 日・1969 年 1 月 7 日・2 月 18 日・3 月 4 日・18 日・25 日が千宗室(うち 10 月 29 日・1969 年 3 月 25 日は井口海仙が参加)、それ以外は井口海仙。

			千宗員(2) <sup>554</sup>
			千宗守(25)
	10月7日～		久田宗也
	1970年	茶の湯「薄茶と濃茶」「濃茶点前」他	(1) <sup>555</sup> 25
	3月31日		井口海仙
			(1) <sup>556</sup>
			千宗室(14) <sup>557</sup>
			井口海仙
1970年度	1970年		(30) 47
	4月7日～	茶の湯「薄茶点前」「濃茶点前」他	
	1971年		塩月弥栄子
	3月30日		(4) <sup>558</sup>
			藪内紹智
			(15) <sup>559</sup>
1971年度	1971年	茶の湯「濃茶と薄茶」「濃茶点前」他	24
	4月6日～9月28日		藪内紹春
			(13)
			久田宗也
			(25)
			千宗左(1) <sup>560</sup>
			千宗員(2) <sup>561</sup>
			井口海仙 25
			(1) <sup>562</sup>
			堀内宗完
			(1) <sup>563</sup>

553 4月1日・9月30日千宗左が参加。

554 5月6日・6月17日千宗員が参加。

555 1970年1月6日久田宗也が参加。

556 1970年3月31日井口海仙が参加。

557 出演日は4月7日・5月12日・6月2日・9日・7月7日・14日・9月1日・8日・10月20日・11月3日(井口海仙が参加)・12月22日・1971年1月5日・3月16日・23日。上記および塩月弥栄子出演の6月23日・30日・8月4日・18日以外は井口海仙が出演。

558 出演日は6月23日・30日・8月4日・18日。

559 出演日は4月6日～6月1日・22日・7月13日～8月3日・同24日～9月28日。それ以外は藪内紹春。上記のうち、4月6日・6月1日・9月14日・28日は共に出演。

560 10月5日出演。

561 10月5日・1972年1月4日出演。

562 1972年1月4日出演。

563 1972年2月29日出演。

			小堀宗慶 (1) <sup>564</sup>	
1972 年度	1972 年 4 月 11 日～9 月 26 日	茶の湯「薄茶棚点前」「濃茶点前」他	千宗守	24
1973 年度	1974 年 1 月 7 日～3 月 25 日	茶の湯「盆略点前」「濃茶」他	千宗室(5) <sup>565</sup> 井口海仙(7)	11
1974 年度	1974 年 7 月 4 日～ 1975 年 4 月 3 日	茶の湯「薄茶点前」「盆略点前」他	堀内宗完 (12) 千宗員(1) 久田宗也(1) 千宗左(3) 千宗室(5) 井口海仙(8)	23
1975 年度	1975 年 7 月 3 日～9 月 25 日	茶の湯「薄茶点前」「濃茶点前」他	堀内宗完 (12) 久田宗也(1) 千宗員(1) 千宗左(1)	12
	1976 年 1 月 8 日～4 月 1 日	茶の湯「薄茶大棚点前」「濃茶点前」 他	堀内宗完 (11) 久田宗也(1) 千宗員(3) 千宗左(1)	11
1976 年度	1976 年 4 月 8 日～10 月 7 日	茶の湯「薄茶」「濃茶点前」他	千宗室(8) 井口海仙 (10) 川島宗敏(5) 塩月弥栄子 (1)	21
	10 月 14 日～ 1977 年 3 月 24 日	茶の湯「薄茶」「濃茶」他	堀内宗完 (11) 久田宗也(1) 千宗員(3)	23

<sup>564</sup> 1972 年 3 月 21 日出演。

<sup>565</sup> 1 月 7 日・14 日・2 月 25 日・3 月 4 日・25 日に出演（うち 3 月 25 日は井口海仙が参加）。それ以外の日には井口海仙が出演。

1977 年度	1977 年	茶の湯「薄茶の点て方」「濃茶の点て方」他	藪内紹智(3) 藪内紹春(9)	9
	6 月 2 日～7 月 28 日			
	12 月 1 日～	茶の湯「点前のしくみ」「薄茶を点てる」他	千宗守	7
	1978 年 2 月 2 日			
2 月 9 日～3 月 2 日	茶の湯「初めて招かれたとき」	山田宗団	4	
	3 月 16 日～30 日 <sup>566</sup>	茶の湯「客を迎えるころ」	小堀宗慶	4
1978 年度	1978 年	茶の湯	堀内宗完 (13)	13
	5 月 4 日～7 月 27 日	「薄茶を点てる」「濃茶を点てる」他	久田宗也(1) 千宗員(2)	
	11 月 2 日～		藪内紹智(2)	
	1979 年	茶の湯「薄茶を点てる」「濃茶」他	藪内紹春 (11)	11
1979 年度	1979 年	茶の湯	千宗守(6)	12
	5 月 10 日～7 月 26 日	「点前のしくみ」「薄茶棚点前」他	千宗屋(8)	
	11 月 1 日～		千宗室(8)	
	1980 年	茶の湯「薄茶点前」「濃茶点前」他	川島宗敏(3) 永井宗圭(1)	12
1980 年度	1980 年	茶の湯「薄茶点前」「濃茶点前」他	千宗室(10) 川島宗敏(1) 金沢宗也(2)	13
	10 月 2 日～12 月 25 日			
1981 年度	1981 年	茶の湯「茶会に招かれて」他	久田宗也 (13)	13
	5 月 7 日～7 月 30 日		千宗左(3) 堀内宗完(1)	

<sup>566</sup> 第 3 回は 3 月 28 日火曜に放送。

付表 8 テレビ変化期の女性向け教養番組における「花」を主題とする講座の放送

1982年4月1日～1993年3月31日

『婦人百科』の終了日（最終放送）は、1993年3月25日。

『放送枠』(放送時間帯)放送波は、特記以外は全て総合テレビ					
放送年度	放送年月日	副題	出演者	講義回数	
『婦人百科』(午前10時30分～10時59分)					
1982年度	1982年 4月5日	4月のいけばな	筒井紫雲	1	
	5月10日	5月のいけばな	安達瞳子	1	
	6月7日	6月のいけばな	今西玉好	1	
	7月5日	7月のいけばな	岡田 <sup>(ママ)</sup> 広山	1	
	8月2日	8月のいけばな	千羽理芳	1	
	9月6日	9月のいけばな —清風瓶華—	早川尚洞	1	
	10月4日	10月のいけばな —古流松籐会—	池田昌弘	1	
	11月1日	11月のいけばな	手嶋千俊	1	
	12月6日	12月のいけ花	梅田博宣	1	
	1983年	1月10日	1月のいけばな	池坊専永	1
		2月7日 <sup>567</sup>	2月のいけばな	芦田一馬	1
		3月7日	3月のいけばな	勅使河原和風	1
1983年度	1983年 4月6日	空間をいかすつり花・かけ花	池坊専永	1	
	5月4日	棚の上の小品花	新藤三枝	1	

<sup>567</sup> 本放送休止のため教育テレビ再放送枠での放送が初回放送。

	6月1日	テーブルにいける花	肥原俊樹	1
	7月6日	ガラスの器にいける	林瑛	1
	9月7日	秋草をかごにいける	川岸香園	1
	10月5日	動きを楽しむいけばな	松本司頌	1
	11月2日	壁面にいける花	諸泉陽子	1
	12月21日	正月のいけばな	吉村華泉	1
	1984年 1月4日	正月の花をいけなおす	西阪専慶	1
	2月1日	温室花を小品に — 一葉式いけ花—	粕谷春水	1
	3月14日 <sup>568</sup>	春の色をいける	千羽理芳	1
1984年度	1984年 4月4日	木花を華やかにいける	手嶋千俊	1
	5月2日	葉をいける	池田昌弘	1
	6月6日	涼しさをいける	筒井紫雲	1
	7月4日	夏草をいける	山根由美	1
	9月5日	秋草をいける	植松雅房	1
	10月3日	一種でいける秋の草花	下田尚利	1
	11月7日	枯れ物をいける	芦田一馬	1
	12月5日	松をいける	桜居博芳	1
	1985年 1月9日	いけ花 —正月の花をいけ直す—	桑原仙溪	1
	2月6日 <sup>569</sup>	いけ花 —花木ものをいける—	吉村京子	1

<sup>568</sup> 本放送休止のため教育テレビ再放送枠での放送が初回放送。

<sup>569</sup> 本放送休止のため教育テレビ再放送枠での放送が初回放送。

	3月6日	いけ花 —春の芽をいける—	堀口昌洸	1
1985年度	1985年			
	4月8日	いけ花 —春の彩をいける—	池坊専永	1
	5月20日	竹といける初夏の花 —みささぎ流—	片桐右弼	1
	6月10日	いけ花 —花器の質感をいかす—	勅使河原宏	1
	7月8日	涼をいける	西阪専慶	1
	8月5日	テーブルを飾る花	道上小枝	1
	9月9日	いけ花 小さい秋をいける	早川研一	1
	10月14日	いけ花・秋の実をいける —専敬流—	林瑛, 林順子	1
	11月18日	晩秋の草色を楽しむ	千羽理芳	1
	12月25日	いけ花 —迎春の花をいける—	肥原碩甫	1
	1986年			
	1月13日	葉の魅力をいける —花芸安達流—	安達瞳子	1
2月10日	身近な器に春をいける	中山尚子	1	
3月10日	芽と草花を楽しむ	(記載無)	1	
1986年度	1986年			
	4月14日	清楚にいける白い花	辻井博州	1
	5月19日	新緑をいける	手嶋千俊	1
	6月9日	水面を広くいける	粕谷明弘	1
	7月14日	ガラスにいける夏の花	勝村翠華	1
	8月25日	小さな器に飾る花	山岸由美子	1
	9月8日	秋草をいける	山根由美	1
	10月13日	秋色を二種でいける	池田昌弘	1

	11月17日	みのりの秋をいける	川岸香園	1
	12月22日	正月の花をいける	桑原素子	1
	1987年 1月12日	冬に見つけた色をいける	下田尚利	1
	2月9日	小さな花のインテリア	大沢節子	1
	3月16日	春の一輪を生かす	芦田一馬	1
1987年度	1987年 4月13日 <sup>570</sup>	春の光にいける	小原夏樹	1
	5月18日	花むらにいける	諸泉祐陽	1
	6月15日	涼しさはいける	池坊専永	1
	7月13日	“場”を生かす花	勅使河原宏	1
	8月31日	水中花をいける	松本司頌	1
	9月21日	秋の訪れをいける	吉村京子	1
	10月5日	菊をいける	肥原俊樹	1
	11月2日	ゆく秋をいける	早川研一	1
	12月21日	出合いを遊ぶ花	成瀬香梅	1
	1988年 1月11日	正月花を春の装いに	植松雅房	1
	2月15日	葉の表情をいける	千羽理芳	1
	3月14日 <sup>571</sup>	春の草花でテーブルコーディネート	山岸由美子	1
1988年度	1988年 4月18日	春らんまんをいける	西阪専慶	1
	5月2日	緑を主役にいける	筒井邦子	1

<sup>570</sup> 本放送休止のため教育テレビ再放送枠での放送が初回放送。

<sup>571</sup> 本放送休止のため教育テレビ再放送枠での放送が初回放送。

	6月20日	初夏の彩りをいける	山根由美	1
	7月11日	涼風をいける	安達瞳子	1
	8月22日 <sup>572</sup>	家族を祝う花	縹あい	1
	9月23日 <sup>573</sup>	投げ入れ花を楽しむ	下田尚利	1
	10月17日	草花でいける秋の表情	中山景之	1
	11月21日 <sup>574</sup>	実をいける	粕谷明弘	1
	12月26日	迎春の花	辻井博州	1
	1989年 1月23日	青竹をいける	手嶋千俊	1
	2月20日 <sup>575</sup>	花器を主役に春をいける	梅田博宣	1
	3月20日	春風に舞う花	林瑛	1
1989年度	1989年 4月17日	陽光のみどりをいける	肥原碩甫	1
	5月1日	緑の風をいける	早川研一	1
	6月19日	水草をいける	笹岡 甫	1
	7月17日	夏の花をインテリアに	井上恵子	1
	8月7日	遊び心で飾る花	村山百合子	1
	9月25日	月によせていける	桑原仙溪	1
	10月16日	秋の色をいける	千羽理芳	1
	11月20日	枯れ色の秋をいける	川岸香園	1

<sup>572</sup> 本放送休止のため教育テレビ再放送枠での放送が初回放送。

<sup>573</sup> 本放送休止のため教育テレビ再放送枠での放送が初回放送。

<sup>574</sup> 本放送休止のため教育テレビ再放送枠での放送が初回放送。

<sup>575</sup> 本放送休止のため教育テレビ再放送枠での放送が初回放送。

	12月25日	迎春の松をいける	石井桓祐	1
	1990年 1月29日	早春のはずむ心をいける	芦田一馬	1
	2月26日	花木で春をいける	吉村京子	1
	3月19日	春のパーティーに飾る花	井上翠	1
1990年度	1990年 4月5日	淡色の春をいける	諸泉祐陽	1
	5月1日	薫りをいける	安達瞳子	1
	6月7日	涼しさをいける	長谷川喜洲	1
	7月5日	水を演出していける	早川研一	1
	7月19日	野の花でくらしをアート	広瀬暉子	1
	8月1日	涼をよぶ花の演出	堀江英子	1
	9月6日	秋の光をいける	松本司頌	1
	10月29日	秋のみのりをいける	堀口昌洗	1
	11月8日	身近な秋をいける	山根由美	1
	12月13日	原色の花で冬を飾る	中山尚子	1
	1991年 1月10日 <sup>576</sup>	早春の息吹をいける	粕谷明弘	1
	2月7日	観葉植物をいける	植松雅房	1
	3月7日	春の草花をいける	小原夏樹	1
1991年度	1991年 4月4日 <sup>577</sup>	春の光をいける	辻井博州	1
	5月2日	新緑を楽しむ盛り花	下田尚利	1

<sup>576</sup> 本放送休止のため教育テレビ再放送枠での放送が初回放送。

<sup>577</sup> 本放送休止のため教育テレビ再放送枠での放送が初回放送。

	6月6日	水に映える初夏の花	肥原俊樹	1
	7月4日	水辺の涼感をいける	西阪専慶	1
	8月1日	涼しさをよぶ花と緑の演出	縹あい	1
	9月5日	初秋に実りをいける	吉村華泉	1
	10月3日	秋の草花をいける	片桐悦子	1
	11月28日	晩秋の色をいける	千羽理芳	1
	12月26日	正月をいける	池坊専永	1
	1992年 1月13日	初春の風をいける	宇田土風	1
	2月6日	春のいぶきをいける	太田一孝	1
	3月16日	柳で春を生ける	林瑛	1
1992年度	1992年 6月25日	雨の風情にいける	芦田一馬	1
	9月22日	みのりをいける	桑原仙溪	1
	12月22日	正月を彩る花のハーモニー	新妻尚美	1
	1993年 1月14・21・28日 <sup>578</sup>	はじめてのあなたに ～花のこころをいける	肥原碩甫	3
	3月24日	陽春をいける	手嶋敏和	1

<sup>578</sup> 1月14日および1月28日は、本放送休止のため教育テレビ再放送枠での放送が初回放送。